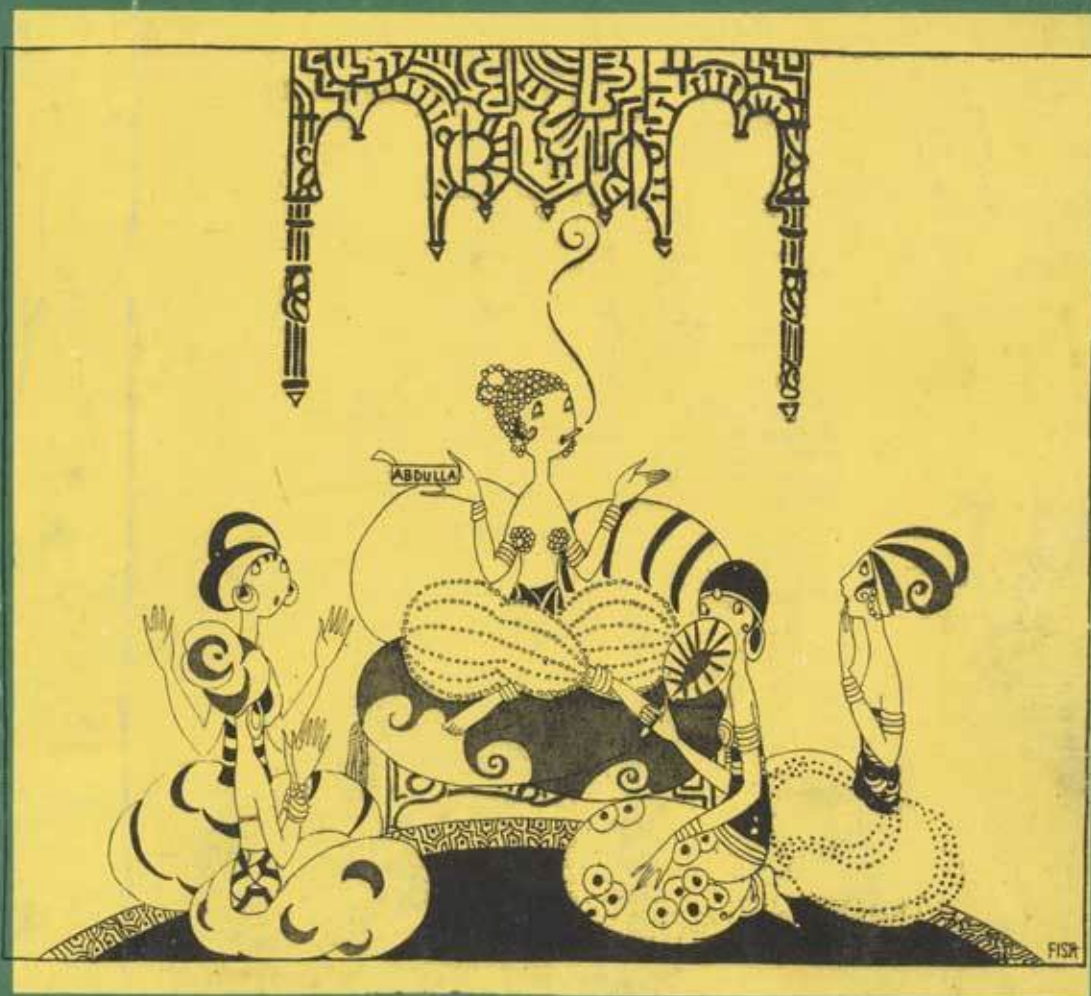


奇譚クラス

新しい風俗文獻誌

4月号



1963 4

昭和三十三年三月二十日創刊 昭和三十三年四月一日発行 四月号（第十七巻第四号）毎月一日発行

昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和三十三年六月十七日国鉄大崎特約取扱委託第三二二号

奇譚クラス

4月号

定価二百円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



日本版
サド侯爵悦虐絵巻

21種×15種（本誌の大きさ）
九枚一組五〇〇円（送共） 略号「さ9」

の一般書店では一切販売いた
りません。是非直接お申込み下
さるよう、お願い致します。

内容はサド侯爵と自称する或る
億万長者の青年が、その巨大なる
富を背景として、美貌のうら若き
女性を飼育し訓練し、嗜するスト
リートの完全絵画化であります。



A black and white illustration of a person in a dynamic, contorted pose, possibly a dancer or acrobat. The figure is wearing a patterned garment and a headpiece. The figure is surrounded by large, stylized, leaf-like shapes. The illustration is signed 'J. L. 1911' in the bottom right corner.

梨花悠紀子吊責写真特集

A5判 (21×15㎝) 感光紙焼付
八枚一組 五〇〇円 (送共)

全身をぐるぐる巻きに
余りの強烈さと刺戟の

縛られて吊り責めにされてみたいというのは、マゾヒスト梨花悠紀子嬢の第一の念願でした。彼女の願う強烈にして苛烈な本格的な吊責。彼女が思ふままに、何ら手心を加えることなく、S派の第一人者辻村隆がピシピシと縛り上げて滑車により吊上げた連続場面です。

強さに口絵としての使用が、ここにマニヤの確い要望により分譲品として同好家の方に限りお譲りすることになりました。梨花悠紀子嬢の均整のとれた姿態が吊責という妥協のない緊縛方法によって決定的な効果を打ち出せることを信じます。

凄絶！とおきの未発表吊り責め写真の秘作、ここに堂々発表乞御期待



第一集（逆エビ吊り）

両手首は後手に控られて、曲げた両足首と共に逆エビに緊縛された梨花嬢の肌には深々とロープが喰い込んでいる。ギリギリ、ギリギリと滑車を引き上げるとうとうと、思わず彼女の口から悲鳴が洩れ、じりじりと全身が浮き上って、苦悶の表情が彼女の顔面から、次第に足の爪先にまで伝ってゆく。高々と吊り上った美しい逆エビの裸身――。

第二集 (逆胴吊り)

ヒエーツという悲鳴も口にかまされた。猿ぐつわによつて、くぐもつてしまふ。繩は徐々に滑車によつて巻き上げられて頭を下にした全身は宙に浮いてきた。二腕の腕に、太股に、胴体にひいて程埋れてしまふ縄目。宙ぶらりんとなった裸身が吊り縄を中心として、ゆるく回る。時間が経つにつれて苦痛が次第に増してくるが、彼女はまだ頑張っている。

画の大きさ A5判

(21 種 × 15 種) 感光紙焼付
六枚一組 五〇〇円、略号 (か6)

一、組上のいけにえ、(台上でエビのように二つ折りにされた全裸の女体に今まさに加えられようとする浣腸器の悪魔のような跳梁をじっと耐える彼女。)

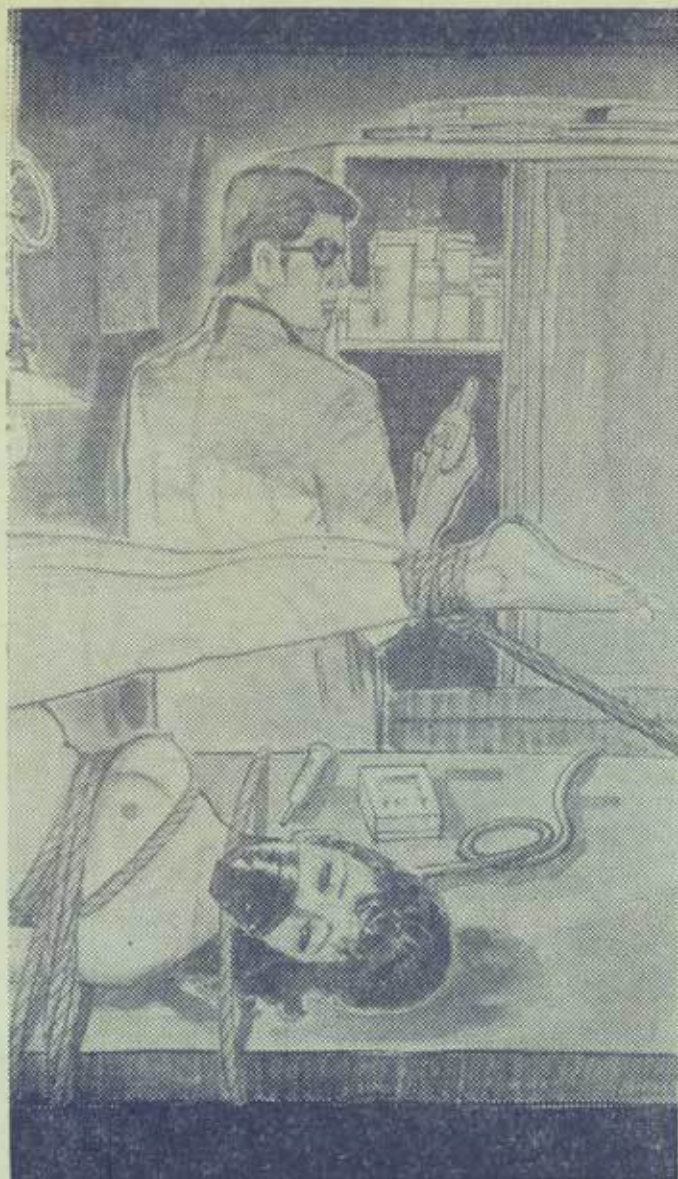
二、高圧空気浣腸、(百ワットの電光に明るく照らし出された女体に、高圧ポンプの先から、空気がドンドン送り込まれる恐怖が鮮やかに描き出される。)

三、蛙腹の注水実験、(手と足を鎖に吊られて宙に浮いた白々とした女体。その鼻孔にはイルリガートルの嘴管が水をどくどくと腹の中へ注ぎ込んだ。)

四、浣腸責の最高頂、(竹の棒によって、両足を八の字に開かされたイケニエは、目の前にある恐ろしい器具に、思わず全身を硬直させてしまった。)

五、排泄に耐える、(豊満な張りきれんばかりの女体を一本の柱に宙じばりにされて、浣腸の洗礼を受けた彼女が便器を前にして耐えに耐えぬく悲壮感。)

六、奇妙な便器、(彼女の体内には、五〇CCのグリセリンが注入されて荒れ狂っている。奇妙な型の便器が彼女の使用を待って、あざ笑っている。)



四馬孝・案並に画

女体浣腸嗜虐場面図

(うら若き麗人、強制的に浣腸を施される図)



◎浣腸愛好者のために、特に浣腸を主題としたショッキングな場面ばかりを四馬孝画伯の豊富なアイデアによって描面して貰った力作揃い、従来兎角口絵から締め出され敬遠され勝ちだった浣腸のテーマを、ここに見事に完全に絵面化されました。

女性に対する浣腸について大きな関心を抱いている方々から、の久しい間に亘っての要望も、いせいの間の制約のため果し得ませんでしたが、浣腸フアンの見果てぬ夢の一端でも満足して頂こうと、ここに四馬氏を煩して、女体浣腸の興味的な場面、数々の変化ある姿態、背景、小

道具等によって、美しい画集として完成して頂きました。浣腸マニヤの方は勿論のこと、Sマニヤの方にとっても、非常に興味がある画面の展開がたのしみです。どうか、浣腸マニヤのため、特に作成したこの画集を、引続いて刊行するためにも、御支援下さるようお願いいたします。

第一グラビヤ

苦悶にゆがむ美貌
両手吊りムチ打ちポーズ
そのポーズ変化の種々相
エビしぼりにもだえる二像
柔肌に喰い込む縄目
鼻を弄ばれる啓子
黒髪に泣く緊縛女体
樹洩れ陽をうけた媚態

梨花悠紀子
関谷富佐子
関谷富佐子
梨花悠紀子
大塚啓子
大塚啓子
大塚啓子
絹川文代

巻頭口絵

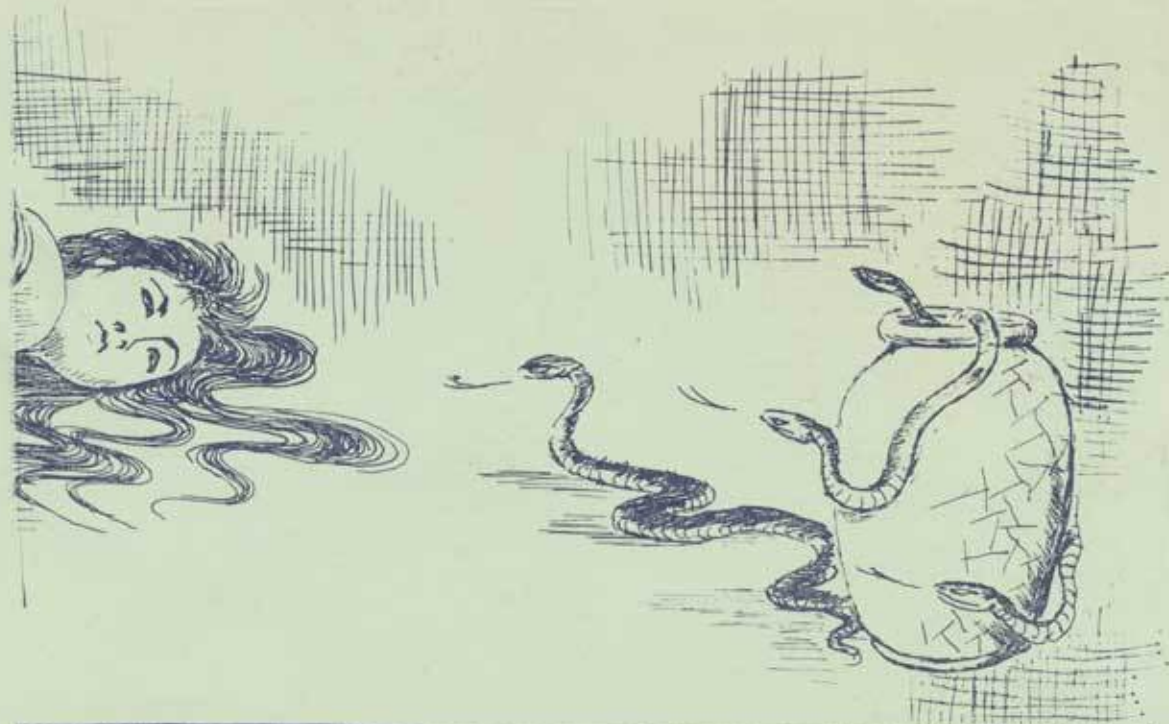
責絵 首枷踊り 四馬孝画
白色奴隷拷問室 クロード・コガ画

針金責め 前衛美術家
蜂責め 鞭打ち用固定器

切腹 女城主の最期 四馬孝画
腹を切る女の幻想図 滝れい子画
アイデア画「煙草責め」 四馬孝画

第二グラビヤ

海老責めにあう女体アップ
手枷と足枷
足首にかかった鉄の環とくさり
切腹フォト 東浦ひかる
梨花悠紀子
大塚啓子
血紅使用、白肌を切りさばく短刀
心静かに右脇腹へ突き立てた刃
エビ縛りの無防備地帯 水本茂美
マゾ・フォト 女の尻の下に敷かれた男
ムチの下におののく表情 梨花悠紀子



巻頭論稿 宗教幻覚とマゾヒズム 林弓志雄 (34)
小説 真知子汚辱 五反虫太郎 (40)
暗黒の世代 (警察で拷問された私の告白) 陸奥凌 (46)
アブノーマル・ストーリー

美しき味の獄舎にて たかぎのぶを (50)

浣腸に関する告白 無花果 関かおる (60)
アブチック ストーリー 使途の兄弟 雪俊遙 (70)
告白 お産の浣腸 菅千代 (82)
告白 酔った女 万田不仁 (84)

被虐愛さんげー

女体切腹の文献 むすめ切腹史 中康弘通 (92)

小説 十字架の妻 竹谷十三 (99)

(告白) 神さまへの呟き 柴崎黎子 (106)

〔奴隷国探検〕サルジニア探訪記 阿留品又怒 (118)

ルポ 踊り子のお臍品定め 須藤律夫 (122)

〔通信〕モデル嬢の縁談 花田一郎 (124)

長篇SM小説 宇宙のどこかで 佐治麻造 (126)

イエロー・セックス(続) 芳野眉美 (144)

創作「足環」 火宮透 (152)

△体験小説△ 女力士会見記 岡平吉雄 (166)

〔通信〕妊娠の写真を入手して 瀬沼四郎 (170)

読者通信 178

梨花悠紀子逆吊り写真特集

吊り責めが大好きだという梨花悠紀子嬢の強烈にしてトリックのない真正銘の吊り責め写真は誌上に分譲写真に大好評を博しております。殊に「りつ1」「りつ2」は注文殺到の大盛況のため、ここに新作の嗜虐味あふれた逆さ吊りのフォト三集を発表いたします。美貌の梨花嬢が苦痛と悦びにあえぐ表情と全身、殊に吊られた足首の喰い込む縄目に御注目下さい。

第一集 両足首括り逆吊り

略号「さか」

大判判印画紙 (13×19 ㎝)

焼付

五枚一組 一〇〇〇円

足首を揃えて括られた縄を滑車に連結されて、足を上にして逆さに吊り下げられた美女梨花悠紀子両手は背中後手に縛られ、胸に

は乳房がつぶれんばかりの縄目が肌に喰い入っている。全体重を両足首の縄で支えている痛さをよく耐えうるのも梨花嬢なればこそ。

第二集 逆吊りの女体折檻

略号「させ」

大判判印画紙 (13×19 ㎝)

焼付

五枚一組 一〇〇〇円

逆さ吊りにあえぐ梨花悠紀子に對して、更にあくなく暴虐の手は情容赦なく竹の棒にて女体のあらゆるところを叩き、こじ入れ、踏みつけ激しい折檻を加える。美し

い眉をひそめて必死に耐える美貌の彼女。両足の間を竹にてこじられ、剥がれた衣服の上にて悶える凄絶にして、しかも美しい逆吊りフォト。

第三集 手足逆宙吊り

略号「さと」

大判判印画紙 (13×19 ㎝)

焼付

五枚一組 一〇〇〇円

両足首と両後手首を括った縄を滑車に連結して、じりじりと宙に吊り上げてゆく。顔、胸、腹を下にして、足首と背中を上にして宙に浮いてゆく梨花悠紀子、柔肌に

は恐ろしいほど縄がうずまって、吊り責めの真価が鮮明なる印画紙焼付によってマニヤの皆さまのコレクションの中に發揮されるでしょう。

東浦ひかる強烈縛写真特集

昨年春から病氣のために御無沙汰していた東浦ひかるが、秋に至って病氣全快と共に、数カ月のブランクが逆作用して、異常なまでに嗜虐感情を燃え上らせ、殆ど連日に亘って彼女の好みによる強烈な縛りを敢行。すでに分譲品として発表した、あの足を高々と顔の上より高く挙げた二つ折りのフォトなんかはマニヤの嵐のような賞讃を得ました。最近一入肉がついてポリウムを増した彼女ですが、それでいて、海老責なんかにすると二つ折りになって、首が縄ですすれて血がにじんできても尚辛抱するひかるなのです。

第一集 後手吊り足挙げ縛り

略号「うら」

大手札印画紙 (13×9 ㎝)

焼付

五枚一組 五〇〇円

肥り気味の割に柔軟な姿体のひかるの辛抱強さと柔軟さを試すため、後手縛りの縄で両足先がやっ

と床につく位に吊り下げ、片方の足首にも縄をかけ、その縄をぐいぐい吊り縄にて引き上げ、恰も一本足の力カシのような哀れな姿で許しを乞うまで晒しておく。

第二集 二つ折りエビ責め

略号「うり」

大手札印画紙 (9×13 ㎝)

焼付

五枚一組 五〇〇円

これは、流石辛抱づよいひかるも、早く解いてくれといつて悲鳴を上げた一コマ。丁度腰のところ

とを連繫、両方の足が高々と挙り、丁度赤ちゃんがオシッコをさせて貰うときのような恰好で床に坐らされて許しを乞うひかる。

第三集 足挙げ椅子責め

略号「うる」

大手札印画紙 (9×13 ㎝)

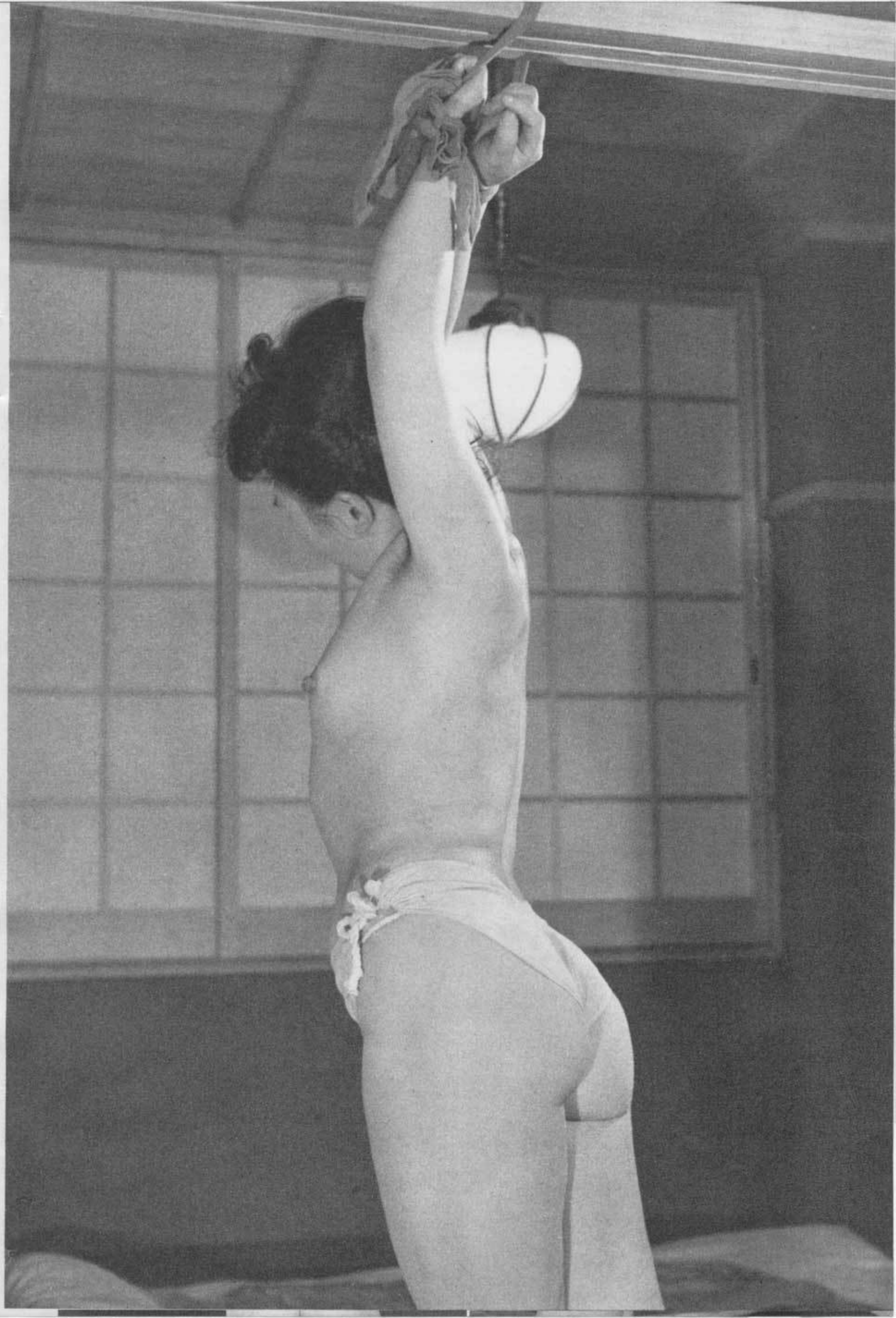
焼付

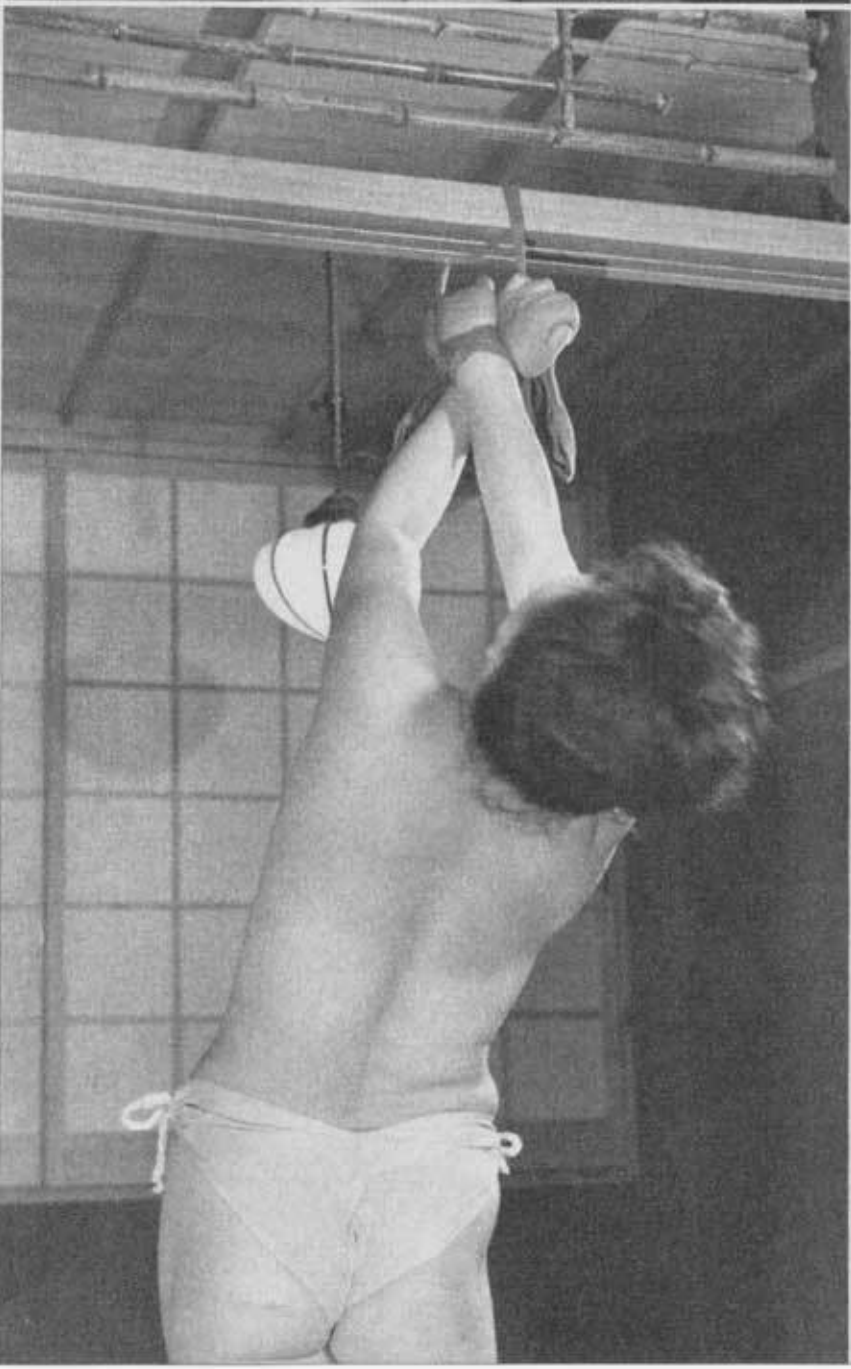
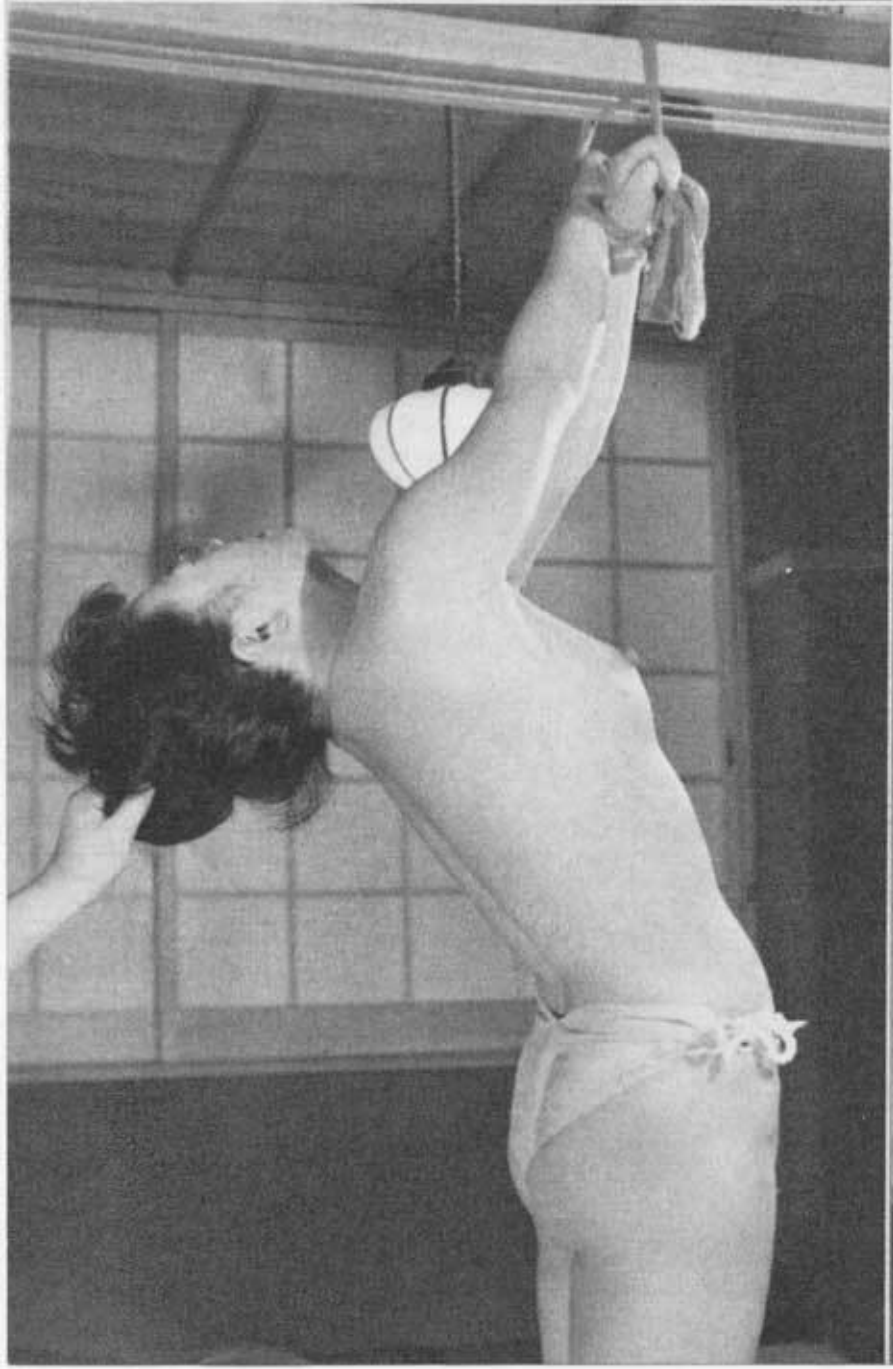
五枚一組 五〇〇円

責めが終ってからマゾ女性ひかるが最も素晴しかったと述懐した苦痛と羞恥に満ちた強烈な緊縛。両足が高々と頭の上まで挙って両

足の間から顔がのぞくといった、ぎゅうぎゅう力一杯締めつけたひかるのようなマゾ女性だけにしか試みることの出来ないポーズ。







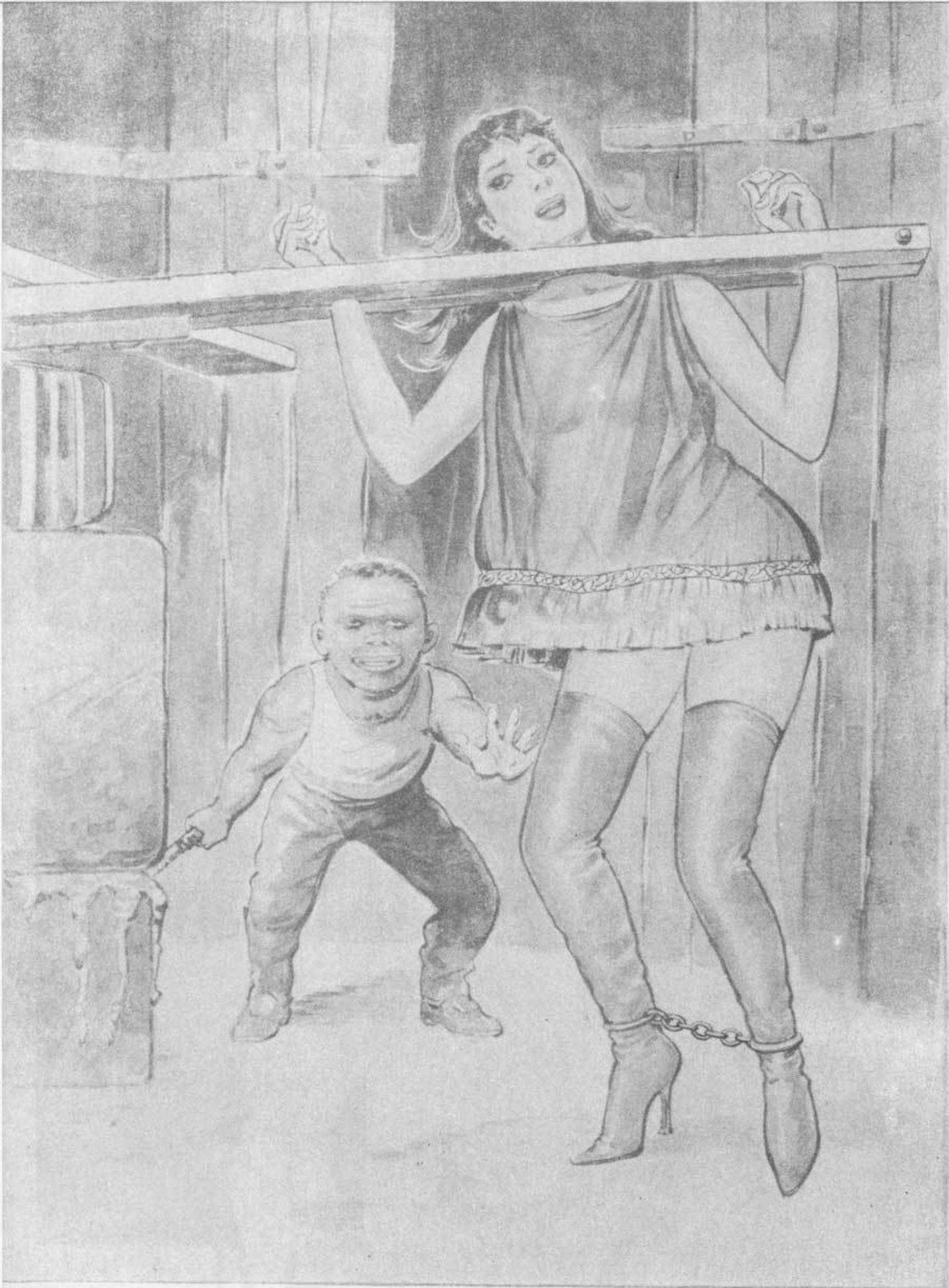












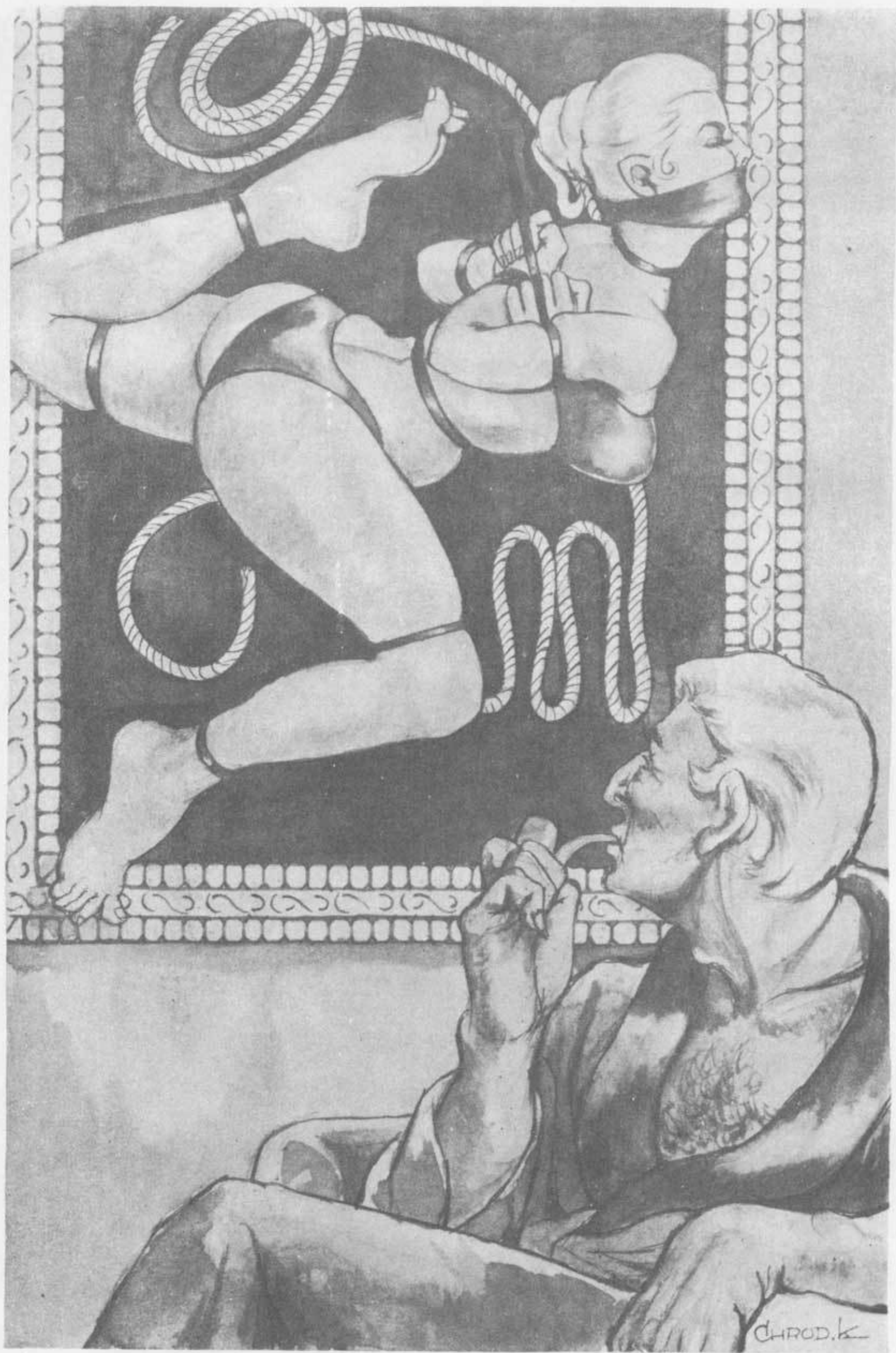
首 枷 踊 り

四 馬 孝 ・ 画



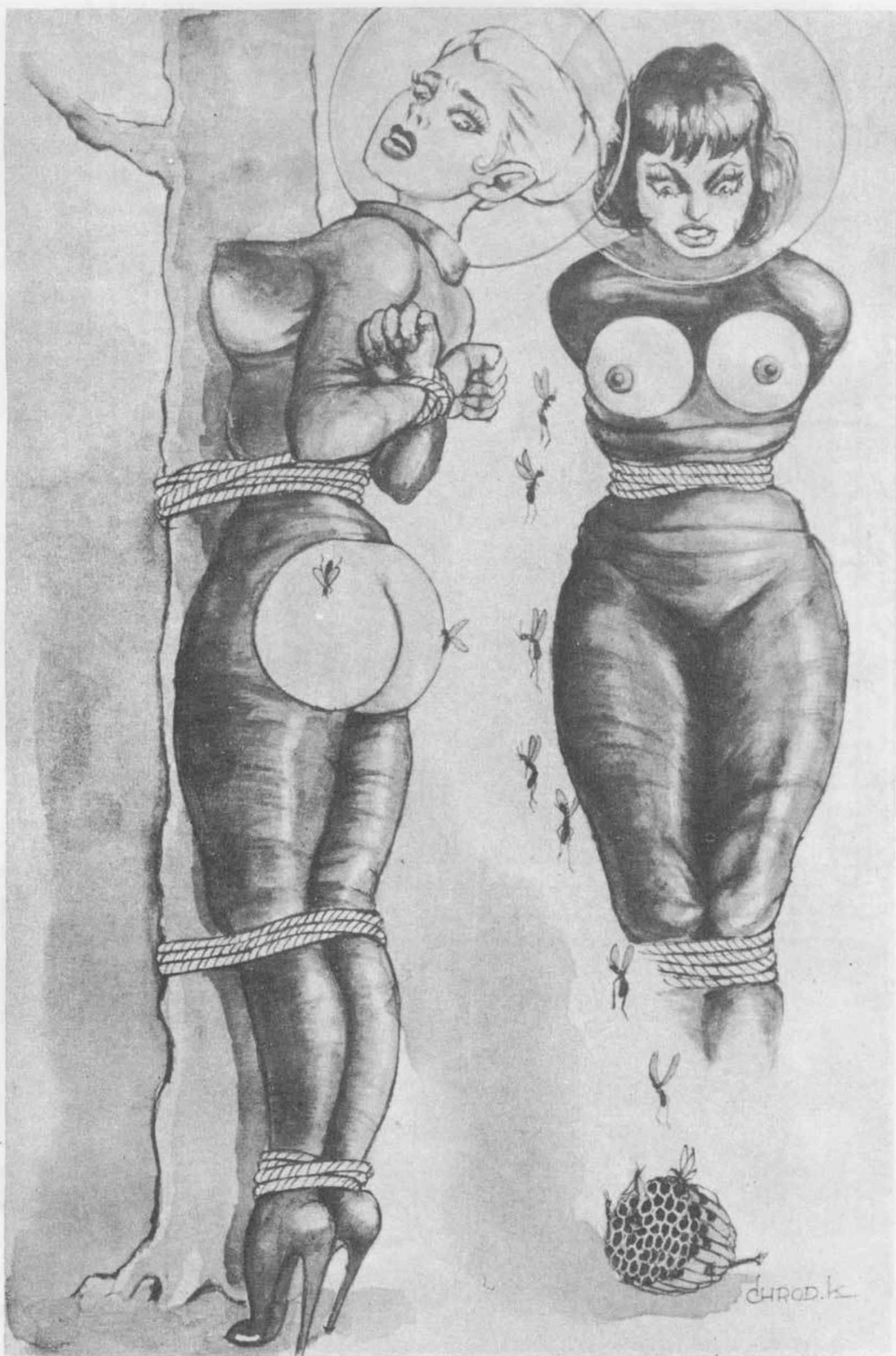
針金責め

クロード・コガ 画



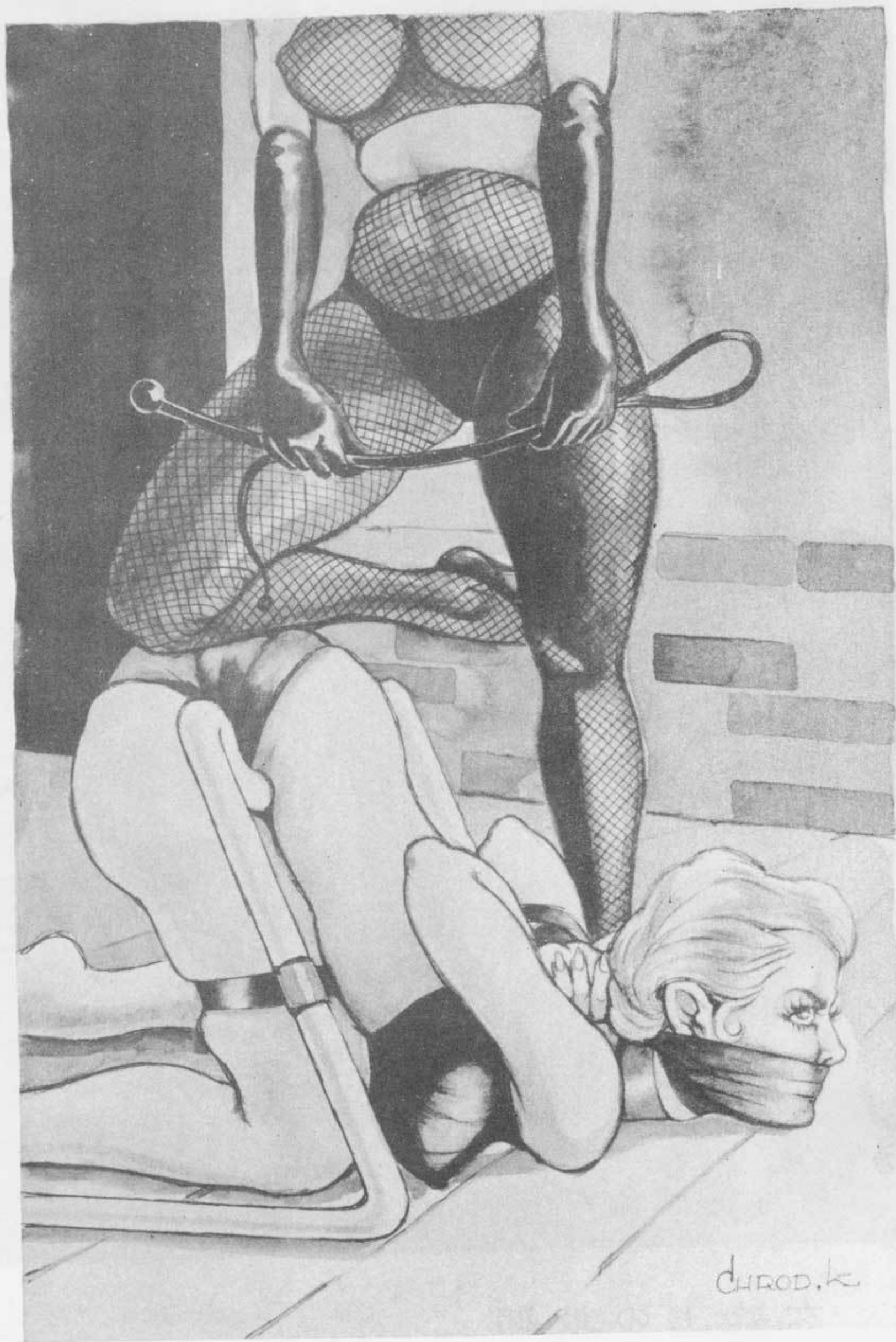
前衛美術家

クロード・コガ 画



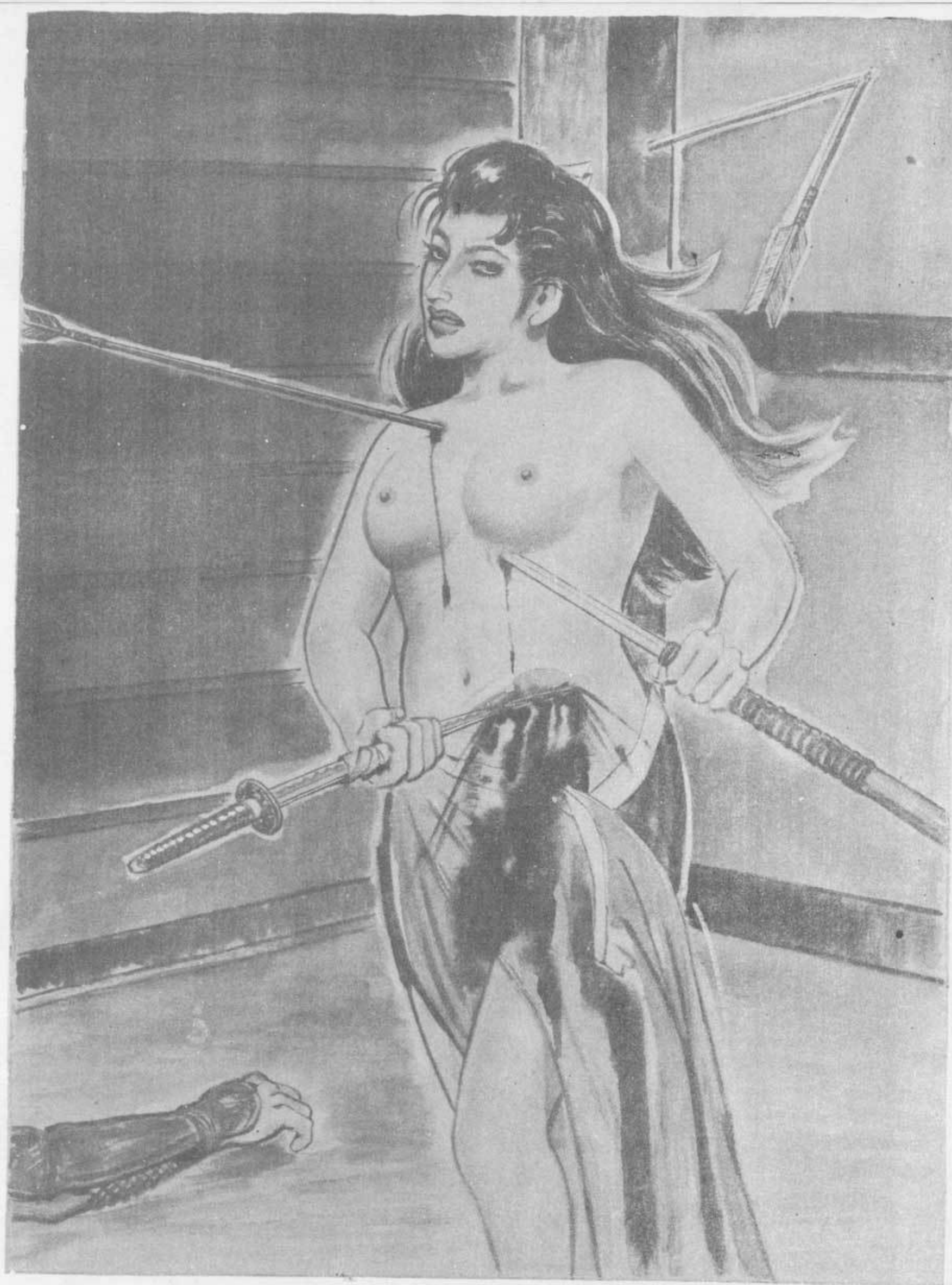
蜂責め

クロード・コガ 画



鞭打ち用固定器

クロード・コガ 画



女城主の最期

四馬 孝・画



腹を切る女の幻想図

瀧 れい子・画

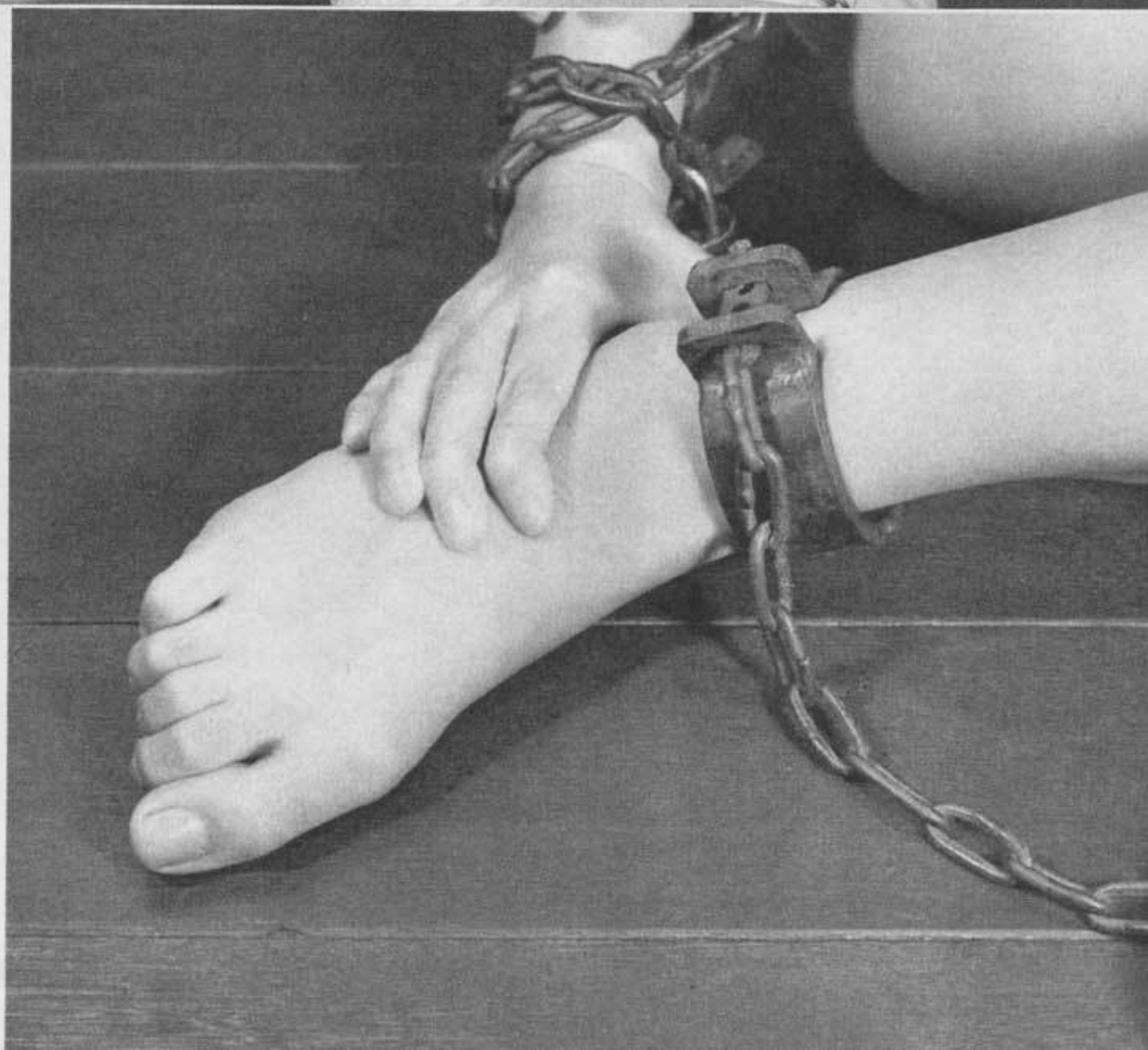


煙草責め

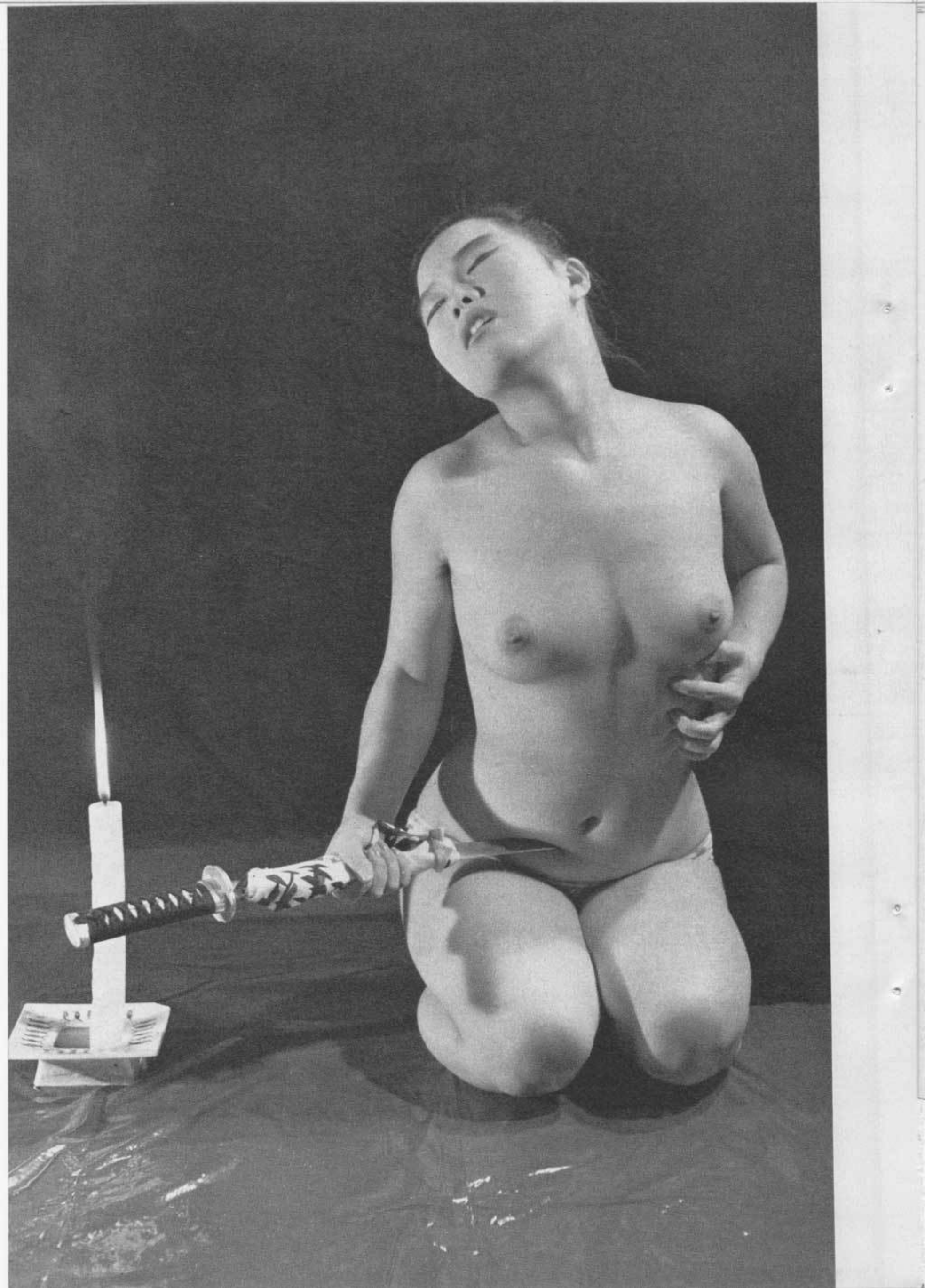
四馬 孝・画















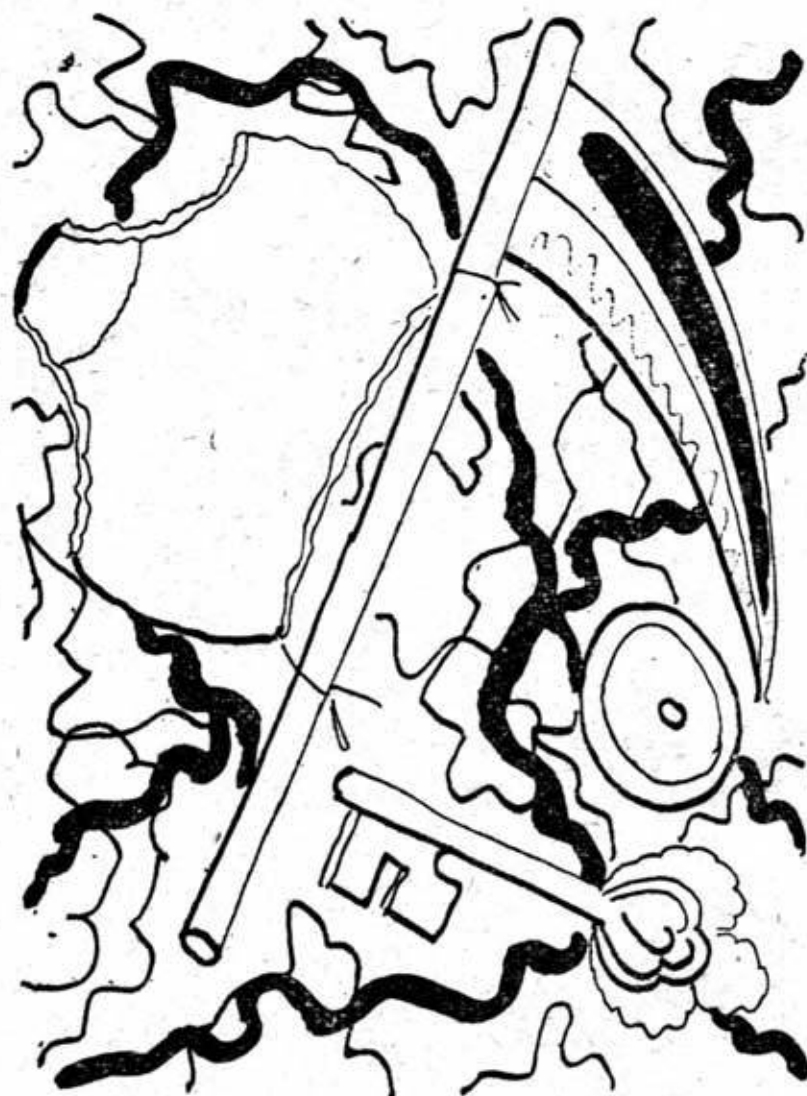


新しい風俗文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1963年 4月号

(第17巻 第4号 通刊 第175号)





巻頭論稿

宗教幻覚とマゾヒズム

林 弓 志 雄

かねて私は、宗教心理学に興味を寄せていて、信者の狂信的な昂奮の心理的本態が、何であるかについて観察してきたが、それが以前から言われている性的昂奮の変型だと言う説明には満足せず、ついに、宗教マゾヒズムの存在に帰納することによって、はじめて解明の一步を踏み出したのである。

勿論、私の研究は幼稚で初歩的であるから、自ら本稿が頗るドグマチーケルになって、その点隙だらけではあるが、決して筋は逃がしておらぬと確信をもっている。

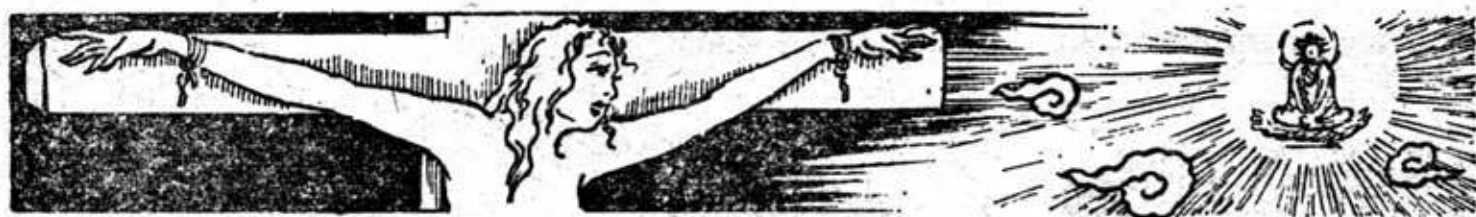
さて、原始時代から人間は神を祈ってきたが、これも適切に云えば、神と共存の生活を送って来たとも云うべきで、そもそも人間と云う生物は、攻撃的にも防禦的にも、他の野獣に比較しては劣弱な能力しかなく、たとえ、狼一匹にも素手では勝つことが難しいので、したがって弱肉強食の未文明時

代にあっては、生存そのものが不安に曝されていたので、何か超自然的な力に縋って、その保護の下で生活しようとするようになり、その果てに創造したのが神である。

神はそれ故に、単なる観念遊戯上の発想でもなく、ましてや迷信でもなく、まったくの生活の必需的存在であった。

で、あるから、神は必ず、人間の生命や運命について活殺自在の魔可不思議な神秘力をもつと云うことが条件であって、祈ることによって、いかなる奇蹟も生んでくれる偉大さをもたねばならない。

太陽、月、星と言ったものから、雷電、風雨と言った自然現象に神性を付与した太古から、今日、宇宙的エネルギーを神霊とみる時代に至るまで、神性そのものの考え方には蹉跎たる経緯はあったものの、神が超自然力をもつ偉大な存在で



あることにおいては、寸毫の変わりもないのである。

このように神は人間の空想の所産には違いないのだが、信者にとっては実在するものであって、これはまったく主感（覚）の問題で、神が在ると言う信者の信念や認識は、これを打ち破るいかなる外力も及ばない石の如き実在認識である。

すでに信者の心意において実在するものであれば、その神と何らかの形で相識ろうとし、そこに見神或は交霊と云う心靈現象が、いかに熱烈に願望されるかは、云うまでもあるまい。

そうして事実、見神はすでに何百人、何千人の各宗各派の信者によって実証されてきたし、交霊は靈謀によって度々世に問われていることは周知の通りであるが、では、神を見たとか、靈姿を見たとか言うことは、単に飛行機を見た、汽車を見たと云うことと同じかと云えば、それは決して、そのような実存的なものではあり得ない筈のものである。

五官器を超絶した大脳の潜在的な能力にのみよって捉えることの可能な見神は、最早や我々が普通にもつ感覚とは異った幻覚的、幻視的な、幽玄神秘とも称すべき境地を展開するのである。

超自然的な絶対的な神性そのものに触れたときの信者の感情は、この現世のすべての豪華華麗を遙かにぐーんと引き離れた、無限の荘厳さに眩むばかりの激情に歓喜するのであるが、ここに味う法悦には、必ず一つの随伴的心理が忽然と出現する。それは、神に対する絶対帰依、絶対随順の美服を纏うた宗教的マゾヒズムが、全脳を領して一途に燃え上ってくる――至妙な衝動である。

この衝動こそ信仰の本態であって、絶対帰依、絶対随順の自己のまごころを神に見せるためには、涙ぐましい献身的奉

仕をしようと決定（けつじょう）するのであり、（これが信仰の心定め、神との結縁、信心の発起である）この発想から信仰は芽ぐみつつ成長していくのである。

ここに云う、涙ぐましい献身的奉仕と言うのは、あらゆる肉慾的――人間的欲望を犠牲としたところの、通常、耐ゆることのできない苦業（自分の肉体を自虐することによって表現する神業の種々相）を通して、神に奉仕することを指すのであり、これこそ信仰の正統と名づけるべきものであるが、こうした献身的奉仕を無視した現世利益一点張りの新興宗教は信仰の本義に背馳した邪道であることは指摘するまでもないことで、真実の信仰とは神に対する献身的奉仕を、より深く体験して行く精進そのものを指すのである。

ではいったい信者は、かかる献身的奉仕を通して神に何を求めようと云うのだろうか。

信者（見神した者、或は感じの上で神の存在を信する者をも含めて）がある高邁な宗教的教養を積むと、物質的願望を持たなくなるもので、彼らは正しい文化生活をし、また科学の力を借りて自然の迫害や圧迫を排除するが故に、その求むるところは、精神界の満足と幸福に限られるのである。

こうした信者の求むる精神界の幸福を、いったい神は、どのような形で信者に酬おうとするのであるか。神の試練とは正しくこの信者の願望に対する神の応報そのものであると思う。

神の試練は、現世的苦痛（病苦、貧苦、良心の苦悩）であって、信者は、この辛酸に会って、実際にはのたうち苦しみながら、彼らは信仰が、これらの試練に耐え且つ克服することを祈念しながら、ますます深く神に対する奉仕の念を深め



る。

(何事もすべて神のおかげ) という、一条の信念は、病苦、貧苦、災難などの世の中の凡ゆる悲劇的運命を、すべて神意つまり神の試練として有難いと言う歓喜の法悦で受けとることを忘れない。それは不幸を幸福と見る完全なる倒錯心理であるが、倒錯することによってのみ神の試練(苦痛)を悦ぶマゾヒズムに到達することが可能な訳である。

この宗教的倒錯心理の何よりの実証は、法難、或は殉教と言う被虐願望の数々の実例が、それを何より証拠立てるであらう。

日本におけるキリスト教徒の殉教史もその一つであるが、長崎港草の記録によると、慶長年間の惨澹たる血の殉教史をこう伝えている。

「一つの鎖りに首枷をかけ、或は苞にまかれ、割木に纏われ板に挟まれ、大きな綱でまかれ縛ったまま破れ竹で背中から血の吹き出るほど叩かれ、石で胸を打ち破られ：こんな姿で刑場に追われて行く信者の数が、一月に三千人の多きに達した」とあるが、その状景は想像するだけでも惨鼻の極である。しかも、これらの殉教者は、この現世の耐え難い肉体の苦痛に、誰一人、悲しそうな顔もせず、皆、輝くばかりの喜色を浮べ、神の祝福を確信していたと書かれている。

これは又、何んと言う素晴らしいマゾヒズムの勝利であろうか。自ら進んで被虐を願望する人間の倒錯の崇高さは、他に比すべきものがないと思う。こうした神秘な倒錯心理は、最早、一片の倫理や、科学的物尺で量ることのできない宗教マゾヒズムの領域ではなからうか。

重ねて云うようだが今一つの例を加えると、慶長元年十二月に、フランススキャン派の神父ペテロバプチスタ、マルチン

ら六人、ジエスイット派の僧三人、それに日本人の改宗者十七人、合せて二十六人が京都で逮捕されて、長崎の浦上の刑場に送られたことがあった。(これがキリスト教弾圧の最初である)

途中、大阪の刑場で、二十六人の殉教者は両耳を切断されポタポタと血の滴るまま、草履も与えられず素足のまま長崎まで引き廻されて行った。

この悲惨な死の行進の途上で彼らは、泣いたり喚いたりする者は一人もなく、道々けいけんな祈りを捧げ、見物に集う群衆に神の道を説き、嬉々として明るい笑顔で旅をつづけたと言われている。

ここでも、我々は宗教心理の不屈な強烈さに舌を捲くのだが、この驚異すべき、そして不思議ともみるべき心理のパンドラの箱の中に宗教マゾヒズムが伏在しているのである。

神の試練は、それが苛酷なほど信者の法悦が反比例して昂騰していくと云う傾向は、一般的マゾヒズムが、やはり楽しい虐待を受けるほど感情の強まるのと同じであるが、ただ違う点は、生理的限界が一般マゾヒズムの限界であるのに、信仰にはこの生理限界すらも意に介せずに進ずる無限の熱狂があるということである。

いかなる型のマゾヒズムも、こうした宗教マゾヒズムの熱狂性の前では色を失うしかない。それ故に私は宗教マゾヒズムを絶対性マゾヒズムと呼ぶ。

最愛の我が子が死んでも、「神様の試練です」と太鼓を打ち鳴らしつつ神楽を死児の枕辺で舞い狂う信者の倒錯感情は、生優しい部分的倒錯ではなく生活そのものの倒錯を意味しているのである。



しかも限界を知らない信者の被虐願望の貪婪とさえ思われる、その痛烈な追及は、サディズムの頂点を示して剩すところがないようだ。

それは刑場でのキリスト者の態度の中にハッキリと窺われるのである。慶長のキリスト教弾圧のときの、これも記録の一つだが、信者を温泉ヶ嶽に引き出し、裸にして熱湯を浴せしめ、失うと少しく休ませ、また気を取り戻せば浴せるといふ言語に絶した処刑を加えた時の長崎奉行、竹中安正正重が思わず妖氣を感じた女信者の話が残っている。

奉行は一人の女信者を柱にくくりつけ、その足許にその女の幼児をくくりつけ、母親の足下で幼児に熱湯を浴せるが、どうだ改宗せぬかと迫った時に、女は軽く微笑して改宗はしませんと拒み、見す見す我子が熱湯を浴びて死に至るを平然と見守り、我身もまた動ずるところなく死んで行った。

又、ある女信者は、何度も熱湯を浴びて、今や全身に火傷を負い、皮膚は爛れて化膿し、見るも無惨な姿になったが、なおその顔に微笑を漂え昂然と右手を高く上げて、脇の下を役人に示し、ここ一ヶ所だけがまだ熱湯にかからず爛れていない部分があるから、ここにも早く熱湯をかけよと言ったので、さすが役人も思わず躊躇せずにはおれなかった。……と書かれている。

これらの殉教事実は、いかに信者が神の試練をひたむきに追及するかということを示し、その苦難の度が深刻なほど、被虐的法悦が昂まるといふことを証明しているのである。と同時に宗教マゾヒズムには生理的限界のないことを痛烈に物語っているのである。

宗教的幻覚は宗教妄想とも呼んで、精神病学上でもすでに

科学的なメスが入れられているが、これを一般精神病の一つである妄想狂とその本態のどこが違うかと云うに、宗教妄想者には高い宗教上の理想があることで、一言にして尽すなら優れた真理（道徳）の実践者であると云うことだ。

実を言えば、私はここで、宗教幻覚について十分な解説を下す必要がありそうに思うのだが、それでは到底、結論が望めないもので、いちおう宗教心理学の方にそのことは委ねて省略することを許されたい。

幻覚の実際は、見神する人の教養の差、環境の別などの要因によって、光りの矢を見たり、イエスを見たり、白髪の老人を見たり、観音や天女を見たり、僧形を見たり、それはもう千差万別と言つてよいので、決して一定ではないのだが、そういえば、出鱈目きわまる話に聞え、単なる想像である一笑に付されるだろうが、ここに単なる想像と異なることは、先にもいったように、その幻覚に実感があること、その神のために生活を捧げる異常な下僕の謙虚さをもってするマゾヒズムが発現することなのである。

だから換言してみると、いかに見神したといつても、その時、神にすべてを捧げ、神の義に生きるために、神の試練に喜んで耐えようとする被虐の願望がないなら、それは、まったくの出鱈目な、興がりの空想にしか過ぎないニセの見神であると断言してよい。

真実に見神するほどの人のもつ品性は、道徳を遙かに超えた優美な神々しさが匂うもので、例えば、我々にとって禁煙だの禁酒だのと云う禁忌は仲々実行できないが（これは決して意志の薄弱のせいではない）その人達は、それが神のみこころに反するものである限り、たとえ、非人間的な（悪い意味でなく、凡慾を去った人間と云う意味）克己でも、易々と



して自制するのである。

自制とはいったが、自制ならば無理に自己を殺すことになろうけれども、この人達は、そうではないので、その逆に、自制克己の苦しみを神の試練として味い悦ぶところの倒錯心理に根差した異常心理によって、神に近い高徳を獲得しているのである。

人に叩かれて喜び―唾を吐きかけられても「有り難うございます―神様」と心から言える信仰は、単なる克己や自制からは生れよう道理もなく、そこには、崇高な宗教マゾヒズムが存在するからに外ならない。

こうした宗教マゾヒズムと、一般マゾヒズムは、では全然繋りがないのであろうかと云うに、相互の背景にあるものは一つであることを発見するのである。

そして、その一つの真理は「被虐は純愛の極致である」と云うことだ。

愛する者のためには殺されてもいい、という心理衝動が縄のプレイになったり、色々の型の「責め」となって表現されるように、神に奉仕する純愛の衝動が、凡ゆる苦難を神の試練として喜びを迎えようとするのである。

こう論じてみると、はじめて、信者が神の存在を、自己の幻覚において確認したいと悲願する理由が、マゾヒズムの人間性から進る必然の願望であることに気付く。愛こそは人間の最も甘美な夢。ほのぼのとした愛の世界は、人生のオアシスである。ならばこそ、被虐は愛の極致として、我々の心を慰める唯一つの泉ではなからうか。

見神や交霊の種々相がもたらすマゾヒズムの在り方を先に書きたいのだが、見神に対する十分な説明を省いて論及する

と、ある荒唐さが感じられて本稿の価値を著しく減ずる惧れがあるので、已むなく、教祖と信者、お振り替えの二つの場合におけるマゾヒズムの姿態を明らかにして本論の結びにしたい。

(現在私がいかに宗教的幻覚について書きたい欲望に馳れながら、いかに書き辛く、苦悶しているかは判って貰えることと思う。)

見神という信仰の奥儀に至らない信者は、教祖を現人神と見ることによって満足しようとするのである。

こうした信者の要望に応えるために、教祖はいずこの宗団でも神格化されているのが常であって、教祖は神の信託を受けるか、或は、神が地上に遣した神の子であると云う風に解されている。

教祖の意味は、神が人間の姿をもって此処に在ると云うことで、単なる教団の創始者ではないのである。

だから、教祖と信者の関係は、神と信者の関係に置き換えられることによって、はじめて意味をもつのである。

この理解に立って、ここに掲げる若干の引例に注意を払ってほしい。

某宗団では教祖を聖師様と呼ぶ慣しになっていた。聖師は日本や世界の将来に明確な予言をするので有名だが、ここに集る信者は、日本貴族社会の名流婦人が多く、いつしか、聖師の側近は、これらの貴婦人が妍を競うて絢爛と咲き誇る如くに囲繞した。

これらの貴婦人が、この聖師様に汲汲として奉仕する有様は、下女のそれよりも自らを卑しくして仕えた。最早や、一個の女奴隷の如くにである。

むろん、この貴婦人たちは、愛する夫や子の俗世の縁を断



って聖師に付き従う者が多かった。

そして貴婦人たちは聖師の肩を揉み、足を擦り、入浴時には、随喜して聖師の五体を恭々しく洗った。

こうした奇現象は、すでに貴婦人の倒錯を匂わせているのであるが、さらに、聖師が入浴後の、洗い垢の浮んだ残り湯を頂かしてもらうために（もっぱら飲用に供するのであるが）これを必死で奪い合う状況は、完全な倒錯図であった。

貴婦人達は、それでも満足せず、聖師によって骨を碎れるほどの心霊的暴力を受けて、病魔を取り払ってもらったり、心の歪みを直してもらって随喜した。（貴婦人と聖師のマソ的關係は京都府警察部の調査に載せられている）

因に—この聖師は、気合一つで雀を落す能力があったと云われている。

繰返そう「被虐は純愛の極致である」貴婦人達は聖師を神と崇めて真心をもって神による被虐を願望したのである。この宗教マゾヒズムの理解がないと、こうした貴婦人の生活態度の倒錯は一片の愚劣な狂態としか眼に映らないであろう。

次に教義と信者の関係に見よう。末端の信者になると、教義（神の言葉）を神とみて、教義に奉仕することに信仰の意義を求めようとするのだが、この中で異色のあるのは「お振替え」である。

「お振替え」と云うのは、人々の苦悩を救う—と云うのが信者の唯一の神業である—と云う教義から演釈された行の一つであって、その救いの実現は、人々の苦悩を我が身に振替えてもらって（神の力と自己の信仰力によってである）我身を苦しめて人を救う—と云うマソ的神業なのである。

例して云うならば、ここに胃痛でひどく苦しむ者がある。

信者は神に祈りつつ、「哀れなる者の胃痛を私に振替えて下さい」と一心不乱に祈念すると、今まで胃痛に苦しんでいた者が癒されて、その胃痛は信者の上に発現する。そして一刻信者は胃痛に苦しむが、やがて神によって癒されてしまう。こう言うシステムである。

これは実際にそうなるだろうか。胃痛に限らない、いかなる病も、また良心の痛烈な悩みも、すべてお振替えが可能なのだが、その効験は相互の心霊観照のピントをさえ合致すれば奇蹟に近いものがある。

お振替えによって、胃病でもないのに胃痛が発現したり、神経痛でもないのに痛みを感じると言うように、健康なる肉体に病変が発現すること—また、明るい平静な精神が俄に何の環境的変化もなくして、暗い苦悩に打ち沈む—と言う奇妙な転換。苦痛の実体が信ずる心一つで、人から人に移行する不思議さを信者が味った時、他人の苦しみを身に替えて救うと云う神の義（ただしさ）に身を焦す喜びが溢れるのである。

東洋の道徳に「衆に先んじて憂う」と云うのがあるが、お振替えの崇高な献身さには、到底及ぶべくもないのである。

苦痛を自ら求めて愉しみ、苦痛に喜びを感じるマゾヒズムを、被虐は純愛の極致と私が叫んでも、決して不当ではないだろう。

宗教マゾヒズムは、むしろ崇高なる人間感情である、それは人類の平和や愛の尊い支柱であると言えるからだ。

だが、学問的には、明らかに倒錯感情であって、正常ではない。しかし正常な人間ばかりの社会には、犠牲の美しさも奉仕の喜びも、恋愛の情炎も、すべてこの心の灯は、噫—永遠に失われて、文学も宗教も姿を消すに違いない。（完）

真知子汚辱

五反虫太郎

○

真知子が夜の京都駅へ駆けつけた時は、すでに遅く終列車の出た直後であった。夫の政二が会社の用で北陸出張中、芦原の温泉での宴会の御馳走に中毒して、重体だと会社からの電報が着いたのは、真知子がこれから寝ようとしていた十時すぎだった。とるものもとりあえず、早鐘うつ胸を焦そうにこがしながら、おりよく通ったタクシーを飛ばして来たのに――

ころびそうに走って改札口を出た時、塩小路の陸橋の下を赤い二つの尾灯が、人間の感情など知る由もなく、小さく消えていった。

「ああー」

と、一声、悲鳴とも思われる嘆声を吐き出した。真知子はホームの冷たいコンクリートの上に、うずくまってしまった。

次の列車は、朝の七時二十八分発の金沢行よりなかった。十月の中旬は十時を過ぎると肌さむさを通りこして、火が恋しい思いである。真知子はしばらく、そんな時刻にも雑沓する待合室の並んだ椅子に崩れるように座りこんだ。真知子の心の中で、一旦帰って明朝出直そうかと思う心と、夫の軀を気使ってすでに心は政二のもとに走って、夫への距離に一步でも近い所にいたい気持が、無言の相剋

を続けていた。じっと座っていられない心の焦り――。時間が流れて、喧噪と雑然と待合室特有の雰囲気も、いつしか潮のひくように静まりかえっていた。今までの騒々しさが嘘のように思える。椅子の上に長々と寝そびている人々は、まるで我が家のベッドの如く、のうのうと鼾さえ立てていた。まっとうな生活を送っている人間には見られない風貌姿勢のいくせもいくせもある老若男女の群――。無言の圧力をもって真知子の心に恐怖の焰をかき立てる。そくそくと寒さと一緒になって真知子の全身に鳥肌を走らせる。今にもそれらの怪しげな夜の待合室の住人が、真知子一

人をぐるぐるととり巻いてくるような恐ろしい妄想が泛ぶ。「キヤー」と叫びたい胸の息苦しい動悸。真知子は身じろぎもせず片隅の椅子に小さくなっていた。夫の苦悶している姿がおののく胸に、鮮明なテレビのように小さく大きく飛び上がって、どうにもならない傷心に輪を描いた。

○

「もし……もし」

後から小さな声をかけられて真知子は、ドキンと胸の鼓動が止まったかのように振りかえった。

「寒いでしょう。火がありますよ。来られますか——」

鉄道の制服を着た中年の男だった。瞳が何かに憑かれたように光っているのが、ふと気になったが、それ以外はさして気になる顔だちでもなかった。

「来ませんか——」

重ねていった男は、意味もなく笑った。真知子は、その男の微笑と鉄道の制服にさそわれて——。

「ええ、ありがとう」

「暖かいですよ。ストーブが燃やしてありますから」

火——と聞くと、今さらに夜の肌さむさが身に沁みた。

○

男の後を追って行くと、男は駅の前を西へ官舎街の間を通り抜けて小さな小屋の中へ、真知子を案内した。

せまい小屋の中には、赤々とストーブが暖かい炎を立てていた。無人なのが一瞬真知子を躊躇させたが、肌に心ちよい暖気が真知子の不安を氷が溶けるように小さくしていった。男は気さくに、ストーブの横へ長椅子を引寄せて、温かい番茶を湯呑みに出してくれる。サービスが悪いことで有名な鉄道職員に似合わない愛想よさ——薄気味が悪い程である。

「さあ、さあ、どうぞ——傍へ寄ってあったまって下さいよ」

番茶のこうばしい匂いが、温味と一緒に暖かくなつて軀中を温めてくれた。ストーブの火気が真知子の頬をうす紅く上気させた。肌がじんわりと小汗をかく程である。ようやく落付いてくると、見も知らぬ異性と二人ということに変に気が走った。真知子はそっと男の方に瞳を向けた。男は向側に同じように腰掛けて、何か読んでいた。何の本だろうと真知子は男

の膝もとに拡げられた雑誌を見つめた。と、その時、頁がめくられた。

「ハッ——」

と眼をそらした。真知子の眼に入ったのはスチール写真だった。

半裸の女が縄でギリギリ縛られて、傍に男が立っている写真——眼をそらした真知子の胸がおどろおどろと妖しい音を立てた。上気した頬が一そう赤まってくる。一旦そらした瞳が、知らず知らずの裡に男の持つ雑誌に吸い寄せられていく。瞬間、男が真知子の方を見つめた。男のキラッと光った瞳と真知子の悩ましく濡れた瞳がカチッと空に行き合った。思わず真知子は、ハニカンダ笑いを美しい唇の端に泛かべると一緒に、ドキマギした眼の行方に迷った。

「奥さん。このような写真、好きですか」

男はその頁を大きく開いたまま、真知子の横にいざり座った。今は真赤になった真知子は顔をうつむけた。その写真の、何か満ち足りた表情を泛かべて縛られている裸女の姿態が、夫との夜毎の自分の姿に重なっていった。乳房がやるせなく疼く。一週間、夫に接していない女体の疼きだった。(ああ、あな。私すぐそちらに参りますわ。きっと死な

ないで待っててね」と、遠い異郷の空に病む夫へ祈るのだった。

○

男の眼が異様に燃えている。突きさす程、若い真知子の軀の線を舐めつくしていく。うつむいていても真知子には、男の荒々しい炎の眼が見えるようである。男の重量感が小さな部屋の中に重々しく充満していく。真知子は腰を浮かした。女の本性が危険を察知した。が、男の行動は変らなかつた。かえっておだやかな調子で

「奥さん。コーヒは如何です。良いのがあるんですが、一杯お飲みになりませんか」

そういうながら男は、部屋の隅にある小さな食器棚の方へ去った。

「さ、どうぞ——」

コーヒのかぐわしい香気が、真知子の動揺した心を落付かすように匂った。さそわれるままに暖かい茶碗を手にとった。心の中まで泌み込む心ちよい香気。その香に酔ったのか、真知子はうっとりする睡気を感じた。

「奥さん。このような写真、お好きですか」

遠い処からささやくような、男の熱っぽい息を含んだ言葉が、もうろうとしてくる意識の片隅に聴えてくる。

「奥さん。このような——お好き——ですか」

裸の女の肉体が、クルクルと白い渦のように巻いて真知子の網膜の底に沈んでいく。乳房に喰入った縄目、くびれた胴、むっちりした腹部、つき出た臀部、悶える白い太腿——いつしかその女体が我が身になっていった。

「ああ——」と、小さく呟やくと真知子の顔は膝の上にうつむせになっていた。

○

と眼をさました真知子は、午睡の眼をさました幼児のように、周囲を見廻した。

「アッ、此処は——？」

客車の内——だった。乗ったこともない豪華な展望車の室内だった。深いクッションの椅子、廻転椅子、古風な桃山風の彫刻のある天井やジュウタンの敷きつめられた床。どうしてこんな車の内へ、いつの間に、何時頃なのだろうか。疑問が真知子の驚愕の心に走った。夫のことが瞬間に、真知子を現実の場へ蘇えらせた。七時二十分の金沢行は出たのだろうか。腕の時計を忘れていた。時計の針は七時二十分を指していた。ああ、よかった間に合う——と、あわてて真知子は扉の方へ走った。

「奥さん。あわてて何処へ？」

と、扉のガラスを背に、昨夜からのあの男が冷たい視線と口調で、真知子の行手を遮ぎった。真知子はハッと蛇に睨まれて動けないネズミのように、バネ仕掛の不意に壊れた人形のように立止まった。

「可愛い奥さん、どうもしませんよ。そんなに驚かなくてもね」

そんな男の顔を睨みつけながら、真知子は「汽車が遅れるんです。お願い、通して下さい。早く、通して下さい——」

「朝の列車はもう出た後ですよ。奥さん、今何時だと思っているんです。やがて、夕方の六時近い時刻ですよ——」

真知子は、びっくりして腕時計に眼を落した。時計の針は無意味な七時二十分を指した儘である。

「ああ、どうしよう。夫が病気の——夫が」と、怨みをこめた瞳で男を見つめた。男は何の感情もない人のように冷たぐいった。

「別に奥さんを殺すの、どうするのという訳ではありませんよ。ただ、一寸ばかり僕がいう通りにして下されば終ることです。」

「……」

「奥さん。お年は、二、三ぐらいですか、まだ若い。楽しみが一段と深いというものだ」

露骨な中年男の厚顔さが、顔色も変えずい
わしたハツとする言葉。真知子の本能がその

時になって始めて、我が身のある場所の危険
な地帯であることを知った。男と女。無人の



空客車の中。構内の片隅にあるらしい外界と遮断された場所。戦慄が鳥肌たたしてサーツと五体に走った。心底から、おののきがせり上ってきた。フラフラと黒のハイヒールの足もとが乱れた。「と、と……と、危いですね。しっかりしなくちゃ、これからですよ」何がこれからだというのだろう。「帰して、帰して頂戴——病気の夫が待っているんですから」

「僕にはそれが、何の関係もないこ

とですからね。用事がすめば、帰して上げますよ」

「お願い、早く帰して」

「帰して上げます。さっそく僕のいうようにしなさい」

男の命令的な切口上な言葉は、何の仮借もない冷酷さである。

「では、その上服を——」

脱げと、男はいとも簡単にいった。無言で男を見つめた真知子の耳たばをかすめて、男のどこにかくし持っていたのか、細い革鞭が風を切って鳴った。

「脱ぐんだ。それから、靴、靴下、スカートを。早く——」

二度、三度、冷酷な鞭の空を切る堅い音が、男と女の二人だけの車内に聴えるだけだった。

真知子が恥かしさに顔をしながら、男の持つ鞭のために責められていこうとするのだ。今は、白い下着だけにされてしまった真知子だった。キラッと光る瞳をすえて男は、真知子の堅く合わされた太腿、シューミーズの盛上った胸元を舐めるように見すえる。

「嫌です。これ以上、私をどうしようというのです。帰して下さい」

「すぐ帰してやるよ。黙って俺のいう通りにしろ。早く、それを脱ぐんだ。シュミーズを——裸になるんだ」

男のものやさしかった口調も、いつしか、高圧的に乱暴になっていた。又しても、耳の傍へ矢のような鞭の風が鳴る。だが、真知子は、これ以上、見も知らぬ男の前で、夫以外に見せたこともない素肌をどうして露わに出来るものか。シュミーズからこぼれそうな乳房の丸みを、両腕でかくしながら男の前に小さくしゃがんで拒んだ。

「裸になるんだ——」

男の腕がサッと動くと、うずまかったズロース一つの、むっちりとした張った臀部の丸みの上を鞭が走った。

「ッ——」

思わず呻いて立上ってしまった真知子の肩先を、つかまえた男の指が肩紐を握切った。

「あッ——」

こぼれ見えた乳房のふくらみを押えた両手の上を、第二の鞭が情け無用とばかり赤い条を見せて走る。

「腕を上げろ」

真赤に顔染めて真知子はおぞおぞと、真白い腕を露わに差上げる。男の眼の前に、こ

んもりと丸みを見せた二つの紅色の乳首も悩ましい乳房、柔かな女の肌が匂う——。

つと、近よった男は、ズボンのポケットから細紐を引出すと真知子の顫える手首を、堅く縛りつけた。男の吐く息が真知子の肩先に熱い。汗ばんだ男の指先が、白い二つの乳房のふくらみを虫のはうようにうごめいた。陶器のように清らかな白い肌の上に、みにくい痣がつくかのように、真知子は半裸の身をくねらせた。逃げられそうにもない客車の中。苦悶する真知子の動きは、かえって男の興奮を倍にするだけかのである。乳房の谷間から背のくぼみ、胴のくびれへと、男のネチネチと嫌らしい指先の蠢動——。

「ああ、勘忍して下さい。堪忍して……」

乳房が大きく波打ち、可愛い紅の乳首がピツと突立って苦しく喘ぐ。

「次——ズロース」

男の押し殺した声が、強く真知子の恥かしさの極にある肉体を奈落の底に突落す。

「とるんだ——」

真知子は哀願の瞳を男に向ける。どうしてこの姿以上の辱かしい姿が出来るだろうか。ペタンと腰を下ろした真知子の頭髪をつかんだ男の強い力を、耐えながら、真知子は根が

生えたかと思える程、頑強に拒み続けた。

ビュウー白い茶碗をふせたような乳房の上に、鞭が飛ぶ。二回、三回、青白い肌にうす赤い鞭の跡がふえていく。胴から背へ——胸へと……。

「立て、立つんだ」

堅く合わせた太腿の下に、ペタンと落した足首に、三度冷酷な鞭が……。悲しい最後の呻きに喘ぎながら、真知子はいっしかふらつく足をふみしめふみしめ立つのだった。

「とるんだ。早く」

男の眼は狂わしく光る。

「堪忍して下さい。これだけは、これだけは——」

「とるんだ。脱げばよいのだ」

「嫌です」

真知子は大きく叫ぶと、男は体当りにむしやぶりついていった。恐怖を通り越して反対に敵にすがりついてしまった真知子だった。ぶち当たった男の胸で乳首がコリコリと哀れな音を立てた。

「うッ——」

と顔をそむけて逃げようとする真知子の白い背中にも男の指先がからんだ。結ばれたままの両手で彼を押えつけた。男には、はかない

真知子のそんな抵抗など何のことはない。後手に縛り直すだけである。真知子は、もうどうすることも出来ない。男の手に小さなナイフが握られていた。冷たい戦慄が真知子の背を走る。ハッと、右の背のあたりが痛みを憶えた。

荒い鼓動を打っていた心臓が死んだもののように、瞬間、動きを止めた。羞恥が腹部から胸へ赤い色で染まって来た。一瞬、止まったかと思えた胸の動きが旧に倍して、早鐘うつように、怒濤の狂うように打ち始めた。

男は真知子を、展望室にある大きく深いクッションの廻転椅子の上に坐らしめた。

クルクルクル——と男は廻転椅子を廻し始めた。腕を縛られたままの真知子を支えるものはない。背丈のある椅子の背に真白い深い曲線の背中を、グツタリと押しつけて倒れまいと足をふんばり胸苦しい眼まいを耐えるのだった。クルクル、くるくる、廻転椅子は廻る。廻る、まわる、マワル——。乳房が大きく喘ぎブルンブルンと椅子の廻転と調子を合せて悩ましい動きを見せる。真知子の神経にはもう何の感覚も消えていった。室内が淫らかな笑いを泛かべた男の顔が、ゆるやかに廻り始めた。クルクルクル——廻転が急激に早く

なると、渦の巻くように頭の上でメチャクチャに、抽象絵画の紋様に似た模様を画いた。

「あーあ、あ、あ、たすけ、て」

錯乱した真知子は吐気を感じながらグツタリと椅子の上に倒れてしまった。

クル。と、廻転が止まった。真知子は、ク

ナクナと床の上に延びていた。輾転反側と瀕死の白鳥のように、青白い汗を流した生まれたまの姿で、二十三才の裸身を虚しく、見知らぬ男の足下に晒け出していた。男の瞳は、真知子を穴のあく程眺めていた。後手にされて一段と盛上がって苦しげに波打つ乳房の丘、大きくせり上り、そしてへこむ、苦痛を耐える腹部の切なさ。苦しさに無意識に左右上下に蠢動するすなりと延びた白い脚。

真知子は、口から流れ入る冷たい液体に、ぼんやりと意識を回復した。

「喉がかわいただろう。水だ、飲め」

男がそういうながら、コップを手に真知子の前に立った。男は真知子のあごに手をやると口の中へ水を流しこむ。ゴクンゴクンと水は真知子の口から体内へ流れ入る。が、真知子はその水の変に塩辛い味に唇を閉じようとした。男は真知子の小鼻をつまむと、苦しさに自然と開く唇からグイグイと流し込んだ。

塩からい液体を——。

怨みに燃える真知子の顔や瞳を、傍にしゃがんだ男は知らぬげに、半裸の真知子の肉体を執拗に姦視していた。男の眼は、何か期待に光っていた。

「あッ！」

思わず真知子は叫んだ。塩からい水の意味をさとした。と、ジワジワと疼き始めた。身内からの自然の生理の欲求が——ああ、こんな恥かしい姿でどうして出来よう。まして男の前ではないか。夫にも見られたことのない排泄の姿勢。尿意が腹の底から湧き起ってくる。耐えようとすると一そう強く迫ってくる。責苦——。これ以上の責苦があるだろうか。若い女の身で、おまけに男の前で、どんな恰好ですればよいのか。苦しさは募ってくる。腰が我知らず左右にもじもじし始めた。男は残忍な眼で真知子を見つめる。生理を耐える不自然な忍耐は、真知子の額に小さな汗を光らし始めた。

「ああ苦しい……」

「何だい——え」

「ああ、あッ」

「苦しいのかい、助けてやるで」

男は真知子の脇の下を、足の裏を、こそば

り出した。こそばい。苦しい。呻いて腕いて
真知子は全身を床の上で波打たした。

「ああ、クルシイ——」

一声叫ぶと、自然の生理は耐える限界を越
えた。真知子の眼から口惜しい涙が頬を伝っ

て耳たばへ止めどもなく光って流れた——。

死んでしまいたい。これ以上の辱かしき
があるだろうか。一そ殺して貰いたかった。

真知子の人間としての誇りもみじんに砕かれ
てしまった。精神も肉体も、クタクタに男の

為にさいなまれてしまったのだ。

「殺して、死なして——」

涙の顔で男に訴えていた。全身を大きく波
打たせて泣く真知子を、男は残忍な笑いを泛
かべながら見つめていた——。 ———終———

暗黒の世代

△警察で拷問された私の告白▽

陸

奥

凌

一

昭和十七年も、あと三日ほどで暮れようと
していた寒い戦事中の年の瀬だった。

私は九州の長崎市の中学三年生だった。
もう休暇に入った学校で、剣道の練習をし

ていた私は、二人の刑事に、その市の警察へ
連行されていった。

慌しい歳末の刑事部屋には、既にその事件
の関係者で、未逮捕の者が何人か顔を揃えて
いた。

少年の私までが取調べを受けねばならぬ事
件と云うのは、私の父が主宰していた思想団
体の反戦活動についてである事は、私にも直
感された。父は、数日前に、幾人かの主だっ
た人々と重要な書類を処分した後、身の危険

を知って姿をかくしていた。これから、吾々の追求されねばならぬ問題と云うのが、それらの人々の行方と、文書の内容についてである事も容易に想像された。

唯々私は勿論の事、父の許へ嫁いで間のない義母にしても、何も知らないのだから、用件は判っていても答えようはなかった。

刑事部屋には、顔見知りの男達に混って、義母や叔母も青い顔をして坐っていた。

何か話しかけようとした私は、恐い顔をした刑事にどやされて、生れて始めての警察に慄え上ってしまった。

義母達は既に、口頭による取調べは終わっていたらしく、間もなく手錠でつながれて、ぞろぞろと連れ去られて行った。

一人残された私は、この事件の最高捜査官と思われる私服の男に取調べを受けた。

「お父さんの行った先は？……心当りは？……書類の家の中の隠し場所は？……仲間の姓名は？……」

大体、想像していた通りの内容の質問だった。

勿論、その中の一つとして、満足な返答は私には出来なかった。

「じゃ、あの連中と一緒に調べ給え。……」

その男は、私の後に控えた刑事に目顔で命じた。

私は、手錠をかけられて別の部屋へ連れ去られる事になった。

「オイ。この坊主と、女二人はすぐパイ（釈放）だから、身体に傷を残さずにうまくやってくれ。」

「かしこまりました。」

私や義母達は、逃走ほう助の容疑で逮捕されたらしい。そして、今の刑事の言葉で、私も苦痛を与えられる事を覚った。

二

私が連れられて入った部屋には皆が居た。

その部屋は十畳位の広さの部屋で、中から錠をかけられるように出来ていた。

天井に滑車があったり、壁に「かぎの手」

がつけられていたり、また片隅に鞭や木刀、竹刀が置かれた。見るからに恐ろしい部屋だった。

片隅の長椅子に、義母と叔母が坐って、今男達に行われている取調べを見ていた。

私も並んで、その恐怖の訊問を見ねばならなかった。

Kは、手錠を鉄砲に施されて、床を蹴ころがされていた。彼の口からは血が糸を引いて

流れていた。Mは、天井から逆さに吊されて鼻の孔に水を注がれて悶えていた。

また、隅の方では、後手錠のHに、一人の警官が馬乗りになり腋の下をくすぐり、他の一人が脚を竹刀で殴りつけていた。

この光景を目撃して、私は恐怖にガタガタ慄え出した。横を見ると、義母も青くなって慄えていた。

やがて、ぐったりと失神した男達は警官達に運ばれて留置場へ移されて行った。

「奴等は、どうせ当分は娑婆の空気は吸えねえんだ。これからゆっくりでも良いさ。だがこいつらは早いところ片づけねえと点数にならないねえ。今日中に、徹夜でも良いから仕事してくれ。」

この部屋の中の一番上席の刑事が、他の連中にこう云った。

私は恐ろしさに生きた心地もなく、いまにも破れそうな心臓が、胸を痛くした。

吾々三人は、上半身裸になるよう命じられた。

「それから、お前達を少しいじめてやるからな、覚悟はどうか……」

中年の下品な顔の刑事が、そんな嫌がらせ



を云った。

「おい、靴や、靴下、足袋を脱ぐんだ。お前達の足の裏も、これからゆっくり擦ってやるからな……」

若い刑事が、厳しい調子で命令した。

私達は、唯々おそろしさに云われを通りになった。私は擦られると聞いただけで、特に敏感な自分を思い浮べて、増々これから行われる苦行の厳しさにげんなりした。

私達は寒々と恐ろしさに体がふるふる

え出した。義母も、叔母も、恐怖のために恥かしさを忘れて命令に従った。

三人は、起立させられて両手を頭上に高々と上げているように指定された。そして絶対に手は下ろしてはいけないと申し渡された。

先ず最初は義母だった。

彼女は部屋の中央に、そのままの姿勢で立たされた。二人の刑事が彼女の左右から近づいて、腋の下を擦った。

義母は両手を思わず下ろした。すると、部屋中の刑事が彼女に飛びかかり、彼女の脇腹を力一杯抓った。

何とも云えない悲鳴をあげて、義母は悶え苦しんだ。白い肌に指のあとが赤く痣となって残った。

「どうだ。云われを通りにしないと恐いぞ。さ、早く立って手を上げてるんだ。」

上席刑事の命令に、義母は立ち上ってまた両手を上げた。

「そら、擦ったいだろ。何うだ」

二人の刑事は彼女の両側から、また擦り始めた。今度は義母も手を下さず懸命に悲鳴を上げながらこらえた。しかし、その手は擦ったさに自然と下りてくる。すると背中をドヤされてまた上げるのだ。

残忍な拷問は私にも廻って来た。

私のそろそろ腋毛の出始めた腋の下は刑事達から執ようにコチョココチョと擦られた。私は下ろす事の赦されぬ両手を懸命に上げて擦ったさをこらえた。

この責めは巧妙だった。若し私達が縛られていて擦られたのなら、まだ多少は苦しさも少なかったろう。併し、私や義母は自由な両手を上げ、わざわざ腋の下を相手の前に晒して擦られるのだ。私達は生きた玩具のように刑事達から責められた。

叔母は三十を少し出たばかりの教養高い夫人だった。彼女の夫も私の父と一緒に姿を消した一人である。

美しい叔母は刑事達の好餌だった。

テーブルの上に両足を前に投げ出した恰好で坐らされ、両手を上げさせられて、先ず足の裏を擦られた。

彼女は余りの恥づかしさに顔を覆ったために、床に置かれた拷問台に縛りつけられた。

その板は、洗濯に使う洗いはりの板の様な大きな板材で、上下の両端に五寸釘が打ち込まれてある奴だ。叔母の両足の拇指を麻の紐で五寸釘に固定され、両手も頭上に拇指を結

びつけられると、もう叔母は身動きが出来なかった。彼女は五人がかりで体中を擦られた。足の裏はタワシでこすられ、腋の下は十何本かの指先が這い廻った。一人の刑事は、スポイトに入れた水を擦り責めに喘いでいる叔母の鼻の穴に注ぎ込んだ。

三

夜が近づいて来た頃、私達は下ろす事のゆるされぬ腕の疲労感、そして時々、間を置いて行われる腋の下や足の裏の擦り責めに、殆んど狂気寸前の状態に追い込まれていた。

体に傷がつかず、拷問の証拠も残さぬ巧妙な責め手は、更に別の方向へ進んだ。

意識が薄れると、アンモニアのびんを臭がされ、その刺激で正常に引き戻された。

義母は、両手を上げ、ひざまづいた姿勢にされた。一人の刑事が、彼女の背後から、足の裏の土ふまずへ、筆の穂先へつけた薬を塗った。次に腋の下へも同様に塗られると、義母は急に身もだえをし始めた。

様子が判らぬまま、私も同じような姿勢を強制され、同じ箇所へ薬を塗られると、義母の苦しさが納得された。

それは、薬品による我慢のならないカユさが、頭の先まで私達を責めたてるのだ。

掻く事の赦されぬかゆさに、私達は呻吟した。

叔母は後手錠を施された体へ塗られて、最前から起き始めたらしく、ヒステリックに泣きわめいていた。

「かゆいか。かゆければ、かいてやるぜ。」
刑事達は面白がって、今度はまた擦ったりして私達をからかった。

その夜、容疑者でも、留置場へ入れる事をゆるされないのか、私達は不気味な刑事部屋の畳へ寝かされた。

私達は最後に
「明日はまた、朝から、もっとうんと可愛がってやるよ。」

と云われた刑事達の言葉が気になって、疲労しきった体はなかなか寝つかれなかった。白状して、早くこの恐ろしい責めから解放されたくとも、私達三人の自白は刑事達を満足させるものは、なにもないのだった。

また明日訪れる次の責め手の恐ろしい予想に、短い休息は息もつまりそうな恐怖の時間だった。

アブノーマル・ストーリー

美しき味の獄舎にて

「三十四号にエサを与える。」リンとした女神の声！ そのエサとは……。

たかぎのぶを

ここに私は、偶然味あわされた、奇妙な体験を綴ろうと思う。

三十五才の今日まで、一通りの高等教育も受け、健全な生活を営んで来た私が、突然、アブノーマルのとりことなり、人間としての尊厳と神聖をうばわれ、一度落ちれば、再び這い上れない、蟻地獄のようなアブの世界。――麻薬の魅力にも似た「魔の味わい」に取りつかれた愚かな男の、甘美な、見はてぬ夢の世界への案内記として読んで頂きたい。

アブの人々は、今夜も秘密クラブへ集まっ

ていることであろう――。

私も、これから出席するよう命令されているのだ――。

熱っぽい視線

奇妙な男であった。

テーブルのグラスには目もくれず、ただソワソワと、ななめ奥に見えるトイレットのドアに熱っぽい目を向けている。

土曜日の夜九時半を廻ったところ、ここは新橋駅にほど近い、バアー・リスボン。春ら

しい天気の子か、陽気の加減か、今夜の混みようは又特別だ。

男の熱心について釣り込まれて、見るとともに私も、先ほどトイレの向うへ消えて行った女性のおでましを心待ちしていた。

一分……二分……。

ようやく女性が出て来た。素晴しく美しい女だ。すき通るような肌、一メートルと七十センチに近い上背と、ボリウムがありながらスラリとしたスタイル。エキゾチックなマスク。

おかしなことに、この女は水洗の水を流して来ない。

せまい店だから、流した水の音がうるさく耳につく筈なのにそいつがきこえなかった。

美しい顔に似合わない、無作法な女もあるものだ。

その時であった。

一穴しかないトイレが空くのを待兼ねたように、例の奇妙な中年男はあわてて立上り、女と入れ代りにドアの向うへ消えた。

こうなると、秘密探偵社員たる私の探究欲がうずき出す。

(何かあるゾ)

私はゾクゾクして来る。

私の思惑も知らずに、男が出て来た。

今度はハッキリ水音がした。

フト目をやれば、男は右手に白いものを握っている。

どうやらハンカチ包みらしいが、なかみはよほど大切なものらしい。彼は、さも目的をすませたような様子で勘定を終え、店を出て行った。

何気なく、男の席を見ると、大型の書類カバンが置かれてある。

(忘れ物だ、よし、こいつを使って)

私も、よい時に、よい忘れ物を掴まえたものだ。立上り、レジのすむのももどかしく男のあとを追ったのだった。

ハンカチの中のモノ

案の定、男の姿はすぐ見付かった。

夜目にもハッキリと、彼のおかしな格好が判る。彼はキヨロキヨロあたりを見廻し、人気がないのを見すますと、ハンカチをそろそろ開いて、それを自分の顔に近づけていく。どうやら、においを嗅ぐ様子なのだ。

ひとしきり、ハンカチを鼻に近づけたり離してみたりした彼は、フト思い返した様子で駅の方へ歩きだした。

小走りに追いついた私は、ボンと肩を叩いてカバンを出してやった。

ビックリしたようにあとずさりした彼は、カバンを見ると大げさなゼスチュアで礼を言った。

『どうも、これは、これには大金が入ってましたんで……』

くどくどと何回も礼の言葉を繰り返し、それだけでは自分の気が済まないからと、しきりに私を誘うのである。

私も、ハンカチ包みのナゾが解いてみたく

て、ついてゆくことにしたのだった。

私も同類です

実は、男のハンカチ包みのなかみは、大体私には見当がついているのだ。

告白するが、私がしばしばリスボンにゆくのは少々理由がある。

リスボンは不思議に婦人の客が多い。バアテンも、マスターも美男子とあって、女性の客が多いのもうなづけようが、私の目的はそんなところにあるのではない。

では何故私はリスボンへ殆ど毎夜のように行くのか。

答えは簡単である。

カウンターの一番奥にトイレがある。

いつも自分の席ときめているカウンターに座ると、くもりガラスを通して、トイレの中の人の動きがおぼろげながら、分る。

このごろ私は軽度の窃視症にとりつかれていた。

男客のは見るのもイヤだが、女性がトイレに入ったとなると、中での行動なり、姿体が目にチラつき、現実には、くもりガラスでうごめく女性の様子を見ると、そこはかたない情感に捉われるのだ。

それだけで、私は満足する。

その様を想像し、それをサカナにハイボールを傾けるのがこの頃の日課なのだ。

秘密探偵員は人の生活面のウラのウラを探るのが商売である。

リスボンのように、女性客の多いバーには私たちの喜ぶエサがたくさん落ちていて。

ここで、ずい分スキャンダルネタをひろい、小使い稼ぎをしたこともあった。

その上、この店には、私の大好きなトイレが望ましい位置にある――。

トイレはべつに珍らしくはないが、先にも云ったように、いつも私が座るイスのスグとなり、そのドアなので、いきおい私は、トイレの番人という格好で、酔った女の客のさまざまなトイレ行状記を掴んでいた。

出しなに金を落して行く女もあった。

ドアをしめながら、パンティをずり上げてゆくようなところを、のぞき見るスリルも味わった。

いつのまにか、私は、トイレ愛好家と化していた。美しい女性が出てくるのを待かねて出たくもないのに、中へ飛び込み、思うさま「芳香」を嗅いだこともあった……。

× × ×

一寸した料亭の二階の小部屋に納まると、

彼は又改めて礼を繰返した。いつ何処で用意したのか、かなり部厚い封筒の包みを取り出してよこす。思うところあって、金包みは押し返した。代りにというように、

『それより、そのハンカチ包みは、何が入ってるんですか、差し支えなかったら教えてもらえませんか……』

案の定、男の顔に

(困った……)

という表情が浮んだので、更に私は

『御心配にや及びませんよ、私も、実は、そんなにおいが好きなんですしてね』と切り込んだものである。

香りにむせぶ男

私の予感はずバリだった。

三田知一郎。

男はそう名乗って、俄かに顔を紅潮させ、

私の、

『そのにおいが大好きだ』

という言葉に乗って来た。

十七の春から、五十五になる今日まで、自分のアブノオマルな性癖に悩んで来た、と三田は告白する。

彼は、異性の肉体から排出されるモノに奇妙に取りつかれ、四十年近い年月をただ、これ一と筋に、この憧れのおいと味に溺れて生きて来たと言う。

あんな不潔なものを、異性のモノなるが故に神の賜物として崇拜し、その異様の香りに酔い痴れ、己れの舌先に、その不浄の味を乗せるとき、エクスタシイの天国に昇天するといふのだ。

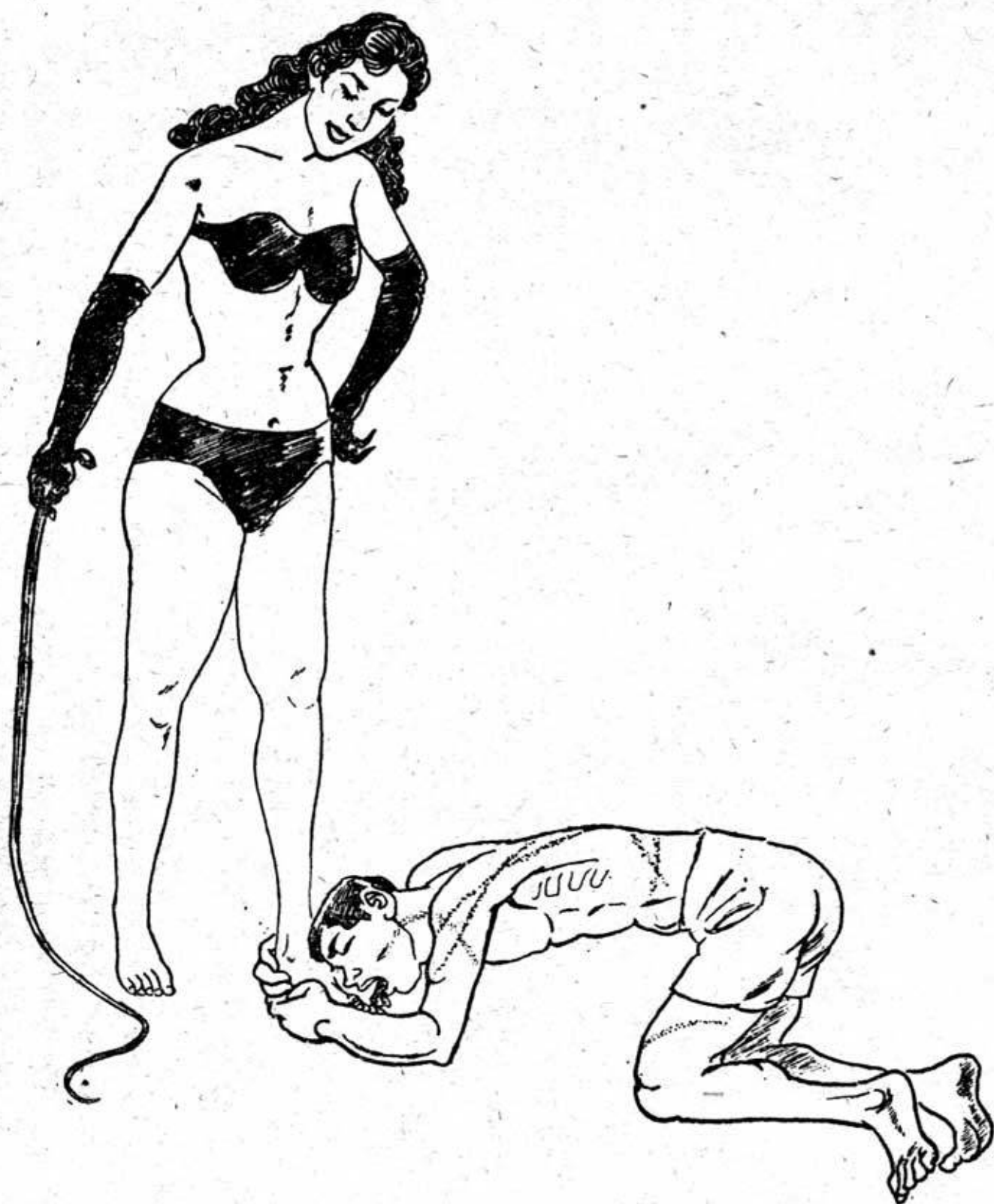
性欲学の書物では読んだことがあるが、今現実に、眼前にそうしたマゾ男を見て、私は人の世の複雑さ、奇怪さを思わせられずにはいられなかった。

彼、三田は、大森に木工工場を経営し、昼間は二〇〇人近い工員の上に君臨し、業界では名の通った成功者であるが、ひとたび夜のとぼりが下りれば、本能の命ずるがままに、アブノオマルの世界にさまよい、麗人たちのかわいだのどをうるおした果ての液体や、さては食欲のはてのものを追ひ、その妖かしのにおいに魂を飛ばし、醜悪な固形物の山の前にひれ伏して悔いなしと告白するのだった。

「今夜、これから、クラブに行くんですがどうですか、あなたも来ませんか、安全は絶対に保証します」

三田はしつこく私を誘う。
実は、私が、三田の告白をトコトンまで誘

い出すべく、自分が尿心酔者になりすまし、
うまく合槌を打ちつつ性欲書で読んだ変態性



欲の知識をさも自らの体験談のように、しゃべったので、彼三田はすっかり喜んでしまい私を気の許せる相手と思った様子なのだ。

「じゃ、おつき合いしましょう」

私は答えた。

内心私はワクワクしていた。

(これは案外のエモノだ……)

何処へ行くかは大体見当もつく。トコトンまでクラブの実態を探ってやろう——。

アブの群れ

三田は酒が廻って、よくしゃべった。

彼は、私を新聞記者か、或いは刑事とでも思っている様子だ。

いつの間にか言葉もぞんざいになった。

映画館、劇場、デパート、駅、とトイレに飛び込んで、それもワザと間違えたフリをして婦人のトイレをねらう。

「楽しみなもんですよ、キレイな女が入ったあとしてえ奴はね……」

口もとに笑いを浮べてしやべる。

「この包みは、儲けものだった。あの女、水も流さないで出ていったんで、そのまま頂戴でさ」

まるで、宝石でも包んだもののように、そ

の包みをゆすって見せる。

すっかり心を許していた。ひとつには、私が、うまくカマをかけたからもある。

「実は、ばくもあんたと同じ趣味でね、色々面白い経験もあるし、その方の女友達もあるから一度会わせてあげましょう」

こういうと、彼は感激してしまふ。

排泄物愛好症！若く美しい異性の肉体から出たものなら何でもウレシイという病氣。

そのようなとわしい不潔物を口にして、最高の法悦にひたるマゾヒスト。

実際にそのようなことをしないまでも、それを空想に描いたり、他人に語って、満足する者もある。

三田のように激しい者はあまり多くはないが、軽度の人は案外この世の中には多いと云われている。これらは性欲業ではフェティシズムと呼ばれ、別に珍らしいものでもないらしい。

その変態性欲者の集りを、今夜これから、眼のあたり見ることが出来る――。

クラブのドア

さすがの銀座も、十二時近くなれば、シンと静まり返って人影もまばらだ。

この頃は、私もスッカリ酔って、ふだんなら眼をつぶっても歩けるギンザが、さてサッパリ見当もつきかねる。

いきおい三田のリードのままに歩くしかないのだ。

橋を渡って、路地を抜けて、ロータリーを横切って、そう三十分も歩いたろうか。

「ここだ、断つとくがね、新顔だとみんな警戒するから、なるべくおとなしくしていて今夜は見るだけにしよう」といってくれよ」

三田が耳もとでささやく。

「それに拳銃持った見張りもいるから」

くどく念を押されて、私の酔いは次第にさめて行った。

三田が、ピタリと足をとめた、目の前に、頑丈な厚い鉄のドア。

ネームプレートからは、医院の二字がかすかに読み取れた。

マゾ群像

壁も、マットレスも、照明も燃えるように赤い奇妙な部屋。

デラックスだが、底気味のわるい室だ。

傍らの大型ソファには、瘡せた六十年輩の紳士と、これは又半裸の女性。

その女を見て私は、アッと驚きの声をおさえた。

「ハハハ、おわかりかね。リスボンの彼女だよ」

三田は小声で言う。

芝居だったのだ。

自分の女のを味わうのに、わざわざバアーへ出かけ、赤の他人を装わせて、衆人環視のなかで、ひとりひそかに、そのものを味わう、三田はそんな男だった。

これで、水洗を流さなかったナゾも解けたというものだ。

二人は、私たちの存在なぞでんで目もくれず、だんだん燃えて行った。

男は、女に痛めつけられて、高度の喜びを知る典型的な被虐症患者。床の上にひれ伏して「リスボンの女」に素足で踏みつけられ、頭から、顔、顔から胸、腹、太股から脚まで重い女の脚でメチャメチャに踏まれて、うめいている。

更に太い鉄鎖で全身をくくりつけられ、その場に腹這いさせられた彼は、首を伸ばして女の足ゆびを舐め廻し歓喜の声をあげた。

女は容赦なく男を打ちすえる。

彼女のムチは、男の全身をメチャメチャに

打った。たらたらと脂あせを流した男は、声も立て得ず齒を喰いしぼる――。

残酷なムチを振いながら、彼女は、嬉しそうに笑った。それは勝利におごった、高貴な女王のよう。

赤く染めた髪はフサフサと揺れ、からだ中の筋肉はプリプリと躍動する。美事なからだはハチ切れそうだ。

それが力いっぱいのもちを振うのだから、御相手する男性も命がけだ。

「ゆ、ゆるして……」

とうとう男はネを上げた。

「アア助けて下さい」

女はそんな声に耳をかそうともせず、

「馬におなり！」

冷然と命令した。

仕方なく男は鉄鎖をジャラジャラ鳴らせ乍ら四ツン這いになる。

彼女は、豊満な肌を惜しげもなく、男の背中の上に跨り、足でしめつけ、男の両耳を握って、室内を歩かせる。

「おそいじゃないか！ モット早く……」

かかとで、男の胸を蹴り、前後にからだをゆさぶって尚も攻撃を加えた。

男は息も絶え絶え。だが、その顔にはアリ

アリとエクスタシイの色が浮んでいた。

見ものなのは女のほうであった。

馬上の女王様は次第に眼を据え、息をはずませ、グッと足に力を入れた。

「寝るんだ！」

女は、馬をまだ許さない。仰向けの馬の胸にドッカとまたがって、無慈悲に、両手に力を込めて首をうむとしめつける。

男はもう死んだもののように伸びていた。

口移しに、彼女は、強い洋酒を男の口に運ぶ、プレイは終わったのだ。

ここで、男は多額の金を女に捧げるのだということである。

× × ×

三浦さゆり。

リスボンの彼女の名だ。

三田が問わず語りに教えてくれたところでは、さゆりはかなり進んだサジェスチンで、今では毎夜、男をいじめなくては寝つかれない女。彼女のムチのために命を落した男もあれば廃人となった男も二人や三人ではないという。

三田は、健康が許さないと、彼自身、ムチによる被虐はあまり好きでないのも、もっぱら彼女の汚物による虐待によって、彼女の

御機嫌を取り結び、月々多額の金を献上しているのだそうだ。

「ほかのものはともかく、さゆりのからだから出るお茶の味だけは忘れませんよ」

目を細めて言う。

特別の味と、香り、それも出たてのものがよいのだと、彼はくりかえすのだ。

さゆりは、情感の高まりをおさえることが出来ず、三田に、そういうモノを口にすることを強要する。こちらが渋れば、ムチでおびやかす絶対の服従を強要するのだった。

魔のパーティ

ホール。

ソツと腕時計を見れば三時を廻っている。だが、このホールは、昼をあざむく照明に輝き、ボーイが忙しそうに飛び廻る。完全に社会と絶縁した世界。普通人には絶対に立ち入ることを許さない秘境。こんなものが、ギンザにあるうとは、思ってもみなかった。

三田は、私の身分をかくすために、マスクと、黒く表いガウンをつけるように命じた。

クラブ員たちは、あちらのソファ、こちらのストールに座を取りめいめい話し合っている。静かなダンスミュージック。

高貴な、香料と、洋酒と、シガーの香り。

『名士もいるんだぜ』

三田がささやく。

云われるまでもなく、財界、政界、芸能人、学者、女優、作家として、かつて私がインタビュした人も、別世界人のようにそこに居る。

私は、マスクとガウンが、はじめは不満だったが、今となつては、身を匿すのに都合がよかった。まるで童話に出てくる『かくれみの』をかぶったようなものである。

他人の空想ということもあるのだ、あまり確信のあることは云えないが社会的に名も顔も売れた名士の二人や三人、立ち

どころに見出せるところをみると、アブノーマルの人々は案外多いことが分る。

『皆、変態の人ばかりだよ』



三田の言うところによれば、昼間すまして生きている人々も、夜、一皮むけば、同じ人間で、程度の差こそあれ、人は誰も、サド、

同志意気投合して別室に席を変えてゆくのもある。

『三田さん、こちらは？』

マゾいずれかの素質をもって生れてきているのだそうだ。同性愛にふける人々：自己憧憬症：蒐集狂：窃視症：小児愛好症：そしてサディストマゾヒスト。

男：女：男：女。

席をともし、酒をくみ交して、議論に熱中している人々。

見るからに上流階級らしい紳士淑女が一皮むけば、恐るべき変態性欲者とは…。

『しかしみんながみんな、直接行動に出るワケではないんだよ』

三田はつけ加えた。

たんに空想を描き、他人とそのような話をしあうことに満足をおぼえる人もずい分と多いらしい。

しばらく見ていると、会員

七十すぎと見える老人が、シガーを片手に近づいて来た。

『この老人は、小児恋着症でね。小さい女の子、それこそ十一二才の女の子が好きでたまらないという人なのだ』

老人にきこえないように、小声で三田がさやいた。

『老いらくの恋をたのしむだけあって、どうだい、この元気さは……』

言われてみれば、なるほどその通り、これは若返りの妙薬であるらしい。

その隣りでは、若い男がアルバムをひろげて写真の鑑賞に余念がない。

このクラブの図書室には、世界中から集めた図書や絵画、写真がおびただしく集められ公開をはかるようなもののライブラリが特設されている。

彼は一種の窃視狂で、これらの資料を見るためにこのクラブに入った。そして実際の女性に対する興味はゼロに近いという。

楽しみ多き人々

女性が身につけた下着類や、汚れたパンティ、靴下を集めて楽しむフェティシズムの実業家。

公園のベンチなどにかくれて、他人の『快樂の図』を、ひそかにのぞき廻る小学校の教師。

ラブレターの蒐集から、屑紙あさがりが病みつきとなり、ついに女性の使用済みの汚れた落し紙集めに、はげしい興味を抱く中年の雑誌記者……

三十人ほどの男女が、目白押しで、お互いだけに分る話に楽しみ、興ずるさまは見えてわるいものではない。

× × ×

やがて司会者の指名によって一人の中年紳士が立上った。

体験談を順番に述べるのだそう。

——これは、わたくしの小学生の頃の体験です。近所に若い未亡人と、わたしより一つ二つ上くらいの女の子の住む家がありました。

子供の心理は妙なもので、わたくしたちはこの子の美しい顔がどうにも気になってならず、学校のゆき帰りにはみんなでつかまえて、叩いたり、ツバを吐きかけたり、髪を引っばって泣かしたり、タチのわるいイジメかたをしたのでした。

……娘はそのたびに大声で泣いては、自分

の家にかけ込むのです。

そしてある日のことです。

例によって、ワンパク共がよってたかってその子をいじめ、激しく泣かせてしまったのです。

さすがに腹に据えかねたのでしょうか、彼女の母親が飛び出してきて、ボンヤリ見ていたわたくしを、ガキ大将とカン違いして手を逆にネジ上げ、血相変えて、庭へ引きずり込み、そこへ押し倒してゲンコツをかためると、メチャメチャに打ってきたのです。

わたくしは、雨と降るゲンコツの下で、生れてはじめて女の肌の臭いをじかにかぎました。

痛さよりも、全身に灼きつく情感は、わたくしを気の遠くなるまで襲いました。そのときです、わたくしは、ハッキリと、生涯をつらぬくマゾのめばえを、自分の肌に感じ取りました。美しい母親の、ひざの下に踏まえらる快感は、生涯、わたくしの忘れられないものとなりました……

つけ加えますが、わたくしは、正真のマゾヒストです、どなたか、わたくしの願いを叶えて下さる女性の方はいらっしゃいます

んか…。

破れるような共感の拍手と共に、二、三人の女性が先を争って、この中年紳士のそばに近づき、手をとって、別室へと消えて行った。

その紳士につづいて、若い女が立ち、老人が語り、話に共鳴した人々は、手を取り合つて、別室へ消えてゆく。サデイストと、マゾヒストが、意気投合し、新しいパートナーを得て個室へ席を移すのだ。

みな潑刺と、楽しげであり、私のような異端者に目をくれる者は一人もない。

洗 脳

「サア、もういいだろう！」

耳もとで三田の声がした。

私は、夢からさめたように三田に導かれるままに廊下を通り奥まった部屋へ入った。

室にはイスが一個も無く、正面には一段高く教壇が設けられ、三方のカベは厳重な防音装置が施されているので、外部からの音は何ひとつきこえず、逆にこの室の中では、いかに大きな物音を立てても、外へは全然洩れないものようであった。

三田は物慣れた手つきで、カベのスイッチ

を押した。

しばらくたつと、音もなく、正面のカベが左右に割れ、白衣を神々しく身につけた女性が、静かに出現して教壇に立った。

三浦さゆりだった。

(アッ！)

あやぶく私は声を立てそうになった。三田があわて、押し止める。

「女神さま、志願者を引きつれました」

三田は、さゆりを伏しおがむようにして、小声で言った。

そして深く深く頭を下げる。

私も、思わず釣り込まれて敬礼した。

「よろしい。名を与える」

女神は、おごそかに宣言した。

「志願者、小杉英一。汝は今より、三十四号と呼ばれる…」

「ハッ、有い難うございます」

三田が、又頭を下げ、次に私に向って、

「お前は、これから小杉英一でなくて、三十四号だぞ！」

念を堪す。

室内には、私の名も知らぬ素晴しくよいにおいの香料がたち込め、女神さゆりの頭上からは、こちらに向けて強烈なスポットが向け

られて、目をあけていられない。

「三十四号！ 洗礼をとらせる！ ムチか盃か、いずれを望むか？」

女神のカン高い声。

(ムチは、からだにこたえるぞ、盃の方が良いぞ、盃を願しろ！)

三田はささやく。まるで悪魔の声だ。

「ハイ、盃を頂きとうございます……」

目前にスツと盃が出される。

「では、三十四号は神の酒を頂け、十八号ナミナミ注いでとらせ」

「ハッ！」

三田はすかさず、カットグラスの容器を傾け、大盃にドクドクと、山吹いろの酒を注ぎ込む。

「女神さまのお酒だ！ 一滴のこさずありがたく頂け！」

すべては分って来た。

尿心酔者と私が告白したのを、三田がそのまま受けての饗宴なのであろう。

三田は、自分が味わうだけでは物足らず、自分と同信の者を仕立てようというのだろうか、或いは、さゆりの要求に応じ切れず、私にもその苦痛のすそ分けをしようともいうのだろうか。

それにしても、この酒の不思議な味はどうであろう。その場の奇妙な雰囲気について釣り込まれて、この私ともあろうものが、こんなモノを無理無体に吞まされ、あろうことか、次第次第にその妖かしの味に引きずり込まれようとしているとは！

香りたかき神の酒をゴクゴクとのどにこぼしつつ、そして舌先にのこるその戦慄を伴う不思議な美酒の味を、一滴残さずむさぼりながら、今はもう、憑かれたもののように盃に吸いついていた。

女神はジィッと私の表情をうかがって、反応をたしかめているかのよう、そして、三田は三田で異常な興奮をかくせない様子。

彼は、高圧電流を掛けられたかのように、その場に化石のように佇んで、ガラガラする目で私を見つめる。

『三十四号、エサを取らせる。それまで二日間絶食！』

非情にも、女神はそう命ずると、そのままあとも振り返らずに、姿を消した。

いつのまにか私は両手、両足をガッチリと鉄鎖でくくられ、完全に自由をうばわれていた。

何をバカバカしい。つまらねえ狂言をデッ

チ上げやがって、と、それまで私は面白半分で、盃をありがたそうに頂いていたが、二日間の絶食というのは、決して芝居ではなかった。

それからの二日間、私が受けたものは、筆舌につくせぬ苦しいものだった。

全裸のまま両手足を縛られ、まっくらな室に放り込まれて、床にうずくまるあわれな姿を考えて頂きたい。

そして、飢えと、のどの乾きは絶頂に達して、処刑三日目を迎える。

モウ二度とこんな目に会いたくない。

軽卒な弥次馬根性を私は悔いた。

だが、まだ自由の身ではない。

……永い永い時間が経って行った。

『オイ！ 三十四号、起きろ！』

三田が入ってきた。

『女神さまが、エサを下さるぞ、身体と口をきよめて来い！』

鎖を解いてくれながら三田が言った。

私の身体は三日ぶりに自由になった。

腹が空いて立っていられないほど疲れ切っている私に、更に苛酷な命令が待っていた。

これ以上のことを、くわしく語ることは、私の理性が許さない。

女神が、自身の身体から自然に出るモノを三十四号のエサとして下さること。

それは、実に汚辱に満ち満ちた、人間の口なり舌を冒瀆するものであった。空腹とはいえ、のども通さないひどい味のものだった。

でも、私は、それを食べねばならぬ。息をつまらせ、苦痛に顔がまがる。ついに、私は意を決して、千万無量の思いをこめて、呑み下した……。

× × ×

私の告白は、これで終る。

あれほどのひどいはずかしめを受けながら私には、女神の味覚がどうしても忘れぬものとなってしまった。

何のために、彼等は私を引きずり込み、何のために、私に、魔の味わいを教え込んだのであろうか。

今宵も、三田の姿を求めて、私は銀座をうろつき廻る。

仕事を捨て、妻子を忘れ、この道一と筋に生きようとして。

私は、私がつき落された第二の人生へドン・ドン落ちてゆくであろう。

ああ、さゆり女神さま、神酒を賜え！

(おわり)

浣腸に関する告白

無^い花^ち果^じ

関 か お る

一

中国山脈の柔かな起伏が瀬戸内海の海岸近く迫った松林の中に、あまり大きくない結核療養所があります。百米程も離れた国道わきに標識でも建てられて無ければ、行きずりに気付く人も無さそうな幾棟かの白い建物は、如何にも外界からとり残された一種の清潔さをさえ漂わせていました。

二月の始めにしては珍しい暖かな或日の午後、私はT叔母に付添われてこのEガ丘療養所のやや古風な玄関に降り立ちました。受付

に名前を告げると前に二、三度診察を受けた院長を通じて入院の手続きは済んでいたらしく、すぐに私達は病室の並んだ棟の方へ案内されました。

本館になった建物には事務室、X線室、手術室、炊事場など廊下に夫々標札の掛った部屋が並んでいて忙しげに行き交う白い上っ張の職員達や銀色に光ったカマから吹き出る蒸気、消毒された食器が金網の上にガラガラと移されている音、などが醸し出す雰囲気は外観から抱いていた私のイメージとはまるきり

異った荒々しい活気を現していました。

病棟では、入口の処置室兼看護婦控室に病棟主任と云う眼鏡をかけた上背のある看護婦さんが待っていて私達を引取りました。

彼女は変に丁寧な口調で院長から私達の事は伺っておりますと云い乍ら椅子をすすめ、粗末な丸椅子に並んで腰を下した叔母に「お母さまでいらっしゃいますか」と、尋ねました。気恥かしさに耳を染めてしまった私の側から叔母が私にはもう両親ともなく自分が親がわりである事を説明すると「まあそれはそ

これは」と大げさに哀悼の身振りを示し、「でもこんなご立派な叔母さまがお在りになれば大丈夫ですわね」と云って益々私を窮地に追込んでしまふのでした。

それから十五分ばかりも身上調査の様な質問と病院生活についての注意がありました。内容は要するに安静が第一であると云う事と病院の規則に従って看護婦の云い付けを守らねばならないと云ったことなのですが、何か云い聞かせると感じられる態度は私の自尊心を傷つける事おびただしいもので、かてて加えて側の叔母が一々大きくうなずいて拝聴し、「本当に、もう何かと宜敷くお願い致します」などと応えたりする事が云い様のない腹立たしさでした。

叔母は、私が病室のベッドに落着くのを見届けると、すっかり不気嫌になってしまった様子を気懸りに思つて、変った事があつたらすぐに電話をして貰いなさいと、何度もくり返して帰りました。

味気ない夕食が済んで、薄暗い照明の下に独りぼっちになった私は、これから先き一体どの位入院すれば家に帰れるのだろうか、ひよっとしたら、もうこれっきりで病気が悪くなるばかりではなからうか、と考へて昼間ろ

くすっぱ口も聞かずに別れた叔母の事迄が、とても心残りになってシユンとなつていました。

その時、顔の上の毛布がふわっと持ち上げられて当直の看護婦さんの白い姿がうかび出ました。「Sさんでしょ、検温よ。」と彼女は枕許の机の上に置いたアルミの平たいお盆から体温計をつまみあげてみせると、ニッコリ笑い、「おとなしいのね」と云いました。あわてて差出した私の手は無視され、胸許がはだけられると、冷い体温計がピッタリと腋の下にはさめられました。すっかりドギマギしてしまつた私は、脈を計る為に手首をつまんだ彼女が時々腕時計から視線をはなして、私の顔をみつめるのが、「脈が速いわ」と云つてゐる様に思へて、今にも早鐘をうちそうな心臓の動きを押えるのに、それはそれは苦しい思いを味いました。

私が始め入った病室は、ベッドの四ツ並んだ室で、周囲の雰囲気は馴れて他の患者とも話をするようになると、病院の事についての色々な知識を大いに吸収する事が出来ました。病棟には同じ様な大室が六ツと外に個室が六ツあり半分は女性の患者である事、病院は、五病棟あつて建物は古いけれども医療設

備の点では県でも一、二番に入る事、病院の給食のカロリーはいくらで値段はいくらであるとか云つた様な事から、一番永く入院している患者で六年にもなる人があるなど、私をふるえ上がらせる話もありました。

やはり一番関心をもつたのは、看護婦さん達の事で、その時分白い制服と髪飾りを恰好よく着こなしてピチピチした魚の様に小気味よく立ち働く彼女達の顔と名前は区別して見分ける迄にもなつていませんでしたが、主任さんを除いて、皆んな私と前後した位の年頃としか考えられないのに、彼女達の患者をあつかう様子が異性に対する羞恥や遠慮を無視したものである事に驚きの目を瞠つたものです。彼女達にしてみれば、そんな事にこだわっていたりしては、何んにも出来ないからなのでしようが、異性についての色々な経験の殆んど無かつた私にとっては、毎晩の症状質問の中で、必ずその日のお通じの有無やお腹の工合迄答えさせる事や、日常のやりとりの中に「痛い目にする」とか「おとなしく云う事をきく」とか「可愛い」とか云う言葉が出てくる事だけで羞恥心をゆさぶるのに十分でしたし、而も患者達が唯々として、そんなきめ付けられ方に服しているのが、やがて私自

身もあの様にしつけられてしまふのだろうかと言うやうりきれない屈辱を覚えさせるのでした。

二

二週間近く経った頃でしたか、診断の結果は手術をする事になり、準備の為に個室に移ってから、身近かな世話を焼く専属の付添看護婦さんが決められました。

このNさんと云う付添さんは普通の看護婦さん達よりはずっと年上でしたが、豊満な感じのする、色の白いやや大柄なおばさんで、私にとってはやはりまぶしい存在でした。

個室に移される数日前の

事、病棟に各種の検査の月例日が廻って来て、前の晩に検便と検尿の容器が配られました。私は入院した直後にも一度受けた事だし、看護婦達にそんなものを幾度も差し出す事に幾分抵抗を感じて、お便所へは行ったの



ですが、尿の方だけ申訳程度にっていました。

朝食前に車のついた大きなケースを押して集めに来た次席のKさんは、私の処に来ると「あーらSさん、お小用これっぽっち」と、

とんきょうな大声をあげました。私は入院後の始めての検査の時、与えられたコップにそれこそなみなみと持って行って笑れた事を想い起してマッ赤になって唇を噛みました。するとKさんは尚もあたりを捜す様な素振りで、「お便は？」と尋ね又何か云われるとハラハラし乍ら引出しの中から出す空っぽのシャーレに意地悪な口調で「ま、隠してるのね、どうしたのお便は？」と追求を緩めません。私は唯もう、人前でこんな事に大声を出される気まりの悪さを早く打ち切って貰い度い思いに「出ません」と応えました。

安静時間に入ってから「一体どの位探って置くものか、最初から教えもしないで、何と云う不親切で意地悪な看護婦達め」と一人で憤慨していると、廊下の向うからかすかな足音が近いてくるのが聞えました。最初の日

それが日直看護婦さんの見廻りと知らずにじっと眺めていて視線がかち合ってしまった、安静時間が済んで早速やって来た主任看護婦さんから「Sさんは安静時間に廊下を通る看護婦さんばかり見て、ちっとも安静してませんね」と云われた時の口惜しさを想い出して急いで目をつぶりました。

足音が部屋の前迄来た時、ふっと聞えなくなつて、オヤオヤと思っていると、私のベッドの側でひそやかな衣づれがし「Sさん寝てるの、一寸処置室に来てね」と云うささやきが聞えました。それはCさんと云う養成所を卒業したばかりの一番年若な看護婦さんでした。後に従つて炭火のカンカンおこっている処置室に入ると、Cさんは戸口から付添さん達の部屋の方に首を出して「Nさん、しますから」と、幾分鼻にかかった様な声で呼びました。

付添さん迄呼ぶ処置とは何をされるのかしら、一瞬私は夫迄受けた色んな処置を頭の中で復習してみました。意気地なしと云われる恥辱を避ける為に。努めて心配してないふりを粧つて「なに、注射？」と聞くとCさんは壁ぎわのガラス戸棚を向いたまま首を振ると「ううん、あなたお便出してないでしょ、で

すからお通じなさいって」と応えました。

最前、Nさんが呼ばれた瞬間、何かただ事でない様な虫の知らせがあったのを、おろそかにした自分の迂闊さに、ハッとした私は、「じゃ、とって来ますから」と、その場を逃げ出そうとしました。しかしその時はもう手遅れ、小走りにやって来たNさんと隣の控室から予防着の紐を後手で結び乍ら出て来た看護婦のYさんは、私を部屋の一隅にある衝立の中へ促しました。

そこには、診察に使う小さなベッドがあつて枕と毛布が畳んで乗せてありましたが、その日は私がおそれた通り、そればかりでなく床の上の新聞紙にホーロー引きの白い便器が出してありました。なにもこんな所でさせなくても、とうらめしく付添さんを振り返った時、その背後に続くYさんの捧げている手許を見てぎょうてんした私は、その儘、あつと棒を飲まされた様になつてしまいました。

「かんちょー」と哀れにも自分から口走ってしまった言葉の為に「そんなものはした事ないから」と云う拒絶もならず、どうしようもない羞恥に陥ったまま「さあ、ちよつとしていただきますよ、すぐ出ますから」とせきたてる付添さんの言葉で、さからう余裕もなく

みじめな浣腸の座に追い上げられました。横臥した上半身に毛布が掛け寝巻の裾に付添さんの手がのびました。何んとかしてこの場だけはまぬがれたい、と、せい一杯の思いで、「後からします」といった言葉も、まるで聞えぬかの様に、パンツがずり下げらるるなさけなさ、思わずちぢめた両脚は、何と口惜しい事に彼女達が今から施そうする処置に願つたりかなつたり姿勢になっていました。

涼しく丸出しになつて最早浣腸器を持つだけになった心細いお尻に、Yさんの衣づれが近よると、付添さんはいかにも動かぬ様にと云わんばかりに肩口と膝に手を置きました。

つい今しがた、Yさんの手で長々とグリセリンを吸込んでいた浣腸器の流動型の濡れた挿し込みが、吾身に入れられる嫌悪を一心に思いつめていたお腹に風が吹きぬける様にたよりなく開けられると、私の期待に反して、湿った脱脂綿の様なものグイグイとこすれる感触がしました。アルコールの消毒、と気付いた時は、それこそパァーとお尻に火が付いたと思える熱さ、「待って」と云う言葉が言葉になるいとまもなく、ツルツと云う感触が貫き、みる間に虫酔の走る様な注入がはじまりました。甘ったるく煮えるみたいナリスリ

ンのせつなさを噛みしめる背後から「お口を開けて、らくうにするのよ」と悠暢な口調が聞えました。数秒間の無言の注入に「もういい？」と云い度くなった時、「はい、よし」とこのいまわしい器具は、はずされ、入れかわりに脱脂綿が後をふさぎました。

Yさんは衝立の向うに消えると、Cさんに浣腸器の仕末を云い付けた様子でした。たった今私に恥しさと気持の悪さを満喫させた器具がCさんの手で洗れているカチカチと云うひそやかな音に、私は、Cさんが「お通じなさいって」と云った時のわざとらしいさり気なさと、隣の室から出て来たYさんの目元がマスクの奥で笑みを含んでいた事を意識して、指先でお尻を押えられている現在の耐え難い屈辱から逃れようと思いました。しかし、付添さんが「暫くじっとしていきましょうね、グリセリンがお腹に滲み込まないと駄目ですから」と云う言葉と、それを聞いて衝立の向うから「いっとき辛抱しないとなんにもなりませんよ」と飛んでくるYさんの言葉でただ身もがきをしただけに終ってしまいました。やるせなく集中してくる作用に、私は一体どれだけ我慢すれば済むのか、せめて時間だけでもはつきりさせてほしいと思いました。

幾度が自尊心を忘れて衰れな催促をした結果、やっとの事で便器にかかる許しが出た時は、毛布をとり除けるのもどかしくベッドを下りて、「よく出しておしまいなさいね」と云う付添さんを身振り外に追い出しました。

付添さんとCさんは、すぐ向うに立って話をしている様子、私の意志を押し越えてくる作用は、そうしようと思えば思うだけ、たまらない勢いで烈しい音をたてました。消えてしまいい度い排泄から解放されて、ホッと吐息を洩す虚脱感が過ぎると、外に出た私と入れかわりに、Yさんを始めCさん迄もが、私のお腹から出た内容物の検査に入りました。

Yさんが「お便が少いわ」と云った事で、私は昨日の晩お便所に行った事を云わねばなりませんでした。どうやら、今朝方、便を集めに来たKさんが、私の便秘を云い立てて、浣腸する様に指示したらしいのでしたが、今更、そんな事でなくさめる様な言葉をかけられた処で、一層自分の受けたみじめさがつのるばかり、辛うじて涙の出そうな衝動をこらえた私は、うつむいたまま又Cさんに伴われてベッドに帰りました。

数日後、いよいよ手術の準備の為、処置室の隣になった一番入口の個室に移されると、主任さんから、今迄と違って、絶対安静する事をあらためて云い渡され、付添さんにも、「看護婦達も注意しますが、目のとどかぬ所のない様に」と命令されていました。

その云い方は、私にまるで監禁されてしまう様な気持を抱かせ、而も、看視をうけもつものが、数日前のいまわしい洗礼を受けて以来、表面はさり気なく粧っていても、お腹の中ではクスクス笑っているに違いないと云う邪推で、まともに顔もみる事の出来なくなつた看護婦さん達だと云うのがやり切れない思いでした。

いつその事、病院なんか退院してしまおうか、しかし叔母はきつとうるさく私に応える事の出来ない理由を問い糺した末、主任さん達と色んな見当違いな憶測を立てて手術がこわいからとでも云った結論を出す事だろうと考えると、それも出来ない事でした。

消灯になってから、枕許の畳に床を敷いて寝ているNさんに気付かれぬように、寝息を整えながら、私はこれから先の毎日がきつと何かしら屈辱と羞恥の連続であるという確信に近い思いに悩みました。それは、ふり払お

うとすればする程、黒い雲のように次から次に覆いかぶさってくる心配でした。中でも一番鮮明に浮び上って、私を云い知れぬ嫌悪に追い込むのは、処置室で私から反抗の自由を身ぐるみはぎとってしまった浣腸の記憶でした。その時私を捕えてしまった物ぐるしい羞恥は、それがあまりにも幼い日の乳母に受けた浣腸に似ていたからでした。

私はまだ物心つかぬ頃、本当の母に死別れずと乳母に育てられました。そして又継母にも終戦後死なれてしまったのですが、小学校の二年生の終る迄は、父が貨物船の船長だったので、その会社のあるSと云う港市に住みました。普段父の留守中の家は、一人子の私と継母に千恵と云うねえや三人暮らしで、私自身近所にお友達も殆どなく、いつも絵本を読んだり父が寄港先でお土産に買って来られるオモチャを並べたりして遊ぶ、比較的小となしい子供でしたし、継母も意地悪なママ母とは逆のやさしすぎるくらいの母でしたから、随分甘やかされていた様に覚えています。

こんな工合で、私の云い分ならば少々の我儘でも大抵は通ってしまうわが家でしたが、たった一つ、我儘のならないものがありました。

た。それは、病気の時には決して母が用いるリスリン浣腸で、この時ばかりは、平常の大好きな母が、いくら泣いてもわめいても断じて許してくれない、大きらいなこわい母になるのです。

四

次々と胸にこみ上げて来る幻想のいまわしさに、まんじりともせぬ一夜が明けると、付添さんのNさんは、主任さんの指示通り、私にもう一際ベッドから下り立たずに毎日を通す為の用意を整えていました。

筒口の飛出たガラスの尿器と真白に輝くばかりのホロー引きのオマルは、それだけで今迄の入院生活に対する覚悟の安易さを思い知らせるに、ありあまるものでした。私はベッドの中でせめてそれが手術後の準備である様にと、天井をみつめる目で心の底から、その屈辱の一分でも遅く来ることを願いました。しかしこんな都合のよい時ばかりのお祈りが聞き届けられるものではありませんでした。

「さ、先にお小用しますか」と云う悲しい宣告、思わずもじもじする私の態度は、「ベッドからは下りないで全部とって差上げる様にと、主任さんのお云い付けですよ。練習して

ないといざ手術したと云った時出来ませんか」と釘をうたれて、早くも掛布団の裾に手が掛り、最早、逃れるでだてのない事を観念した私は、只管変な興奮をしてみました。どうしよう云う危惧と戦いました。

小用だけでも、まるで女の子みたいにパンツを押し下げられる恥しさ。「おばさんにだけは全部まかせて下さいね、一寸もおかしいことなんかないですよ、患者さんなんですから」Nさんは、やさしく耳許にささやいて私の抵抗を奪い去りました。それは想像していたのに較べると直接肌に触れる部分が上手く塵紙でくるんであって、案外さっぱりしていましたから、幾分気持は安らぎましたが、「どんなに思い切っても大丈夫」と云われたからと云って、こんな姿勢からおいそれと排泄出来るものではありません。

Nさんは、腰を持ち上げる様に手を差し延べると「さあ、一度コツを覚えればわけないのよ。御不浄に云ったと思って、目をつぶって飲み込む様にしてごらんさい」と励ましました。懸命の努力も空しくもういきむ気力もなくなって「もういいですから」と鼻を鳴し度い気持に襲われた時、身体の中に温い糸が走って、丁度涙の盛上る時の様にボーッと



溢れる排泄感が身体中の張りつめたしこりを押し流してくれました。

Nさんが云った様に二度目からは、排尿する事自体は、そんなに苦心せずスラスラと出来るものでしたが、憂鬱なのは、もう一つのお務めでした。便器は当てがわれる事だけな

ら、尿器より気が楽なのですが、嫌でも排泄物の検査を受ける結果になると、消えてしまいい度い後仕末を伴うので、やはり一番こわい日課でした。それに排泄行為が思うにまかせぬ事は一層で、この時程患者である吾身に悲哀と嫌悪を覚えることはありませんでし

た。それなのに私が、この屈辱的な指示にも、懸命に従った理由は嫌でも結びついてしまいう処置室でのいまましい浣腸の経験だったのです。若しも出なかったら、便秘だと云ってすぐにも無防禦なお尻に浣腸器を見舞われるのではなからうかと云う懸念は私の一切の抵抗を封印してしまいました。

この様に半ば戦々兢兢々として過す毎日の生活の中で、私をほのぼのとした安心さで包んでくれる。Aさんと云う看護婦さんがいました。病棟では主任さんは別格のこわい存在として、次席のKさんは嫌いでした。と云うのは、おでぶであり美人と云えなかった点や、役割上お叱言を喰う回数も多かったせいでもありましたが、先達での処置室での口惜しい事件がKさんの云い出しだった事からでした。

Cさんはその時に浣腸をみられたわだかまりさえなければ親切で嫌いではありませんでした。Aさんへの特別な感情の芽生えは当直の晩の検温に来た時、一人ではつんと思ひ沈んでいる私に色々話題を作って話しかけてくれ、偶然にAさんのお家が、私の幼い頃住んでいたS市の町はずれで、学校こそ違い同じ学年だったと云う事からでした。

その上Aさんばかりは、恥しい処置を無理に押しつけたりする感じが少しもありませんでした。その時分のなさない儀式の一つにお清拭と呼ばれるものがあって、入浴の許可のない私達は、ベッドの上でパンツ一つの身をバスタオルでぐるぐる巻きにされ、顔、手、足、身体と順々に蒸しタオルで拭われるのです。腕まくりしたいで立ちから物々しく、お湯の入った大きな金盥とタオルを両手に抱えて現われる看護婦さん達は、「お痩せさんだと思っていたら、案外肉があるわね」とか、「さあそっちの手を出して、じたばたすると四方から一ぺんに拭いちゃうから」など余計なおしゃべりをする上、随分手荒くあつかいしますから彼女達のタオルがだんだんお腹に下って来たり、遂に両脚から股の方の上って来る時は、若しやパンツをぬがせると云出すのではないかと息苦しくなってしまうです。

こんな時、Aさんがいれば、笑い乍らでも、きっと私の味方をして同輩の意地悪をたしなめてくれますし、最後になって、「まだ安心するのは早いよ、かんじんな処はどうする」とでも云った様に、にやにや顔を見合せる看護婦さん達に「後は付添さんをお願いするわね」と云って引上げる事を云い出してくれるのでした。

将に台風一過とでも云った様に、何もかも清潔になったベッドにうずまって、指のまたやお尻にはたかれるタルカム粉のくすぐったい感触を心地よく味い乍ら、私は若しこれから先どんな我慢の必要な処置でも、Aさんにやさしく云い含められたなら、きっと逆らう事は出来ないと思いました。

それでなくとも、病院と云う特異な環境の中で、常に監督者である看護婦に対してそれに頼っていないてはならぬ患者の立場は、検温、注射、清拭などの日常の看護を始め排泄すらもが、その指示の下に行われ、それこそ穴があつたら入り度い様な浣腸迄施されてしまうのですから、身体中から自尊心を支えるなどと云うものは、追い出されてしまうのです。

私のAさんに抱いた甘えたいような依頼心に似た心理が、やがて強い思慕の情に発展する事は、もはや時間の問題でした。

しかし、大室に居た頃から患者達の噂話も一番美しいAさんに集っていた事を思うと、たとえ私が胸の中を打ちあける勇氣をもった所で、一笑にふされてしまふに違いないと考えられ、Aさんの親切は誰にも事なのに、自分だけの独りぎめしてるのが、まったくコッケーなのではないかと自信喪失してしまうのでした。

或晩、遂にその胸苦しさに耐えきれず重大決意を固めた私の前に、Aさんが姿を現したのは、八時ちょっと過ぎた頃でした。Aさんは右手に小さな注射器をつまんでいました。「マイシンよ」と云う言葉で、今朝から始められたこの新しい受難の部位を想い出し、早くも斗志のくじけた私が「又、するの」と、はかない抵抗をこめた視しで肩口を出すと、Aさんは「あら、お尻でしょ、朝はどうだったの」とごまかされてはくれず、頬を染める私に「まあずるいずるい駄目よ」とNさんとうながしました。

うつぶせにさせられた背中から、Aさんは少しおどけた声で「今朝は、どっちだったかしら、こっち？」と晒しものになった私の双丘を指先でつついて確かめ、まるで、大それた妄想を罰するみたいに、チクリとお灸をすえました。

翌日、Aさんの当直がお終いになる晩こそ、どんなことがあっても云ってしまわなければ永久に機会はなくなることを、自分自身に云い聞かせ、あれこれと思いを廻らせて研

究した結果、七時の検温の時を待ちました。昨晚の様に、お尻に注射を受ける破目になると、又何んにも云えなくなる事がわかったからです。

何時もと変らぬ笑顔でAさんがベッドの側に立った時、私は胸の鼓動を静める為目をつぶりました。やがて結果をみに戻って来たAさんが腋の下から体温計を取り上げた横顔にともすれば、空気の抜ける風船の様にヘナヘナとくずれそうな心に鞭をあてて、「ね、Aさん。手術する前に一度散歩に行き度いけど一緒に行ってくれない？」と云いました。体温計の目盛りを目をそそぐ姿勢のまま、ハッと身体を固くしたAさんは、矢庭に振り返ると何か懸命さをたたえた瞳で私の顔を凝視しました。到底受け止め終えることの出来ない大きな力に目を落して、自ら息苦しさを助長する様に鼻孔を布団にうずめた私は、不安な期待に怖えました。

「まあ、ちっとも挟んでなかったのね」

まったく予想外の言葉で、振仰いだAさんの顔は普段の看護婦さんの表情に戻っていました。あらためて体温計が腋に入れられる動作で、あまりに思いつめて体温計のことを全然忘れ去っていたのに気付いた私は、折角身

を投じる思いでせい一杯の告白をはぐらかされた事と、Aさんが警戒した様に一步身をひいた事が口惜しく、かたくなに脈をとろうとするAさんの手を拒みました。

「今日はどうして、そんなに云う事聞かないの。そろそろ、我儘がでて来たのね」

「だって」

「だって何よ」

「だって僕の云った事に返事してくれないじゃないか」

「それは、貴方が患者さんで、私が看護婦だって事、考えたらわかるでしょ、そんな、いじめるならもういいわ、体温計お出しなさい、帰るから。」

体温計をとり上げようとするAさんと拒む私の手がからみ合って、一瞬ひるんだすきにそれはAさんの手に渡ってしまいました。

敗北感と恨みを全身に私が唇を噛んだ顔をそむけた時、そっと額に手が当りました。

「ね、今は駄目、判るでしょ、手術が済んで良くなったら。」

絶望の壁がさっと聞いて希望の光をみた気持、「Aさん」と、その手をだきしめる私に、Aさんは「あら駄目よ、駄目よ」と烈しく拒みましたが、耳を真赤に染めて身をよじ

った動作は全然弱々しいものでした。

「僕、退院出来る様になったら、Aさん、家にも来てくれる？」

と私が問いかけた時、かすかにうなずいたAさんは、若し力をこめて引き寄せれば、私の胸の上にくずれ落ちたかも知れませんでした。しかし私達は、息苦しい程の幸福な沈黙の中で気持の通い合う事だけで、それ以上、望むことは折角手に入れた幸せをとり逃す破目にもなりそうな空おそろしさでこらえました。

Aさんは手を私の胸にゆだねたまま

「でも、本当に良くなるまではさっきの様な聞きわけのない患者さんではないや」と云って、見かえるまなざしの中に私の誓いを要求しました。ちゃんと検温をすること、注射を嫌がらぬ事、病気を良くする為の看護婦さんの云い付けは何事によらず絶対服従である事などが、抵抗を失った私に重々しく約束させられ、

「お仕事残ってるから、又あとでね」と云う

言葉に、からめたままの手をあわててはなして頬を赤くした私を、Aさんは「メ」と軽く睨める様にして立去りました。

その翌日からは、通りすがりに廊下から投

げかけられる一瞥も、診察に立合って側から見守られる事も、病室に入ってきて来て私の全身にすばやく駆け廻らされる視線も、それ迄は看視と云うやり切れない意識でうけとられていた事柄がAさんの場合だと少しもわずらわ

しくないばかりか、かえってくすぐったいような幸福であり、時にはいたずらをして又睨めつけられてみたい様な気持になるのですから、まったく勝手なものでした。

しかし、こんなバラ色に包まれた安穩な毎日、を嫉妬深い運命の神様が許容する筈もなく、たった二日の後に手術の予定日が来た事を知らされました。

(完)

〔新版〕女体悦虐フオト七十選

Z組七十集

大手札判印画紙(9×13型) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

Z 1	ゴム猿轡 (梨花悠紀子)
Z 2	囚女六三号 (柳初子)
Z 3	猪手足吊り (梨花悠紀子)
Z 4	逆エビ縛り (大塚啓子)
Z 5	ローソク責 (東浦ひかる)
Z 6	豊臀責め (絹川文代)
Z 7	淫らな縛り (愛川悦子)

Z 8	ザリガニ (梨花悠紀子)
Z 9	引き回し (東浦ひかる)
Z 10	全裸後手縛 (加茂良子)
Z 11	豊満被虐 (大井小夜子)
Z 12	黒髪いじめ (大塚啓子)
Z 13	足吊り嬌態 (絹川文代)
Z 14	黒縄高手小手 (四方清美)
Z 15	強烈荒縄責 (梨花悠紀子)
Z 16	喰込む白縄 (東浦ひかる)
Z 17	くの字の足指 (桜井葉子)
Z 18	裸身の受縄 (前本妙子)
Z 19	無茶な猿轡 (竹野ひろ子)
Z 20	ハリツケ (梨花悠紀子)
Z 21	臍なぶり (大塚啓子)
Z 22	逆手足吊り (東浦ひかる)
Z 23	美肌いじめ (絹川文代)
Z 24	鼻ゼメ仰向 (加茂良子)
Z 25	恐怖の瞬間 (若原明子)

Z 26	火箸責め (梨花悠紀子)
Z 27	全裸海老責め (熱海容子)
Z 28	ベッドの痴態 (絹川文代)
Z 29	足の裏擦り (大塚啓子)
Z 30	閨の女体飾 (竹野ひろ子)
Z 31	首絞めゼメ (大塚啓子)
Z 32	鼻孔責め (若原明子)
Z 33	悦虐放心 (梨花悠紀子)
Z 34	手枷足くさり (四方清美)
Z 35	寝室のプレイ (花本京子)
Z 36	猿轡の妙味 (梨花悠紀子)
Z 37	首縄柱しばり (絹川文代)
Z 38	巻煙草責め (大塚啓子)
Z 39	尻立てポーズ (桜井葉子)
Z 40	エビ責 (東浦ひかる)
Z 41	彼女の好物 (竹野ひろ子)
Z 42	ワンピース (花本京子)
Z 43	荒縄竹棒責 (梨花悠紀子)
Z 44	浣腸責ポーズ (大塚啓子)
Z 45	鏡に映す裸 (山路ミヨ子)
Z 46	苦悶に喘ぐ (大塚啓子)
Z 47	酔後の緊縛 (絹川文代)
Z 48	逆十字エビ (大塚啓子)

Z 49	全裸猿轡 (東浦ひかる)
Z 50	欄間宙吊り (梨花悠紀子)
Z 51	全裸逆エビ縛 (絹川文代)
Z 52	荒縄仕置室 (梨花悠紀子)
Z 53	庭園の惨虐 (館典子)
Z 54	被虐の果て (大塚啓子)
Z 55	痛めた全裸像 (大塚啓子)
Z 56	鏡の中の全裸 (愛川悦子)
Z 57	セーラー服 (梨花悠紀子)
Z 58	檻の緊縛裸体 (愛川悦子)
Z 59	全裸股間縛り (絹川文代)
Z 60	オムツ逆エビ (田中芳代)
Z 61	胴縄の重量感 (桜井葉子)
Z 62	ゴム人形 (竹野ひろ子)
Z 63	縄トゲ責め (梨花悠紀子)
Z 64	女大生恥態 (田中芳代)
Z 65	白肌全裸縛り (絹川文代)
Z 66	強制的開股縛 (絹川文代)
Z 67	強烈的全裸晒 (愛川悦子)
Z 68	亀甲乳房責 (梨花悠紀子)
Z 69	ベッドの悶え (愛川悦子)
Z 70	恥しさに耐えて (館典子)

サジスチック・ストーリー

使徒の兄弟

雪 ゆき

俊 とし

遙 はるか

1

南へ行く程空は青くなった。雲の白さまでが鮮やかに澄んで来る様だ。

檻の中へ射す陽も明るくなって来る。

マルガリータの雪の様に白い肌が一日毎に美しくなっている。ドルチノは背中合せに括り上げられているマルガリータの、ムッチリした剥き出しの腕を指でさぐり、いとおしむ様に愛撫した。

隣人愛。奉仕。純潔。そんなものはどうでもよいから、此のいとしいマルガリータと、教会の秩序や世俗の常識に従って、世間並み

に幸福に暮していたら、ふっとそんな迷いも心に湧いた。

マルガリータの柔かな指も、同じ様に優しくドルチノの背中を撫でている。刑事達に気附かれぬ様につつましく。

町へ入ると人々が檻の外に群って来た。獣の様に檻の中に括られているものを、悪魔でも見る様な目で見ている。実際彼等は、自分達を、悪魔だと思っているに違いない。モデナ。ボロニヤ。フィレンツェ。ピサ。レグホルン。次々と通過して来た大都會では、二人はわざわざ檻から出されて、町中を曳廻され

た。姦通でもした男女の様に、ドルチノは腰のものの一つの裸にされ、マルガリータは上半身半裸で。頭には鈴のついた鉄の帽子を冠らされ、時々笞で、ビシビシと背中を叩かれながら。

チビタベッキヤの町を過ぎれば、もうローマだ。そこには地獄の宗教裁判と、火刑台が待っている。

街道の右手にはチレニアの海が青く輝いている。此の旅でドルチノは始めて海を見た。そしてそれが見納めでもあるのだ。

レグホルンからチビタベッキヤまでは遠か

った。その町で又曳廻される時。ドルチノは久しぶりにマルガリータの顔を見た。檻の中では、呼吸も詰る程にきびしく細鎖で縛り上げられているので、顔を合わせるどころではなかった。

マルガリータは相変わらず美しかった。白い顔にはやつれも見えず、曳廻しの屈辱にも負けない様な清々しい顔をしていた。

「あれを見い。法王様に楯ついた恐ろしい女じゃぞ。」

「然し綺麗だなあ。」

「魔女だがな。魔女だから別嬪なんじゃ。」

マルガリータが衣服を剥ぎ取られて、乳色の背中や、巨大な玉の様に丸やかな双の乳房を、南イタリアの明るい陽光の下に露わした時。群衆はどよめいて、思わず身を乗出した。

悪魔だろうが、魔女だろうが、曳廻されるのが、白く引緊った美しい乙女の裸体であれば彼等は良いのだ。

「あの女がローマで火焙りになる時は、どうしても見に行くぞ。な。」

皺だらけの、八十にもなろうかという老人が、歯の抜けた口で喋っている。

「わしも随分此の町で曳廻された姦婦や女

賊、火焙りされた魔女を見て来たが、顔も身体もこんなに美しいのは始めてじゃ。神々しい位じゃな。」

「あれはきつと娘だぜ。あの身体は絶対に娘の身体だ。」

「阿呆言うでねえ。あの若え男のイロでねえか。娘でねえのに娘の身体してるのは、やはり魔女だからよ。」

夕暮れ。海の上にサフラン色をした小さな雲が浮いている。地平線の空が、蒔入れ時の麦の穂の色で光っている。

ドルチノとマルガリータは疲れ果てて曳廻しから帰って来た。

檻の戸が鈍い金属音を立てて閉められた。馬車は動き出した。紫色の空に星が光り始めていた。

2

薄暗い石の階段を下りて、地下室へ引立てられたマルガリータは、そこにもやはり高い鉄の檻が置いてあるのを見て、暗い気持になつてしまった。やっとあの馬車の上の檻から出られたと思ったのに、又檻に入らなければならぬなんて。

その檻は縦に長くて、身を横たえて休むということなど出来そうもなかった。立ちづめ

の拷問。マルガリータが立ちすくんでいると、刑事達は容赦なく、彼女の両腕を掴んで檻の中に押込んだ。

マルガリータは檻の真中に立たされた。鉄の胴環で、彼女の腹はしっかりと締められた。胴環の周りには八本の鉄檻が附いていてそれを八方の檻の格子に繋ぐと、檻はピンと伸びて、どこへも歩けない。その胴環の後は大きな南京錠で留められてしまった。

別の兵士が足にも鉄の環をはめた。両手を後手に廻して、その手首にも。そして最後に、ほっそりとたおやかな白い頸にも。手足の枷も、二本宛の檻で、左右の格子に結ばれた。首枷は後に檻がついていて、天井の鉤に引掛けて、ぐっと引張られた。ふっくりとふくよかにふくらんだ彼女の白い咽喉に、冷たい首輪がくつきりと食い込む。

刑事達は出て行こうとした。

「これではあんまり酷過ぎます。人間を扱う仕打ちとは思えません。」

しとやかな彼女も、耐えかねて思わず叫んだ。

「黙れ、悪魔の娘め。誰もお前を人間だと思つては居らんわ。宗教裁判が始まるまで、異端派の輩は、皆そうして待っていることにな

ってるんだ。それだけ嚴重に刑具をかけておかないと悪魔の魔法で逃げられるのでな。」

そして刑吏達は、部屋から出て行った。

何という恐ろしい目に遇うのだろう。ドルチノ様はいつも、教会の連中は盗人だと罵っていたが、盗人だって、こんなむごいことをしやしない。そう言えば、ドルチノ様もどこかで、こんな風に、枷具で身体の急所急所を締められて、身動きも出来ずに、暗い中に立ちつくしているに違いない。私のことを御心配なさりながら。

マルガリータは、一緒に曳廻された時に見た、ドルチノの裸身を思い浮べた。柔かそうで、しかも逞ましい肉付き。濃い褐色の胸毛。

此のままお仕置されて死んで行くのなら、あの白い、豊かな胸に、一度でいいから抱き締められたかった。でも、私からそんなことを言ったら、嫌われてしまったに違いない。

胴も首も足も手も締めつけられていると、そんな思いで切なく胸がうづいた。それでも身動き一つ出来ない。

身動き出来ぬ姿のまま、マルガリータは、暗い中で思わず吐息をついた。

これから私はどうされるのかしら。

七年前に見た、セガレリの焚刑の姿が思い出される。あの時私はまだほんの少女で、セガレリ様の美しい信仰のことなど知るよしもなく、人々の言う通り、悪魔の火刑を見て、四十五日間原罪を免れる有難い恩恵に浴しようと思っていた。だってお母様がそうお教えになったのですもの。

マルガリータは七年前のことを、昨日見た様によく憶えている。

裸のセガレリは町中を練り歩かされて広場に連れて来られた。長い判決文の言渡しの間、彼は跪かされていた。そして判決が終ると、今度は驢馬の背に乗せられて、刑場に曳かれて行った。

刑場には太い木の棒が立っていて、足許に一對の薪束が立ててあった。セガレリはその上に立たされた。太い縄で、くるぶしの周り、膝の上下と、腰の周り、腋の下を縛られた。両手は最初から背後で手錠をかけられていた。そして最後に、首が鎖で柱に固定された。

藁を混えた薪が、彼の周りに、顎の下まで積上げられた。薪に火がつけられて、彼の身体が焦げ出すと、手錠と首鎖以外の縄は、薪と一緒に燃えてしまった。炎の壁の奥で、素

裸でのたうち、くねっていた、男の身体の異様に妖しい怖ろしさは、とても忘れられない。

薪が燃えつくすと、半焼けの肉体を完全に消滅する為に、死体を引き裂き、骨を砕き、肉片と内臓をあらためて火中に投じた。火が消えると、灰をすっかり集めて、ポー河に流してしまった。

殉教者の形身が保存されないように、そんなに急入りの真似をするのだ、と母が言っていた。悪魔の形身なんか欲しがる人が居るのかしら、と、その時、マルガリータは不思議で仕様がなかったが、間もなく、外ならぬその母が魔女にされてしまった。

その時は、まだ十五才だったマルガリータも、教会の一室に閉じ込められて、母に不利な証言をするまで烈しく笞打された。

机の上に、どろどろに水に濡れた、灰の様なものが、瓶に入れて置いてあった。

「お前のおふくろが、夜中に川の中へ入って、セガレリの灰を拾っているのを見たという証人が居るのだ。もう一人、此の灰がおふくろの長持の中にかくしてあったという証人さえ居ればそれでいいのだ。お前は見ただろう。見ている筈だ。」

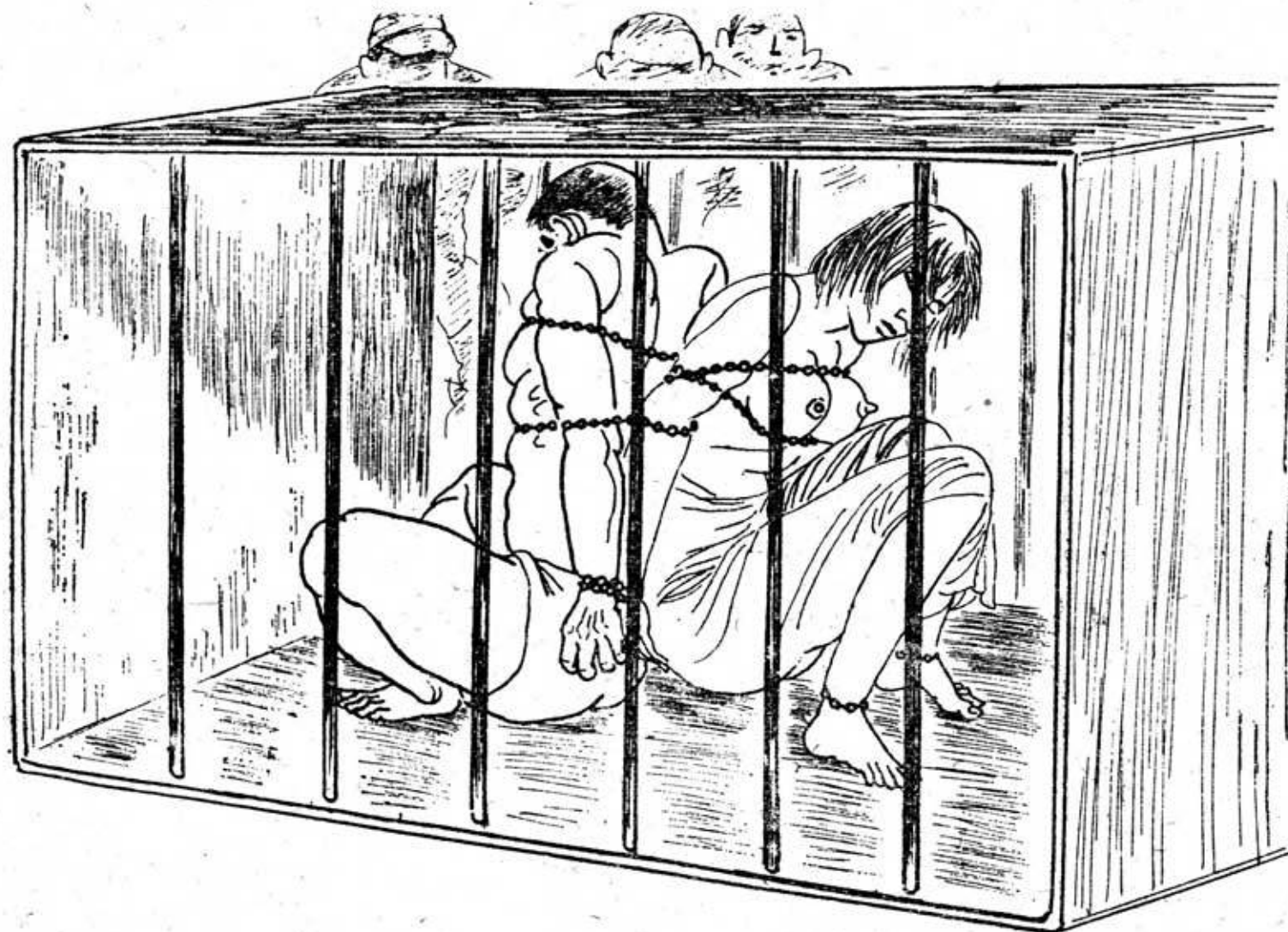
役人はそう言って、両手を鎖でYの字に吊り上げられているマルガリータの、まだ青い果実の様な固いお尻を、錘の附いた鋼鉄の鞭で、ピシピシと叩いた。

マルガリータは役人の言う通りに「自供」してしまった。

だが、十七だった姉は、それでも「自供」しなかったので、異端者を擁護する「間接的な異端」の容疑で、証人の拷問台から、容疑者の拷問台へ移されてしまった。

母の火焙りの時は、だから姉も一緒に曳廻されていた。彼女は「清められた悔悟者」として、広場で晒されてから許されたが、まもなく死んでしまった。拷問車に仰向けに縛りつけられて、ぐるぐる廻された為に背骨がすっかり外れて、ガサガサになっていたのだった。

母の火焙りは、女なので、セガレリの時と少し違っていた。H型の火刑台を刑場の真中に置いて、横棒の上に仰向けに寝かされていた。横棒は鉄の梯子で出来ていて、それを支



えた二本の縦柱は、石のブロックで出来ていた。裸で寝かされた母の身体の下で薪が燃え上ると、背中や尻の焼かれる熱さに、彼女は悲鳴を上げてもがいたが、後手の手首と頸とを鎖で縛られて梯子に固定されているので、起き上がることは出来なかった。

薪はよく燃えて余り煙を上げなかった。火刑台の上に転がされた三十女の、よく肥えた白い身体が、胸と腹とを交互に小山の様に隆起させたり、腰をよじったり、膝を立てたり、足先をニョッキリと宙にもたげたり、膝下だけで縛り合わされた足を左右にくねらせたりして、苦しみ、悶える断末魔の姿が、人々を興奮させていた。

確かにその魔女が、女性であることを群衆に示す為に、母はそんな焼かれ方をしたのだという話だった。

間もなく、ピアチェンツアの町随一の豪商だった父は、尾羽打ち枯らして自殺してしまい、マルガリータは奴隷同然の身になる所を、「使徒の兄弟」団に助けられた。

セガレリの刑死後、「使徒の兄弟」

団の指導者になっているドルチノが、魔女の秘密を教えてくれた。

「教会の大僧正が此の頃大きな別荘を幾つも建てたでしょう。奴はあなたのお父さんに財産を寄進させようとしたが、思い通りにならなかったのです。お母さんを魔女に仕立て、お父さんの全財産を掠め取ったのですよ。財産と引換えに、お母さんの火焙りは許す積りだったんだらうが、民衆が、男でない、本物の魔女の火焙りを見たがったので、今更のっぴきならなくなっちゃったんですよ。」

3

拷問台の横にマルガリータを立たせると、刑事達は一旦法廷から出て行った。

マルガリータはおののきながら、そっとかたわらの拷問台を見た。古い木の感じは、地下室の湿気で、じっとりと気味悪そうだ。

裸にされて、あの上へ寝かされることを考えてみると、気の遠くなる様な戦慄が、背筋から、お尻の方へ走って行く。

黒ずんだ木の肌。何百人の女達が、此のベッドに寝かされて、あさましい姿を見せたことだろう。涙と汗と膏と血糊が、木目の奥の奥までしみ込んでいる様な感じがある。

母もいつか、こんな拷問台の上で、悲鳴を

上げ続けていたに違いない。暗い部屋の奥から、その悲鳴が聞える様な錯覚に捉えられて、マルガリータは身震いした。

突然扉が開いて、三人の尼僧がつかつかと部屋の中へ入って来た。

「マルガリータ、法王の御命令で、これから私達がお前の処女改めをやりまします。無礼はあらかじめ覚悟して下さい。」

先頭に立った、白髪の上品な尼僧が、おごりかな表情で宣言した。

何の為に。訊いても、おそろくなにもなるまい。マルガリータは明るく澄んだ碧色の目を薄く閉じて、かすかに肯いた。

「では、その台の上にお寝なさい。」

マルガリータはもう一度肯いて、黒ずんだ木肌を見せたベッドに近寄って行った。なんだ。処女改めのベッドだったのだわ。取越苦労ばかりして、私ったら。

手、足、首にはやはり鉄の環をはめられていた。足首の鎖の先には、鉄の分銅が結びつけられていた。それで、歩く度に、鉄鎖が分銅と足枷に当って、カチャカチャと騒がしい音を立てた。

マルガリータは木の台の上に横たわった。行儀よく手も足もピンと伸ばして、顔を天

井に向けると、こんな目に遇わなければならない我が身が、いとほしくてならない。不思議なことに、その感情の奥には、悦びに似た気持もあった。

後に居た二人の中年の尼僧が左右から近寄って来た。上着の裳裾がかえされた。次に下着の裳裾もかえされて、マルガリータの白い腿が露わになった。

煌々と灯が点けられた。白髪の尼僧は、ポケットから大切そうに紙包みを取り出して中を抜いた。長い柄のついた眼鏡と、竹製のピンセット。魔女改め用の針が取出された。

マルガリータは観念の目を閉じた。二人の尼僧が彼女の豊かな腿を撫まえた。

「本当によく緊った綺麗な腿だこと。」

そして、下ばきがずらされた。マルガリータは一心に神に祈っていた。

処女改めが終って、彼女が起き上ろうとすると、尼僧達が口々に、

「まだそのままにしていなさい。」と言った。

やがて大勢の僧侶や貴族が入って来て、宗教裁判が始った。尼僧達も残っていた。マルガリータは拷問台の上に寝かされたまま訊問された。

「お前達、使徒の兄弟、団のものは、財産と

女性は人民の共有にすべきだと説いているそうだが、それに違くないか。」

「ハイ、違い御座居ません。」

「怪しからん異端じや。そんなことをして世の中の秩序が保てると思うか。」

「いいえ、財産、婦人を個人の所有にさせているから世の中が乱れるのでございます。私の父は、ピアチェンツアの町一番の金持でございましたが為に、僧正様に財産をすっかり奪われ、母は魔女にされて火焙りにされてしまいました。」

「黙れ。教会を中傷する憎い女め。自分達母娘の魔性を棚に上げて、何を言いくさる。」

「魔性だなどと、私の母はそんな女ではありません。ピアチェンツアの町でも較べるものがないと言われた程の、信心深い、清らかな人でした。それを僧正様が拷問にかけ、火焙りになさったのです。よしんば本当に悪い人間であったとしても、人間が同じ人間を生きながら焼き殺すなどということが許されて良いものでしょうか。きつときつと、今に、神様は、此の様なことを公然となさる教会の人達を、お罰しになられることでしょう。」

「こいつ、言わせておけばいい気になりおつて。人間が同じ人間を、だと。法王様を信じ

ない異端の者が人間だと言うのか。」

「私達は、神様を、エス様を、使徒の方々を信じているのです。エス様や使徒の方々は、一生、決して法王様の様に莫大な財産をお貯えにはなりませんでした。」

「ウームこいつ。えーい。拷問だ。拷問だ。」

マルガリータは美しい顔をキッと天井に向けたまま、じいっと目をつぶっていた。ドルチノ様のお教えは正しいのだ。負けてはいけないわ。此の人達は、ドルチノ様が、使徒の様に厳格な禁欲をもつて神に仕えねばならぬ。という御自分のお説教を実行しては居ないだろうと思って、私の処女改めをやったのだ。その点で、此の裁判官は、どんな偉い大僧正か知らないけれど、先ず第一戦でドルチノ様に敗けたのだわ。次の戦いが私の拷問だわ。これで音を上げたら、私はもうドルチノ様に合わせる顔がなくなるのよ。さあマルガリータ。しっかり頑張つて。お母様やお姉様の様に負けてしまつては駄目よ。

刑吏が、観念の目を閉じて、じっと拷問台に横たわっているマルガリータの腕を掴んで上体を引起した。

吊し責めかしら。後手に縛り上げた手にロープを通して、身体を滑車で宙に吊り上げ、

足に錘を結びつけられるあの方法。私達と一緒に十字軍に捕えられた「使徒の兄弟」の女達が大勢、敵方の陣屋でやられていたわね。負傷して、息も絶え絶えの人まで、裸にされて吊り上げられていたわ。その時の陰惨な光景が浮んで来て、マルガリータの心を動揺させた。

刑吏はマルガリータの両手を前に差出させて、ベッドの頭の部分の鉄棒に手首をしっかりと結びつけた。ロープの袖口が捲かれて、ムッチリした二の腕まで剥き出しにされた。

ロープの裾と下着の裾がもう一ぺんめくり上げられた。マルガリータは、処女改めの、気の遠くなる様な羞しさと、不思議な快感を思出して、思わず顔が火照った。

太腿まで剥出しにされると、マルガリータの白い、よく緊った足が二重に折り曲げられた。膝の上十厘位の所と、太腿の上とに、鉄の帯が当てられた。帯の両端にはタンバックが附いていた。端の鉤をベッドの両端に引っ掛け、タンバックの丸い捻子を廻すと、帯はぐいぐいと腿の肉に食い入って来た。

拷問台の上に正座したまま、剥出しの腿を鉄の帯で固定され、両手を真直前に差出して棒に縛りつけられているマルガリータの姿

は、拷問者達の目には大変可愛らしく映った。次に加えられる苦痛の予感で小さな胸を震わせている玩弄物を、彼等は暫く、そのままで眺めていた。

「フーン。優しそうな娘じゃないか。此の小娘が、ドルチノめと一緒に『使徒の兄弟』を率いて、法王様の十字軍に二年も抵抗していたあの恐るべき尼だとはとても思えんな。」
「どうじゃマルガリータ。法王様を認めるかな。」

うなだれていたマルガリータはスックと顔を起して、大僧正を睨んだ。

「エス様の名をかたって、平和に暮している人々を、殺したり、拷問したりする十字軍をお創りになったのはどなたでございますか。法王様ではございませぬか。マルガリータはかよい女ではございませぬけれども、意気地なしではございませぬ。どうぞ、御存分に折檻なさいませ。」

「こやつ、優しそうで全く気の強い娘じゃ。よし構わぬ。拷問にかけい。」

刑事は、首枷の鎖を天井の鎖へ通して引上げ、マルガリータの、腿から下ばかりか、腰から上も動かさない様にした。

それからペンチで、マルガリータの、細い

しなやかな指の先の、桜貝の様に美しい爪を、一本宛剝がし始めた。

「ウツ。ウツ。ギェーイッ。ゲエツ。」

此の世のものとは思えない怖ろしい、悲鳴が、マルガリータの唇から洩れた。

白い指先を彩った鮮血が、点滴となって床を染める。

歯を喰いしばって、目を固くつむり、硬直した顔をのけぞらせる美しい尼僧。その白い咽喉に喰込んだ鉄の環が冷たく光る。

溢れ出る透明な涙。

「ヒイッ、イーッ。」

「ヒイ。ヒイ。ヒイ。ウツ。」

じめじめした地下室の壁に、可憐な被拷問者の悲鳴が、幾度も、幾度も反響する。

幾度も。幾度も。

やがて激烈な痛みに耐えかねて失神してしまったマルガリータを運ぶ、手押車の車輪の金属的な軋りが、その悲鳴にかわって、深い地下室の壁に吸い込まれて行った。

4

ドルチノに加えられた折檻は、もっと酷かった。

イタリアに於て、スパルタカス以来最大の叛乱の指導者と言われている彼に、教会側の

憎悪が集中したのは無理な話ではない。

彼以前にも数多くの異端派はあったが、彼の様に、

「法王と大僧正は殺され、教会の財産はすべて没収されなければならない。」

などと戦闘的な反教會的説教を民衆にした上、宗教裁判に反抗し、法王の派遣した十字軍にまで、武器を執って刃向った者は居ないのだ。

檻の中では、彼は、ニーダーヴァート（小さな腰巻）で僅かに腰をおおっているだけの姿だった。

純潔な若者らしい、白い豊穠な腹部は、裸のまま冷たい胴環でくぶり上げられていた。

女の様に澄んだ美しい目。愛らしい小さな唇は、セガレリの感化を受けて、平和と友愛と徳行の支配する一千年、王国の到来を夢み続けた彼の優しい氣質を現わしていたし。高い鼻は、法王政治の暗黒と陰謀とを見透す、

並外れた理性を示していた。宗教裁判と十字軍に飽迄反抗した意志の強さは、太い眉宇のあたりに潜んでいた。そう言えば、タイパー河沿いの低地に見られる丘の様に、なだらかな曲線を描いている、白いふくよかな——胸でも、腕でも、腿でも、尻でも、——どこか

逞ましい雄々しさを秘めていた。

彼の説教する所、女達は皆彼の魅力に熱狂したが、しかし彼自身は、厳格な禁欲をもって自らを律し、まだ童貞であった。

しかし、その様に美しい彼の肉体も、今は風然の灯である。

檻から引出すと、刑吏達は、彼の小さなニードーヴァートまでもほじめてしまった。

たくましい若者が、キリストの様な受難を待っている。

しかし、まる裸にされても、ドルチノは恥じる色も、怒りの気配も見せない。毅然と顔を上げて、澄んだ目だけが、じいっと前方の壁を見ていた。

「さあ、これを持って歩くんだ。素っ裸でお裁きを受けるなんて、お前みたいな異端の徒らしくて、仲々いいじゃないか。え。」

刑吏はそう言つて、ドルチノの逞ましい太腿に、ピシリッと答をくれた。

ドルチノは与えられたヴァーデルを持って歩き出した。これは当時の男が、風呂から上る時など、前をかくす為に手に持った、柴の束の小さなものである。同時にそれは、何れはお前をこうして火焙りにするぞ、という暗示であつたかもしれない。

一足毎に美事な臀の半球肉が、ブリッ、ブリッと揺れる。大理石の円錐を逆さにした様な二本の腿が、ふくよかな内側の肉をこすり合わせて微妙に揺れ動く。

ドルチノの腰から腿にかけての肉付きはかなり発達しているの、薄暗い地下室でその身体を見ていると、体格の良い女を見ている様な、妙に悩ましい錯覚が湧いた。その錯覚に勝手に興奮して、刑吏は、ピシピシとドルチノの尻を鞭打った。

ドルチノはその姿で法廷に曳出され、裁判官達の前に立たされた。彼等は素っ裸で真中に立たされたドルチノの周りを四角く取囲んで並んでいた。誰かが訊問すると、刑吏が臀を答打つて、ドルチノをその方に向かせて答えさせた。質問の矢は右からも左からも後からも飛んで来る。その度にドルチノの身体が向きを変える。そこで裁判官達は彼の身体をあらゆる方面から見えて愉しむことが出来た。

「ドルチノ。美事な身体じゃな。まるでギリシャの彫刻に生命を与えた様じゃ。しかしお前の異端思想が改まらないのなら、火責台にかけるより仕方がない。どれ、その前にその肉付きの良い、娘の様にムッチリした下腹や腿をもっと良く見せるんじや。コレ、只立た

せていては面白くない、犬の様に四つん這いに這わせてやれ。ウン、そのヴァーデルは口にくわえさせて。ヨシヨシ、いい尻付きをしてるのう。そこにもっとピシピシ鞭を当ててやれ。」

裸で散々罵られた末に、ドルチノは火責台の階段を昇らされた。

これは鉄の籠と横棒と支柱を使って、いけにえの身体を宙に吊す装置である。肩から腿の半ばまで鉄の籠がギッシリと男の肉体を締め上げていて、身動き一つさせない。腿から下の両足には油を塗っておいて、下から火で裸の足をあぶるのである。

「ウツ、ウーン。ウーン。ウツウツ。」

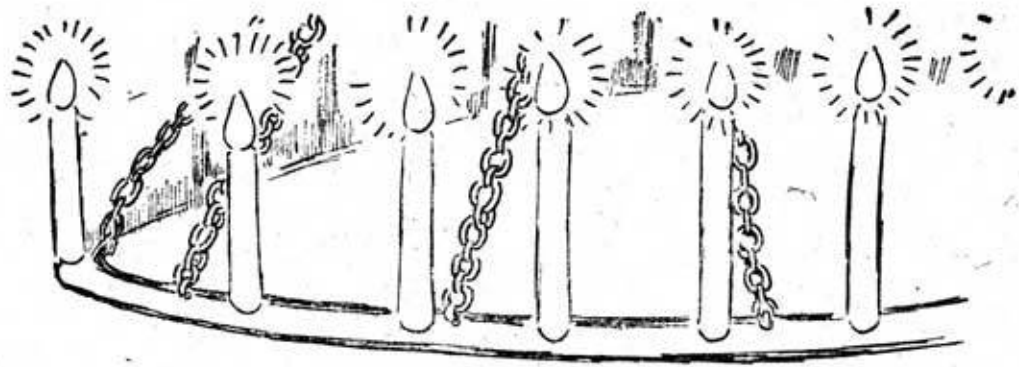
ドリチノは首ばかりを上下に振って苦しんだ。

時々板で焰を遮って苦痛をゆるめておいて、転向を促す。

油の熱気の為にドルチノの白い足が美しい桃色に染まって、膝から下をバタバタと前後に振っている。

「アツツウツ、ウーン。ウーン。ツウツ。」

油を塗っては焼き、塗っては焼きしている内に、皮膚が焦げ、肉が爛れて、段々足先から骨が露出して来るといふ怖ろしい苦虐であ



5

る。

「大僧正様。」

拷問台の上に手足を大の字に拡げて縛られた姿のまま、マルガリータが呼掛けた。彼女



も今はバデールという前垂れを一つ腰に垂らしただけの姿である。

特殊な器具で彼女の足指の股を裂いていた

刑吏が、拷責の手を止めた。

「何じやなマルガリータ。異端に組した罪の

怖ろしさが解ったか。」

それには答えないで彼女は、円らな目から只涙だけを涙していた。美しい顔がやつれて、言い様もない凄艶な表情を見せている。連日の拷問で彼女はもうすっかり弱っていた。

腹部にはみみず脹れの鞭の跡が無数の紫色の縮緬皺を作っているし、太腿の脇には痛々しい焼爇の跡が幾つもある。ふくよかだった乳房には、二糎平方宛皮を剥がれたあとが、褐色のタイルの様にかさぶたとなって盛上っていた。これも特殊な責道具で剥がされたのである。

「もう私の命も幾らもないものと観念しております。死ぬ前に一度でいいからドルチノ様と遇わせて下さいませ。お願い致します。」

大僧正は暫くの間、考えていた。

「よし遇わせてやろう。マルガリータ。しかし、お前の懇願で遇わせるのだぞ。ドルチノが、どんな姿になっていても、わたしを恨むなよ。」

大僧正の顔にチラと嘲りに似た笑いが浮んだが、折檻の痛苦に目もかすみかけているマ

ルガリータには見えなかった。しかしその言葉ははっきり聞えて、ともすれば意識の遠くなってしまう彼女を、ハッとさせた。

手足の爪を剥がれ、指の股を裂かれるという様な酷烈な責苦を受けて、彼女には始めて折檻の意味が解った。

責苦が、その限界に達して意識も朦朧として来ると、被拷問者は拷問者の言うことのすべてが、真実な様な気持ちになって来てしまうのだ。

セガレリとマルガリータの母が悪魔の手引によって魔境で情交し、そこから生れたのがドルチノと彼女であった。だから二人はあれ程密接な間柄でも純潔で居られるのだ。これが、異端審問官が彼女を責めて「自白」させようとしている二人の出生の秘密である。

こんな尊敬する人のすべてを侮辱する筋書が承認出来る筈はない。第一そんなことをしたら、彼女もドルチノも、生きている限り償えない魔性のものとして生きながら肉を焙られる以外にどんな逃遁もなくなるだろう。

彼女は頑強に否認した。しかし苛責が続いて息も絶え絶えの状態にまで行くと、ふっと審問官の責めている話が本当で、自分の方が嘘を言っているのではないかという風に意識

が混乱して来ることがあった。拷問は折檻される女に空想の翼を与え、折檻する男の聞きたいことのすべてを幻影に見るのだった。激烈な苦痛に一時無感覚の状態に落込んだ時。

彼女は遠い山奥の谷間。牡山羊に乗った魔女達が空を飛び交う下で、セガレリと母が抱擁し合っている状景をはっきりと目撃した。自分がそのロマンスのヒロインでもあるかの様な恍惚感と共に。

母も多くの魔女達も、此の幻影に負けて自分を火刑へ追いやってしまったのだ。恍惚境を抜け出ると、賢い彼女は、苦痛に呻きながらすぐそう考えた。その時には革の鞭が、彼女の皮下脂肪の厚い背中にビシビシと食い込んでいた。容赦ない男の強い力で。

そんな幻影に負けない為に、マルガリータは一心に、ポロニヤやチビタベッキヤと一緒に曳廻されたドルチノの男らしい裸姿を心に描いた。彼の為と思えば、どんな苦痛にも耐えられた。幻影の中で彼にすっかり抱かれていた時は言い様もなく幸せだった。此のまま火焙りにされたって構わないと思う程に。

折檻が恋慕を煽り立て、苦痛に気も遠くなくなりかけた時、彼女は、ドルチノ様に遇わせて下さいと言ってしまった。

言わなければ良かった。ドルチノ様だって今の姿を私に見せたくないでしょうし、私も見たくはない。自分の姿も見られたくはない。

だがその時、彼女はもう車の附いた椅子にのせられていた。椅子は動き出した。

暗い地下室の廊下を幾つも曲る。一つの小部屋に送り送まれた。しかしそこにも恋しい人の姿はなかった。刑吏は椅子を壁際まで搬んで行って、窓際に附いているハンドルを廻した。すると目の前の壁が少しづつ動いて、覗きカラクリ程の小さな窓があいた。

窓の向うは一段低い地下室だった。そこで一人の男の拷問が行われていた。台の上に裸で仰向けにのせられているのは、確かにドルチノだった。顔はすっかりやつれてしまっているが、身体はまだがっしりと逞ましく、白い肌のあちこちに、五彩の花が咲いた様に、赤、ピンク、紫、赤、黒と責め傷のあとがいたいたしい。

顔は仰向けにされて、左右に動かさない様に、頭から頬の横を板切れではさまれ、首と額を縄で台に縛りつけられていた。胸と腹の境のくびれ目に強く縄をかけられて、白い身体が蜂の腰の様にくびれ返っている。縄目の

上から腕を横腹へピタッと伸ばされ、腹部のなだらかにふくらんだ岡の中腹から、ひじの上へもう一本胴縄がかけられて拷問台に固定されていた。三本目の綱は膝の上の方で足を縛りつけていた。そしてその腿に食い込んだ縄目の下から爪先までは、粗末な布をかぶせてあった。

若しその布がなかったら、マルガリータはそれだけで気絶していたに違いない。

天井から巨大な振子がぶら下って、ドルチノの目の先でゆっくり左右に振れていた。振子は少しづつ下って行く、その先は剃刃の様な鋭い刃物になっていた。ドルチノは目を大きくあけて、その振子の先を凝視していた。女の様に優しい、美しく澄んだ目が、恐怖のあまり、モノメニヤックな光を帯びて輝いていた。

マルガリータは顔をそむけようとした。その髪を驚嘆みにして、大僧正が叫んだ。
「お前の方から見たいと言ったんじゃないのか。」

拷問台の右側に立っている糾問官の中から一人が何か言った。聞えない。窓の硝子は厚いのだ。恐怖に顔をひきつらせてドルチノが答えている。聞えない。

マルガリータは悲鳴を上げた。
刃物は遂にドルチノの鼻に達し、ゆっくりと鼻先が切り割られ始めたのだ。
髪を掴んでいる大僧正の手に急に重味加わった。大僧正が大きな声で笑った。
マルガリータは失神していた。

6

再び蘇生した時、彼女はもとの様に、拷問台に大の字に縛られていた。前垂一枚の裸姿で。頭上で灯火が頼りなく揺れていた。

大僧正がドルチノの死を告げた。あの刃物が、彼の鼻ばかりか、頭顱までも割ったのである。

マルガリータは、仰向けに縛られたまま声もなく肯いた。

「マルガリータ。悲しくはないかな。」

大僧正がきくと、彼女は目を光らせて反論した。

「何で悲しむ必要がございましょう。ドルチノ様も、セガレリ様や私の母と同様、辛い此の世の勤めを果して、天なる神の御許へ召されてお出でになったものではございませんか。私も早く御あとに従って行きとうございませう。此の様な怖ろしい御折檻はもうお許し下さいまして、どうぞ火焙りなりなんりの御

仕置を早くお受けしとうございます。」

「ところが、それをやるには順序があるのだ。教会は『使徒の兄弟』の様な、俄仕立の貧弱な組織ではないから、お前が確かに魔性の女であるという自供書を取らない内は、御仕置さえするわけには行かんのだ。」

「是非もございません。では、ドルチノ様と同じ方法で命をお取り下さいませ。」

「死ぬのが怖くはないのか。」

「怖いと思ったこともございますが、今は心も落着きました。いつかきくと、此の様なむごいことをなさる法王様や大僧正様は罰せられるでしょう。そして此の世の終りの、すべての死者が蘇える日には、私達『使徒の兄弟』のものが、美しい理想郷を此の世に建設するのです。陰謀も十字軍も教会も拷問も火焙りもない世の中を、さ、どうぞドルチノ様と同じ様にして……。」

「おっと、折角だが、ドルチノめと同じ責め方では詰らんのだ。お前は女だ。女には女らしい虐め方があるものよ。」

「……………」

「ハハハハ。解らんかな。お前のせられて拷問台は、一寸今迄のとは違うんじや。口で言うよりも、実際にその拷問の味を味わ

わけてやろう。ハハハハ。ソレ。」

刑事が進み出て、マルガリータに、バケツに半分程の水を吞ませた。鞭跡の痛々しい腹が孕婦の様に膨満し、細い前垂れの紐が、腹部に食込んで、脇腹などは、紐が肌の間にかくれて見えない程になった。

「ソレッ、ハッ。ソレッ、ハッ。」

妙な懸声と一緒に刑事が台の枠の所についているレバーを引くと、手足をおしひろげられて礫になっているマルガリータの身体の下で、台板が二つに割れて盛上って来る。

「アー、アーッ、アッ。」

腹部が盛上って、内臓も腹筋も皮膚も裂けそうに痛い。拷問台は丁度勝鬃橋の様に、女をのせたまま上に聞く様に出来ているのだ。手と足を縛りつけられているので、彼女の身体は大の字の姿のまま弓なりにそり上った。手首足首には縄目が食い入ってちぎれそうに細くくびれていた。縄目の先は血行がとまって充血し、赤紫色に変じていた。

「ウーン。ウーン。お腹が裂ける。ゲッ。ゲーッ。」

下腹も裂けそうだが、その前に吞まされた水が逆流して来て、口から鼻から溢れて来る。その苦しさ。

プツンとバデールの紐が切れた。バデールが少しづつ下にずれて、緊張した皮膚を露出して来る。

「ヨーシ。その辺でもとへ戻して、もう一ぺん水を吞ませろ。」

「ソレッ、ヨッ、と。」

レバーを戻すと、勝鬃様が閉る様に、女体をのせた拷問台がゆっくり下って、戻る。

もう一ぺん水を口中に注ぎ込まれて、今度は別のレバーが引かれた。

「ソレッ、ハッ。ソレッ、ハッ。」

台が縦に割れて、乳房の中間から鳩尾、臍を結ぶ線をピークとして、マルガリータの腹部が、雪白の山脈の様に縦に盛上る。小さく引緊る乳房。台板の割れ目が臀部にひっかかって、吞まされた水は脇腹に溢れ、臀の部分が大きなこぶの様にふくれた。一部の水が上と下から溢れ出る。

「ゲッゲッゲ。ウウウウーン。」

肋骨がミシミシと鳴っている。

「ウウウウッ。クッ、ツウウッ。」

「ヨーシ、そのままの姿で一つ立たせてみせろ。」

絶世の美女の身体を自由自在に翻弄する偷しさで、大僧正の声は弾む。それと対照的

な、マルガリータの呻く声。嚔り泣き。間歇的な悲鳴。

「ソレッ、ハッ。ソレッ、ハッ。」

別の刑事が、頭部の下の踏板をリズミカルに踏むと、その責姿のまま、マルガリータの身体が次第に斜めに起上って来る。

「ヒューッ。いやだ。何をやるのよう。」

「ハハハハ。泣いたって笑ったって駄目さ。そら、とうとうバデールが落っこちた。」

三人目の刑事が、ベッドの裏を支えた鉄柱についているハンドルを廻すと、手足を後に引っ張られ、胴の中央部を張り出した姿で垂直に立ったまま、マルガリータの全身がゆっくりと廻転する。

ポキン、ポキンと肋骨の外れる音。

マルガリータはグッタリと首を前へ垂らし、もう声も出ない。

四人目の刑事が、その頭髪を縛って、台の鉄棒にくくりつけ、ぐったりしている美しい顔を無理にも皆に見物させる。涙に濡れて、赤く泣きはらした目が可愛らしい。

「ヨーシ、拷問台を元へ戻せ。さ、今度こそ最後の拷問だぞ。此の台を徹底的に使えば、どういふことになるか、異端者への見せしめにもなる。お前達、よく見ておいて世間にし

らせてやれ。」

「ソレッ、ハッ。ソレッ、ハッ。」

「ソレッ、ハッ。ソレッ、ハッ。」

「ソレッ、ハッ。ソレッ、ハッ。」

ハンドルが戻され、逆の踏板が踏まれ、レバーが返された。マルガリータの裸身が最初の時の様にベッドに寝ている。

バデールだけが喪われて。口許と鼻が、腹から溢れた水に濡れ、灯火を受けてつややかに光っている。

大僧正の最後の訊問。女被告は辛うじて口を開いて、小声で、呻く様に、

「どうぞ御折檻をお続け下さい。」

と言った。そして、ぐったりと全身の力を抜いた。

腹へ入れる水が補充され、最初と同じ様に拷問台が勝関橋になった。

反り返る裸身。

踏み板が踏まれると、弓なりの身体が今度は真逆さまになった。開かれた両足を上にして。

ハンドルでその姿をぐるぐる廻す。廻しながらレバーが引かれ、身体は一層弓なりに反る。

断末魔の喘ぎが、美しく可憐な裸女の唇か

お産の浣腸

菅 千代

十五分おきにくる痛みをおさえながら、

病院の門をくぐったのは、うららかな春の日の午後でした。夫にともなわれて二階産婦人科の受付へ——何度も診察に来てはい

るものの、ここへ来る度に内診のあのあら

れもない姿にさせられるのが想像されてゾ

ツとするのでした。——

「痛みが十五分おきにくるのですが」

ほほを赤らめて小さくなっている私に代

って夫が入院願を差し出すと、

「ではすぐ入院なさって下さい」

いとも事務的に受付の看護婦の差し出す

カルテをかいまみて、右上角に大きく押さ

れた赤い印「入院・浣腸。」

陣痛をさまたげないために浣腸をすると

は本で得た予備知識として知ってはいたも

ののもしやしないですみはしないかとの、

ほのかな期待もむなしく今や浣腸されるの

が、時間の問題となってきました。

看護婦に導かれて予備室へ。明るいクリ

ーム色の壁さえ、浣腸の事が頭へ来て灰色

にも見えるのでした。

「お浣腸しますから、着がえなさってすぐ処置室へ来て下さい」

なんと冷たい看護婦の声であろう。一刻もおそくと、寝巻きに着かえるのをわざとおそくする。

「準備が出来ていますから、早くいらして下さい。」

看護婦の姿が鬼に見えるよう、でも看護婦に浣腸されるのなら、相手が女だからと氣をとり直して、おそるおそる処置室の扉を明ける。

「アッ！」

思わず声を立てそうになるのを、グッとかみしめた。あの子供の頃よくされたグリセリン浣腸位と思った私の眼前には、一リットルも入ろうかと思われるイルガートルが三つも並び、その一つには、今や私の体内をのぞむが如く、真白な石鹼液が並々と満たされているではないか。而もベッドは産科の手術台、その姿を想像しただけで、

ら洩れて来る。

腰椎の関節が、ポキリ、ポキリ、と音を立てて、一つづつ外れて行く。

手の空いている刑吏が、思出した様に、小道具で、マルがリータの、血の気を失って石膏の様に鈍い白色を呈している肌を剥ぐ。

その音は、ザリッ、ザリッ、と静まりかえった地下室の中を異様にざわめかせた。

指の股が更に裂かれ続けた。

最後には両手と両足がくつつくまで、マルがリータの身体は反り返された。

そして。

——絶叫。——

彼女の白い下腹は、一番肉附きのふくよかなあたりで、真一文字に裂かれてしまった。

7

二人の死体は車に乗せられてローマの町中を曳廻され、長い間タイバー河のほとりの丘の上に晒されていた。

異端派への峻烈な見せしめとして。

事実。『使徒の兄弟』の叛乱を最後とし

て、長くて暗い中世の夜が明けるまで、イタリアでは、目ぼしい異端派の活動は後世に伝えられては居ないのである。

(終)

入口で足がすくんでしまうのを、どうすることも出来なかった。

「パンティおとりになってお乗り下さい」

看護婦の声はいよいよ冷たい。屠所にひかれる羊の如く、すごすごとパンティをぬぎ、台に上る。

「上向きに寝て、足を足のせにのせて下さい」

ああ、足のせは歯車の回転音とともに高くせり上り浣腸される体勢は完全に出来上った。もうどうすることも出来ないとい観念の眼を閉じた時、

「先生、用意が出来ました。」

看護婦の呼びかけと共に医局のカーテンを押しあけて入ってきたのはまだ年若い男の医者ではないか。

「では浣腸します。すぐ終わりますから。お腹に力を入れないように、口をあけて。」

嘴管の先が肛門にふれる。思わず活約筋を力一杯しめたが、既にワセリンがぬられているだけに、いとも簡単に嘴管は直腸内深く入ってゆく。同時に生温い石鹼液が、注ぎこまれる。何ともいえない気持の悪い、なさけなさで、目尻がジーンとしてく

る。そっとイルリガートルを見る。まだ半分しか入っていない、あと半分、あと三分の一、看護婦と医者の目が、事務的に冷たく、私の肛門の方をじっと見ている。お腸がごろごろとなって早くも便意を催す。あと四分の一、腸が張る、苦しい。

「では五分位我慢して。」

医者は嘴管を静かに引き抜くと出て行ってしまった。

「あのう、出そうなんですけど。」

「あと三分位我慢なさって下さい。お薬がよくゆきわたらないと、完全に便が出ませんから。あとの陣痛にさわれますよ。」

ああもう我慢が出来ない。若しい、冷汗がにじんでくる。懸命に引きしめる肛門から、一条二条液がもれるのが分る。

「ああ、許して！」

思わず叫んでしまった。

「そうですか、ではもういいでしょう」

足が下され、あてがわれた便器に、ほどばしる、ほどばしる。快感と言おうか、喜びといおうか。あれほどいやだった浣腸が何か喜びに似た虚脱感をもって私を包んでしまうのだった。

酔った女

——被虐愛さんげ——

万 田 不 仁

私はどんなことからそんな遊びをするようになったのか今は全く記憶がありません。しかし、私たちはその遊びに一時熱中したものです。

私が畳の上に仰向けに寝ると、杉田君が縄飛びのひもで、先ず私の両足を揃えて踝の上のところで固く縛ります。次に私が胸に重ねる両手を同じように縄飛びのひもできつく縛るのです。この場合、口を使って縄目をほどこうなどとは致しません。さて、それから杉田君は私のおなかの上に馬乗りになって、「どうだ降参か！悪者め！どうだ降参か！」

と、いいながら、丁度馬を飛ばせる人のお尻が上下するようにどしどしと腰を上下させて、私のおなかに圧迫を加えるのです。その動作がひとしきり続くと遊びは、それで一段落になるのです。ひもをほどこいて、もう一度する時も順序は同様で、縛られるのはいつも私でした。この遊びに多少色取りを添える意味で、はじめ私が四畳半の自分の部屋を跋をひきながら逃げ廻ることもありました。クラスでも足の早い方の杉田君は苦もなく私に追付いて、私も仰向けに押え付けて、それから……今お話ししたり通りの次第になる訳です。

興が乗ると二人は何回でも同じことを繰返したのですが、縛られて、杉田君が私のおなかに乗る前あたりから、私は必ず一種の快感をズキズキと体を感じるのです。

杉田君は頭が良くて、しかも仲々の運動家でバスボールがうまくて、あまり不具者の私などと遊んでいられないクラスの人気者でしたのに、ちよいちよい私の家を訪ねてくれました。それは私の書棚には少年雑誌や世界童話集、世界冒険物語などぎっしり読物が詰まっていたし、電気機関車やタンク、模型飛行機などの玩具類も揃っている点に多分魅

力があつたのかも知れませんが、一体に杉田君は優しい心の持主でした。私でもキャッチボールくらいは出来ましたからグローブもミットも持っていて、たまに庭で杉田君とボール投げをしますと、悪い球を投げた時は勿論私が後逸した時も直ぐ駆け出してボールを取って来てくれるのでした。

杉田君の来るのは大抵四時過ぎでした。暫く本や雑誌を見たあとで、

「あれでしょうか？」

と、いい出すのは、きっと杉田君で、私は実はそれを待受けているのでした。

その日は、雨が相当はげしく降っていました。杉田君と私は夢中で縛り遊びに耽っていました。杉田君は案外不器用なところがあつて、縄を強く結べないので、フウフウ鼻を鳴らしていましたが、ようやく縛り終えて私のおなかの上に跨がりました。

「どうだ降参か！悪者め！どうだ降参か！」

と、極まり文句を高らかに唱えた時でした。すっと襖が開いて、

「あら、何してんの？喧嘩？まあ、縛ったりなんかして、どうしたっていうの？」

ユキさんが突然あらわれました。杉田君も私も唯びっくりしてしまつて、直ぐには口も

きけません。殊に私は恥ずかしさで、本当に消えてしまいたいくらいでした。

「ばく、もう帰る。失敬」

といつて、杉田君がそくさと引上げていったあと、私は氣不味い思いで逆にユキさんに対して腹立たしさがこみあげて来ました。いない筈のユキさんは何時戻つたのだろう、玄關の戸にはよくひびく鈴がついているが、ああ、雨の音で裏口の開くのが解らなかつたんだ、ユキさんは満叔母さんや母にこのことをどんな風に告げ口するだろうか、こっそりうちに入つて来たりして、ユキさんは意地悪だ、いやな女だと無性にいきどおしくなるのでした。当のユキさんはその場の光景に些か驚いたようでしたが、着替えをして茶の間にごろりと寝転ぶと、もう無表情ないつものユキさんにかえつて、鼻唄をうたいながら映画の雑誌などペラペラめくっていました。……

私はその時小学校の四年生でした。私の全く覚えのない幼ない時の怪我の為に左足が跛の私は、二年、三年と学年が進むにつれて、漸く内攻的な性格になっていました。体操の時間や運動会、それに遠足、そうした自分の参加出来ないことのある学校が段々いやにな

っていました。私はずっと満叔母さんと一緒に暮らして、母とは永く、その後母が海で死ぬまで別々でした。母は東京湾に臨む〇三業地で、小さな待合を経営していましたが、商売柄男の子を置くのは教育上良くないという理由から妹に私を託しきりでした。満叔母さんは長いことお屋敷奉公をした後に一度電気技師と結婚しましたが、間もなく不縁になつて、それから独り身を通し、私を異常なほど可愛がつたのでした。

その時分に、そんな縛り遊びに熱中したりするのは既に異常なものでしょうか。それはあながち、そうとのみはいえないと思います。恐らく初めは、その頃よく見にいった町の三流館のチャンバラ映画にかなり少年の心を刺戟するような縛りシーンがあつた為に、その感化を受けたのではないかと考えられるのです。……

しかし、次のような思い出は今も何か私の胸を打つものがあります。それは、うちのそばの米屋の少女のことですが。少女は六年生だったと思いますが、学校から帰ると毎日私のうちの前の道路で、大勢の悪童連中にまじつて暗くなるまで遊びました。大柄な娘で、ほのかに赤みを帯びた顔に黒い瞳がよく光つ

て、小麦色の健康そうな手足をすばしこく動かしながら常に遊びの中心にいました。ボール投げなんかでも、その少女の投げたボールは、男の子でも受止めかねるくらいきつく、弱虫の子はよく顔に当てられて泣き出す始末でした。彼等はしばしば悪漢ごっこというのでしょいか、正義派と悪者派に分かれて争いを展開する遊びを好んでしたようで、私はうちの格子窓から小鹿のように駆け廻る彼等の姿をいつまでも眺めているのでした。悪者たちは次第に一人二人と捕らえられて、電信柱に繋がれます。どういうルールになっているのか知りませんが、手と手をつないで珠数繋ぎになって、それで彼等の空想の世界では牢屋に閉じこめられたことになっているのでした。が、どうかして反則して逃げ出す者もいました。その子が再度つかまった時は小突かれたり、ズボンのお尻をペタペタ叩かれたりした上に電信柱に縄飛びのひもでぐるぐる巻きにされるのでした。

「××ちゃん、もう逃がさないわよ」

少女は正義派の頭目らしい貫録を示して、逃亡者を縛りつけます。その様子をじっと見ているうちに私はいつも何ともいぬ興奮に吾れを忘れそうになるのでした。ああ、ぼく

もあの子のように縛られたいという切実な希望で胸がいっぱいになって、少女の手で縛られる男の子が羨ましくてならなかったものです。私は学校から帰ると、うちで本ばかり読んでいたし、虚栄心が強くもあつた満叔母さんは私が無類の勉強家であるかのように隣近所に吹聴したこともありましたが、それだけでなく遊び相手として歯痒い不具の子は悪童たちからまるで敬遠されて、町はずれから来る杉田君以外にはまわりに友達はなかったのです。

しかし、一度ある薄ら寒い夕方、私がうちの前にばんやり佇んで、彼等の遊びを見てみると、少女がピョンピョン縄飛びをしながらこちらへやって来ました。そして少女は私に気付くと

「洋ちゃん、しばっちゃおかナ」

と、ふざけて、赤、黒、白に染め分けた縄飛びのひもを私の鼻先へ突出してみせたのです。この時の私の気持——、それは年中暗がりにいる人間がいきなり明るいライトに照らし出されたような、実に深い感動で一杯といつてもいいほどでした。私は直ぐその場で、少女に縛ってもらいたかったのです。本当に「ぼくを縛って」

と、いえるものなら、いいたい私でした。でも少女はその時後から走って来た少年と共に忽ち風のように何処かへいつてしまったのでした。

その晩、私は少女のことをずっと考えていました。その頃の私の生活はというと、満叔母さんは朝、私を学校へ出して、朝飯の後片付けをすませると、そのまま〇三業地の母の待合へ手伝いにいつて、帰りは大抵十時か十一時過ぎになるのでした。乗物嫌いの満叔母さんは、その待合まで四十分も歩いて通っていました。私は学校から帰ると、先ず戸棚にあるおやつを食べて、好きな本や雑誌を読んだり、気が向けば一通り復習もしました。たまたま杉田君が来れば、二人であの遊びをして、杉田君が引上げると、一人で満叔母さんが用意していつた夕飯の膳に向かうのでした。隣のおばさんにお茶をもらうこともありましたが、大方ひとりでお湯を湧かししました。弱虫の癖にへんに強情なところのあつた私はそんな毎日を別に淋しいとは思っていませんでした。夕飯が終ると、私は自分の部屋の机の上に紙製の動物たちをずらりと二列に並べて、それを長いこと眺めながら色々なことを空想しました。紙の動物はライオンにし

ろ象や虎にしろみな小さなものでしたが、それぞれ丁寧に彩色が施してあって、仲々よく出来ていました。あまりいじると毛羽立つので、こればかりは普段は鍵のかかる本箱にしまいこんで、親友の杉田君にさえ見せたことはありません。それから私はまた少年雑誌を開くのですが、私は精神的に稚ない面もあったようで、未だ幼年向きの雑誌も併読していました。そんな幼年雑誌の口絵か挿絵に、武装して馬に跨った美しい女武者が描かれてあったりすると、橙色のシェードをかけたスタンドの下でその頁をいつまでも飽きずに見ているのでした。私は杉田君の顔立を想わせる瑞々しい前髪の美少年の絵も好きでしたが、巴御前や板額（後に醜婦であったという説を何かで読みましたが私が見た雑誌の絵では美人でした）の凛々しい姿は私をたやすく夢幻の世界に遊ばせてくれるのでした。そんな時、いつか米屋の少女のことを考えている自分に気付いていたのですが、少女が、

「洋ちゃん、しばっちゃおかナ」

と、いった夜は一人少女のことを思いました。幼年雑誌の口絵には、楯を並べた城の櫓で、剛弓を引きしぼった板額が今正に矢を放そうとしている姿が大きく描かれてありまし

た。白い鉢巻、長い黒髪、萌黄おどしの鎧、その勇姿と米屋の少女はその時実にぴったりと結びついたのです。私はほっと熱い吐息をつきました。

こうした思い出は、あるいは私の性的偏向性の萌芽を示すものかと考えています。

さて、私はユキさんに杉田君との秘密の遊びを見られてしまった悔いに、それこそ腸も焦げんばかり、ユキさんが早く何処かへ移ってくればいいと神様をお願いしたいくらいでした。

ユキさんは母の友達で、大分前から時々うちへ来ました。居候のような形で幾月もいることがありました。三十近い、色白で、背の高い、痩せ形の女で、切長の眼が何かこわい感じでした。いつか夏の朝、鏡に向かって髪を直していたユキさんの二の腕に小さなほりもののあるのを私は見つけました。

「それ何？ 字が書いてあるの？」

その青い何かの形を指さして聞きますと、

「うん、ハナという字さ」

ユキさんは無造作に答えました。私は前に銭湯の女湯に叔母と入った頃、背中一面に竜や牡丹をはった女の人に何人か出逢いましたが、ユキさんののは極く小さなもので、あ

の恐ろしいような立派なほりものをした女たちと、一緒には考えませんでした。でも何か普通の女の人は違った、変った人のような感じを受けました。変ったといえば母は私にとって最も変った存在で、たまにあらわれても隣のおばさんほどにも親しめませんでした。小肥りの駅を上等の着物に包んで、巻煙草をくゆらしながら、じろじろと私を眺める母の前で、私はひどく気持ちが固くなって、あまり物もいえないのでした。

「洋一は元気がないネ、勉強も大事だけど」などと母はよくいいました。また、満叔母さんに、こんな驚くべきことをいうこともありました。

「うちへ遊びに来る、お医者さんがいうんだよ、ひと思いに悪い足を切っちゃって、義足にした方がよく歩けるそうだよ」

私は恐ろしさに胸塞がるばかりでした。私は縛り遊びなどに熱中してはいても鋭利な刃物で自分の足を切断される恐ろしさに体がふるえそうでした。

ユキさんは終日うちでごろごろしているかと思うと、ぶいっと何処かへ行って四、五日帰らないことがありました。

杉田君とのことは満叔母さんにも母にも告



げなかったようで、私はそのことで二人から何もいわれませんでした。

しかし、私はユキさんが何となく嫌いでした。ユキさんを綺麗な人だとは思っていましたが、何といても大人で、話相手にもなってくれず、それにユキさんが満叔母さんに時偶聞かせている温泉やダンスホールの話には必ず大人の男の人が出て来て、何かいやな感

じがしてならないのでした。まさか十一歳の私がユキさんに嫉妬を感じていた訳ではありますまいが……ユキさんが早くいなくなってくればいいと思っっているうちに、いつの間にか、何とかして追い出したいという気持ちが私の心の中にきざして来るのでした。ユキさんには私はいやな思い出がありました。二年前の夏でした。

たいへん蒸暑い晩で、白麻の蚊帳の中で肥満体の満叔母さんは寝苦しそうに団扇を使っています。私は私で虚脱したように蚊帳のたるみを見詰めています。蚊の多い土地で、蚊帳の外には血に飢えた蚊が唸り廻っていました。

ユキさんが乱暴に戸を叩いたのは、夜も更けて十一時過ぎでした。寝つきの悪い私はやっと眠ったばかりで、眼を開くと頭のしんがズキズキ痛むようでした。満叔母さんが玄關の戸を開けると同時に、白い洋服を着たユキさんが満叔母さんに凭れかかるように玄關へ転がりこんで来ました。ひどく酔っていたのです。

「今晚は、おばさん、また、御厄介になるわよ、洋ちゃん未だ起きてんの？」

そんなことをいいながらユキさんはよろめく足を踏んばって脱いだ洋服を蹴散らすようにして、蚊帳の中へ這いこんで、私の蒲団へどすんと体を横たえるのでした。私の嫌いな甘ったるい日本酒の香いが私の胸をむかつかせました。シュミーズひとつのユキさんの白い体は汗と香水と酒のにおいが一緒くたになった生々しい活気を発散して気味悪いようでした。私はその時どうしてあんなに怒ったの

でしょう。およそ他人から嘲けられても、例えば跛々と悪童連に嘲されても、クラスメートから皮肉に私の歩き方を真似された時でも決して怒らなかった私でしたが……。

「くさいなア、帰れよユキさん、いやだ一緒に寝るのは」

と、私はいつてしまいました。

「う、うむ、うう」

ユキさんはうるさそうに向こうを向いて、唸って一図に眠りこもうとします。

「帰れよ、帰れ！ ユキの馬鹿！」

利く方の右足で、私はユキさんの背中を蹴りました。どんだん蹴り続けて、温和な気性の満叔母さんがなだめすかそうとしても、一向ききませんでした。

「洋ちゃん、たのむ、迎もねむたいんだよ」

背中をまるめたユキさんは、哀願するようにはいいました。私はその酔に濁った声を聞くと何かたまらなく可哀相な気がしましたが、私の中にいる、もう一人の我儘な私が俄にいきり立って暴れ廻るのを制することが出来なかったのです。

「帰れ、帰れ、ユキなんか大嫌いだ、くさいくさい」

叫びながら一層足に力をこめて、ユキさん

の背中やお尻を蹴り続けました。すると、流石にユキさんも段々正気づいたらしく、海老のようにまるめていた体を、くるりと向き変えて、切長の血ばしった眼で私を見据えると「帰るよ、うるさいわネ」

ひと声となりました。同時に右の拳で力一杯私のおでこを殴りました。そして荒々しく蚊帳を出て、脱ぎ捨てた洋服をよろよろしながらも着こむと、玄関の鍵を開けるのもどかしそうに飛び出してしまいました。

敷石にカツカツとハイヒールの音がひびいて、それはユキさんの深い怒りを、そのままあらわしているようでした。

あとで私はユキさんに全く済まないことをしたと後悔しました。しかし、そんなしおらしい謝罪の気持の底に、むらむらと湧きあがるユキさんの日常への嫌悪感、それを抑えきれぬほどに私の心は豊かではありませんでした。朝遅く起きて、寝間着のまま開いた両膝を立てて、その間に、新聞を置いて読む恰好や、昼や時には寢床にも焦げ穴をこさえるほど好きな煙草をやたら吹かす横顔、どうしても吐気を催おしそうになる日本酒のにおい、人を馬鹿にしたような笑声など、数え挙げればきりがないように私には思えるのでした。

私は夜、玩具の動物たちを机の上に勢揃いさせながら何時でも勝手に私の生活へ闖入して来る気儘なユキさんが、死ねばいいと無責任に考えるようになりました。

庭に私の好きな真紅の薔薇が咲きました。

ある日、私はその薔薇の花や葉にユキさんの外国物の香水をたっぷりかけてやりました。それからユキさんが愛用していた化粧水へチマロンを薔薇の木の根元へ十二分に注いでやりました。次にユキさんの鏡台（これはずっと以前、ユキさんが初めてうちへ来た時から私の部屋の隅に置いてあったのです）の引出しを開けて棒紅を取出すと、画用紙に先ず洋装のユキさんの姿を軟かい、濃い鉛筆でくつきり描きました。顔を思いきり歪曲して描く、それでいて一目でユキさんと解るように描いてから、唇と頬に棒紅をどしどし塗りつけ、洋服も同じように棒紅を使って真赤に塗りつぶしました。こうして随分減った棒紅はそのまま鏡台の上に投げ出し、ユキさんの画像は鏡台に寄せかけておきました。私は図画は学校の課目中最も得意としたところで、この悪意と悪戯心をまぜた戯画は相当にうまく描けたように自分には見えるのでした。私としてはふと思いついた、精一杯のいやがらせ

だったのです。その日は土曜日で、満叔母さんは朝、食事の時、

「今夜は忙しいから遅くなるよ」

といいました。土曜は海岸の砂原で少年野球があるらしく杉田君も来ないので、私は新刊の冒険小説を読んで午後を過ごしました。

暗くなって、一人で夕飯を食べて、ラジオを聞いているうちに何だか急に眠たくなった私は卓袱台の脇へごろ寝してしまいました。

「洋ちゃん、おきなさいよ、洋ちゃん、こら洋一！」

どのくらい経ったでしょうか、いきなり脇腹をつつかれて私は眼を覚ました。何時戻ったのか淡い水色のセルを着たユキさんが片膝立てて私を見下していました。

「ああ、お帰り」

寝呆け声でいう私を抑えるように、

「あんた、いたずらしたでしょ、悪い子ネ」

ユキさんはきつくいいました。酒臭い息が私の顔にかかりました。その匂を嗅ぐと途端に耐えがたくいやな気がしました。ユキさんの酒好きなのが私がユキさんを嫌う最も大きな原因だったのかも知れません。黙って向きを向いて自分の部屋へいこうとしますと「洋ちゃんは、一度こらしめなくちゃ駄目ネ

今晚やってあげる」

ユキさんの鋭い声が迫って来て、私は後から肩先を掴まれて、ぐいと引戻されました。

「何をするんだ、よせよ」

「うん、少しお灸をすえてあげる」

表情の乏しい顔に冷やかな笑みを浮かべたユキさんは左手を私の頸に巻くと、左足を私の利く方の右足に絡ませて、相撲の首投げのように私をその場に押し倒しました。可成り酔っているらしいユキさんの乱暴ぶりにすっかり驚いた私が跳ね起きようとするのを、そうさせず、そのままユキさんは白いズロースをちらっとのぞかせて馬に乗るように私の胸の上に跨がってしまいました。

「よせ、よせ、満叔母さんにいつてやるぞ」

「ああ、いいわよ、どうぞ」

ユキさんは薄笑いしながら私を見下して、腰をゆすって、尚しっかりと私の胸の上にお尻を据えるのでした。私は両足をバタバタさせましたが、片方の足は力が無いので少しも効果がありません。両手でユキさんの帯を掴んで、胸の上からユキさんの体を押し除けようとしたが、その両手も忽ちユキさんの左右の膝小僧の下に敷かれて、もう私は動けなくなっていました。大人の女の体はぎ

ゅっと乗られると大層重たくて息苦しいくらいでした。私はそれでも何とか跳ね返そうとして、はアはア苦しい息を吐きながら無茶苦茶に足掻きました。

「せいせいもがきな、いい気味」

ユキさんは喉の奥で笑いながら着物の前を直しました。そして左右の袂をさぐって煙草とマッチを取出すと、ぱっと火をつけて、気持良さそうに吹かし出すのです。電灯の光の陰になったユキさんの顔は西洋の童話に出て来る魔女のような妖しい美しさで、切長の眼が濡れたように光っていました。私は足掻きを続けましたが、ようやく疲れて来ました。

「さ、すこし荒療治をしてあげる」

煙草を卓袱台の上の私の茶碗の中へ投げこんだユキさんは、両手をそっと私の喉に当てがいました。

「そら、どうだ」

ぐーっと締めはじめました。

「う、う、ううう……うッ、ううう」

「苦しくなるぞ、そら」

私は懸命にもがきましたが、もう力がありません。ユキさんはこうして私が目を白黒させて、息が詰まりそうになるまできつく締めるかと思うと、急にゆるめてやんわりと押す

程度にして、それからまた強く締めるという風に執拗に時間をかけて私を責めたてるのでした。私はユキさんの両手の柔らかい指の攻撃と、長い間跨っているで石臼のように感じられるユキさんの体の重みとで、すっかり反抗心を拉がれてしまいました。

(ユキさんに殺される！)

不意に私の体の中を冷たい戦慄が走りまわった。

「どうだ、降参か」

私をじっと見据えたユキさんの唇から杉田君が縛り遊びの時に唱える文句のはしが呪文のように出ました。私は完全に押し拉がれて切ない脂汗を顔や体に出しながら、そこは強情だったのでしよう、泣きもせずにユキさんを睨んでいました。それが何とも憎らしかったのかユキさんは

「こいつ、これでも謝まらないのか」

という、今までより一層指に力をこめました。

私が不思議な感覚に襲われたのはこの時でした。それは杉田君とするあの縛り遊びの間に感じる快感の何十倍、いや何百倍のずっとずっと刺戟の強い、どぎついといってもいい感覚が炎のようにずうんと背を走り後頭を突き上げるのを覚えたのです。それは死の恐怖に裏付けられたもので、一段と刺戟的だったのではないのでしょうか。私はもう少しで失神しそうな茫漠とした夢心地に落ちこんでいくのでした。

(おわり)

「最新版」 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙 (9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B 5	足の裏擦り責め (竹野)
B 6	おへソいじめ大写真 (関谷)
B 7	剃いだバタフライ (関谷)
B 8	貴方に捧げた裸身 (大塚)
B 9	乳房責め絶叫苦悶 (大塚)
B 10	無防備双手吊り (絹川)
B 11	豊満臀部エビ縛り (水本)
B 12	糸纏わぬ股間縛り (水本)
B 13	全裸亀甲股間縛り (関谷)
B 14	足踏付け二つ折り (大塚)
B 15	尻突出しムチ打ち (関谷)
B 16	手錠にもだえる (竹野)

B 17	尻突出エビ責め (水本)
B 18	椅子開股鼻責触手 (梨花)
B 19	息もつがせぬ猿轡 (竹野)
B 20	投げ出した全裸 (関谷)
B 21	美しき尻部の露出 (絹川)
B 22	首絞めの悦虐境 (竹野)
B 23	後手柱縛り脚線美 (竹野)
B 24	強制鼻挾水吞ませ (梨花)
B 25	苦悶にねじる裸身 (関谷)
B 26	責めに気を失って (関谷)
B 27	さアどうでもして (関谷)
B 28	豊満乳房膨隆縛り (竹野)
B 29	投げだされた女体 (竹野)
B 30	裸身をくびる麻縄 (梨花)
B 31	強烈縛りに悦ぶ (梨花)
B 32	全裸逆エビ片脚拳 (東浦)
B 33	踏みつけマゾ境地 (東浦)

B 34	すべてをさらけて (関谷)
B 35	ムチ打ち失神寸前 (関谷)
B 36	クリップ鼻挾み (絹川)
B 37	台上的マゾポーズ (大塚)
B 38	吊られゆく美体 (絹川)
B 39	拷問に無惨な美貌 (梨花)
B 40	マゾ女性の表情美 (東浦)
B 41	喰い込む股間縄 (絹川)
B 42	灸責めに悶える (梨花)
B 43	犠牲台の人身御供 (大塚)
B 44	美肌無茶苦茶縛り (絹川)
B 45	裸身に立つ蠟燭 (大塚)
B 46	手枷足枷大写真 (四方)
B 47	鎖に悶える足首美 (柳初)
B 48	蛇責めに柔肌栗然 (梨花)
B 49	鼻の玩弄恍惚境 (大塚)
B 50	女囚菱縄さらし (絹川)

女体切腹の文献

むすめ切腹史

中 康 弘 通

一、家庭の事情

(明治大正篇)

しばらく休筆している間に、あちこちでうら若い女性が、身みずからに刃を加える、悼ましい事件が一再ならず報道された。

かつて筆者は、近代以後における女性の自刃について筆を執ったことがあったが、ここで蒐めた文献や資料を整理し、小著「切腹——悲愴美の世界」に洩れた事件を記してみたい。

まず明治大正時代から見てみよう。

龍野一雄氏に伺ったところでは、明治初年から昭和十六年までの七十五年間に、切腹を計った女性は八十余例に上るということである。勿論この数字は新聞紙上に報道されたものを主体とするから、地方紙の報道などで氏のお眼に触れなかったもの、全く埋没して報道されなかったものなどを合わせれば、相当な数に上るものと思われる。尤も、多数と云うのも比較的問題であるから、やはり女性の身で切腹を計るというのはよくよくの事情によるものと推定して差支えない。切腹は他の手段によるのとは異なり、多大の気力と体力

を要し、多大の苦痛を伴うからである。

では是らの女性に傷ましい死を希求せしめた事情とは一体どのようなものであったか、また、悲傷を極めるその自刃の相が如何なるものであったか、文献の録すところに従って述べてみよう。

日露の風雲ようやく、只ならぬものがあつた、明治三十六年五月。東京は、本所の商家で、十九才の娘が、刃わたり一尺九寸の日本刀で左右の咽喉を突き、更に腹を背まで刺し貫ぬいて死んだ。原因は家庭の不和を苦にしたもので、口中に紙を含み両膝を細紐で縛る

など覚悟のほどが偲ばれて悼ましい。(1)

同四十二年八月には群馬県利根郡で二十四才になる農家の娘が、家人の田草取りに出かけた隙に、独り納屋に入って、秘かに切腹した。この娘は帯を解いてたたみ、緋の和服を寛ろげると、桑切り鎌で臍の直ぐ下を横一文字に五寸ばかりかき切ったのち咽喉を突いて果てたものであるが、平常から継母との折合いが悪く、その前夜も口論したばかりであったと云われている。(2)

四十四年の暮れには赤坂氷川神社の社前に於て、商家の娘で十八になるのが、一尺五寸の脇差で腹と咽喉を突いて死んでいる。原因は氣うつ症からであった。(3)

大正二年夏、水戸で、下宿屋の養女で十九才の娘が、やはり家庭の不和から実の弟を刺し殺し、みずからも出刃庖丁で腹を三寸の余もかき切り、咽喉を突いて果てた。(4)

こうして、芳紀二十才になるやならずの娘たちが、いずれも家庭の事情に災いされて自刃を計り、いずれも目的を達しているのは、覚悟のほどもうかがわれて哀れ深い。

例えば島崎敏樹氏の「感情の世界」に、

家という超個人的実体は、家自身が安泰に生きてゆくために、家の成員である私た

ち何人かを互に共属させ、心を開放していることを要求するので、私たちは家族を「否応なく愛さねばならぬ」、互の心と心とは完全にすけていて、ちらと洩れた表情、言葉の端、日常生活の何気ない素振りといった微妙な行為のなかにめいめいの心は知らず知らず表出され、読まれているのである……(中略)……

こうして互に心の内が知れあって、めいめい動きがとれぬ完全了解性のなかに住んでいるのは、言葉をかえれば「不自由」にほかならない。……(中略)……

家族同志が愛情をもつてみつめあっているのなら、このように自分の自由がなくなつて互の人格が素通しになっているのは快いことにちがいない。けれどももし家族の間に不和が、憎悪が芽ばえたときにはどうなるであらうか。……(中略)……無言のうちに関手を憎みながら、しかも自分を憎む相手の心の内がすっかりこちらに見えている。相手から逃げだそうとしても、家の閉鎖性によってかこまれ、どこへも出ようがない。一方、家の閉鎖性は、外へ向つてはなかでの葛藤を少しも洩らさないもので、よその人はこの不和を垣間見もできない。

島崎氏の所説は、こうして家族間における憎悪や葛藤が発生し累積してゆく経過を具さにし、その不幸を、

憎悪の相手がなくなるとか、よその家へ嫁ぐとか、それとも劇や物語のなかで行われるように、自分の手で相手を亡ぼしてしまふかしないかぎり「逃れきれない」とものと見るのである。

(この項、岩波新書版による)

こうした家庭の複雑な事情の解決が、年少者、殊に娘の身では是を如何ともしがたいのが普通であつて、彼女らの現実逃避が、島崎氏の言葉を真似させて頂くならば「自分の手で」、「相手を」ではなく、みずからを亡ぼしてしまふ」状態に、しばしば立ち至るのである。尤も是らは方法の如何によらず自殺の因由として考えられるものであつて、切腹の前提条件として局限されるものでないのは、改めて云うまでもない。

とまれ戦後は女性の職業意識が進み、更には、家の持つ観念的絶対性が可成り弱められたことによつて、こうした家庭の事情に基づく娘の切腹悲話は減少しているように思われる。

むしろ、彼女自身の個人的事情によるもの

すなわち、失恋とか経済事情、あるいは純潔の喪失などに問題が移っていると思われる。

先年、ボードビリアンのトニー谷氏が「家庭の事情」なる言葉を連発して、そのニュアンスで爆笑を誘ったことだけでも、戦後は、「家」の重圧が薄れていることは否めまい。

昭和初期までの日本では、この言葉には笑いよりもむしろ、著るしい圧迫感を覚える人も可成りあったであろうからである。

なおまた、敘上の諸例の如く悼ましい悼話のほかに、往年といえども随分と無軌道な娘もあって、明治四十四年七月、東京本郷の某家に傭われていた二十才の娘は、左利きと見え剃刃で、右の腹から左乳下へ五寸ばかりも切り上げた。深さも骨にかかるほどだったが助かったのは幸いとして、その動機たるや、盗みが露見したからであったという。(5)

尤も、罪を償うには腹を切るほかはない。

という可憐な心意気であったか知れぬが。

二、愛を求めて

(昭和初期篇)

「丙午」の年に生れた娘は、嫁しては夫を食い殺す、というので縁が遅れた。昭和初期のことである。

十千と十二支の組み合わせは六十年の周期を以て一と巡りする。従って丙午の年は六十年に一度の割で必ず来る。最近では明治三十九年が丙午に当たったから、昭和の初期には此の年生れの女性に婚期が訪れたわけである。

千葉県下で二十才の娘が日本剃刃で腹を切って死んだのは、昭和二年の秋のことであった(6)翌三年には、東京の尾久でも二十才になった娘が剃刃で腹を一文字に切り、更に頸動脈を断って世を短こうしているが、(7)いずれもが丙午を苦にしたもので迷信の生んだ悲劇を物語っている。

是らは、結局は愛を求めて満たされぬ孤独感が彼女らを死に追いやったものであったろうか。そう思ってみれば、二十才前後で切腹を計った娘の動機が、多少とも愛情の問題に絡んでいるのが、昭和初期の特色であろう。

例えば、東京の向島で、愛人の結婚の日に短刀で腹を切って苦しんでいる失意の妹を、その姉が発見し、妹の腹の傷手を甲斐甲斐しく晒で巻き締め、付き添って男の家へ乗り込んだ、という挿話があるし、(8)また、十七才の娘が妊娠五ヶ月の腹を、恰かも八大伝の伏姫を見るように、真一文字に掻き切ったのも愛情のもつれからであったろう。(9)

妊娠を苦にした切腹でも、大正のころに起った二十三才の女の例は、趣きを異にし、みずから開腹手術を計ったものであった。看護婦から会社社長の愛妾に納まった彼女は、十七八のころから武士の腹切りに関心を持ち、殊に白虎隊の絵で少年たちが腹一文字にかき切る悲壮な姿に憧れを抱きはじめた。みずから腹部を素手で撫で、直かに刃ものをあて、切腹の幻想を追うに至ったが、もとより実際に切腹する意志は無かった。

たまたまパトロンの外遊中に一夜、盗賊に襲われ、思いがけず妊娠するに至ったので、煩悶の末、西洋剃刃を執って彼女は、夢想していたとおり、腹を五寸ばかりかき切り、胎児を取り出した。一命を取り止めたのは、看護婦あがりだけに、止血の準備までしていたおかげであった。(10)

是も幸わい未遂に了ったが、昭和九年初夏の網島温泉で、二十才の娘二人が腹を刺し違え情死を計ったのは、末永からぬ同性愛の前途を悲しんだことであった。(11)

また太平洋戦争中の昭和十八年夏、北関東の山村で十九の娘が切腹したのは、添い遂げられぬ恋に悩んだ果てであった。この娘は、短刀で臍の真下を左から右へ六寸余も掻き切

り、左の乳下を刺すという、男まさりな、思
い切った最期を遂げている。(12)

変った例では、昭和八年の初秋、静岡県下
で農家の娘が、肉切庖丁で腹を二た筋切り、
みずから縊れて死んでいるが、これは神経衰
弱が原因とあるけれども、二十六才という年
令から推定して、やはり結婚問題などが強く
意識にあつての悩みに基づくものではないか
と思われる。(13)

肉切庖丁と云えば、年月は不詳であるが東
京で、商家の新妻が朝の店先で、肉切庖丁を
以て美事に割腹するという悼ましい事件もあ
つた。原因は夫と舅との仲に入りうまく行か
なかつたということである。(14)

こうして、愛情問題をめぐつての悲痛な事
件が少くない中に、無智な陋習を全く機智で
切り抜けた美少女もある。

大正八年、大分県下でのことである。

毎年八月十五日の盆の行事として、その村
では十四才になつた娘を若者が試すという、
全く奇妙な風習が行われていた。

ヒロインもその例にもれず、殊にその美貌
と大柄な容姿は、早くから若者たちの眼にと
まっていたから、クジで外れた若者の中には
口惜し泣きする者もあつたほどという。

当日は体の具合が悪くて難を逃れた少女も
日をすぎさず回復し、約束の若衆宿で待つ若
者たちの前に、青ざめた面持で現われた。

いよいよというとき、彼女が懐ろから短刀
を取り出したので、驚いて後じさる三人の若
者たちに彼女は、

「こんな野蛮なことをさせられるなら、死ん
だ方がいいのです」

云いさま、短刀を腹に突き立てた。とび散
る鮮血に、悲鳴をあげて若者たちが逃げ帰つ
たあと、彼女は莞爾と微笑した。

この頭の良い娘は、腹に巻いた晒に仕掛け
を施し、赤インクを進らせたのである(15)

是だけ読めば、地方の陋習に抵抗する美少
女のユーモラスな挿話にすぎないが、彼女が
此の方法を考えるまでの心境や、またこの計
画が失敗したときの予定として彼女が決意し
たもの、あるいは、こうした陋習に本当に身
を以て対決した少女が無かつたか、などと思
いめぐらせば、未だ未だ悲劇もあつたであろ
う。

三、社稷ほろびぬ

(昭和殉国篇)

戦国時代から江戸時代の初期にかけて、日

ごろ恩寵を蒙むっている武士は、主君の死に
際して腹を切る者が多かつた。戦陣で主君が
討死したり自刃したり、という場合は勿論だ
が、平時に主君が病死したときでも殉死する
者が少くなかつた。

切腹による殉死を追腹と云つたのは主君の
跡を追うという意味からであらうが、先腹と
いう言葉も出来た。是は重病の主君が垂死の
床にあり、命もはや旦夕に迫つたとき、死出
の道案内とばかりに腹を切ることであつた。

こうして先腹と云い追腹という、つづまり
は、特定の個人に殉ずるためのものであつた
が、近代になって、夏目漱石が「こころ」と
いう小説を書き、その主人公の心境として、
若し自分が殉死するとしたら、明治の精神に
殉ずるのだ、という感懷を述べさせた。

殉死が、個人を対象とせず、抽象的な対象
に向つて考えられたのは是が最初であらう。

然し、理屈の上でこういう考え方は可能で
あるけれども、実際に行動に移されるという
例は無かつた。ところが、太平洋戦争で日本
が、連合国軍のポツダム宣言を無条件で受け
入れるという非常事態が発生したとき、この
考え方が初めて実行に移された。

まず八月十一日、先に戦病死した軍人の未

亡人である二十六才の女性が、亡夫の友人に見届けられて自刃した。決定的な敗戦を目前にし、亡夫に代り切腹して国家の安泰を祈念したい、というのである。

当日は朝から身を潔め、黒の和服に白足袋と最期の装いを凝らした夫人は、切先四寸残して布で刃を巻いた九寸五分を前に、まず東方を拝し、立会う者に「お願いします」と一礼、やおら双肌脱いで短切を構え、左脇腹に力をこめて突立てると、一気に右へかき切り右脇で声も立てずに引き抜いた刃で、心臓深く刺し貫き、言葉どおりの見ごとな最期を遂げた。見届けた人も、軍人の切腹は一再ならず目撃したが、かほど従容たる自刃は知らぬという。(16)

やがて終戦が周知されるや、N県下の親戚に疎開していた十七才の女学生が、戦に負けた日本には生きていたくない。日本人らしく女ながらも立派に切腹して死にたい」という趣旨を、東京時代の特に親しかった級友に書き遺して自刃した。

一日おくれて終戦を知った彼女は、その日は半日を泣きくらし、夜は常と変らず寄寓先の人々と雑談していた。翌る十七日未明、小机の前に端座した少女は、双肌ぬいだ胸から

腹まで香水を撒き、亡母の遺品の懐剣で腹を二た筋切り、更に右脇腹を肋骨の下まで鍵十文字に切り上げたのち、咽喉を突いたものであった。家人の気付いたときは、机によりかかったまま息が絶えていたが、髪を美しく束ね薄化粧までほどこしていたという。(17)

この二例を見ると、いずれもが、変貌する祖国の、嘗っては背負っていた栄光の將に消えなんとする相に殉じて這ったわけであり、前者を先腹、後腹を追腹と見て差支えないであろう。身分から云っても、また内地という環境から見ても、祖国の失われてゆく栄光に殉ずるという以外に、死を必須とする理由は見当たらないのである。

先に拙稿「昭和の女白虎隊」でも記したことがあったが「社稷ほろびぬ、わが事畢る」という痛哭の悲涙を胸ふかく秘めて、みずから刃に伏して行った彼女たちの心事は、純粹かつ悲壯の極わみと云えよう。その死を以て単純に、ナショナルイズムの犠牲とか、ファシズムの所産と考えるのは、当時の人心の推移を考慮に入れて、些か当を得ていないのではあるまいか。

こうした純粹さは、今日では全く顧りみられていないけれども、今日の十代、二十代の

一応高校以上の教育を受けた人々はどう見るであろうか？筆者の関心を抱く所以である。敍上の二女性ほど殉国の意志は明白ではないにしても、例えば終戦直前の満洲で、連合国軍の進攻と同時に、来るべき敗戦を察知して自刃した少女は少くない。

三浦某なる十八才の少女は、日本が敗けたら早く死にたい」と云っていたが、彼女の寄寓する家のある街が戦場になろうとする寸前、用意の脇差の鞘を払い、立ったまま左の脇腹に刃を突き刺した。居合わせた者の制めるひまも妨げる隙もなかった。

右手で柄を握り左手で柄頭を抑えているので、遅々として刃の運ばぬうちに坐り込んだ少女は、肌衣で包んで刃を両手に握り直し、悲痛に呻きつつ一気に臍下を掻き切って果てた。日時は判っきりしないが、八月九日から一両日のうちと思われる。(18)

また同じく満洲で、農家の姉妹娘が、八月十日の夕暮に自刃している。

彼女らは隣り合う部屋で互いに声を合わせ同時に割腹したものであって、二十二才の姉は鎌を執り、臍の真下を五寸も切ったが死に切れず、苦しんでいるうちに、たまたま訪ずれた隣家の娘に介添えを乞い、右腹部を臍ま

で切り上げ、更に咽喉を突いて畢った。

そのとき二十才になる妹娘は、既に出刃で正十文字の作法（まず臍の真下を横に一とすぢ切り、更に一旦引き抜いた刃を鳩尾に立て臍下へ切り下げる法）どおり、深々と割腹、みずから咽喉を突いて息絶えていた。（19）

彼女らが戦鬨の波及に先立ち自刃した所以は、蓋し、確率は高いにしても、必ずしも決定的とは云いがたい死を必至不可避と断定、最も己が意向に叶う方法で積極的のみずからに与えようとする気魄を、如実に示したものと云つてよいであろう。

こうした壮烈悲愴な自刃は、在満開拓団の婦女子のみならず、在鮮農業訓練生の女子青年、あるいは在外教育関係女子、軍官関係女子など可成りな数に上る娘たちもまた終戦と同時に選ぶところであつたと仄聞もし、想像もされるが、その詳細の伝わらないのは遺憾である。

終戦時も内地に在つては、こと生命に関する限り外地におけるほど緊迫した状態ではなかつた。尤も航空基地周辺の娘たちの中にはあくまで戦闘継続を祈念して、基地付近で白無垢の死装束を身につけ、懐剣で咽喉を刺し貫いた者一再にとどまらぬといわれている。

とまれ、あくまで聖戦完遂を目標として戦争一本に結集されて来た、二十才前後の世代に取つて、終戦の冷厳な現実には極めて大きな精神的打撃であつた。殊に肉親の縁に恵まれぬ少女にあつては、人生の目的を喪失したかの如き衝撃を、感じたものもある如くであつた。

例えば、東京で家族が悉く戦災死し、たまま生き残つた十七才の少女は、山村の親戚に寄寓していたが、頼みとする兄が戦死した上に終戦となり、前途に希望を失つて死を選んだ。同じく東京から療養に来ていた学生と親しくしていた彼女は、その学生に見届け方を頼み、八月十七日未明、村有林の草地に端座、野良着を脱ぎ棄て持参の匕首を抜き放つて正十文字に割腹した。その状況たるや、立会人に「手を添えないで下さい」と念を押し雪白の腹皮を真一文字に割き、次いで鳩尾より臍わきへ深々と切り下げて果てたものであつた。この少女は予ねてから高山彦九郎の自刃を記述した文献を所持して居り、特攻隊の兄が体当りで死んだのだから妾もこれくらいのこととはやりとげたい、と悲壮な決心を涙と共に述べたと伝えられているが、一つには、親戚で厄介者あつかいされる惨めな境遇に自

憤し、云わば死に華を咲かせたい、といううな、若気の短慮かも知れないけれども、彼女の身になってみれば随分と傷ましい、思ひつめた心情が、かくも凄烈な死を選ばしめたものかと思われる。（20）

内地では此の他にも、やはり身寄り薄い十七才の少女が、敗戦の現実を悲しみ恐れ、疎開友だちの少年に見届け方を依頼して自刃している。彼女もまた潔きよく野良着の諸肌を脱ぎ棄て、細身の出刃を執つて腹一文字に掻き切つたが、「未だ浅い」と呟きつつ、右脇で止めた刃を反転し、更に深く腹の半ばまで切り返したとき、大動脈を切断したものと見え、倒れ伏して絶命した。あたかも明治維新に際し、堺妙国寺に於て仏兵の面前で壮烈な最期を遂げた、土佐藩士西村左平次の割腹の状を想起せしめる。（21）

かくの如く、うら若い女性たちが、敗戦の悲運を純粹に憂悶し、必ずしも死を必然とせぬ境遇にあつてなお、その解決を自刃に求めた心情は、余りにも単純直截でありすぎたかとも思われる反面には、その故にこそ、その心事の純情にして清冽なることを、忘れてはならないであろう。

三浦某女の死を述べる記事が始めて筆者の

眼に触れたとき、筆者の受けた感動の大きさを、今も忘れないが、そのとき彼女の死を悼んでの感懷を、茲に引用させて頂く。

敗戦と覚る忽ち身を果てし

処女三浦と姓のみ伝ふ

(京都歌人協会年刊歌集)

なお、終戦前後の女性殉難の記録は紙数の都合もあり、更に殉難篇として又の機会にゆずりたいが、それにしても、戦後十八年を経て、日本赤十字社の救護班戦時殉難遺芳録とか満蒙開拓団の殉難記録なども刊行されているという。それらは筆者の眼に触れないので茲に参照する術もないが、また是らの記録にも含まれない殉難者も少なくないことと思うにつけ、殉難悲史の悉くは伝わらないことを遺憾に思う次第である。

紙数がわずかに余ったので、思い出した挿話の一つを記しておきたい。

本稿の中にも鎌で切腹した娘たちのことを記したが、芝居の忠臣蔵外伝にも弥作鎌腹の話がある。古くは狂言にもある。鎌で腹を切ることを鎌腹というわけである。それに就いて思い出す浪曲がある。

もう三十年に近い暮、未だ戦争というものが一般国民には余り身近くないところで、防空

演習も灯火管制くらいで済んでいた、ある夏の夜のことである。

ラジオからは、防空司令部の発表を知らせるアナウンスを時折はさみながら、女流浪曲が流されていた。女流と云えば年少うして美声を謳われた鈴木照子さんの名前が記憶に残っているが、そのころは未だ鈴木さんの時代ではなかったと思う。題名も全く記憶の底に沈んでしまっているが、日露役の当時、応召しながら即日帰郷を命ぜられた農村の青年が鎌腹を切って恥辱を雪ぐというストーリーであった。当時の生真面目な青年なら考えられる話で、実話なのであろうが、老いた病父と年少の妹を残して応召した青年は、思いがけず健康上の理由で即日帰郷となり、夜更けのわが家に戻ったのであるが、父は、未練で帰って来たものと思ひ込んで入れてくれないのである。彼は、是も徴発されて征った愛馬の空き小屋を覗いて懐旧の念に耽るとともに、出発に先立って妹のために研ぎ上げておいた鎌を執り、裏庭に端座して、「己れの腹を切るために研ぐとは思わなんだになア」と嘆じつつ、腹一文字に掻き切った。

呻き声に驚いて出て来た妹が、「大変だ、兄さんが腹を切った」と叫ぶのを制しつつ、

彼は手当ても拒んで死んでゆく、そういう筋であった。

農村の保守性が、自殺の手段にも切腹という古風な方法を選ばすことは首肯出来るし、用いる刃ものも、手近かなものとして鎌が選ばれるのは尤もであるかも知れない。

○参考文献

竜野一雄氏 切腹する少年達

(1) (3) (4)

高田義一郎氏 自殺学

(2) (5)

池田敏夫氏 自殺の手段としての女性の切腹について

(6) (7) (8) (9) (11)

手塚正夫氏 妊婦腹切の話 (10)

田谷敬生氏 女腹切の考察と女性切腹例 (12) (13) (16) (18)

須藤律夫氏 新聞に現われた切腹の種々相 (14)

浜野 朗氏 悪習と戦った切腹娘 (15)

(15)

田谷敬生氏 女性切腹例抄記 (19)

田谷敬生氏 続女性切腹断想 (21)

右に典拠を明記したもののほかは、筆者あて投書に拠った。

小説

十字架の妻

竹谷十三・作

星夫は、妻の智子の淋しそうな後姿を眺めていると、ジーンと胸があつくなるのを感じた。晩秋の露は、足早に去って行く小柄な智子の姿を包んでしまった。

星夫は、駅前の明るい喫茶店で、二十分程時間をつぶしてから智子と同じ道を家へ向った。妻と一緒に帰える事を許されない家。妻と会った事も話せない家―そして、その事を認めている自分の弱い心に、星夫は悲しくなった。結婚して二年になるのに、家では自由に妻と語る事も出来なかった。珍らしく都心まで使いに出た智子は、ほんの僅かな時間をさいて会社に訪ねて来たのだ。星夫は、会社

を早退して、智子と人目をさけ話し合いながら帰って来た。そして郊外の駅に着くと二人は、素早く別れた。万一、星夫の姉達や女中にも発見されたら、智子はどんな責苦に会わされるか解らなかったのだ。

「只今」

星夫は、自分の部屋に入って洋服を着替えて茶間に行くと、すぐ上の姉良子がニヤニヤしながらいった。

「星夫、何故智子と一緒に帰えって来なかったの？」

星夫は、ドキッとした。

「智子？ 何処かへ出ていたの。知らない」

「ホホホ……駄目よ。しらばくれても。私はちゃんと智子の監視をしていたのだから。こういう事があると思って、わざとお母様がいに出したのよ。あのバカは、何にも知らないで、いい気になっているのだから。今、奥の部屋で、お母様とお姉様からお仕置を受けているところ」

その時、母のお里が部屋に入ってきた。

「お母様、白状した」と良子は訊ねた。

「するもんかね、強情な女だもの。あんたの見たのは、人違いだとき。」

母は、星夫をジロツと睨んで

「星夫！ 何故お前は、会社でなんか智子と

会うのです。訪ねて行く女も女だけど、一緒に歩いたりするなんて……」

「お母さん、そんな事をいっても、智子は僕の妻なんですから……」

と星夫は、弱々しい調子で抗議した。

「山本家の嫁とは認めていません。何処の馬の骨か知れない孤児を引っぱって来て妻もないもんです。お母さんは、断じて許しませんよ。お前が、あんなに頼むから一生召使いとしてなら置いてやるといったのを、お忘れなのかい。赤ん坊が生れたから、仕方なしに居させてやるのです。」

お里が怒り出したらヒステリーで、死んだ父も手を焼いていたのだ。気の弱い星夫ではあやまる事が一番無事な手だった。二十八才にもなった男が、全く母に頭が上がらないのだ。社会的に名流貴夫人であり、賢夫人の名の高いお里も、家の中では暴君であり鬼婆だった。

「良子、和子にお仕置は後ですから、智子をここへ連れていらっしやい。食事にしなすよう」

三十にしては呆れる程妖艶な身なりをした良子は、奥の部屋に姉を呼びに立った。間もなく、後手に縛られた智子を両方から挟むよ

うにして入って来た。

「智子、お前は、今日は食事をする事は許しません。そこに坐って、食事が済んだら、またお仕置の続きをするから。」

智子は、鞭で打たれたのだろう白い肌に赤い線が処々に見えていた。足には外出の時にしていた黒い靴下のままだが、ズロースも取られていた。乳当も取られ、張り切った美しい乳房には細引が痛々しく喰入っていた。薄い褐色の乳暈から乳首にかけ両方共に十文字に絆創膏が貼ってあるのだ。これは智子が、赤ん坊に乳を飲ませる事があってはと、お里が毎日乳搾りの後で貼るのだ。乳のたっぷりある智子なのに、牛乳で育てる事にして一滴も智子の乳は与える事を許さなかった。それだけでなく、赤ん坊のつね子には、女中をつけ抱く事も智子にはさせなかった。

五十六だというのに十才も若く見え、でっぷりと脂切った姑、母親にしても妹の良子、星夫にしても美しい容貌なのに、同じ姉弟でこうも違うかと思う程醜い未亡人の和子、三十にもなって男から男へと飛び廻り結婚しようとしな良子、この三人の憎悪に満ちた視線に素肌を見据えられた智子は、顔も上げられなかった。星夫は、深く妻を愛していたが

こうして肉親の者にさいなまれていた姿を見ると可哀そうだと思ふ心と同じに胸のわくわくするような魅力を感じるのだった。

「お母さん、この子は罰として、今日から三日間裸で働かせましょう」

と和子は、ギロツと蛇のような目で星夫の方を見ながらいった。

「それはいい考えね。お姉様、下着も一枚もさせないこと」

良子は、食事の後の煙草をうまそうに吸いながら大喜びで賛成した。

「星夫、お前はもう、向うへ行きなさい。これからお仕置の続きをするのだから」

お里は、鋭く命令的にいった。星夫は、黙って茶の間を出た。書斎に入ると、女中のお光が「ガス」に火をつけているのだった。

「若旦那、お風呂の時、お声をかけて下さいまし」とニヤリと笑っていた。

お光は、女中とはいえ、お里のお気に入りである、星夫の嫁にとお里が考えていた娘なのだ。お光の両親は「家の娘等、星夫様の奥様どころか、お妾でも、一生お世話下されば、こんな有難たいことは」と、お里にいうのだが、本心は、山本家の財産に魅力があるのだった。それが、星夫は、勝手に智子を引き入

れたのだから、お里も、お光の両親もガツカリした。当のお光は、始めは、星夫になんの興味もなかったらしいが、智子という嫁が来てからは、急に慾が出たのか、ガラリ態度を変え、あらゆる誘惑を向けてきた。お光のこうした態度は、家中が公然と認めていた。星夫は、下町風のお光が好きではなかったが、次第に誘惑に負けてくる自分を認めないわけには行かなかった。智子に済まないと思いつつ唇を交わしてしまった。これは、ますますお光の態度をずうずうしくさせた。



夫の態度に取りつく島もなく、何か低声でいながら仕方なく出て行った。星夫は、お光が出て行くと本を閉じ、そっと廊下へ出て見た。

「お母様、許して、あっ…」
「まだまだ、今夜は許しませんよ。お前が、山本家の嫁になる気なら、なんです、これ程のことが我慢できないのですか」

「ホホホ…お姉さま、まだまだ搾れるわよ。ほら…」
「良子、ほら、これを向うにやって…」

茶の間から、三人の声に混じって、智子の低い泣き声が聞えた。星夫は、暗い廊下に立っていた。誰かが部屋から出てくる様子なので、星夫は、知らぬ顔で便所へでも行く風で、茶の間を通り過ぎ様とした。部屋から出てきたのは、良子だった。手に汚い洗面器を持っていた。

「星夫、お便所に行くなら丁度、いいからこれを捨ててきて。空いた洗面器は、洗面所の棚に置いて」と、良子は、洗面器を星夫に渡すと、又、部屋に入って行

た。汚い洗面器には、白色の液体があった。智子のお乳なのだ。何時でも、搾り取った乳は、便所に捨てられるのだった。

「お前の乳等は、赤ん坊は勿論、山本家の人に飲ませるものじゃないんだよ。」

とお里は、これを便所に捨てさせるのだ。

大抵、本人に捨てさせていた。星夫は、これを捨てに行くのは始めてだった。星夫は、汚ない洗面器だったが、思い切って、口をつけ皆飲んでしまった。甘い味が、星夫の胸を打った。

星夫が便所から帰えると、もう、茶の間は暗かった。もしや、許されたのか—と思って二階の夫婦の寝室に上って見たが、智子の姿はなかった。奥の拷問室に連れて行かれたのだと星夫は、暗い気持ちになった、この奥の間は、死んだ父がある宗教を信仰していた時に礼拝堂として作った。天井の高い特別な室だった。ここは、いまでは智子を苦しめる拷問室になってしまっていた。部屋の内部の出来事は、厚い壁のため外には聞えないし、窓も小さく、入口の扉には鍵があり、お里が持っていた。お里は、この室に誰も近づくことを許さないのだ。娘達でさえ、一人で近づくこと怒った。

星夫は、書斎に帰り、気の進まない読書を続けていた。

「星夫、お風呂にお入り。とてもいいお湯だよ」と良子が、湯上りの血色のいい顔で声をかけた。星夫は妻のことが気になって、姉に何かいいかった、それは却って智子を苦しめることになりそうなのでやめた。

星夫が湯舟につかったと思う時は、お光が「いい、お湯でございましたよ」といいながら裸で湯殿に入ってきた。大柄で肥肉のお光は、娘らしきより、年増女の美しさを見せて居た。それでも、未婚らしく固い乳房には、桃色の乳首がつんと尖っていた。恥らいさもなく、大胆に、星夫の湯舟に入ってくるのだった。

「下のお嬢様が、お光、星夫と一緒に風呂にお入りですって……私、男の方と入るなんて恥しいと思ったんですけど……」

お光は、おちよぼ口をして、クックツと笑った。星夫は、目を閉じてしまいたかった。

「お体を流しましょう」

お光は、いやがる星夫の背中をさっさと流し出した。

「もう、僕は出る。君は、ゆっくり入って居たまえ」

そう言う、星夫はさっさと湯殿を出た。

そして、二階の寝室に行った。夫婦の床がひいてあった。星夫は、湯上りの体をどかっと床に坐った。傍にある智子の床は、寒々として居た。お里の命令で、嫁が暖い床に寝る事はないというので、薄いせんべい蒲団に粗末な夜具が一枚しかないのだ。それでも、この床は、畳にとって極楽なのだ。

「そうだ今日は赤ん坊の顔を見てやらなかった」と思った星夫は、再び二階から降りた。赤ん坊は、お光と一緒に寝て居るのだった。女中部屋とは隣合って居るのだが、一寸奇麗な六畳が、お光の部屋だった。智子の床とは比べものにならない柔かそうな美しい夜具の床がひかれて居た。その隣の小さな床に、つや子が眠って居た。星夫は、そっと桃色の頬に接吻をした。

「ホホホ……いいお父ちゃま振りです事」とお光が入って来た。鏡の前に坐ると、パツと両肌を脱いで化粧を始めた。星夫は、立ち上ろうとした時、お光は星夫の手を固く握った。

「ねえ、私のオッパイ、あの女より美しいとお思いになりません。ほら、こんなに……」

お光は、無理に星夫の手に、乳房を握らせ

た。星夫は、ぐっと手を引いた。

「おやすみ！」

呆然と見て居るお光を後に、星夫は室を出た。冷めたい床に帰ると、星夫は、胸がドキドキした。「よかった、もう少しで、誘惑に負けてしまう所だ」と思った。智子は、待っても待っても帰って来なかった。星夫は床の中でいらして来た。「まさか、一晩中、お仕置になってる事はあるまい。平素でも働かされて、十一時頃でなければ、寝室に來ないのだから……」そう思いながら待った。星夫は、うとうととした頃、障子が開いて、智子が帰って来た様子だった。

「智子かい」と星夫は暗い中で声をかけた。そして、手を伸ばして、スタンドをつけ様とした。

「電気つけないで……」

智子の鼻声が哀願するのだ。そして、床の中に体をすべり込ませ様とする智子の手を星夫は握んだ。細い手首は、氷の様に冷めたかった。

「智子、許してお呉れね。」

智子は、クックと忍び泣きをした。星夫は、小柄な智子の体を抱き寄せ様として、ハッとして、スタンドの灯をつけた。

智子は手で顔を隠した。星夫は、夜具をパッと取った。体一面についている責め傷も兎も角として、星夫を驚かしたのは、智子の腰にバンドだった。それは巾の広いズックのバンドだったが、男のふんどしの様に、智子の尻かう革紐が廻り腹部で結びつけられて居るのだ。原始的ではあるが、一種の貞操帯の役目をして居る。腹部の結び目に日本紙が巻いてあり、それにお里の印が押してあるのだ。「ウーム」と星夫は唸った。母の限らない惨忍さに身震いした。

「こんなもの、取ってしまえ」と星夫が怒って言った。智子は、顔から手を離した。真赤に泣き腫らした眼で、星夫を見て言った。

「許して。お母様が三日間、これをしろと言うの。若し、取ったりしたら、私は、もっともっと苦しめられるわ。ね、勘忍して……」

「……」星夫は黙って、智子の体を見た。智子の蒼白いスベスベとした肌には、紫色の抓られた跡、鞭で打たれた傷、そして細引に喰

とした。

「ね、お願い。今夜は取らないで。お乳が痛い。それに、お母様達を怒らせないで、そっと寝かせて、ね、お願い……」

智子は、黒い大きな瞳をうるませて哀願するのだ。星夫は、先刻からやり場のない忿怒を押さえ切れなくなって来た。

「お前は、誰の女房だと思ってるんだ。僕は誰よりもお前を愛してるんだぞ。」

「ええ、知ってます。それだから、私は、どんな目に会っても、貴方の妻で居ります。だけど、今夜から三日間だけは許して。若し、このお仕置の間、お母様達を怒らしたら、それこそ殺されてしまうわ。」

「いいよ、お前がどんなに片輪にされても、僕はお前を捨てやしない。だから、ね、いいだろう。」

「そんな無理を言わないで……私、お母様と約束したのよ。三日間、必ず、お言付けを守りますって……」

「フン、お前は、そんなにお袋達が怖ろしいのかい。僕がお光の誘惑に負けた方が、お前は楽なんだね。」

智子は、黙って泣いて居た。星夫も、口では激しい事は言ったものの、今更、お光の部

屋に行く気もなかった。プイッと明りを消すと、背を向け寝てしまった。

翌朝、星夫が眼を覚ますと、もう、智子は床に居なかった。何時でも、智子は、暗いうちに起されて、台所の水仕事をさせられて居るのだ。女中はお光の外に、もう十年以上も居る中姿さんのお滝が、台所働きとして居るのだが、これは主に買物や外廻りの仕事をして、本当の重労働は総て智子がさせられて居たのだ。

会社が遅れそうになって、急いで起きた星夫の洋服の世話等は、何時もの様にお光がするのだった。朝出る時、智子の姿を見た事はないのだが、今朝は、一寸心配になったので台所に行つて見た。「まさか、如何に母でも本日に昼から裸のままにして置く事はないだろう」と星夫は思ったのだ。台所に行くと、智子の姿が見えなかったのだ。今度は、風呂場を覗いた。お里が椅子に掛けて居る傍に、智子が裸のまま洗濯をしているのだ。智子の横には、山の様に洗濯物が積まれて居た。「星夫、何の用ですか」

お里は、キリッとした顔で言った。お里の手には、竹の鞭が握られて居た。

「行つて参ります」と星夫は言うなり、湯殿を飛び出した。

星夫は、会社に行つても、智子の姿、洗濯物の山、竹の鞭が目にはチラツキ、仕事の能率は余り上らなかつた。その夜は星夫は友達と酒を飲み、麻雀をして家に帰らなかつた。痛々しい妻の姿を見るのに堪えられなかつたのだ。

次の夜も、酒を飲み、遅くなってから家に帰つた。玄関に入ると珍らしく、智子が迎えに出た。粗末ではあるが紺のスカートに、白いブラウス、薄黄色の毛のチョッキを着て居た。

「なんだ、もう、許されたの」と星夫は、何か期待はずれの気持で訊ねた。

「ええ、素直にお言付けを守つたから。それに、今日は、お母様の婦人会の方や、お姉様の友達の方が見えて、とても忙しかつたの」

智子は、ニッと笑つた。美しいと言うより可愛らしい容貌の智子は、お化粧のためか、今夜は何時になく初々しかつた。

応接間には、良子の友達の有閑マダムや令嬢が遊びに来て居て、賑やかな笑い声がして居た。奥のお里の部屋には、婦人会の会長という女史が話し込んで居た。智子も、和子も

そしてお光も、忙しそうに動き廻つて居た。星夫は、自分の部屋に入つて、独りで残してあつたウイスキーを出して飲み出した。時間は、思ったより遅くなく、やっと十時になった。客達は、間もなく帰り出した。

星夫は、一人取り残されて居るのが癪に障つて来た。智子の事を二日間も心配し通した自分が莫逆に思えて来た。客の後片付け、家族が一人一人風呂に入る世話と、智子は一寸も手があかないのだ。星夫は、幾度か呼び止めてみたが、直ぐに呼ばれて「ハイ」と走つて行く智子に、何故か憎しみを感じさせられた。「よし、今夜は、うんと、僕が苦しめてやれ」と星夫は、我にもなく惨忍な考えが出て来た。

星夫は、廊下を通つたお光の手を押さえて言つた。

「二階に行こう」

お光は、一寸考へて居た様だったが、笑つて星夫に従つて来た。

「君は、もう、風呂に入つたの」

「ええ、大奥様と御一緒に……若旦那、何の御用なのです……」

お光は、わざとらしく聞くのだった。「解つてゐるじゃないか。今夜は、ここで遊ば

うよ。僕は、君が好きなんだ……」

星夫の酔った精神は、そう言ったもののヒヤリと感ずるものがあつた。

「ホホホ……でも、私、こんな薄い薄団で寝られませんわ」とお光は、横坐りの体でジロツと智子の床を見て言った。

「僕の床が広いから、大丈夫だよ。」そう言つてから、星夫は、お光の耳に低声で囁いた。

お光は、星夫の言葉に一寸ガツカリした風だったが、思い返えしたらしく、それでもコケティッシュに笑つて言った。

「いやなお役目ね。でも、いいわ。」

お光は、着物を脱ぎ、真赤な長襦袢姿になると星夫の床に坐つた。星夫は、秘蔵の好色本や写真を出して来てお光に見せた。

暫らくすると、二階に上つて来る足音がした。智子は、例により静かに、洋服を脱ぎ、床に入ろうとして、低声で「あなた」と星夫を呼んだ。「なんだい」と星夫は、答えると同時に、スタンドをつけた。智子は、ハツとしたりしく床にベタツと坐つた。

「ホホホ……奥様のお出でが遅いので、大変なのが入り込んで居るわよ。今夜は、若旦那が、あなたと私とどちらが美しいか、競争させるのですって、失礼な話ね」

お光は、そう言うと、パツと床に起き上つて長襦袢を脱ぎ捨てた。部屋の中は、電気ストープがあつて暖かだった。

「智子、お前も裸になるんだ。そして、二人でここに坐れ」

智子は、オズオズとスリッパを脱いだ。

「こんなものは取れ！」

星夫は、アツと言う間に、智子の乳首に貼つてあつた絆創膏を取ってしまった。智子の乳首から、白い乳がにじみ出て来た。

「アア、今日は忙しかったので、大奥様は、乳搾りをしなかったのね。私が代わりに搾つてあげるわ。若旦那、何か取る物を……」

お光は、智子の後に廻ると、両手で両の乳首を握つた。

「よし、智子！、動くぞ承知しないぞ！」

星夫は、机の上にある花瓶を取つた。

「駄目よ。そんなもの。もっと口の広いものがないのよ。その湯沸しの蓋を取つて、その方がいいわよ。若旦那は、こっちの乳首を押さえて、ええそう」

お光は、片手で星夫が持つ、水の半分程入った湯沸しの中に、智子の片方の乳房から乳を搾り出した。乳は、始め、音を立てて、流れ出た。智子は下を向いたまま、身動きもし

なかった。両手は何時もの癖になつたのか、後に廻し腰で結んで居た。

こうして両方の乳を搾り取ると、お光も星夫も、次第に自分の今している事に心の方が馳り立てられて来た。二人は、智子に猿轡をして、高手小手に、紐で縛り上げた。丁度、この時、二階の下でお里の声がした。

「智子！」と鋭く呼んだ。二人は、急いで電気を消した。お里は、階下で二、三度呼んだが、智子は猿轡をされて居るので返事は出来なかった。星夫は手さぐりで猿轡を取つた。同時に、お里が二階に上つて来た。

「智子！、乳搾りが済んで居ませんよ。早く起きていらっしやい」

お里は、障子の外で立つて居た。

「ハイ、只今参りますから……」智子は仕方なく返事をした。

「早く来るのですよ。私の部屋へ」

お里は、足音を荒々しく降りていった。星夫は、電気をつけると、智子の縛しめを

といた。

「ここで乳を搾つた事は言うのじゃないぞ。それからお光の居る事も……いいか」

急いで出て行く、智子に星夫は、鋭く言いつけた。その夜は、とうとう智子は、二階に帰って来なかった。

(未完)

告白

神さまへの呟き

柴 崎 黎 子

神さま——という方がいらっしゃるのです。たら、どうぞ黎子の告白を聞いて下さい。ええ、何もお答え下さらなくて結構です。何もお答え下さらず、そのかわりお笑いにもならず侮蔑もなさらず、ただよそを向いて考え事でもなさっていて下されば、それでよろしいのです。もっと幸福な、正しい愛と真実に生きていく美しいお嬢さんのために祝福でもおたれになって下さい。

神さま——あなたがどんな方で、どこにどうしていらっしゃるのか私は知りません。あなたがいらっしゃるのかもまだわかり

ません。いろんな宗教家の言うあなたは、私の考えるあなたとは違う方ですし、私にとつてのあなたはそうのようにあいまいもこととした存在であられて沢山なのです。なぜかって、私はあなたのお力にすがろうという気もありませんし、ただ不透明な、だからこの上なく大きな確かな存在として、私の言葉をお受けとり下さる対象であって下さればいいのだからです。

あなたはどこを探したって見えない。どこをまさぐったって居られない。誰に聞いたって確かめられない。どんなにあせったってあ

なたの神格や体温に触れる事はできません。ああそういうあなたは、私にとって何と得難い味方である事でしょう。私は、あなたがそういう方であるからこそ、心おきなく一人でいつまでも語りつづけたいのです。

私はそれはそれは深い孤独の中にいます。私の五体の中に巣くってしまった、異質の救いのない暗い孤独です。そこから必然的に泡立って来る低い、際限のないぶつやきは、形のないあなた以外に誰が聞き、そして理解して下さるでしょう。

私はどんな方であれ、生身の彼をもった男

の方に何をお話する気もありません。その方たちはどうしたって、それぞれの感覚と生活と歴史を持っていらっしゃるって、私などが全面的に入りこむ事を許さない、固い性格をまわっていらっしゃるんです。私がいくら私の真実をつぶやきつづけたって、ほんの一部分しかわかって下さらないでしょう。その事は一時は心から信頼しおすがりした二人の男性によって証拠だてられました。私は結局ひどい孤独につきおとされるだけでした。

透明な、無形の、だから何ものをも反撥しない唯一の存在、神さま。私は本当に、愛という不思議な錯覚の中で、私にできるすべての手段で、私は恋人に自分を訴え、捧げようとしてました。恋人は当然のようにひたむきな私を喜び、私の強さと同じ強さで愛を報いてくれました。そこで私が錯覚から醒めないで酔っていつてしまえば、幸福なお嬢さんですんだのかもしれない。でも知ってしまったのです。恋人が報いてくれた愛というのは、私が本当に受けたいと願う愛とは別のものがある事を。恋人はあまりにまともに過ぎていたのです。受ければ受ける程苦しく、味気なくなっていくような愛だったのです。

神さま。私をこの世の中で本当の一人ぼっ

ちにしてしまった二人の恋人のうち、もう五年も前のIさんについては、幾度かお話ししてしまいました。きょうは、今まで一言もお話せずに胸に秘めておいた、もう一人の恋人について、悲しい告白をさせて頂きたいと思うのです。それと共に、お友達の手紙から、ふいに発見した私のひそかな夢をも。

もう、二年も前になるのです。(何もかもかくさずにお話致しましょう)

私は、今こうしてあなたにささやきかけている長野県の山村に参りました。浅間山に見える、そして千曲川のほとりの、美しい田舎でございます。私の参りました家は、父方の親戚で、大きな農家でした。昔、このあたりの大地主で質屋でもあった旧家です。

私がここに来ました理由は、三つありました。一つは病弱だったため、一つは父が女中に赤ちゃんを生ませてしまった事から家庭がめっちゃめちゃになってしまった、母は実家へ帰ってしまうという騒動が起ったため、もう一つはこの村の青年と結婚するためでした。その第二の家庭争議の事は、ここに書くほどの意味はありませんので省くとして、結婚の件はくわしくお話ししなければなりません。

相手はやはり縁故つづきになる税務署員で

Aさんといいます。私がまだ東京の女子美術高校におりました頃、彼も学生で遊学していました。時々私の家に来て親しんでおりましたので、いつのまにか彼は私を妻に、と考えて父の内諾も得ていたようなのでした。私があればお慕いしたIさんとの交際を、父が目の敵のように忌み嫌ったのはその為だったのです。Aさんは弱々しいタイプではありましたが、静かな面もちをしたなかなかの美男子でした。私も決して嫌いな人ではありませんでした。でも当時は、すっかり私の心を奪ってしまったIさんへの思慕にかくれてAさんの存在は何の意味も持っていなかったのです。

Aさんは卒業し、長野県へ帰りました。とうとう私には何も告白せずに。そしてIさんも郷里へ去りました。私の事など忘れてしまったようにあっさり。

そして一年たち、家中が混乱した時、父は私にAさんの気持と父の意向を語り、信州へ行くようにと言ったのでした。私は周囲の事態や虚無的な心境にあってもしかするとAさんによって何かが与えられるんじゃないかという気がして承知し、ここへ来た訳です。それと同時に、自然発生的にAさんと婚約が成



立しました。その頭初は、きわめて消極的ではありましたが、私も嬉しくないこともありませんでした。愛と呼べるようなものが見じみと湧き上がるような気がして、ふつうの女の子らしい感傷を持ちました。

ここでの私の行動は、やかましい伯母の為にずい分と制約がありましたけど、Aさんと

の行動には何の注意も受けませんでした。Aさんとピクニックして多少遅くなっても、又は夜分外出しても、問題にはされませんでした。私達が婚約者であるからというだけではなく、Aさんという人がらに、絶対の信用があったからだと思います。

Aさんは若いに似合わずモラリストで、又

理想家でした。それだけに沈着で、物静かでした。あらあらしい男性的な所もなく、紳士的でした。私の山腹の野を歩いても、手をくむこともはばかっていた位です。私はそういうAさんを美しく思いました。熱情というものはいつも胸の底にしまっているような感じで奥床しく思いました。でんから私もつつましく、清らかな思いでいました。

ねえ、神さま。(と甘えても、あなたは、にこりともなさらない)

私がそのままであるうちに結婚していたら今と違った私になってしまっていたかもしれないね。でも彼はまだ薄給でしたし、家もごたごたで片がつかないし、どうしようもなかったのです。

Aさんは三カ月たっても四カ月たっても、そういうおだやかな立派な態度をかえませんでした。私の方がもっと先へ進みたいと望むようになりました。私はAさんに近づくにつれて、その分だけ何かを望む気持ちが出て来ますのに、Aさんは一歩も前進しようとしなかったのです。ですから、だんだん寂しさを感じ

じる事が多くなりました。Aさんのように、いつまでも上品でつましやかである事はどうしてもできない私でしたし、(Iさんに対しても、ずい分行動的だった私ですから) そんな私は本当の私ではありませんでした。

私がAさんに何を期待していたかといっても、自分でも釈然としないのです。でもありふれた抱擁や接吻や、でなかった事はたしかです。大体私はそういうものに興味がなかったのですし、まして貞操に関する事なら本能的におびえや嫌悪を感じていました。ですから、やはりIさんとの愛の体験のような、悪い戯れを待っていた事になります。

私はとうとう行動的に出、Aさんをまごつかせ、そして強い愛のお返しを貰うようになりました。そしてその結果は始めにお話したように私の方から違和し、孤独に陥ってしまった事になるのです。

一番最初の時は、八月の日曜日でした。近くの松山にのぼり、木蔭で休んでいました。その時、あなたが高いお空にのぼって大きな目でこちらを見ていらっしまったとすれば何もかも御存知の筈なのですけど。私は身体中汗ばんでだるい気分になっていました。その上にいつも以上にAさんは黙りがちで、

考え事に耽っていました。それに、私は「お花」の前でした。私は鬱勃としたやるせなさに襲われて、あまりに消極的なAさんが少し憎くなっていました。私は少しいやみたらしい口調で、Aさんを怒らせてみたい気持ちになりました。少し刺戟を与えて、この不可解な気分を救ってほしいと思ったのです。

私は「大恋愛」という言葉を使って、Iさんの事をしゃべり出しました。ずい分意地の悪い話し方だったろうと思います。AさんはIさんの存在を知ってはいいましたが、それほど、二人の関係については話してなかったし、彼も詮索しないので、ごく概念的な事しか知らない筈でした。私はIさんにどれ程心惹かれていたかという事を得々としゃべりました。Aさんは驚いた表情をしましたが、静かに真剣に聞きました。私はだんだん図に乗って、ダンスした事も手を組んだ事も、二人きりで一室にいた事もあると言いました。それでも怒る風がありませんので、身体だって半分上げてしまったのかもしれないわよ、という思わせぶりの話をしてみました。Aさんはたしか、私の方に向きなおりました。そして怒るかわりに悲しそうな顔をしました。私は意外であると同時に、腹立たしくなりまし

た。

「あなたの知らない事して来たのかもしれないわよ」

「どういう事だ」とあくまで彼はおだやかでした。

「しらない。大恋愛だったんだもの」

「一番悪い意味に解釈していいのか」

「そうね。貞操を除いては」

「なぜ僕にそんな事を言う？」

「わかんない。きっとあなたがあんまりおとなしいからよ」

Aさんは相変らず考えこむのでした。私はそういうAさんが好きだったのですけど、いらしました。

神さま、あなたはごらんになったでしょう？ その時私はAさんにむしゃぶりつきかったのを、やっと抑制していたのを。でも申しました。

「あなたは、そうしてみたくないの？ Iさんのように。それ以上に」

「君を傷つけないんだ」

「Iさんだって傷つけはしなかったわ」

「一体何をしたのだ」

私は夢中で言っていました。Iさんとの体験というよりは、その時ふいに口をつい

て出て来た言葉を。

「おしりを叩いたり、いじめたり、裸でよ」

Aさんはびっくりしました。保じられないという風に。

「お医者様ごつこもよ、お浣腸もよ」

彼は暗い表情にもどってあおむけにひっくり返ってしまいました。私は彼の胸の上に手と顔をのせてまだ呟きました。

「あんまりされたので、病気になっちゃったの。今だって痔が痛いよ。もう歩けない。

誰かに見てもらわなきゃならない……。あなた、大好き」

痔、なんて嘘でした。ね、神さま。あなたは相変らず姿を持たないで、時々おトイレにやって来て、よく御存知でしたね。

Aさんは、そっと私の髪をなでくれました。私は涙を流していました。Aさんのやさしみがじんと伝わって来ました。でもそれだけでした。私はますます混乱して泣いただけです。

正気に戻ってみれば、我ながら恥しく、消えてしまいたいようでした。でもAさんに、何か本当の事を訴えたような気がして、かすかな充足感もありました。

二度目は、前にお話した温泉なのです。こ

の村の中の山あいにある小さな温泉です。旅館にはたった一つの浴槽しかなく、混浴でした。村の人達は「農休み」だのお盆だのといっではよく出かけますので、私達がそこへ遊びに行くのも不自然さや、やましさはありません。一日六十円の席料を払ってお茶を飲んで入湯して夕方帰ってくる、というやり方です。ですから、温泉へ行くからといっても、伯母達もお銭湯へ行く位にしか思っておりませんでした。

でも私にとっては違います。混浴なのですもの。

もうそれ以上御説明する所はありませんからね。

Aさんに行った時、彼は脱衣所で躊躇しました。脱衣所も男女いっしょですから、若い女の人が入っている事もわかりました。彼はいやだから後にするといいますのを、私が引きとめてようやく入る事にしたような訳でした。

Aさんに背を向けて衣類を脱いで行きます間、私はAさんがこちらへ視線を向けていて下さるように、と祈りました。私はAさんが見ているに決まっていると自分にいいかけせて、燃えるような羞恥を抱きました。一枚一

枚脱いで行くごとに、私はかっとほてってしまいました。Aさんの前で裸になるのは始めてでしたし、私は不思議とはにかみ屋でもあるのです。ですが、見られるという事は、あ何てすてきな事なのでしょう。

パンティをとった時、とっさに振りむいた私は、思ったとおりAさんがこっちを見つめている視線と出合いました。私は思わず「いや」と口走って浴場へ逃げこみました。充たされた感じでした。

湯舟はタイルで相当広いのです。先客は農家の娘さんらしい若い人が三人いただけでした。湯舟のへりに腰かけて、楽しそうに談笑していました。

しばらくしてAさんが入って来ますと、娘さん達は大あわてで胸をかくしてお湯の中にとびこみました。見ていておかしい程のあわて方でした。談笑もぴたりとまってしまつて、向こうむきになって、首までつけています。私もタオルで包むようにしてAさんを見上げ、にっこりしました。何のために微笑したのかって聞かれても困ります。そんな時の笑いなんて本当にいわれないものです。

娘さん達は、もう出ようかといって、そそくさと上がってしまい、私とAさんだけにな

りました。二人とも何もしゃべらず、向きあったままでした。私はももをぴたりと合わせ、タオルを握りしめてAさんの目を見つめていました。Aさんの目は、くるくるとあちこちを見まわして、少しろっばいしているようでした。

意気地のない人、という気がしました。でもそういうAさんが清潔で好ましい気もしていました。がそれとは別に、私は息苦しさを感じていました。脱衣する前から、又何かが心の中にもえ出していて、それが私を変な気分にした。さそいこんでいました。おちちをしっかり押さえている手のあたりにうずくような感覚があり、何か又無鉄砲な衝動にかられて変な事をしてしまうのではないかという予感がしました。

そうです。神さま。私はお床の中でたびたびお風呂の中の私に冒険をさせて、その空想を楽しんでいました。私の見られたいという願望が不自然でなく果たされるとしたら、お風呂ほど、絶好の場所はないじゃありませんか。それに私には、時々、空想と現実のギャップを無視して思いがけない行動をとってしまふという悪い癖があるのです。

その時が、そんな風の癖でそんな妖しい

気持になりかかっていました。私と、Aさんとたった二人、明かるい昼の光の中に裸でいる。しかもフィアンセです。Aさんは、それなのにとまどった顔をしている。もう少し私に近よってくれたらいいのに、湯舟のはじとはじで。私の所に来て、手ぐらい取ってくれでもいいのに。もっと強引に何とかしてくれでもいいのに。私が行動をとりやすく、何かおかしい事でも言って笑って、かたくなな雰囲気をごわしてくれてもいいのに。

私はもうのぼせ気味でした。もうタイルの洗い場に出て涼みたいと思いました。洗い場上がる時、Aさんは、向うからじっと見ていて下さってもいいのです。見てほしいのです。けれど何気ない笑いにまぎらわせて上げれるように何とか言ってくれればいいのに。

Aさんもよくよく困ってしまっていたのかもしれない。

で、私は「あついわ」と言ってさっと上がってしまったのです。Aさんもがまんしていたらしく、すぐ出ました。私達はお互いに横坐りになって足を投げ出し、タオルで身をおくっていました。

Aさんは、こっちを見ていない、と思いました。私は安心してタオルを落していいのじ

やないかしらと思いました。そして、そっとAさんが見てくれる事を期待しました。私は熱っぽくうずく乳房をあらわにし、タオルをふとももにかけました。それだけで私は錯乱してしまっただのかもしれない。私はAさんに見てほしいと思い、思わず考えてもいなかった言葉を発しました。

「私、ゆうべあなたの夢を見たの」

その一言でAさんは私の方を見ました。私は知らんふりして、正面を向いていました。そのくせ、心の中はもたえるように躍り狂っていました。とうとう胸を見られてしまったという羞恥と歎びとで。

「ひどい人、あやまりなさい」

と私はつぶやきました。

「私をひどい恰好にさせて、いたずらして」

Aさんは、んふんと、妙な笑い方をしました。そして、

「君が勝手に見た夢じゃないか」

ああ、何てことでしょう。そんな言い方であるものでしょうか。そんなまともな返事をして、私を失望させ、とりつく島もなくさせてしまっただけじゃありませんか。

「あなたは、私を泣かせてしまふつもり？」
と私は始めて彼を見返りました。

「いやあ、そうじゃないよ」

とAさんは、困った顔をしました。

「僕だってがまんしきれなくなるもの」

「あら、何を？」

って、私ずい分皮肉っぽいでしょう？

IさんもAさんも、時々私にこんな風にやられて、気を悪くする事があったんです。でもAさんはこんなふうに説明しました。

「君をまだ大切にしておきたいんだよ。

この気持わからない？」

わからない事はありません。いいえ、ある意味では嬉しいんです。私はIさんにもそうでしたけど、Aさんに対しても操の最後のものはこわがらなければなりませんでした。ですけど、私の言う（求める？）ものは、そんなものじゃないのです。そこで、私はAさんの言葉を胸にしっかりと刻みこんでから、こんな事を言いました。

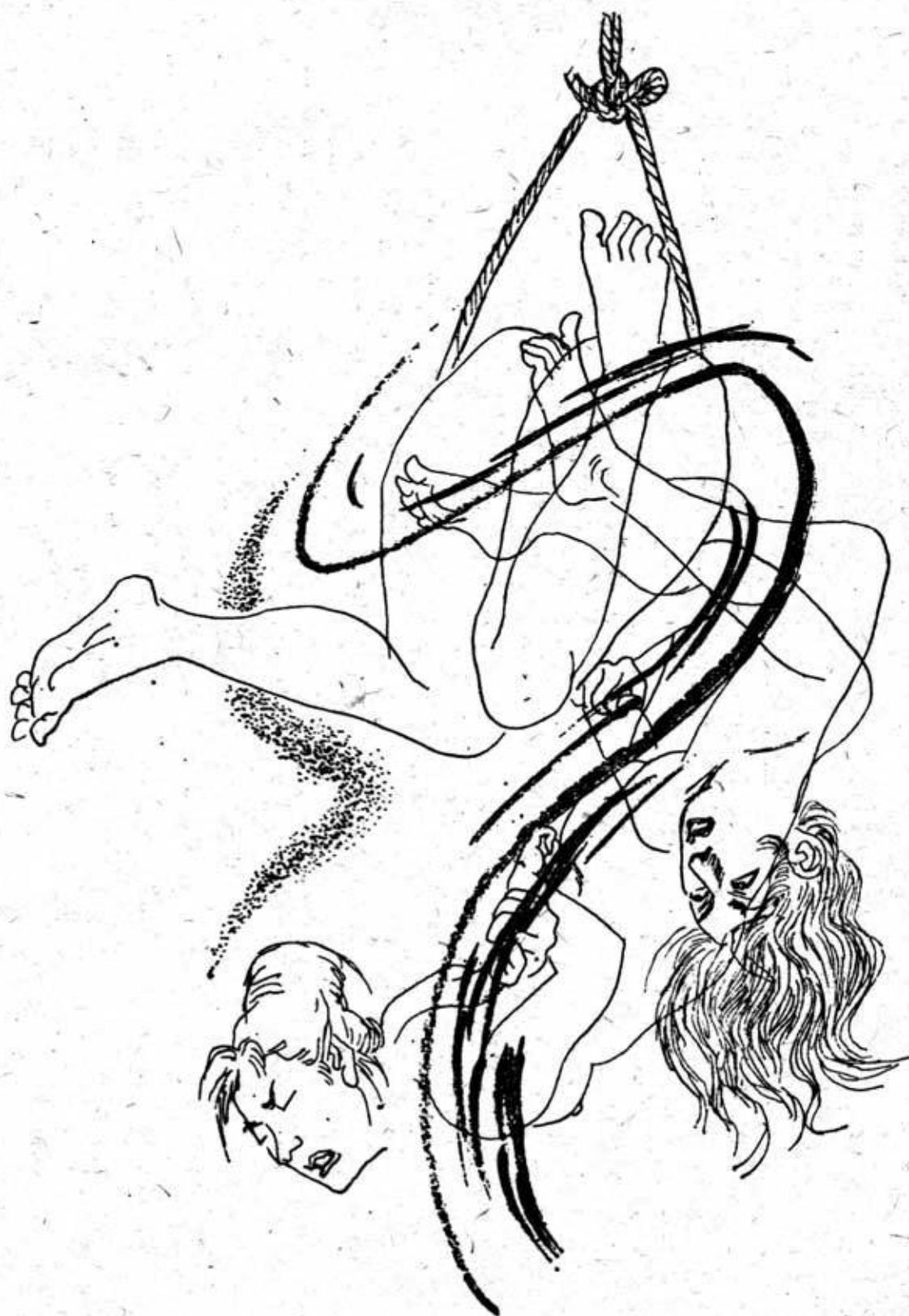
「ね、私の身体きれい？」

「うん」

と彼も私を見まわすようなそぶりでした。

「いつか、ヌード写真にとってみない？」

「君をか？」



「ね、おちちはかわいい？」

「いいおちちだと思う」

「さっき、見たでしょう？ おしりは？」

「かわいいと思った」

「おなかは？」

「まだ知らないよ」

「盲腸のあともないのよ」

「でべそさんでもないし」

もうそれ以上、言うことはありませんでした。頭の中には、好きにして、という言葉がくるくるまわっていましたけど、それまでは口にでませんでした。

もう上がって休もう、といって、Aさんはその場の雰囲気を取りました。そこへ二人の青年が戸をあけて入って来ました。私は又胸をおおい、湯舟にとびこみました。Aさんはさっと入ってすぐ上がり、私を置いて出てしまいました。私はたくましく粗野な顔つきの青年があまりしつこくじろじろ見るものですから、上がりそびれてしまつて、うだる程がまんしてしまいました。

でもここが変なのです。Aさんがいなくなつてしまうと、私は見もしらない二人の男の人に罵られていような気分陥つて、必ずしも不快ではなくなつてしまつたのです。それのみか、どうせ関わりのない遠い人達だと思つと、むらむらといたずら心が起つてきてちよつと冒険してみたいという気になりました。私は湯舟を出、後向きにかがんでタオルをしぼり、身体を拭き始めました。二人の視線がおしりをなめまわしていると思うと、耳から首にかけてかつと熱くなりました。そうなるとうとう、もう私は陶醉境にあるのです。私は立ち上がり、又かがみ、しまいに胸を、きゅんとしめつけられるような感じと共に、おしりを突き出し、立ち上がつてタオルもおおわずに出て来てしまつたのです。

脱衣室ではAさんが髪をとかして待つていました。私はまだ顔中をほてらせながら、パンティだけをはいて、Aさんにほら、と直立してみせました。Aさんの目は私のその時の気分と同じようにうるみ、上気しました。

お部屋に戻つて、不意に私は抱擁されました。逃げるまもなくたし、逃げる気もありませんでした。が、その瞬間、私は彼の手をはねのけ、後向きになつて倒れていました。

私の防禦の姿であるかもしれせん。

Aさんは、なぜ？ なぜ？ とささやきましました。なぜ、といわれても私は何も答えられませんでした。でもその恰好で私は彼に充分あまえ、歓喜しました。しかし、そのまま嵐が去ると、Aさんはそれ以上は何もしてくれませんでした。Aさんは私の肩を持って起こし、ごめんね、といったのです。

たしかに彼、ごめんねという理由はあったと思います。なぜなら、私がお床の空想の中で渴え望んでいるものは、そうした次の段階のものなのでもの。Aさんは、私の門を叩いて引き返してしまつたのです。

Aさんは私達の結婚により積極的な意欲を持ち始めました。いろんな約束や誓いを言つて、私を喜ばせようとしていました。

でも神さま。私本当は結婚というものの、それ程期待を持つてはいなかったのです。Aさんの純朴な生活設計のお話などより、私はもっと先に充たされたい欲望を持っていたのです。あなたがよく御存知のように、私は身体の中に、結婚などというオーソドックスなものでない、異質的な願望を抱いて悶えていたのです。私がAさんに望んでいたものは、結婚というおごそかな儀式でなく、私を意思のない動物か何かのように愛玩してくれる事だったんです。私が彼を誘導してみるのも、そのためだったんです。

私はここのお部屋でも、Aさんを誘い、私に挑ませておいて、彼の行きつこうとする物には拒みました。その度に彼は不思議がり、そのくせ詮索もせず、私の願いを理解しようとしなかったのでした。そしてただ結婚を急ごうとするのです。

そんな風ですから、私は孤独になつてしまいました。Aさんが真剣になればなるほど、私と阻隔してしまふ訳、おわかりになりますね？。彼と結婚しても彼は私の望むようにはしてくれないでしょうし、あまりにまともな彼の愛情は、私を寂しくしてしまふだけだと思ひました。

もう一つ、あなたにはけがらわしいお話かもしれませんが、私にとっては重大な事件をお話した方がよいかと思ひます。

それは、もうおコタのある寒い日、私はAさんと肩を並べてねころんでいました。私はAさんの手を握って指を弄びながら、息づまるような気持になっていました。Aさんは消極的でした。

私の手に指をまかせていたAさんはふいに叫んだのです。

「こんなところ！」

って。

いいえ、それは嫌らしいという意味の言葉ではありません。驚いての言葉なのです。でも私は失望しました。少なくともAさんは、私の欲する事に対して積極的ではないとわかったからです。パンティの上からですけど、痔だといつわった所へ彼の指を持って行ったのです。私は彼の手を押し放して悲しみましました。

彼は彼で、私を愛そうとするのでした。私の愛とは本当にくいちがっていましたが、ですから、彼の言葉も息づかいも、私には何か悲しいのです。

私は「こんなところ」の意味をいろん

に考

えました。

ねえ、神さま、この所が大切なのです。「こんなところ」って、あなたにも「こんなところ」ですか？ それはどういう意味なのでしょう。きたない所？ かくすべき？ 忌み嫌うべき所？ それほど意外で異常な所？ そうかしら。たしかに、不潔なのかも知れません。美しくないかも知れません。その部分だってかわいらしくないかも知れません。変てこかな、いやらしいものかも知れない。

でも、この黎子という女の、立派な一部じゃありませんか。いつまでもいつまでも、私の生活についてまわる大切な部分じゃありませんか。一生かくしてかくして、そんなもの無いようなふりをして行かなくてははいけませんの？ こんなこと言う事がおかしいのですか？

少なくとも、こんなところを愛してはいけないのでしょうか。

でしたら、私はどんなにか変な、気狂いじみた女なのでしょう。

私はおトイレに行くたびに、そこにひそかな愛情をさえ感じるのです。あなたに見ていただきたいと思ふのです。ですから正直にお話すれば、誰もいないと知ってはいても

なるべく美しい姿で、と考へてゐるのです。声を出してきばったり、無作法に身体を動かしたり、変に前こごみになったりしないように気をつけてゐるのです。表情もみにくくならないように注意してゐるのです。お始末だつて優美にするのです。時にはその姿が美しい一つのポーズのような気がして、氣どつてしまふ事さえあるのです。

変ですか？

変であるのでしたら、Aさんの「こんなところ」と驚いた理由もわかります。

変だ、とおっしゃつても私はやめられませんが、私は——だめです。

Aさんと結婚したら、彼はそのような私を嫌うでしょう。私が望むようにはしてくれないでしょう。きっと見てもくれず、触れてもくれないでしょう。

私は悩んだのです。そして恥ずかしいと思つたのです。いつもの嬉しい恥ずかしさじゃありません。ただただ悲しい恥ずかしさ。

私の夫には、どういふ人が適當なのでしょう。Aさんのように美しく氣高く純粋ではだめなのです。

しかも私はいわゆる結婚生活や、妊娠や、母性としての生活には何のあこがれもない

かりか、こわいとさえ思うのです。

Aさんとのその後は、私の発病によって保留の形になりました。Aさんと結婚する事については、もうお断りしようという気持ちです。私は今、毎日毎日がひどい孤独で、たまにAさんが遊びに来て下さっても、孤独は少しも癒えません。

これを書いているきょう、近くの十九才のきれいな娘さんが亡くなりました。心臓脚気なのだそうです。そこのお母さんが朝とんで来て、伯母にその臨終のようを話していました。おコタにあたっていて、突然ウーンと呻って倒れたのだそうです。大小の便を洩らして、その始末もしてやらないうちに息を引きとったというのです。身体が弱いからというので、いつも着物を着て家にいるだけでしたが、きれいな人でした。時々散歩で私の部屋の外を通る時、にっこり笑みを交わした事もありました。その人のお母さんは大きな声で、便を……などと話してましたが、その便が、美しかった彼女の人からや死を少しでも不純なものにしたのでしょうか。いいえ、それだって彼女の立派な生の一部だったのではありませんか。私は少し自分が慰められた気がしたのです。

そのお家の庭の柿の木に、うすいピンクや白色の大きな花がいっぱいについています。若い娘が亡くなった時の風習で、花籠というのだそうです。いくつあるか数えてみても、ちょっとわかりません。あまり沢山の花なので。

それを窓から眺めているうちに、私は彼女と親しいお友だちであればよかった、と思いました。いろんなお話や遊びもできたでしょうし、きっとこんなに深い孤独に陥らなくてもよかったかもしれないのです。彼女だったら私をよく理解してくれたでしょう。又、勝手な想像ですけど、彼女も私と同じ悩みを持っていたかもしれません。もしそうでしたら私達は裸になりあって、お互に願う所のものを求める事ができたのかもしれないのです。いっしょにおトイレに入って、お互の美しい姿を見せあう事もできたでしょう。お通じを洩らしたとしても、私がすぐにとんで行って喜んでお始末して上げたでしょう。

花籠を見ていると、遠からず私もあのようになるのではないかという気がしました。別に悲しいとは思いませんでした。

ねえ、神さま。

私はむなしい。

私にこのような欲望をお与えになったのは誰なのでしょう？。せめて、私達におしりというものがなかったら。

でも世の中の多勢のお嬢さん達、彼女達はどうなのでしょう。私とはどう違うのでしょうか。彼女達だって同じようにおしりを持ち、毎日おトイレに行くのでしょうか。

思えば、高校時代に、私はもうそのような差別感（劣等感でしょうか）を持っていました。だからお友達のお身体と私のと、どう違うのか（どう同じか、などとは思いませんでした）、とても関心を惹かれました。ですからお風呂や修学旅行のお床なので、私はそれを知ろうと懸命でした。お風呂ではたくさんのおしりを見ました。勇敢なお嬢さんなどはおしりを高々と上げてお髪を洗ったりしますので、私は鏡を使って知っている自分のと寸分の違いもない事を確かめました。それでも不安で、Sのようなお友達のおしりをさわってみたり、見たりしました。少しも違いはないのです。それなのに、皆はどうして平気なのでしょう。

おしり、おしりといって笑ったり、電車の中で男の人にいたずらされたもようを話して聞かせたりしたお友達がいました。あまり性

格が合わないの、それ程仲良しではありませんけど、向うは私に近よって来ようとしてました。その子が、或いは私と同じ悩みを持っているのかもしれませんが、こんな手紙が来たので。

ミッチ（私の本名の愛称です）へ。

ワタクシはお元気ですか。（ワタクシというのは、私―黎子のことです。一時ワタクシと氣どっていたので、このお友達が使う仇名）

アタシもお元気です。長野の秋は寒いでしょう。そんな所で病氣してるあなたはかわいそう。一度お見舞に行きたいのですが今年中は暇がありません。お金もないし。この前ヨッコとおヒヤにあいました。しゃれた男の子をつれて銀ブラでした。相変らず氣取ってる。トコヤさんはお嫁に行くそうです。まだ相手は聞いてないけどきっと男性にはちがいない。あいつは、おイロケがあるから、うまい口みつけたのだらうと思う。

私の方はサッパリです。あの変態課長がさかんにモーションかけて来ますが、ゲロです。あいついやにしつこいと思ったら、男

性的に不能なんだそう。だから皆で不思議がってる。課の女の子かたっぽばかり目をつけてホテルへ行ったりドライブしたりして、どんな事やってるんだらう。ちよいと興味があるでしょう？。私にも近ごろお熱らしくて、電話かけるふりして足をすりよせて来たりポニーテールをひっぱったり只事でない。立ってるとおケツ叩いたりして喜んでる。女の子ひっかけると平気で人前でおケツいじるんだ。暮のボーナスに係するからがまんしてるが、ほっぺでも引っぱたいてやろうかと思う。

不能なら安心だから、アバンチュールを楽しんでみても面白いけど、会社でデレデレされたんじゃおしまいだね。

そのうちいい人見つけたら会社やめてせいしようと思ってる。

そのほか今日は書くことありません。一日も早くよくなって東京へ戻って来たまえ。いっしょに三橋に行ってタラフク食べようじゃない。

じゃお元気で、さようなら。

おキヌ 拝

この変態課長の報告の所に、彼女の氣持が

でていますね。いたずらされるのがゲロだなんていいながら、会社でない所でならまんざらでもないような事書いています。だから、彼女案外私のような所あるんじゃないかと思っただけです。もしそうだったら私はとても安心するでしょうね。私一人変なのじゃないって。

私はこのお友達が、ちょっと羨ましいのです。私の身のまわりには、その課長のようにいたずらしてくれる人がない。私が求めたAさんは紳士の態度をかえません。私がこのお友達の会社に行ったら、このお友達のように彼を非難などしないで、甘えて屈辱の立場に服すでしょう。

この課長さんは奥さんと別れて独身なのだそうです。前にもこのお友達から、女の子を応接室に呼んでいたというようなお便りがありました。四十過ぎのやせっぽっちだそうです。

私は、この課長さんを相手に夢を描きました。例のようにきたならしい、粘っこい夢でした。でもこの課長さんは飽きることなく私を弄び、私を辱しめます。いろんな方法で。私はこの人にかかったら、蜘蛛の巣にかかった蝶か、むしりとられる花のように無力なの

です。何をされたって、どんな非道をされたって身動きもできない。

しかも彼が不能者だとは、何とうれしい事でしょう。私が本能的におそれるものは、自ら守られる事になりますもの。Aさんのあまりに正道な愛によって充たされないものを、いいえ、そんなものばかりを、彼は私に与えてくれるのではないでしょうか。

ねえ、神さま。

私は想像以上に変わすね？。

とてもあたり前の結婚なんてできませんよね？。

私は不能課長のような人の所に行って一生愛玩されて終るのがいいのでしょうね。と思えば、絶望的な気持ちになってしまいます。

でも、もう仕方ありません。私がどうなる

のか、なってみなきゃわかりません。或いはこのまま死んでしまうのかもわかりません。

でも、あなただけは最後まで私の唯一人のお友達であって下さいますね。

私の大空や、小さなお床や、ひそかなおトイレの中に、いつもいっしょにいて下さいませね。

(おしまい)

限定版 特別号

案内

第一弾、第二弾、第三弾、第四弾と引続いて刊行された本誌の限定版特別号は、その豪華なモデル陣の美女を縦横に駆使して、素晴らしい緊縛ポーズを展開しております。第二弾はいち早く売切れとなりましたが、第一弾、第三弾、第四弾も今や残り少なくなりました。縛られた美女ばかりの艶妖ポーズと四馬孝画の緊縛画集によって、どうか痺れるような責めの醍醐味をお楽しみ下さい。

第一弾

緊縛フォト・アラベスク

略号「あらべ」 定価五〇〇円

本誌の黄金時代のモデル嬢の素晴らしい緊縛姿ばかりを集めた匂うばかりにあでやかにも美しいフォト集です。全巻二十六項目、七十七葉に亘り、文字通り表紙から裏表紙のハシに至るまで、すべて緊縛女体のむせかえるような、むんむんするムードで埋めました。まだお求めにならないマニヤの方は、是非コレクションの一端にお加えになって、その妖美のエキセントリックをお楽しみ下さい。

第三弾

緊縛写真グラフ集

略号「グラフ」 定価五〇〇円

絹川文代、大塚啓子、愛川悦子、桜井葉子、等の本誌で育てたベテラン・モデル嬢の活躍による最も優秀にして鮮明、且つ魅力的な緊縛艶姿ばかり百十五態を集録した「グラフ」です。誌面いっぱいに所狭しと盛り上げる大型グラビアの迫力は、きっと皆さまを、この妖しい異常美の縛りムードの中へと誘い込むことでしょう。女体緊縛マニヤの皆さまに自信を以ておすすめ出来るグラビア・フォト集です。

第四弾

緊縛フォトと緊縛画帳

略号「別特」 定価五〇〇円

三十六葉に及ぶ四馬孝描く粒選りの傑作画集のケンランたる陳列に加えて、本誌の発掘した新人モデルである、四方清美、花本京子、柳初子、山路ミヨ子、館典子、熱海容子、前本妙子、浜千代子、大井小夜子、加茂良子等の新鮮な悦虐姿態と加賀利江子、藤田節子、萩千恵子、桜井葉子、絹川文代、大塚啓子、須川令子などの代表的ポーズによって味をつけました。どうぞ御一見下さるようおすすめします。



〔奴隷国探検〕

(最終回)

そろそろ僕の帰国の時期は迫っていた。僕とて、ナハール君がいくら大金持だからといって、その好意に何時までも甘んじている訳にはゆかなかった。

僕はそこで見落したもののうち、矯正所に

おける女奴隷たちが、抜歯の拷問の後どんな責苦にあうのか是非とも知りたいと思った。ナハール君にそのことを懇請すると、彼は予定していたことだといわぬばかりの表情で承諾した。

ナハール君のあっさりした承諾には理由がある。いやこれは僕の思いすごしかも知分らぬが、僕の数日の滞在中に、僕が一回着想らしい着想も示さず、ただひたすらに感嘆ばかりしているの、ナハール君は失望し、あえて僕の滞留を長びかせようとせず、矯正所を見物させて帰国をうながそうとしたのかも分らないのである。

こんなことを思うのは、貴族の鷹揚さを持つナハール君にたいする、僕の平民的なひがみであり、失礼なことは分っているのだが、どうもその考えを打ち消すわけにゆかなかった。

ともあれ僕たちは、次の日の昼食を早いめにしたため、六人曳きの車に乗って矯正所へ向った。

途中、腰に吊られた鎖を鳴らしながら立ち働く男の奴隷たちを見ながら、僕はむしろかれ等の方が女奴隷より楽なのではないかと、ふとナハール君に疑問を洩らした。

しかし、ナハール君は言下にそれを否定して云った。

「なんのなんの、畠の仕事は見ているほど生易しいものではないし、鞭も女奴隷たちに如えられる車だけでつくったものでなく、先端

に鉛の入った鞭が使われているんだ。こいつで打たれると骨の髄にまで響くんだよ。それに男の奴隷の矯正所は、気の狂う者がでるほど凄いのなんだ。」

僕は一見したい興味を感じたが、口に出しては云えなかった。また僕は、男の虐げられる姿に激しい欲求は感じなかった。矢張り当面の目標は、女奴隷の矯正所にあったからである。車はやがて矯正所の門をくぐった。

女体絨緞、女体椅子、そして僕たちは女所長に案内されて抜歯の部屋まで来た。

そこでは今しも、一人の女奴隷が口を血だらけにして、歯を抜かれているところであった。苦痛が非道いらしく、おそろしいうめき声が部屋に充満していた。

既に抜かれた歯は、台上に並べられていたが、それはざっと二十本はあった。

「抜歯がすめば一週間の休息が与えられるのです」

僕たちは、女所長の説明を聞きながら、休息の部屋へ案内された。

しかし休息の部屋などというのは名ばかりで、抜歯のすんだ女奴隷が三人、後ろ手に枷でとめられ、三角の鉄材を並べて床に座らせられていた。そしてよく見ると、かの女たち

の首枷は低い天井に鎖で吊られており、足枷の鎖は、尻を圧迫しながら腰枷に吊られていた。それでかの女たちは立ち上ることも、横になることも出来ず、脛を三角形の鉄材に押しつけたまま、苦痛をしのばねばならないわけであった。

そうして一週間が経ち、抜歯の傷が癒るとかの女たちは次の部屋へ入れられ、矯正所奴隷としてふさわしい拘束具をつけられることになっていった。

案内されたその部屋には、丁度休息の部屋から出されたばかりの奴隷が一人、拘束具をつけられるため控えているところであった。

その女奴隷は、先ず今迄の枷を全部外された。そして代りに、肩をがっしりおさえつけられ、首が自由に曲らないようになっていた。巨大と云っても決して誇張でないような首枷をつけられた。それでかの女は、後ろを向く時など、首だけ振りむけるなどという贅沢は出来ず、身体全体をわざわざ動かさねばならないという訳である。云ってみれば、鉄で出来たギブスとでも形容出来よう。

つづいて厚くて重い手枷と足枷が、その鎖と共に鋼鉄の光を反射しながらはめられた。女奴隷の表情は諦め切った痴呆の状態にあ

ったが、流石に眼からは涙が流れていた。

更に鋼製の腰枷がくびれに喰い込み、更に内面に突起の見える乳枷が、附属の鎖により女奴隷の背に錠でとめられた。

拘束具の装着が終りそのお礼を云わせられると女奴隷は嵌口具をはめられ、次の部屋へ追われた。その足許は拘束具の重みによるめいていた。しかし女監督たちは容赦しなかった。鞭と罵声は、当然のもののように女奴隷にふりそそいだ。

そうして次の部屋で女奴隷と待っているのは、女としての機能を一時麻痺させるための器具だった。残念ながらその詳細は記すことを許されないが、いわば開閉出来る小さい傘の骨であり、嵌入と共にそれが開かれ、鍵でとめられると云えば大体想像できようかと思う。

すべての拘束具を受けた矯正所奴隷は、完全に女監督の恣意に任ねられた。生かそうと殺そうと、すべては女監督の意のままでありその上最も残忍な女監督が賞讃される仕組みになっていた。

最後の大広間では、たくさんの女奴隷たちが、それぞれさまざまな責苦を受けていた。ナハール君は、その部屋に入ると僕に云っ

た。

「この部屋は矯正所の最後の仕上げの場所なんだよ。時々僕も退屈するところへやってくるんだが、確かに面白いところだね。ここへ送られた奴隷の半数は、この部屋で生命を落す仕儀になるんだが、奴隷たちの餌を勘案して、僕はそれを許しているんだよ。それでも生きているやつは発電か水汲みの仕事をやらせることにしているんだが、時々見せしめのため、館に連れて行って檻に入れ、未だ罰を受けたことのない奴隷どもに、鞭の跡や抜歯の跡などを見物させてやるんだよ。これは奴隷を統制する上でなかなか効果的なんだよ。」

あるところでは、女奴隷が十人ばかり、そのおの鼻を鉤で釣られて並べられていた。かの女たちの嵌口具をはめられた唇の端からは、苦痛のためのよだれが汚く流れ出ていた。そして女監督は、女奴隷の姿勢が悪いと云っては、尻や太股などに太い針を突き刺していた。

またあるところでは、数人の女奴隷が拘束具のまま、腰をくねらせ踊らせられていた。ずいぶん長いあいだ、かの女たちは同じ踊りをつづけさせられているらしく、顔は蒼ざめ疲労が身体全体にあらわれていた。しかし鞭

と針が待ち構えているので、その踊りをやめることはできないのだ。

そうしてあるところでは、乳枷と乳枷をおっつけあう、斗牛のような競技がおこなわれていた。内面に突起のある乳枷だけでも、つけているだけで相当な苦痛だろうのに、それを激しくぶっつけあうのだから、時々悶絶する女奴隷のあるのも当然である。するとその奴隷は、競技に負けたものとして、鞭と針の罰を受けねばならないのである。

いやそればかりではない。自働くすぐり機や自働鞭打機などは、激しいモーターの唸りをたてて女奴隷を苦しめていた。

くすぐられている女奴隷は、眼をむき、脂汗を流し、筋肉をけいれんさせて窒息寸前にあった。

女監督は機械を止め、女奴隷にしばしの休息を与えてやった。

機械が停ると、女奴隷はいままで吐き出しつづけていた空気をとり戻そうとでもするうちに、大きく息を吸い込み、唇をわななかせながらその息を吐いた。そしてその後は、激しい運動をしたもののように、肩を波打たせていた。

鞭打機は太いゴムの棒が急速に女奴隷の臀

部を打ちすえる仕組みになっていた。そのため打たれる尻は赤くはれ上り、部分的に血が流れていた。

そして打たれる女奴隷は口を大きく開け、固定されている鉄の棒や枷から逃れようと、無駄な努力をつづけていた。しかし両手両足をしっかりと固定され、四つん這いで尻をつき出している恰好から逃れることはできず、ゴム棒の正確な打撃を避けることはできなかった。

またあるところでは、女監督によって爪をはがされている女奴隷がいたし、片目をくりぬかれている女奴隷もいた。そして……。

広間はそれらの女奴隷のたてる声にならない悲鳴、丁度さるぐつわをかまされた多くの人間が声にならぬ声でうめいているように、むんむんする人いきれに満ちていた。汗と排泄物とゴムの臭気が鼻をついた。

、半数が息絶えるというのは、決してナハール君の誇張ではないことが容易にうなづかれた。

いや現に、僕の見ている眼前で、くすぐり機になぶり殺された女奴隷が一人、鉄の枷や鎖を外され、まるで食肉かなんぞのように、その裸身に鉤を打ち込まれ床を引きずって

かれた。そして広間の一方の隅にある鉄扉のついた直径一メートルほどの穴の中へ投げ込まれた。

つづいてもう一人……いや、それは死んではいなかった。悶絶したのか、あるいは苦痛を逃れるために故意に死を装ったのか、とも角、検死の焼きごてを足の裏に当てられると、その女奴隷は身体をぴくりとけいれんさせ、焼きごてから逃れようと足をすくめたのである。しかし恐らく、その女奴隷も、女監督をあざむこうとした不ときな者として、遠からず、なぶり殺されることは明らかだった。そして矯正所にいる者たちのスープになり、ミンチにかけられて液体状の餌にされることは明らかだった。

僕は少しづつ気分が悪くなってきた。そしてナハール君の眼の輝きや、女監督たちの無表情ともいえる冷たい顔つきをいぶからずにはいなかった。

たしかにそれはおびただしい浪費だった。ナハール君の恣意を満足させるためにのみ、女奴隷たちはかどわかされ、とるにも足らぬ罪で罰を受け、やがてなぶり殺されねばならないのである。

もがけば針が背にくい込むベッドに寝かさ

れた女奴隷の乳房や腹部に太い針が突きさされて、有様や、両手に鉤を打ち込まれて天井に吊るされ、生きたまま皮を剥がれている女奴隷の姿を見ると、僕はナハール君にもうついてゆくことが出来なくなった。

石油利権による龐大な収入が年々約束され、その費い道が見つからぬ状態とはいえ、ナハール君の道楽はいささか度がすぎているように思われた。

僕の顔色が蒼ざめてゆくのを認めてナハール君は、僕に帰館をうながした。

館に帰ってから、僕は気が変になってしまったような錯覚からなかなか逃れることができなかった。

にもしろ金の枷や鎖を鳴らし、絹やビニールの水着をつけた女奴隷にかしづかれ、風呂場で身体の緊張をもみほぐされている中に、僕は次第に常態に戻ってきた。

そうして僕は、それから更に数日の休息を兼ねた滞在の後、帰国の途についた。

ナハール君は僕を飛行場まで送ってくれたが、その時乗ったアメリカ製の高級乗用車に僕は初めて近代文明の世界に來た氣持を味った。

その時から数えるともう五年の歳月が経っ

ている。その五年間というものの、僕はナハール君によって与えられて強烈な刺激に、奇妙な夢遊病的状態を味わうことがある。

それは忘れようとしても忘れられない経験であり、味わおうとしても味わえぬ、現実とは思えぬ世界であった。

僕は今、ナハール君に土産として貰ってきたビニールの水着や金の枷、そして鉄の枷などをトランクに藏って持っている。それらは僕を時々襲う疑問、あれは一体現実だったのだろうか、夢の世界ではなかったらうかという考えを否定してくれる。

そして同時に、ナハール君がもう一度僕をサルジニアへ招待してくれはしないかというはかない希望を抱かせる。

しかし稀にくるナハール君からのアラビア語の手紙には、そんなことは一言も仄めかしてさえないのである。僅かにそれに関連することとして述べられてあったのはグレッタ医師に関してだった。

ナハール君は最初、グレッタ医師を妻とする計画でいたのであるが、かの女が次第に凶々しく厚顔になってゆくのに腹を立て、兵士をやって逮捕させ、女奴隷の身分につき落してやったというのである。(終)

ルポルタージュ

踊り子のお臍品定め

須藤 律夫

一月二十二日夜、招待されていた、日劇ミ

ュージック・ホール、新春上演を見に出かけた。今回は「新趣向で悩ませる絢爛のセクシ

ー公演」と題し、全二部、二十二景、構成、演出丸尾長顕、大村重高で、踊り子陣は奈良あけみ外、毎度お馴染の顔が多い。

場内は何時行っても満員で、戸外の異常な寒気をよそに、ここばかりはむっとする暑さである。尤も発散する若い踊り子達の放射能と、観客の間から洩れる溜息と、蓋し暖房の為めばかりではないらしい。レサーブの席は正面舞台、円形せり出しのまん前で、踊り子の肢体は咫尺の間にある。以下は例によってのストリップのお臍品定めであるが、少しガソリンが入っていたので全き正鵠を得たも

のとは断じ難い。

○ 奈良あけみ

ストリップパーとしての歴史ももう相当になるが、肉体的の衰えも見せず堂々たるもの、深い謎を秘めた様なお臍は、豊かな腹部をよく彩っている。穴も深く先ず八十点は堅いところ。

○ R・テンプル

肉体も、そしてお臍も、三、四年前に見た時と少しも変わっていない。腹部の脂肪は余り豊かでなく、その為めに時々穴が扁平に近くなる事がある。

○ 泉 京子

最初映画に出た頃は、もっと魅力的であ

った。つまり、相当に大きなお臍は深く窪んで真黒なその蔭が印象的であったのだ。

最近ではそれが白々しいものになり、穴も浅くなったみたいに見える。潔癖なのか、或は人に言われたのか、恐らく彼女、お臍のゴマをみんな取り出したのであろう。

○ 立花三枝

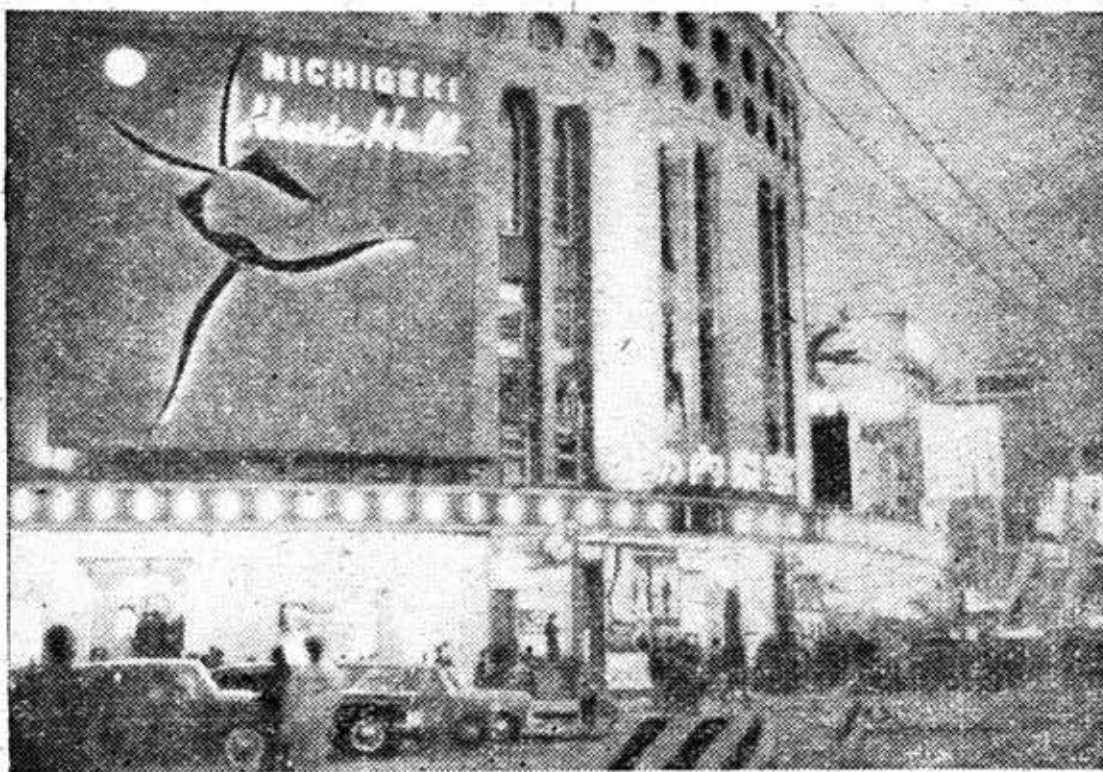
筆者のお臍分類によれば、之は所謂二段臍に属するもの、然し深さ、大きさ共に充分でなく、魅力には乏しいお臍である。

○ 橋 こずえ

穴は小さく浅く、誠につつましやかなお臍、浮世の片隅にちよこなんと暮す——と言った様な、どこか謙虚さの感じられるお臍である。

○ 島 淳子

毎度皆様お馴染の通り、大きさも程良く、深さも充分で全く申し分のないお脐である。殊に踊り乍ら腹部がくびれる時、お脐は殊更に深々とした蔭を宿し、之はマニアには堪らない魅力であろう。この人お脐とは関係のな



い事だが、某宗教の熱心な信者だと聞かされている。

○ 城 さゆり

大きさは普通、穴の深さも取り立てて言う程の事もないが、稍下向きなのが見る人に淋しい感じを与える。

○ 松江登紀

お脐は小さく、穴は下向き、之も一寸弱々しい感じを受けるお脐である。

○ 若穂二葉

大きく、深く、全く美事なお脐である。ゆるやかな曲線を描くその窪みには、拳すらも入るかと思われる位、ゆったりとしていて、其処からは、滾々と魅力の泉が湧き出て来る様だ。

○ 川上みき

お脐の穴の中が良く見える位大きい、深さはそれ程でもない。良く手入れが行き届いているのかゴマは殆んど無くそれが却って峻厳な感じを与えている。

○ 明日待子

○ 一条キム

共に小さな可憐なお脐、取り立て言う程の特徴も見当らない。

○ 美那景子

一応整った形のお脐だが、腹部に張りがなく、穴の下向きなのが力弱い感じを与える。

○ リタ・エレン

ゴマの筋がよく見える位、浅く伸展したお脐、と言ってゴマは全然影を見せない。外人にはよく見かける形のお脐である。

以上は当夜舞台（一部は写真）での所見だが、良く整った、然も魅力に富んだお脐とは、仲々鮮いものである事を痛感した。全く率から言って十人の中一人か二人位のもの、この点下町の方が遙かに歩溜りが多い様に思われる。浅草六区には現在、ヌード・ショウが六軒あるが、ロック座、カジノ座の踊り子達の中には、時々瞳目に価する、美しいお脐を見かける事を付記して置こう。

(完)

(写真は日劇ミュージック・ホール夜景、
律夫写す)

モデル嬢の縁談

花田 一郎

奇クの黄金期を迎え、筆不精の私も、それぞれ二ページずつを費やして、梨花さんや関谷夫人をほめたたえました。又私が筆をとらなくても、絹川さんは熱烈なファンの二十の質問を受け、それに対して誌上公開の形で答えられました。それで今日は大塚さんをほめたたえて——大塚さんの場合は、はずかしめて、という方がふさわしいでしょう——見たいと思います。

私の見当はずれにいるかも知れませんが、若し編集部あてのファン・レターというものがあつたとすると、大塚さんあてのものはかなり少ないのではないかと思います。大塚さんはスター的要素が少ないのです。

でも私が若し江戸時代の奉行で、モデル諸

嬢を順に呼び出して取り調べるとしたら、一番むごたらしいじめるのは大塚さんでしょう。大塚さんの身体は拷問を受けるためにこの世に生をうけたものだからです。ずっしりと重量感のある肉体は、よだれが出る程、木馬責めに適しています。

私たち読者が奇クのグラビア・ページをあけると、読者の一人ひとりとモデル嬢はいつでも水いらずの二人だけになることができます。そのとき

「僕が今度生まれるときは奉行に生まれてくるから、大塚さんは女囚に生まれていらっしやい。毎日毎日、半死半生になるまで木馬責めにかけて上げるから」

というような言葉をささやかれるのも大塚

さんの特権です。他の諸嬢を順に責め立てた後で、私は側近のものと、それぞれの無残な美しさについて語り合うでしょうが、大塚さんののたうちまわる姿については何も語らないでしょう。中学の生物の教材として購入され、解剖台にのせられた蛙と同じく、拷問を受けるために生まれて来た大塚さんが苦しむのはあたり前だからです。

他の諸嬢は一年か二年拷問にかけて、その美しさを満喫したらみんな釈放するでしょうが、大塚さんだけは七、八年も拷問にかけた上で、無期懲役をいい渡すでしょう。大塚さんが涙を浮かべて無実を訴え、奉行である私もその無実を充分知っていても、「拷問を続ける」という目的のために決して許しはしないでしょう。毎日失神して非人共にかつき込まれる獄舎にまで出かけて行ってまだ痛さの去らない大塚さんに、はずかしめの言葉を投げかけるでしょう。

それはマゾ好きの弟に対するような感情です。若し結婚ということを生至上の幸福と考えるなら、長い目で見て大塚さんは最短距離に立っているように思います。他のモデル嬢の上にさく裂する鞭は、無残な美しさを引き出すためのもの、牛馬の上にさく裂する鞭



すらも動物愛護の精神という抵抗に出あうでしょうが、大塚さんの上にさく裂する鞭は、勤行の鐘を叩く撞木と同じなのです。

大塚さんの過去の作品を思い出しても、大塚さんの「牛馬以下」という人格ははっきりします。写真の、左手からのびた男の手と、砂上に黒いシュミーズで坐った（まだ縛られない）大塚さんの手と一緒に輪の形をした縄を持っています。次のシーンは砂上に縛られた大塚さん、次は引き立てられる大塚さん。以上三枚。次は大分新しくなりますがオムツ・カバーの上から股間を縛られ、後ろ手

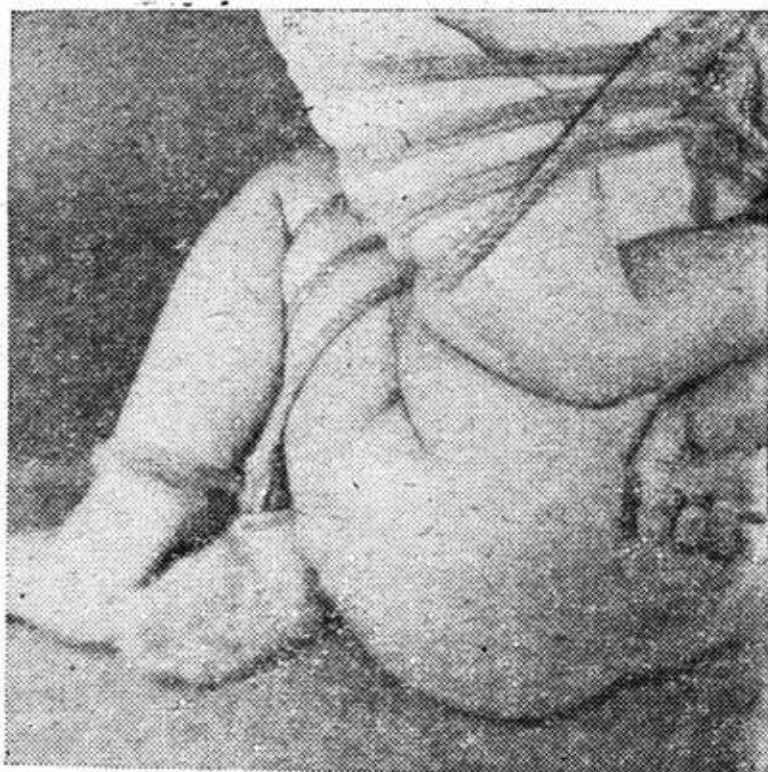
の大塚さん。以上が一番印象に残ります。疑いもなくこれは芸術です。これ程まで読者に幸福を与えてくれた大塚さんの乳房を、股間を、豊かな黒髪を生涯いつくしむ——いや、はずかしめ苦しめる——、ことのできる男性は、世にも幸運の星の下に生まれた人でしょう。

今月三月号の作品では、大塚さんのものでは、切腹の光景と、殆ど全裸でウェストまで垂れた髪の上からガンジがらめに縛られた作品が出色です。その中でも特によいものを、切腹の図を一枚とガンジがらめの図を一枚、私は切り抜いて枕下においています。私自身奉行になったような気がします。先ず切腹を命じ、この世をあきらめ正に刀を腹に突き立てようとする大塚さんに、突然切腹を禁止する。側近に命じ、

「切腹では足りない。死にまさる屈辱を与えてやろう」

との意向で、その場で全裸にしてガンジがらめに別室へ運び込ませ、更にそこで首縄をかけさせる、人びとを退けた後で私はその部屋へ颯りに行く。こんな空想がふっふっ

と沸いて来ます。乳も豊かな腹に刀をつき立てようとするノ



ーブルな姫君、野性の獣のように縄をかけられた牝獣——この大きな落差がさそう空想です。

私はこの切腹の写真を手に入れてからは、大塚さんの肉体をはなれて日本刀の限りないファンとなりました。

スター的要素の少ない大塚さんでなければならぬ所以です。大塚さんには、そういうデコレーション・ケーキにない米のめしのようなシンの強さがあります。

お身体大切に。

長篇MS小説

宇宙のどこかで

△太平洋戦争の話▽

佐 治 麻 造



もう古い昔の話だなあ。俺も今じゃ政府の補償金でこうしてのんびり暮して居る訳だが、しかしなあ、若い時代は二度と戻らないて……。

其の老人は、白樺荘の客室の縁側の安楽椅子にゆったりと腰を下ろし、私に足を揉ませ乍ら語り出した。

出 撃

ここ南溟の基地ラパールは、日毎に激化の兆しを見せる、連合軍の反攻に備えて、その戦力は益々強大にされつつあった。進級したばかりの海軍大尉武林一郎も、空軍増強の一翼を担って空母勤務からラパール基地航空隊に転属された。彼は兵学校出身の精悍老練な

戦闘機塔乗員で、脂の乗り切った技倆は廿五才の若さと相俟って部下一ヶ分隊十六機の信頼と尊敬の的であった。

哨戒機の爆音がいつになく耳について眠れない彼は、窓の月光を引緊った顔に受けて寝台の上に起き直った。明日は戦爆連合のポートダルイン攻撃である。彼が基地に着任して三ヶ月、嘗てない大規模な出撃なのだ。

情報によれば敵戦闘機の大兵力の邀撃が予想された。零戦から『旋風』に切替えて間もない部下の一部の空戦能力が気にかかった。あれこれ思い患った彼は、珍らしくも其の気になって慰安所へと宿舎を出たのだった。

翌未明、ラパール基地の各飛行場は、爆音で埋まった。愛機『旋

風」の風防内に坐って夜明け前の南溟の空を征く彼は身も心も軽々と操縦核を握って居た。先発した銀河一二〇機の第一次攻撃隊の跡を追う『旋風』戦闘機六十四機。彼は総指揮官機の尾灯の微かな光と、部下十五機が従って居るであろう背后的空間を交互に眺めて腕が鳴るのを禁じ得ない。巡航速力二三〇ノット、水星二重星型十八気筒は快調に唸る。単調な一刻、彼は二時間前迄枕を交わして居た慰安所の女の事を思い出して居た。将校用慰安所には部屋はあったが女が足りなかった。

「中々空かない様ですから、およろしかったら、下士官用では如何？ 体も顔も飛切り上等なのをお回しますわよ。私がもう少し若ければお相手させて頂き度いんですけど。」

おかみは彫の深い彼の顔を打眺めて云った。

「お待遠でしたわね。此の妓なんですよ。先刻云い忘れたんですけど奴隷女なの。我慢して下さいよ。いいでしょ？ これ、お前。お前なんかじゃ勿体ないお客様だよ。一生懸命にお慰さめ申上げるんだよ。」

「はい。」

房枝と云う名の其の妓は成程かなり美しい女であった。真赤な長襦袢が白い敷布の上で、青い月光に照らされて情感をそそった。此の女なら奴隷であってもいいじゃないか、と考えた彼は、横坐りは座って神妙にうなだれて居る彼女の肘を掴んで引寄せ、おかみが渡して呉れた鍵を取上げた。

「あら、外して下さるの？ 嬉しい。」

房枝はいそいそと両手を差出し、上目使いに彼を見上げて体をすり寄せて来た。

細いがふっくらと柔らかい両手首を噛んで居た鋼鉄の手錠を外してやった彼は、女が哀れにもいとおしく思えた。

「兵隊さん達は滅多に外して呉れないのよ。そんな時間も惜しいのかしら？ けど、あんた、いい男ねえ。」

彼女は彼の腕の中でうっとりとしと長いまっげを閉じた。一刻が過ぎて彼は房枝のうちの風を受け乍ら腹這って煙草を深々と吸った。

「嬉しいわ。こんなゆったりした気持、初めてよ。死なないで。そして又来て可愛がってね。」

「……」

「私ね、監獄に入れられてたのよ。十三年の刑だったわ。何をしたかは聞かないでね。慰安婦になるなら奴隷にて呉れてあと四年で赦してやるって云われて……」

別れる時、俺が手錠を取上げたらいそいそと両手を揃えたつけ。白い手首に手錠の痕がむごたしくついて居たなあ。どんな悪い事をしたのか聞きもせず云いもしなかったが、良い女だった。可哀想に……。

彼の想念は、背後に突如閃いた曙光によって断ち切られた。前方遙かに銀河の大編隊の銀翼が微かにきらめく。あと一時間半で目指すポートダリン上空なのだ。

敵の邀撃は激しかった。対空砲火は全天を掩い、其の切れ目切れ目で敵戦闘機は雨と降った。しかし『旋風』隊の腕力は強かった。対空砲火で一機又一機と落ちて行く『銀河』を切齒抱腕して眼の隅で見やり乍ら、敵戦闘機には一指をも触れさせない。爆撃を終えた『銀河』隊を直掩して帰途につくと、新手の敵機が上空から降って来た。出撃前の指示に従って、彼の分隊は直掩の位置を離れ、勇躍

して自由な空戦に突入して行った。

「あッ、スピッツファイアーだ。」

歴戦の彼も、名だたるスピッツファイアーには一度だけしか見参して居ない、三十機の『旋風』は約五十機のスピッツファイアーと組んずほぐれつの空戦を、六千米から海面にかけて雲一つ無い空間に展開した。一機を仕止めた彼は、彼我六、七機が交互に一直線に並んで眼前を横切るのを見て苦笑した。列機は既にバラバラ劣勢ではそれも致し方なかった。彼は店ち一機の後ろに回り込んだ。気付いた敵は右垂直旋回をやる。馬鹿な奴旋回性能の差を知らないな。しかし流石はスピッツファイアー、どの敵戦闘機よりも格段に旋回半径が小さい。

愛機『旋風』は三回も回らない中に敵機の背後に出た。もう少しもう少し……。電映式照準器が三百米の距離で尾翼の辺りを捕捉した。敵はいきなり、垂直旋回を打切って縦横転を二度三度と繰返した。彼もすかさず切返し乍らニタリとほくそ笑む。馬鹿な奴!! 愛機のエンジンは一八〇〇馬力の全力を咆哮した。勝った!! 高度は既に二〇〇〇米、敵が急降下性能に物云わせようにも、此の態勢と高度ではチャンスは去った。彼は残弾を考え乍ら全火力の発射ボタンに拇指を乗せた。念のため背後を振り返る。いけない!! 後方六〇〇米に敵機が迫って居る。彼は素早く計算した。未だ十秒はタップリあるぞ。彼は照準器を必死に覗いた。二五〇米、二〇〇、一五〇一〇〇、よし!! 二十耗機銃弾が四本の火箭となって敵機に吸い込まれて行った。右翼が付根から飛び散る。ようし、確認する暇はない。思い切りフットバーを踏んで左に滑らせた。遅かった!! 滑るその左側に火箭の束が美しく流れた。未だ三〇〇米はあると云うの

に敵の照準の正確さ。ガ、ガーン、エンジンの被弾を知った彼は唇を噛んだ。出力が落ちては敵は見える見る背後に迫る。彼が観念の脐を決めた二、三秒が流れると、奇蹟的にもエンジンは再び力強く吠え初めた。彼の手足は反射的に動いて得意の右斜上昇反転の操作を行って居た。間髪を入れず、今度は右下に捻り込む。大抵の敵ならば、この操作で彼我所を変えたものだが今度ばかりは彼も唸った。敵もさるもの、ピタリと右斜下に喰い付いて突き上げる態勢を保って居るのだ。しからば上昇力に物云わせて一先ず逃げようと急上昇に移った彼は一気に一〇〇〇米程駆け昇ってホッと一息入れた。途端又しても咳込むエンジン!! 慌てて機首を下げて失速を防ぐ。駆け昇る敵機との距離は見る見る縮まり、主翼前隊に並んだ八門の敵機銃は火を吐く寸前だ。取りあえず左垂直旋回を打って急を逃れた彼は、こうなれば最後の手段、垂直上昇失速反転で真上から体当たりだと決心した。ブーストを一杯にふかせて機首を起す。敵機よ、ついて来い。エンジンよ、あと十秒だけ回って呉れ。と念じたが、出力の落ちた愛機では、矢張り急激な操作は無理であった。翼端失速を起した機は背面錐揉みに入ってしまった。自爆する術もなく降下を続ける彼は、赤ちゃけた地面がぐるぐる回り乍ら頭上に迫るのを見て、いつの間にか海岸線から大分奥の沙漠地帯上空に来て居たのを知った。兎も角、此の『旋風』を敵に渡してはならない。それに海に突込むのが一番だが、それが出来ねば、地面に激突しなければ、と彼は焦りに焦って錐揉みから逃れる操作を必死に行った。漸く機を正常位に取戻した時には既に高度は一〇〇〇米、エンジンは完全に停止して居た。敵乍ら天晴れなスピッツファイアーは、其の優雅な姿に凱歌を奏して、彼の頭上にピタリとかぶさって居る。一思

いに射って呉れりやいいのにと彼は歯ぎしりして其の誇らしげな姿を睨んだ。此の高度から突込んでも機を完全に破壊は出来ないと判断した彼は、着陸して焼き払い自決しようと考えた。既に高度は三十米、彼はそのまま接地を初めた。あ、脚が両方共出て居る。彼が脚引込みの操作をしても青ランプは消えなかった。接地と同時に、柔い砂地を予想して本能的に機首を上げたが、地面は意外にも固かった。ブレーキも利かない。行き脚は全然止らず、遙か前方の灌木地帯が見る見る近付いた。低い灌木の林を避けるすべもなく、ざーっと突込んだ彼は、バンドが切れて風防に頭を強く打ちつけ、拳銃をまさぐり乍ら失神してしまったのであった。

空戦の果て

何か強烈な刺戟と芳香を感じて彼は気がついた。頭上の風防を開いて一人のパイロットが覗き込んで居た。頭が激しく痛んだが、忽ち今迄の事を想い起した彼は立ち上ろうとしてふらつき、再び座席に腰を落した。

「静かに、怪我はない様ね。」

女の声で外国語を聞いた彼は愕然として振り仰いだ。小さな薬瓶を手に微笑して見下ろして居る其のパイロットは正しく女性であった。革の飛行帽のふちには豊かな金髪がこぼれ、ピンクのマフラーを巻いて口紅の唇が赤く、香水さえ微かに香った、百米程向うにスピッツファイアーが翼を休めて居た。つい先刻迄彼と死闘を演じて居た敵操縦士が、彼の跡を追って着陸し、そして失神して居た彼を正気ずかせて呉れたのだ。それにしても俺としたのが女の戦闘機乗りにしてやられたとは、と彼は恥辱の余り歯ぎしりして呟いた。拳銃

銃はと探したがどこにもなかった。

「ユア、ガン？」

彼女は風防に片肘を寄せ、彼の拳銃を擬して、ニッコリと微笑んだ。切れて居る座席バンドをかなぐり捨てた彼は憤然として立ち上ろうとしてよろめいた。

「おとなしくしないと射つわよ。」

銃口をこめかみに押当てられた彼、死線を越えた反動からか不思議にも命が惜しくなった。彼女は本当に射つだろうと彼は考えた。それに、相手が女性である事も彼の闘志を鈍らせた。

「相手は女性一人だ。おとなしい振りをして居ればチャンスもあるだろう。」

こう考えた彼は、顔をしかめ乍ら愛機の座席から這い降りた。愛機『旋風』は、名も知れぬ灌木の茂みに頭を突込み機尾を浮かせて居た。

「発火して呉れたら、よかつたのになあ。」

彼は地面にどつかと尻を下して愛機を眺めた。薄い砂の層の下に固い砂岩の層があるのが感じられ、赤ちゃけた沙漠が青空の下に緩く起伏して行渡す限り続いて居る。

「立つのよ」

腰を蹴られた彼は唇を噛んで婦人操縦士を睨み上げた。

「俺をどうするつもりだ？」

「あら、言葉が分るのね。おや大尉じゃないの。」

彼の袖章を見つけた彼女は青い眼を輝かせた。

「云う迄もないわ、連れて帰るのよ。さあ立って!!」

首のマフラーを外して彼の背后に回った彼女は、後手に縛ろうと

して当惑した。片手に拳銃を擬したままでは充分に縛り上げることが出来ないだ。

「困ったわ。仕方がないから応援機が来る迄待ちましょう。」

スピッツファイアーの方へ彼を追い立てた彼女は、彼を地面に坐らせ両手を頭の後ろで組ませて、自分は愛機の主翼に腰掛けて見下した。

「私はね、米空軍中尉エリザベス・テラードよ。フッフ、思いも寄らない手柄を立てたわ。『旋風』を殆んど無傷で手に入れるなんて。」

彼は自責と無念の想いで齒ぎしりしたが、両脚をぶらぶらさせ乍らも彼女には少しの隙もなかった。

「しかし、あなたも中々大した腕ね。先に一発お見舞してなきや五分五分の勝負だったわ。勿論最后には私の勝だけど。」

畜生め!! あんな距離から射ちやがって、まぐれ当りじゃないかと彼は思った。

「一二・七ミリで三〇〇米からじゃ、まぐれ当りだと思ってるだろう? どう致しまして。私にや自信があったのよ。ホホホ。」

「……」

「そんなことはどうでもいいけど、応援機おそいわね。早くしないとエンジンが冷えて始動し難くなるわ。」

拳銃を持ち替えた彼女は、シガレットに火をつけて深々と吸い込んだ。

「あら、スコールが来そうだわ。」

地平線の彼方から広がる黒雲を眺めて彼女は煙草を捨てて地上に降り立った。航空ズボンの腿はピッチリと張切って其のボリューム

を彼の腿に焼きつけた。

「手錠があればねえ。ウン、いいことがあるわ。」

彼女は、彼の体に残って居る座席バンドの切れ端しで彼自身の両脚を縛る様に命じた。

「早くするのよ。あら、両足を揃えてじゃ駄目。そうそう、そうして坐ったままで固く縛るのよ。」

拳銃で頭を小突かれ乍ら、あぐらをかいたままの両足首を自分で固く縛り合わせられた彼は、いきなり前に押し倒された。航空長靴で背や尻を蹴られ、両膝を大きく広げた恰好で漸く腹這いになった彼の腰の上に彼女はどっかと馬乗りになった。両足首を括り合わせられたままの彼は大柄な婦人操縦士の体重を腰に受けて、腿と股関節の痛みに叫びた。彼の背の上にマフラーを置いた彼女は、両腕を一本宛ねじ上げて其の上に重ね合わせた。彼女が両手を使い初めたので、拳銃を手から放した事を彼は気付いたが、もはや両手首は固く括り合わされて、もうどうする事も出来なかった。第一に、腰を磐石の重みで押えつけた彼女の体重をはね返す事は思いも寄らない事である。彼の両手首を固縛し終えた彼女は、彼の襟を掴んで引き起し、両足首のバンドを解いた。

「さ、乗るのよ。」

腿の骨が鈍く痛んで、顔をしかめる彼をせき立てた彼女は、スピッツファイアーの翼上に追い上げ、更に座席の中に追い入れ様とした。

「あら!!」

操縦席の背後の空間に彼を押し込むべく、座席の背を前に倒そうとして彼女は小さく叫んだ。半分しか倒れないのだ。彼女に襟の辺

りを掴まれて片足を踏み込んだ彼は、鋭い目で機内を見渡した。操縦席の背後には僅かな空間を残して無電機があり、其の後方は胴体燃料タンクが遮ぎって居る。外鉋には、被弾孔が五つ六つ散見された。彼女は座席の背を半ば倒したまま、無理矢理に彼を押込もうとした。

「駄目な様ね。そんなぶかぶかの航空服を着てるからだわ。」

再び地上に降ろされた彼は縛しめを解かれた。

「服を脱ぐのよ。」

シャツも脱ぎ捨てて、真白い六尺褌一本の姿で立った彼を物珍らしそうにジロジロと彼女は眺めた。

「それ、どうなってるの？ 除ってごらん。」

屈辱に全身を真赤に染めた彼の真正面に銃口が冷たく光った。思い切りよく取って捨てた六尺褌を見て彼女は嬉しげに白い歯を見せた。

「縛るのに丁度いいじゃないの。」

再び自分で両足首を固縛し彼女に馬乗りにされた彼は、自分の褌で後手に縛られた。砂岩のかけらが、彼女の体重で胸や腹に喰い込んで痛かったが、彼女が力一杯締めるにも拘わらず褌での縛しめはそんなに固く緊まらないのに気付いてほくそ笑んだ。今に見てろ、と彼は考え乍ら漸くのこと、座席の後ろに這い込んでうずくまった。座席の背を起して操縦席に坐った彼女は、長く残った六尺褌の端を引き寄せて座席の背に巻き付けて結んだ。座席の背後で中腰に膝をついた姿勢の彼は、顔や胸を座席の背に押しつけられた。

防弾鋼板が其の厚さを感じさせていつ迄も冷たかった。風防が閉まりプロペラがゆるく回転を初め、やがて爆音と共に銀盤となって

機が振動した。ロールス・ロースが全力で吠える。婦人操縦士エリザベスが離陸操作に没頭して居る間に、彼は縛しめをかなりゆるめることが出来た。彼の腹は決った。此のスピッツファイアーを奪うのだ。開戦直后一度だけ、鹵獲したスピッツで軽く飛んだ事がある。先刻見た所では、同型のものではないらしいが何とかなるだろう。巡航体勢に落着いた彼女に気付かれない様に身をもがくのは苦心を要した。スコールの中に突込んだらしく、機は上昇し乍らえらく揺れる。天佑と喜んだ彼は、動揺を粧うて必死に身をもがいた。時々手荒く頭や肩を防弾鋼板に打ちつけるもののかは、機がスコールから出た時には殆んど縛しめから脱して居た。突然大きく機がバンクして婦人操縦士が片手を挙げて振った。右少し上方に一機のスピッツファイアーが同じくバンクして居た。彼女が呼んだ応援機が来たのだ。

おそかった!! 唇を噛んだ彼は覚悟を決めた。なる様になるだろう。乱れた頭髮が額にかぶさるのを、防弾鋼板にすりつけて掻き上げた彼は呼吸を計った。最後の一もがき、矢庭に縛しめから脱した彼は、座席の横から手を回して、見定めておいた拳銃を彼女の腰から引き抜いて奪った。はっと振返る彼女の顔が驚愕で歪むのに銃口を突きつける。

「どけ!! 俺と代われ。」

嗚鳴った彼は忽ち思い直した。

「いや、さっきの所に引返せ。俺の機を銃撃するんだ。無電を切れっ」

爆音の中で彼の言葉を解したか解さなかったのか、彼女の動作は素早かった。機を上昇姿勢にするのと風防を開くのが同時だった。

次の瞬間、彼女の体は機外に飛び出して居た。機は忽ち失速してゆるく錐降下に移った。

「畜生。なんと安定の悪い飛行機なんだ。」

彼は罵り乍ら死物狂いで座席に這い出た。幾度か放り出されそうになつては必死にしがみつき乍ら漸く風防を閉めた彼は懸命に操縦桿を操つた。『旋風』に較べると、舵の利きは鈍く操縦は頗る重い。錐降から脱してホツとした彼は後上方に応援のスピッツの姿を認めて舌打ちした。増速しようとスロットル・レバーを引くとエンジンが咳き込んだ。あ、そうだ、反対だった。レバーを前方に押し切ると機は猛烈な出足で加速し、彼は座席に押しつけられた。バンドを締め乍ら急いで計器類に眼を走らせたが、馴れぬ配置では殆んど読み取れなかった。突如右側にスピッツファイアーがすーと出て来て雁行した。風防の中でこちらを見て居る操縦員は、真裸の男が操縦して居るのに驚いたらしい。ざまあ見ろ、驚いたか。彼は敵操縦士を、もう一度眺めてアツと叫んだ。此奴も女だ。はみ出した金髪赤い唇、確かに女性に相違ない。敵の様子を注視し乍らバンドを締め終えた彼は、矢庭に左垂直旋回で反対方向に機首を向けた。兎も角俺の機を探して炎上させねば、と彼は機位と針路を必死に探った。機は海岸線の少し内側を、海を右にして飛んで居る。大体こんな見当だ、よし。振り返る敵機は苦もなく距離を詰めて迫つて来た。スロットルは全開だ、速度計を探し、哩をノットに暗算で換算する。おかしい。もっと出る筈だ。射つなら射ちゃがれ、と彼は操縦装置を調べ回ったが分らなかつた。今度は左側に出て来た敵機の操縦席では、婦人操縦士が何やら手真似して居た。引返してついて来いと云うのらしい。勝手にしゃがれ、今に用が済み次第体当

り喰わせてやるからな。彼はせせら笑って眼を皿にして眼下に拡がる沙漠地帯を睨み回した。突如後方から火線が数条走って前方に消えた。威嚇射撃だ。彼の闘志がむらむらと燃えた。操縦桿の頭のボタンをぐっと押すと八門の機銃が小気味よく火を噴いた。ようし!! 彼は矢庭に強引な空戦動作に移って行った。

捕 虜

「矢張り駄目らしいわい。」

如何に秘術を尽しても、敵は案々と彼の背后に喰い下るのであった。初めても同然の機を操つての空戦はどだい無理であった。二機のスピッツファイアーはもつれ合い乍らいつしか海上遠くに出て居た。高度は下って僅かに一〇〇米。すっぱりと全てを諦めた彼は、針路をラパールに向けると直線飛行に移った。座席バンドを解き、六尺褌を引き寄せた彼は操縦桿を放し、よろめく機上でしつかりと締め込んだ。敵は性懲りもなく再び左側に寄り添って、しきりに引返せと手真似で命じて居る。絶好のチャンスと雀躍した彼は左に捻って体当りを試みた。無念!! 意の如くならない機は少し滑って空を泳いだ。危くかわした敵の婦人操縦士は怒り心頭に発したらしく、忽ち後に回り込んで迫つて来た。折角ここ迄漕ぎつけたのになあ、と彼が無念がる暇も与えず、敵の機銃弾は彼の機のエンジンを粉碎して居た。プロペラが四散したのを眼の隅に認めた瞬間、機は機尾から先に海面に落ちて行き、激しい衝撃を受けた彼は失神してしまった。

塩辛い海水に鼻を刺戟されて彼は気がついた。落ちてから未だいくらか経って居ないらしく、眼前には沈み行くスピッツファイアー

の特徴ある主翼が高く海面から突き出て居た。奇蹟的にも負傷らしい負傷もなしに機外に抛り出されたものらしい。頭上を舞う敵機は暫くの後、何かを投下して去って行った。仰向けに浮んだ彼は饅でも来て殺して呉れないものかと願ったが、油を流した様な海面は、正午近い太陽に灼かれて静まり返って居るだけであった。固く眼をつぶって居た彼は、微かな爆音に眼を開いた。周りの海面は、先刻投下された着色剤で黄色に染まって居た。近ずいて来た爆音は敵の飛行艇であった。苦もなく彼を発見して着水した飛行艇は外側の二ヶのエンジンを巧みに操って接近して来た。巨大な翼が彼の頭上にかぶさり、胴体の側方の扉が開いて二人の人間が体を乗り出した。「ロープを投げるわよ。」

水色のスカートに水色の上衣、紺のネクタイを締めた二人の婦人兵士が、制帽の下に金髪と、ブルネットを海風になびかせ乍ら叫んだ。

「もう一度やつつけるか。死ぬのは何時でも死ねるからな。」

腹を決めた彼はロープに掴まって艇内に引き上げられた。広々とした艇室内には、もう一人の婦人兵士が居て送話機に何か叫ぶと、艇は離水を初めたらしく爆音が高くなったが、室内では会話が充分出来る位であった。与えられた大きなタオルで彼が体を拭き終えると、一人の婦人兵士が窓に駆け寄って叫んだ。

「あっ敵機よ。戦闘機らしいわ。沢山居る！」

思わず窓に走り寄った彼に、三人の婦人は嘲笑を浴びせた。

「ホホホ、矢張り言葉が分るのね。テラード中尉も、そう報告してたらしいけど。」

「大尉だそうよ。フ、フ、フ、今のはちよっとからかって試して見

ただけよ。」

千切れ雲の他には何もない青空を眺めて齒がみした彼の手からタオルが取り上げられ、身体検査が始められた。

「裸じや調べようがないわね。」

それでも頭髮の中が掻き回され、耳、鼻、口の中迄丹念に調べられた。疲れ果てた彼は、大柄な白人女性三名を相手にする自信もないので、屈辱に耐えてされるままになって居たが、禪を取る事を命じられた時には腹が立って横を向いてしまった。

「あら、言葉が分らないのかしら？、それ、何て云うの？」

「えーとね、何とか云ったつけ。そうそう、FUNDOSHIとか云うのよ、たしか。」

命令に従わない彼は激しいビンタを受けて口惜しさに呻いたが、如何とも出来なかった。

体を震わせ乍ら漸く命令通りにした彼は、直立不動の姿勢を取られて前後左右から視線を浴びた。彼女達は三名共下士官らしく、スカートの腰ははち切れそうであった。

「ジャプーにしちやいい体してるわね。私、こんなしなやかそうなのが好きよ。」

ついで四つ這いになって検査された彼は男泣きの涙をポタポタとこぼした。金髪の婦人下士官が何かをカチャカチャ云わせて彼に近付いた。彼女の乳房は制服の下で一きわ大きい。

「もう検査は済んだのよ。あら泣いてるわ。おとなしくさえしてりや命迄取ろうとは云わないわよ。さ、可哀想だけど捕虜は捕虜なんだからね、手を背中にして……」

両手首が背後で手錠に繋ぎ合わされた彼はガックリと首を垂れて

坐り込んだ。両手首に嵌められた鋼鉄の感触は、彼をみじめな絶望に陥し入れてしまった。

「足を出して。」

両脚を前に投げ出すと両足首にも足錠が固く嵌められた。これでもう完全な捕虜であった。マフラーや揮で縛られたのとは訳がちがった。万一を希って両手をもがいて見たが、所詮鋼鉄の硬さを思い知らされるだけであった。彼に興味を失った婦人下士官達は集まってしゃべり合いを初めた。咽喉がカラカラに乾いた彼は、彼女達が飲んでいるコップを羨ましく見やったが、婦人達はもはや一顧だにせず、床に転がった彼を放置して声高く賑やかに談笑するのであった。

取 調

飛行艇が着いた所は、ポートダルインから少し北方に離れた基地であった。足錠で両足を短く繋がれたままの彼は、婦人下士官に両腕を抱きかかえられる様にして飛行艇からモーターボートに、そしてジープに移されて、司令部に連れて行かれた。一糸もまとわぬ身が何としても恥かしく情けなかったが何とも致方がなかった。後手錠と足錠を外され、薄茶色の制服を着た婦人憲兵に引き渡された。婦人憲兵の白い警棒に小突かれ乍ら、指紋を取られ両手の甲に整理番号を青くスタンプされると再び後手錠を嵌められて一室に追われた。そこには男女一名宛の将校と一人の婦人タイピストがデスクを並べて居た。婦人将校のデスク前に立たされた彼には、早速訊問が始められた。

「所属と官、姓名は？、それから年令は？」

情報将校らしい婦人下士官は、大尉の袖章のついた両腕を机上で組み、きびしい顔で彼を見すくめる。白人の女性として平凡な顔立ち乍ら深い堇色の大きな眼と、両眼から大きく離れて半月の弧を描いた眉が印象的であった。

「何か飲ませて下さい。咽喉が乾いて……」

婦人下士官が白い歯を見せて合図すると、背後で手錠の革紐を握って居る婦人憲兵がアイスウォーターの紙コップを口に当てがって呉れた。一息に呑み乾して蘇生の思いの彼に、間髪を入れず鋭い訊問の声が再び浴びせられた。

「海軍大尉武林一郎。二十五才……」

わざと自国語で答えると背後の婦人憲兵の手から革鞭が腿に飛んだ。

「ヒーツ……」

押え様のない悲鳴が彼の口から洩れるのを苦笑いして眺めた婦人将校はインターフォンで通訳を呼んだ。

「先刻、英語で水を呉れて云ったじゃないの？ フッフ、ま、いいわ。」

現われた通訳は明らかに二世の若い女性であった。みじめな彼の姿をさげすむ様に眺めて

「私が通訳してやるからね。全部正直にしゃべるのよ。いい？」

と男の将校のデスクに横坐りに腰を掛けて脚を組んだ。ストッキングの縫い目が小憎らしい程まっすぐだった。

「官姓名と年令は分ったわ。所属は？」

黙って居ると再び鞭が鳴った。

「ヒーツ。……ラ、ラパール航空隊三〇二戦隊……第三分隊長……」

「機種は？」

「旋風…艦上戦闘機…」

「フン。お前の分隊の編成は？」

「……十二機……」

婦人将校が合図すると、今度は革鞭が胸に鳴った。二つ、三つ、四つ……

「嘘つく痛い目に合うのよ。分った？ 知ってる事も混ぜて訊くからね。」

身をよじって呻く彼に嘲笑が浴びせられた。

「三〇二戦隊の長の名と其の編成は？」

「……ウッ……」

「フン。じゃ、あとで又訊くわね。ではお前の経歴は？ 実戦部隊に配属されてからでいいよ。」

「……」

今度は内股に鞭が炸裂した。

「ヒーツ、ヒー……。小村航空隊から…空母高城乗組。それから…」

「それから？ 鞭が欲しいの？」

「空母怒竜戦闘機中隊長、そしてラパール基地に来ました。ああ、手錠を少しゆるめて下さい。もう痛くて……」

「駄目。ミッドウェイの時には高城に乗ってたのかい？」

「い、いえ。出撃の少し前に怒竜に転属しました。」

婦人将校の顔には少し失望の色が浮んだ。

「怒竜の要目を云え。いつ出来た？」

今迄黙って居た男の将校が太い声で押しつけるように訊ねた。

「……」

「同型艦がある筈だ。名を云え」

黙って居ると鞭が背に続け様に鳴った。

「フン。流石に云わないな。ま、あとで云わせてやる。」

「所で旋風という艦上戦闘機だけとお前はいつから乗ってるの？」

「怒龍に乗ってからです。」

「性能は略、どの位？ 脚はずい分長いらしいね。」

「……」

「ま、それはいいわ。お蔭で、お前の乗ってたのが手に入ったからね。少し修理すればテスト出来るわ。フ、フ、フ」

彼は自らの責任の大きさに今更の様にのいた。

「ホホホ、少ししよげた様ね。所で暗号のことだけど……。日によって乱数を変えるんだろ？、少し教えてくれない？、お前が平常使ってた硬度の分で結構よ。」

「……」

「『秋の夜長に尺八の囁り泣き』って何のことなの？、『野原に陽が沈んで子供が四人』て云うのは？」

「知りませんよ。そんなこと。」

「そう。じゃあとで訊くわ。所で『旋風』の次の戦闘機を見たり聞いた事ない？」

彼はラパールに出発する直前、内地の基地で見た『烈風』の事を思い出した。「烈風って云うらしいんだけど…」

彼はギクリとして思わず顔色が変わったのが自分でも分った。二人の将校は眼顔で領き合った。

「知ってるな。云えッ！」

革鞭が雨と降って、彼は悲鳴と共にガクリと膝をついて喘ぎ、そして床に転って鞭を避け様とはかない努力を続けたが、やがて気を失ってしまった。

気がついて見ると手錠を外されて監房に入れられて居た。すぐやって来た婦人憲兵がかなり立派な食事を運んで呉れた。一時間ばかり経つと曳き出されて薄暗い室に連れて行かれた。中央においてある鉄の寝台の様なものの台上には、革や鉄のバンドの様な物、鉄製の訳の分らない物等が固定してあり、又周囲には鉄の支持架で以ていろいろな器械の様なものが沢山支持され、無線類が張りめぐらしてある。

ゴム製のサポーター様のものを穿かされた彼は、三名の婦人憲兵の手で有無を云わず台上に仰臥させられた。両腕を斜上に伸ばし両脚を上げた恰好で、手首、肘、肩、腰、膝そして足首ががっしりと革バンドで固定される。台上を滑って来た頑丈な金具がこめかみの所で両側から頭部を強く締めつけ、そして金具のねじが回されると頬骨が上から引掛けて押しつけられた。同時に別の婦人憲兵の手で口に鉄棒を横啣えにされ両端を台上に固定される。唇が裂けそうに痛んだ。首に鋼鉄の首環ががたりと嵌められると、これでもう動かせるのは手足の指だけである。両足首から足先にかけてそれぞれ何かかぶせられ足裏に柔かいもの触った。両腋下にも何か取付けられた。頭上と腹の上に何か器械が位置を調節されて支持された。どうせ拷問なんだろうが、どんな目に合わされるのかと、彼は不安と恐怖の念に駆られるのを如何とも出来ない。

額にポタリと冷水が一、二滴落ちて来た。続いて両方の太腿に痛烈な痛みが走った。

「こんなもののね。さ、一晚中ゆっくり苦しむといいわ。フ、フ、フ、今十八時よ。」

最後に彼の両腕の静脈にゴム管の先の注射針を一本宛突刺すと婦人憲兵達は立ち去ってしまった。直ちに額のだ真中にポトリ、ポトリと冷い水滴が一滴宛数秒間隔で規則正しく落ちて来た。

最初は平気だった彼も、忽ちにして喘ぎ初めた。何とも形容出来ない苛立たしさと擦ぐったさどが、額のまん中から脳の内部へ、そして全身へ波及し、彼は眼をパチパチさせたり額の皮膚を動かしたりして懸命に耐えた。頭部はそれこそ微動だも出来ないし、水滴は狙い違わず同じ箇所無限に落ちて来るのだ。彼は大きく胸を波打たせ、くつわを噛まされた口からは訳の分らぬ喚き声をあげた。全身に脂汗がじっとり滲み出て行くのが感じられる。

突然両足裏と両腋下とを擦ぐり器が柔かく擦り始めた。自分の呻き声が、室内に反響するのが、微かになり息も止まりそうになった時、漸く器械が停った。ポトリ、ポトリ……額には無限に冷い水滴が落ち続けて居た。又もモーターが回る音。又擦ぐりか、と全身を固くしたが、水滴が滴たり落ち続けるだけであった。と思った瞬間右の太腿のやや内側に裂く様な激痛が走った。サポーターの内側は既に濡れて居た。又もモーターの音が長く長く続いて、左腿に激痛が襲った。鉄のくつわを砕けよとばかり噛みしめて激痛の名残りに脂汗を流すうち、額に落ち続ける水滴が無限の焦燥感に駆り立ち始める。太腿を打つのは、モーターによって振り下ろされるピアノ線であった。ピアノ線の鞭は全く不規則である。モーターは数秒後に再び回り初めるかと思えば一時間以上も黙って居る事もあった。又モーター始動後、鞭が振り下ろされる迄の時間も、全く不規則であ

る。そして左右すらも全然予測がつかないのであった。振り下ろされた時の痛みもさること乍ら、今か今かと回り初めるモーターの音に聞耳を立て、今度は振り下ろされるピアノ線の鞭を手に汗握っておのき待つ気持というものは全く堪らなかった。全身を硬張らせて一撃を待つ間、ビクとも動かせない額の真中に水滴が規則正しく滴たり続けるのである。操り器も全く不規則に作動して彼を苦悶させた。そして覚醒剤と強心剤とが自動的に腕の静脈に注射される仕掛けなのである。やがて彼は死んだ方がましだと思ったが死ぬすべもなかった。全身は溶けた鉛の様に熱っぽく、そして、芯は綿の様に砕け散り、動悸は激しく不規則で、胸は張裂けんばかりの息苦しさ。しかし頭脳と感覚は飽く迄も冴えに冴えて、与えられる苦痛を割引きなしに感じ取るのであった。

永遠とも思われる一夜が漸くや々と明け、現われた婦人憲兵達がスイッチを停めて呉れた。額に落ち続けて居た水滴がハタと止まった瞬間、眼前がパッと明るくなり、そして次第に昏くなって行き、頭の芯に嵌められて居たタガがゆっくりと、弛んで行く様に感じられた。台上の固縛から解かれ、助け起された彼は、全身の皮膚から分泌した得体の知れぬ物質が台上に薄くこびりついて居るのを昏い両眼で見た。サポーターの中は、もうとても気持ちが悪かった、室の隅で微温湯のシャワーを充分に浴び、少し眼が見える様になった彼は自分の両腿のむごたらしさに眼をそむけた。一晩中、機械の力で殆んど同じ所を鞭打たれた太腿は、見るも無残にざくろの様な口を折り重ねて見せて居た。鞭痕の手当を受け、流動物の食事を与えられた彼は直ちに取調べ室に曳かれた。もはや、抵抗はおろか、歩くのさえ覚束ない彼の両腕は背後にねじ上げられ、非情な手錠が音高

く両手首に喰い込んだ。膝を折って床に坐り、上体を深く倒して喘ぎ続ける彼は、自分の腰を靴で踏みつけて後手錠を嵌める婦人憲兵の冷酷さが恨めしかった。いざる様にして情報将校達の前に曳かれた彼を待つて居るのは又してもきびしい訊問であった。昨日と同じ面々の男女は、寝足りて爽やかな顔つきで朝のコーヒーを香り高く啜って居た。

拷問

「どうお？、気分は。」

正面の婦人将校がコーヒーを干し終え乍ら冷笑を浮べて云った。立って居る事の出来ない彼はボロの様に床に這いつくばって居た。「いいかい？、知ってる事は全部云うんだよ。そうしないと今夜も又……」

彼は腹の底から震え上ってしまった。しかし妙な隠語の暗号のことは全く知らなかったし、空母怒竜と新戦闘機「烈風」の事は辛くも押えた。帝国軍人が捕虜になるのさえ耐え難いことなのに、拷問に耐え兼ねて重大な機密を洩らす等と云う事は、彼の自尊心の最後の一かけらが許さなかった。

「は、ほんとうに知らないのです。ほんとに……」

自分の声が思わず知らず哀願の響を持って来るし、額を床にすりつけた姿のみじめさを思うと、彼は情けなくて泣声になってしまった。

「知らない筈はないよ。よしよし、じゃ今から又寝台に寝かしつけて上げるわ。」

「そ、そんな……。殺、殺してくれ。頭に一発射ち込んで呉れ。お願い

いだ。」

婦人将校と男の将校とは何かヒソヒソ相談していたが、彼をそのまま独房に帰してしまった。昼食後、再び曳き出された彼は、今度は医務室に連れて行かれた。医務室に入る前に婦人憲兵は腰から手錠を取り出して彼の両足に嵌め、後手錠を検査した後、警棒で彼の尻を突いた。医務室の匂いを強く鼻に感じ乍ら、床に四つ這いになって長いこと待たされた後、出て来た看護婦によって、両尻に太い針で大きな注射を二本宛射たれた。其の注射の痛い事と云ったら、彼はつるつるする床にしがみついて呻き続けた程であった。

「此の薬はとっても高いのよ。此のジャブーはそんな値打ちのある捕虜なの？」

美しく化粧した看護婦は、彼の体を汚らわしそうに見下ろして注射針を拭い乍ら呟いた。

今彼に射たれた薬が、ノイロン即ち死に対する極度の恐怖心を強制する自殺防止剤の初期のものなのであったが、彼が知る由もなかった。

「ジャブー。今射ったのはね、毒薬なの。二十四時間後にキツチリ効いてお佗仏よ。今十四時ね。中和剤を射たなきや明日の今頃はもう冷たくなってる筈よ。フ、フ、フ」

看護婦の声を聞き乍ら独房に帰った彼は、今度は後手錠のままで翌朝迄放置されたのであった。六割頭の彼は、看護婦の言葉を信じてしまい、むしろ望む所だと喜んでいたが、夜半頃から死ぬのが無性に恐ろしくて堪らなくなってしまうた。此のまま生きて居た所で苦痛と屈辱の日々があるだけだといくら心に言い聞かせても無駄であった。明日の午後二時には死んでしまうのだと考えると全身に脂

汗が浮く程怖ろしかった。堪え兼ねて呻いた彼には嵌口具が嵌められてしまった。朝おそく房から曳き出された彼の眼は、もはや虚ろに据って居た。取調室には電気椅子の様な木の大きな椅子が据えられ、一人の裸の男が革バンドで縛りつけられて居た。彼と同じく捕虜らしいが全身には鞭の痕が生々しく、ぐったりした男は眼をつぶって小刻みの息をして居た。

医師が現われて一郎の胸に聴診器を当てがった。婦人将校が口を開いた。

「お前もいい加減にしゃべらないと其の男の様にしてやるわよ。其の男はね、お前と同様捕虜なの。少女に乱暴しようとしたから罰をこれから受けるのよ。」

木の椅子の傍らのボンベに接続された太い針が男の腕の静脈に刺込まれた。坊主頭で肋骨も露わな其の男はビクリとしたが覚悟を決めて居るらしく直ぐに固く眼をつぶった。

「さあ、バルブを開くわよ。けどあんまりいい気持ちじゃないわね。」婦人将校がパイプについて居る栓を捻るとシューッと音がした。

数秒の後、男は苦しそう喘ぎ初め、やがて全身を硬張らせ口から泡を吹いてガクリと頭を垂れた。死んだのである。彼の心臓は恐怖の余り飛出しそうになった。煙草に火をつけた婦人将校は

「分つただろう。血管に究気を入れるのよ。すぐに心臓麻痺で死んでしまうわ。さ、今度はお前の番よ。」

聴診器を彼の胸から外した医師は大きく呟いた。

「効果充分ですな。心臓が破れそうになってますよ。それに不規則ですし。ハ、ハ、ハ」

男の死体が運び去られた椅子に、今度は彼がゴム製パンツを穿か

されて容赦なく固縛された。胸や腕に電極やら電線を結ばれた彼は恐怖で眼もくらむばかりだった。嵌口具と云うものが、此の様に完全に発声を封ずる物とは知らなかった彼は、哀願の声を洩らそうとして無益な努力を繰返すのであった。

「其の無線はね、嘘発見機に繋いであるのよ。嘘ついても直ぐばれるからね。」

右腕に太い空気針を刺込まれた彼は、殆んど失神せんばかりだった。嵌口具が外された。冷静であれば、彼等の主眼点が脅かしにある事は容易に知り得たであろう。殺してしまいう人間を嘘発見機にかける必要はないし、又看護婦の言葉が本当なら彼は午後には死んでしまう筈なのだ。しかし恐怖に両眼も飛出さんばかりの彼には其の様な判断は思いもよらない事だった。すさまじい恐怖の慄きが彼の口から断続し、骨も折れる程固く締められた革バンドや金具がギシギシ、カチャカチャと鳴った。婦人将校の白い右手がゆっくりとバルブに延びて指が掛ったのをかすむ眼にボンヤリと認めた彼は、既に咽喉が痺れて声も出ず、唯大きく口を開いて激しく喘ぎ、そして涎れをダラダラと流すだけであった。

「フ、フ、フ、観念したの？、急に静かになったじゃないの。」

婦人将校はバルブを指に当てたまま、彼を見据えて云う。

「命だけは助けて上げようかしら。」

マニキュアした白い指がバルブから離れ、彼は全身の硬直が弛んで行くのを感じた。便が洩れて行くのを止めようがなかった。

「訊問に答えれば助けてやってもいいわ。」

彼女の口辺に冷い笑みが浮んだ。

「それとも……」

細くしなやかな指先が再びバルブに延びて、彼は絶叫して身をもがいた。

「申し、申し上げます。命だけは……」

かほそい哀願と屈伏の声を、痺れた咽喉から漸く絞り出した彼を眺め、婦人将校の頬に満足そうな笑みが浮んで直ぐ消えた。口許がひき締って薑色の両腿が鋭く彼を見据えた。

「よし。では訊ねるわ。怒竜の要目からにしようね。排水量は？」

「たしか……三七〇〇〇屯と聞きました……」

「速力は？」

「三十六ノットは充分出ます。」

「飛行甲板は装甲してるの？、何インチ」

「薄いですけど装甲してます。五センチ位です。中央部だけですけど。はっきりとは知らないんです。ほ、ほんとです。」

「搭載機数と編成は？」

彼の責任感と恐怖心とが激しく相克した。

「云わないの？、じゃ……」

指がバルブに延びた。

「ギヤ……云います云います。……『旋風』二十四機。『天山』

三十六。……」

「それから！」

「彗星二十四機……です。補用機は各四機宛……」

「ウン。では怒竜の姉妹艦は何隻？、名は」

「……全部で……三隻……」

嘘発見機を睨んで居た医師が合図した。

「嘘をついたね。一度だけは許してやるけど二度と嘘を云うと……」

「あっ。お、お救し下さいまし。全部で四隻です。怒竜と蟠竜、そして…海竜です。雷竜と迅竜は機装中…。」

「今どこに居る?」

「し、知りません、は、ほんとうです。」

「フン、本当らしいね。えーと次はと……。『烈風』は生産に入っただの?」

「未だだと聞いてます。第一線に配属されるのは来年の春頃だと云うことです。」

重大な事項をべらべらと喋り乍ら、彼は自責と恥辱の念に涙を流した。

「発動機はどんなの?」

「光三二型。三重星型二十一気筒、離昇二五〇〇馬力です。」

途端、鞭が頬に鳴り、煙草の火を肩に押当てられた。

「ヒッ…ウッ」

「光三二型は離昇二二〇〇だよ。」

「そ、そうですか。聞き違いです。ほんとに間違ひなんです…」

「フン。そう云う事にしといて上げよう。速力は?」

「よ、よく知らないんです。旋風より二十ノットばかり早いと聞いてました。」

彼は乾き切った唇を、乾いた舌で舐め、鞭の痛みが灼く様に残る頬を歪めて呻いた。

「脚の長さは?、兵装は?」

「航統は旋風と殆んど変らない筈です。火力は二〇ミリ四門……」

「それじゃ『旋風』と同じじやないの?」

「そ、その代り、弾量が倍近いんです。装甲も大分してある様です

し…」

きびしい訊問はなおも続いて、知らない事を訊かれる度に彼は脂汗を流して震えおののいた。洗いざらい喋らされて、声もかすれ精根尽き果てた末、漸く赦された彼は、底無沼に引摺り込まれる様にながらと首を垂れた。訊くだけ訊いた婦人将校達は、もはや彼には全然関心を失った様子で、自席で音高くコーヒーを啜った。腕の針を静脈から抜かれた彼は全く蘇生の思いがした。訊問が済んで利用価値の無くなった彼は、もはや一介の捕虜である。ジープに乗せられて捕虜収容所に送られ乍ら、彼は後手錠の肩を震わせて男泣きに低く啜り泣きを続けたのであった。

捕虜収容所

捕虜収容所はポートダルの市中にあつて、大きな倉庫を改造したものであった。彼の両手から外した手錠を革サックにしまい込み乍ら、婦人憲兵は白い警棒で彼の頭を小突いて若い赤毛の婦人に引き渡した。薄茶色のスカートに上衣、薄い茶色のネクタイを締め制服姿の六尺近い婦人警備員に監視されて、彼は花模様を散らした腕も露わな赤毛の娘の手で、頭を坊主刈りにされ、ホースの水をしたたか浴びせられ、そして胸と背に捕虜番号を、額と両尻に此の収容所での整理番号を黒々と刷り込まれた。六十センチ程の重い鎖の両端の鉄環が鋏打器で両足首に嵌められた。別の少々細目の鎖の一端が足鎖の中央を前で吊って、腰を強く締めつけて一巻きし鋏が打ち込まれた。腰に喰い込んだ鎖と、太腿の内側あたりに触れる鎖が冷たかった。差出した両手首に、メッキのかなり剥げた手錠が音高く喰い入った。うなだれた彼の眼前に、赤毛の娘のワンピースを

盛り上げた胸が、そして幅広に腰をくびった黒い帯の下方には花模様様の裾が爽やかに拡がって、彼は急に切なくなつた。白い胸許からの匂いが悩ましく、生れたままの姿で若い異国の娘の手で鎖錠を施されて居る自分の姿を考えると、彼は余りのみじみさに鳴咽がこみ上げて出た。しかし、大柄な婦人警備員のはち切れそうに豊かな腰サックに納められた大型拳銃を見ては、如何とも仕様がなかった。

鞭で追い込まれた所は四方がコンクリート壁の大きな室で一隅に今潜った小さな鉄扉が重々しく光り、天井は網の目の様な鉄格子で、其の上に高くスレートの屋根が見える。捕虜達は労役は出払って居るらしく、長方形のコンクリートの床には何一つなかった。四方のコンクリート壁の所々には、高く低く計十ヶ程の鉄環が黒々と埋込まれて居た。茫然と立ちすくむ彼の背に二つ三つ革鞭を当てた赤毛の娘は、鎖を鳴らせて身をもだえる彼の悲鳴を後に、物も云わずに立ち去った。鉄扉が軋んで錠の音が向う側で聞えた。コンクリート床に鎖を鳴らせて崩折れた彼は暫く経つと忍び泣きに泣き初めた。心ゆく迄彼は泣いたが、辺りはシンとして物音一つしない。突然爆音が近付き、頭上を通過した。単発機の編隊である事は彼には直ぐ判った。突然、捕われの身の実感がひしひしと胸に迫った。青空の断雲を截って上昇反転する戦闘機の姿を臉に浮べて、彼は、身もだえして壁の固さを叩き、突伏して手錠を床に鳴らせて歯ぎしりをした。しかし鉄鎖ある身にはもはや叶わぬ事であった。きびしい訊問と拷問を受けて来た彼はやがて泣き疲れて死んだ様に眠ってしまった。気配に眼覚めた彼は、はね起きようとして、手錠の硬さに呻いた。労役から帰った捕虜達が鎖を鳴らして追い込まれて来たのであった。

其の収容所には、十数名の正規警備員と三十人程の民間の志願者達が勤務して居り、其の大半は女性であった。そして、帝国軍隊の将兵も案外多数捕虜として繋がれて居た。四十人程度を収容した監房が十ヶ、計四百名近い捕虜が居たのには彼も意外に思うと共に気が楽になった事であった。彼の房に追い込まれた捕虜達の額と尻の整理番号はすべて七百台である。彼の番号は七三八号、そして其の監房は第七号室であった。囚人達は何れも彼と同様、生れたままの姿で手足を鎖錠され、更に二名宛腰を一米半程に連鎖されたまま、疲れ果てた様子で床に倒れて喘いで居る。ひっきりなしに鞭音と悲鳴が交錯し、白人女性の罵声があちこちに飛んだ。

「ちよつと立つのよ。」

「ヒーッ」

いきなり胸に鞭が飛んで来て、彼はよろよろと立ち上った。白人にしては小柄なブルネットの婦人が、七三七号と一緒に彼を連れ出し、重い鎖を二名の囚人の腰鎖の後ろに鋏で留めて鋏打器を鳴らせた。

「お前だけ未だだったわね。ホラ。」

示されたバケツの底には残飯類が汚らしくこびり仕いて居た。手錠が固くてズキズキ痛む両手を揃えて手摺みにすくっては見たものの、流石に口にする事は出来なかった。別のバケツの水だけを啜って居ると、ブルネットの婦人はさっさとバケツを取上げ、床に鞭を鳴らして囚人達を監房へせき立てたのであった。

監房の床には既に囚人達の大半が死んだ様に眠って居た。彼を入れて三十八名の中、十名程は頭全体を黄色に塗られ、首には鉄環をそして手錠は後手に嵌められて居る。そしてあの残酷な「錠」をピ

ツチリと嵌められて居た。彼等は所謂『重捕虜』で、收容中に重大な反則をした連中なのであった。更に反則を重ねると、今度は国際捕虜取扱協定の保護を剝奪され、鼻環なんかをつけられて一般犯罪者並みに監獄にぶち返まれてしまうのである。しかし大抵の場合、何かの実験材料にされてしまうのが普通であった。

一郎達二名は、空所を探して床に横たわった。七三七号は彼よりも二つ三つ年下の男で、一見きやしやな体格をして居て笑顔の可愛い青年であった。もっとも、七三七号の笑顔等を見たのは稀だったし、又其の体つきに拘わらず芯は強い事を後になって知ったのであるが……。

頭上の格子天井の上を歩き回って監視して居る婦人が下から仰ぎ見られた。スカート姿の彼女達は全く平気な顔で囚人達を見下し乍ら格子天井の細い鉄板の通路に靴音を絶えず響かせて居た。

「あーあ、今日も暮れたか。君は今日来たの？」

七三七号は両手で顔をこすり乍ら話し掛けた。

「そうか、海軍の飛行大尉さんか。俺は学徒動員の、新米歩兵少尉さ。輸送船が沈められてさ、独りで三日三晩頑張ってたら敵艦に拾われたよ。任官して十日も経たない中に捕虜さ。」

近くに寝て居た黄色頭の男が、頭上を歩く婦人を血走った眼で見詰め、足の拇指を反り返らせて太く呻いた。後手錠の腕をもちいて起き直った其の男は、苦しそうに喘いで、逞ましく厚い胸を大きく波打たせる。

「彼奴、土方の小頭をしてたんだ。少々の労役なんか全然こたえないらしいんだな。可哀想に。」

頭上の婦人の叱り声が降って来た。

「七一〇号。何してるの？、三日前に錠を外してやったばかりじゃないの。」

言葉を解したかどうか、七一〇号は顔を歪ませて、恨めしそうに頭上の白人女性を仰いで全身をビクビクさせ、そして自らの体の一部を見して大きな涙をボロボロとこぼした。

「仕事かい？、俺はもう半年以上も、ここにぶち込まれてるけど、ドックで船の垢落しか、又は防空壕捻りばかりさ。女共にいたぶられて癪にさわるけど仕方ないよね。俺なんか要領よくやってるから大分可愛がってくれるぜ。お前が来る迄は連鎖なしでさ、鞭を当てられた事も滅多にないよ。フ、フ、フ、おい、七一〇号。息を詰めて居て見ろよ。そして古兵にビンタを喰ってる所でも考えて見るんだな。おや、痰を吐きかけられちゃったのかい？、喚くのをやさないと、又ぞろホルモン療法で楽にしてやるとか云われて、黄色い臭い液を吞ませられてしまうぞ。」

漸く七一〇号も鎮まった様子で、学生出身の七三七号も暫く黙って居たが、やがて独りで呟き始めた。

「見よ、白き雲行く。」

忘れ居し良き歌の

微かなるメロディにも似て

濃青の空を流れ行く……」

職業軍人である彼七三八号囚には、其れがハルマン・ハッセの詩である事は知る由もなかった。

「かくて我等の小さき奥津城は
明るき道の傍らに
並びて二つ立つならん

そして時来り時は過ぎ

明日が来りて明日が逝き

風は幾度来て過ぎん……」

低い朗詠はやがて原語に変わって韻を踏んだ。意味は分らぬ乍らも、武林一郎は遠く離れた故国を、そして故郷の山や川や野を想って涙ぐんだ。眼をこすろうと両手を動かすと、手首の骨に手錠が痛かった。

「静かな星空の下

沖合遠く小舟をやる人

彼は其の時ふとおののいて悟るのだ

そのかみの、幸わせな日々には

思いもかけなかった事どもを……」

彼は七三七号の脇腹を肘で突いて云った。

「おい。此の手錠を少し弛める事は出来ないのか。きつく嵌めやがって痛くて痛くて」

七三七号は吟詠を止めた。

「冗談じゃないぜ。鍵がなけりや、どうもこうも出来るものか。」

「畜生！ 檻の中で迄手を縛っとかなくてもいいじゃないか。」

「そんな事を俺に云ったって仕方ないよ。所長に頼んで見な。よく肥えたやさしそうなおばさんだぜ。」

「畜生奴。それに腰の鎖も苦しい程喰い込みやがる。ああ、何か喰べたいなあ。腹が空って眼がクラクラすらあ。」

「おい。教えといてやるけどな、其の手錠は外されたら腰に吊って自分でいつも持ってるんだぜ。鎖に金具がついてるだろ。そして嵌められたり外されたり時には押載いてサンキューサーと云うんだ。」

女共喜ぶぜ。」

「馬鹿野郎！ そんなこと出来るもんか。俺達は懲役囚や奴隷じゃないんだぞ。両手を揃えて出すだけでも頭に来る位だ。」

「ハハハ、まあ勝手におしよ。所で今日、君を処理した女は赤毛が燃える様な娘じゃなかったかい？、そうだろ。あの娘が又きついんだぞ。御きげんを損なうと忽ち重捕虜にされちまって首環をガチャン、気を付けろよ。ヘマすると吊られて口から泡を吹くぞ。」

七三七号は壁の鉄環を顎で示した。

「所で俺達はいつ迄でもこうされて暮すのかな。早く自由になりてえなあ。いつ迄鎖をつけられて過すのかなあ、見当もつかねえってというのが堪らねえよ。」

「順繰りにボツボツ船に積み込まれてる様だぜ。どこに連れて行かれるのか知らないけど。しかし、君は今日繋がれたばかりじゃないか。こぼしたって仕様ないよ。おや、顔に鞭喰ったんだな。それだけは滅多にしないんだがなあ。暴れたんだな。」

訊問の事は恥かしくて云えなかった。

「眠くなった。寝るぜ。ああ云つといてやるけどな、仮に捕虜から釈放されても、もっともっと辛い生地獄がお次に待ってるんだぜ。」

「……………」

「友軍がやって来るか、戦争が終るか、しか俺達が赦われる場合はないけどな途端に軍法会議にかけられて、今度は衛戍監獄行きさ。」

「ほ、ほんとか？」

「知らないのか？、軍刑法第三十二条の俘囚罪で奴だよ。君には其の上に兵器遺棄罪がつけ加えられて、さしずめそうだな、先ず十年から十五年だな。」

(未完)

イエロー・セックス (続)

芳 野 眉 美

ゲイバーにて

その夜も寝られなかった。生理的な欲求でどうにもならなかった。一度消した電気をつけ直して夜具の上に坐った。このままでは眠れそうになかった。無理に寝たとしても、また女の夢に悩まされるのかと思うとうんざりした。アパートに帰るまで、客を拾いそこねた女たちの群に幾度かぶつかってはいた。あっさり処理してしまえばよかったのかもしれない。その気が無かった。商売女には興味が無かった。

夜具の上で漫然と週刊紙をひろげた。タバコも吸いすぎてはまずかった。その週間紙に

ゲイバーが特集されてあった。カラーのグラビアには、セシルカットを赤く染め、黒いボートネックの少年が笑っていた。大きな金の輪のイヤリングが目立った。そのボートの下には、バー『羊子の店』のマダム羊子とあった。美しい少年であった。

そのバーがアパートから十分と離れていないことに気がついた。ふと行く気になった。時計を見ると、午前三時前であった。まだ一時間ほど遊べる。同性愛に興味を持っているわけではない。ジャンウエネの作品は知っていても、そんな性傾向は持っていない。またゲイボーイを理解するほど、その知識も持ち合わせてはいなかった。ただ、ゲイバーのボ

ーイたちは、かならずしも真性の同性愛ばかりではないというは知っていた。単にビジネスとして、シスターボーイと呼ぶほうがふさわしい、エコノミックボーイが多いはずである。男客より女客のほうが多いゲイバーもある。

こういう精神状態では、気晴しにそんな雰囲気に触れてみたいという気を起こしたのに過ぎない。軽い気持であった。そんな気を起こすほど、やりきれなかったのだ。いわゆる『オンス』なのだ。自然発散を持つのもいやらしい。こんな時には失敗ばかりする。その一日が憂鬱だ。

「芳が荒ている」

とバーの女の子が表情をこわばらせる。客と喧嘩を起しかねないからだ。麻薬がきれた時の娼婦のように、眼つきが鋭く沈む。こんな時には、なんでもいいから発散させるに限る。

『羊子の店』はすぐわかった。横丁の一つの露地から露地とぬける一角にあった。そこだけネオンが明かるかった。露地はひっそりとして人影は無かった。ドアを開けてバーに入るのに意外に勇気がいるのに気がついた。なんとなく照れくさい。しかしここまで来て帰るのはしゃくだし、勝手にしゃがれとドアを背中であけてゆっくり入った。

「いらっしやいませ」

と十七八の少年が腕にからんで、

「あら、スリースターの芳じゃない」

と云った。

「お宅は誰だ」

「失礼しちゃうわねお、客様とバーに行ったじゃないの」

「そうか」

「まあ、憎らしい」

男の声でもないし女の声でもない、中性音のつぶれた、それでいてなんとなくセクシイな声なのだ。眼の前のボックスで男と男が接

吻していた。客同志らしい。羊子の店は三つばかりボックスのある、小さなスタンドバーだった。カウンターに坐るとビールを注文した。キャッシュにした。その方が気が楽だ。少年がわきに坐って

「私、みどりです。どうぞよろしく」

と挨拶した。黒のボートネックでありストラックスであり、サンダルシューズであり、この黒づくりの少年は、唇だけがやけに赤かった。セシルカットの中で唯一人ポニーテールであった。うしろ姿はどうしても少女に見えた。手の爪にも足の爪にも綺麗にマニキュアがしてあった。羊子は居なかった。

週刊紙をめくって、羊子のポオトを見て

「ママのファン？」

と聞き、壁にかけてある藤娘を指さして、

「ママよ」

とみどりは云った。

「綺麗でしょう」

「いつうちに来たんだ」

「十日ぐらい前かなあ、私、舞妓だった」

「わかった」

「またお客様を連れて行くわ」

「俺の前で、お連れさんと派手にキスをしたな」

「うそ」

みどりは身中をくねらせた。連れの客はハイクラスのバーのマダムタイプの中年の婦人であった。素人ではない。その見事な和服の着こなしは水商売の女と見受けられた、肥満しているというより、豊満という感じの婦人であった。

「私バージンなのよ」

と芸者姿の少年がボックスの中年の婦人に抱きついていて、かなり酔っていた。

「私のバージンをママに捧げるわ」

二三人の客が笑った。

「私ママの子供が生みたいの」

その婦人といまさきの若い男が、その少年を抱きかかえた。少年は暴れた。

有関夫人であろうか。それとも大店の夫人であろうか。若い男の連れが三人居た。店の子たちが四人つきつきりであった。そう美しい婦人ではない。四十年配と見受けられた。素人然としたぎこちない身のこなしようであった。この時間で素人でなければ未亡人であろう。

ふとみどりが唇を向けて眼をつむった。それを拒絶する理由が無かった。ぼくはみどりの頸に唇を寄せた。

「ずるいわ、みどりばかり」

と若衆姿の少年が肩を肩で押した。

「わたくし、香代子」

みどりの指が露骨にまつわりついた。

「ねえ、遊びましょう」

とみどりがささやいた。

「私のアパートで」

「用意してないよ」

「あら、そんなこといいのよ、私、お兄様が好きなのよ」

ぼくにゲイ気は無い。ゲイボーイと遊ぶということが理解できないのは当然だ。自分ではことわったつもりであった。そろそろ四時に近かった。ぼくは立ち上った。

「帰る」

「いや」

みどりが叫んだ。口笛が聞えた。誰かひやかしたもののらしい。

「マーテルで待っていて」

と、近くの終夜喫茶の名を云った。ぼくは頷いた。みどりと遊んでみても面白いと思った。みどりと香代子にいたずらされたことがひっかかっていた。そこにはなんともいえないスリルがあり（奇妙な）セックスがあった。知って三十分とたたないうちに、ビジネス

でなく、誘われたスピードが面白かった。同性愛に興味が無いぼくを頷かせる何かがあるにであった。

男が男と愛してはいけないという理由はない。女を求めるように男を求める場合もあるものだ。ぼくはみどりの誘いにのることにした。

みどりのアパートには羊子の店のバーテンが先に帰っていた。二人で借りているらしかった。畳はまだ新しかったが、調度品も無く四畳半の部屋は男くさかった。鏡の前の化粧品と、男ものに交って女ものの派手なブラウスが壁にかかっているのが、わずかに女の香を思わせた。バーテンは疲れていたのか背を向けて熟睡していた。みどりは並べて夜具を敷いた。

「きたないところで御免なさいね」

化粧をおとし、それでもさっぱりにした浴衣に着変えて、みどりはぼくを促した。

「彼寝ているから」

とバーテンの背中を見た。それは夫を寝かせてから云い寄る人妻を思わせるような軽い響があった。部屋はすでに薄明かるかった。そのバーテンとみどりが夫婦ぎどりで同棲しているということを、マダム羊子から聞い

たのは、一週間ほどして羊子の店に寄った時である。

「女の居ない国に行きたい（人間失格）」

と云った大宰治に敬意を表した。

ことわっておくが、ぼくは同性愛に興味は持っていない。

妊娠娼婦

母親に抱かれた幼児に激しいジェラシーを感じたのは、いつ頃からだったろうか。若い美しい母親にあやされている幼児を、石畳にごしごしすりつけたいというような、そんな小品を中学生の頃にクラス雑誌に発表している。性欲以前の問題であろうか。晩年の母しか知らない末子の、若い美貌の母親に対するコンプレックスかもしれない。このコンプレックスが、ぼくの性傾向、女性の尿に関心を持つということを決定したと云えないこともない。それは以前書いた。

この頃、やけに妊婦が眼につく。若い健康な妊婦を見ると、ジェラシーで鳥肌が立つようなこともある。コンプレックスがぐっと深く逆戻りしたのかもかもしれない。幼児を母親の腹部に居る時から憎んでいるのであるうか。そればかりではあるまい。その背後の

幸福な家庭を思い浮かべるからだろう。近頃のマーケットには、かなりの妊婦に眼を奪われる。それも見事にふくれて、臨月と思われる人が多い。季節の関係もあろうか。

羽村京子夫人も最近書いていられたが、妊婦のヌードフォト、強いては緊縛ヌードフォトが無いのは何故だろうか。週刊サンケイの裏紙に見受けたがネグリジェを着ていた。それでも公刊紙としては珍しかった。こんなおとなしいものでもいいから、モデルが許せるならばを発表していただきたいものだ。羽村京子夫人の作品に、緊縛した妊婦の押絵があった。初期の頃のことだ。

それを偶然ストリップショウで見たことがある。池袋だったと思うが記憶違いかもしれない。まだGストリングが許されていた頃でそれを見たくてよく劇場を歩いたものだ。性傾向の発端をそんなところに見れば、中学生の頃から自覚していたわけになる。ぼくはメリー松原が好きだった。一枚つつ衣裳を脱いでいって、Gストリングになったとき、全くショッキングであった。はっきりと妊娠線を確認した。そのストリッパーがその後どうなったかは知らない。ぼくの見たのは、その一度だけである。芸名も知らない。

新聞で妊娠している街娼の殺人事件を読んだ。拾おうと思えば妊娠している女は居るものだ。ぼくが遊んだ中に、臨月が三人居た。「今月なのよ」

とスカートをめくってみせた。

二人共家庭婦人と比べて腹部は小さくて失望した。岩田帯できつくまき、できるだけ目立たないようにしているからなのだろう。夜の生活とて、栄養も休憩も十分でないからかもしれない。

夜の女で中絶しないのは、その時に中絶費用が無かったのか、それとも一度悪徳もぐり医者にひっかかってばられた上、身体を手術で目茶無茶にしてしまった女だ。

その女は五カ月のときすでに臨月のようであった。九カ月目には完全に双子だと誰からも云われたその女もあきらめていた。紐になる男も居ないようであった。五十円ベッドハウスに居たが、山出しの大女であった。十九貫と云っていたが、二十貫以上越していると思われた。この女が妙にひっかかった。

午前二時、バーが終っても、その女に会うことがあった。アパートに帰る道順でもあった。女の顔を見ると、つい道草を食ってしまった。腹部が大きくふくれていく過程を半年に

亘って見たような結果になった。乳房は肥大型で大きくずっしりと重く固かった。乳首はやけに真っ黒く割れてちよっと唇を寄せる気がしなかった。白い乳液がたまにたれた。

腹部にまいた帯を解いて女を完全に裸にする。まんまるく張りきったこちこちに固い腹部に、ぼったりとした乳房が垂れさがる。それだけでぼくの目的は達しられるのだが、仰向けになったぼくの顔の上に、女はうんざりするほどもりもりしたポリウムのある臀部で腰をかけるのだ。あまりリアルになるので書きにくい。ぼくが何を求めているか行間でわかるだろう。

五十円ベッド・ハウスでは、まさか遊べない。女の常宿より、ちょっとましなホテルをつかう。ホテルの寝巻をひっかけただけの女が、用便をしているのを見たことがあった。それまで便秘だったらしく、かなりの量であった。ドアを開けてぼくは見つめていた。ホテルは静まって、化粧室の中は女と二人だけだった。強烈な健康な女の香が鼻をついた。妙に苦にならなかった。そんなぼくを女はぼくの顔を見て笑っていた。

「いつまで見ているの」と言った。

「終るまでさ」

「おかしな人だね」

「おかしいか」

「芳、買ってくれよ」

とバーにワイ写真をよく売りに来た。愚連隊の生活費だ。誠の商売となれば顔なじみになり、いつのまにこんな関係が生じてしまった。一組十枚で十組をカウンターの上に置く。百枚を続けて見てもなんの感興も起こらない。つまらないものだ。興味が無いから妊婦をさがすのだからあるわけがない。結局、中年の女の肥満した写真を買ってしまう。

「芳は、いやったらしいのを選ぶな」

と売に来た当人が言っているのだから世話がない。中年女のぶくぶくくれた腹部と、ぼってりと垂れた乳房を見ながら、

「売れ残ったら俺のところを持って来い」

と笑う。誰も買いきらないのを買いうらしい。中年女の肥満体にひかれたからかもしれない。これも憧憬のひとつであろうか。



煙え

バーが終っても、そのままアパートに帰ることは無かった。終夜営業のバーに寄って行く。喫茶部もレストラン部もあるグラントスランドバーで、午前三時までバンドも入って

いて踊れた。バンドの前のボックスに陣取り踊っているのは、ハイティーンのグループだが、うっかりスケこましをしようものなら、愚連隊のスケだったりして、カツアゲされるのがおちだ。十六、七でも、グラマーがいる。

こんなことがあった。例によってカウンターでカレーをたべていると、

「芳、お願いがあるの」

ときた。顔なじみのスケだがどこのどいつだか知りやしない。名前に興味が無く、自己紹介などめんどろでしたことがない。高校二年だと言っていたがどうしてもそうは思わない。薄いポロシャツから乳首が突起していた。ブラジャーをしていないようであった。落下傘スタイルで、豪華なカンカン・ペチコートが覗いていた。髪は比較的長く、流行を追っていないが、ぼさぼさにしたのが流行と言えないこともない。イヤリング、ネックレス、腕輪

とインデアンみたいにごてごて飾っている。

「なんだ」

「病院を紹介して」

「病院？」

「三カ月なのよ」

「何が？」

「アレよ」

「アレだと」

連れの女がじれったそうに指先で下腹を押した。

「ああ」

「そうなのよ」

「誰のだ？」

「知らないわ」

とすましている。そんなものだ。

「三枚でいいでしょう」

「俺が連れて行くのか」

「モチよ」

「俺の子供じゃあるまいし」

「お礼はするわよ」

「何かくれるのか」

「二人でサンドウィッチにしてあげる」

二人は顔を見合せて頷いた。

「ねえ」

「病院は知っているけど、そんなこと誰に聞

いたのだ」

「そりゃ、ニュースソースよ」

「勝手にしやがれ」

「明日、午後二時、駅前」

返事をしないうちに、二人はフローワーに踊りに行った。バンドはすでに終ってレコードに変わっていた。

下着盗人

洗濯してある下穿きを、眺めるだけでは満足せず、手にとって気のすむまで、ということとは盗むことになるが、こんな心理状態は危険なことだ。五十枚百枚とコレクションとした話を新聞でもよく見るが、こんな癖を持っている人は意外多いものらしい。集め始めると、ますます欲しくなるのが常で、社会記事を面白くさせることになる。

中野安太郎氏は、この興味は無いそうだが、理由は、それがすでに洗濯されて綺麗だからだ。

夕美夫人は下穿きを庭に乾したことがなかった。自分の居間に秘かに乾すのであまり人の眼に触れたことがない。それを偶然発見したのは、お茶のおつまみを買に行った間のわずかな時間に、夕美夫人の居間に雑誌を取

りに行った時だった。

その頃は、まだナイロンのパンティなどない。メリヤスの白いズロースなのだが、ぼくはその前で坐ってしまった。

夕美夫人が帰って来て居間でぼくを見つけた。

「何をしているの」

「見ているのさ」

「嫌な子」

「見ているだけだ」

「――」

「さわりたいんだ」

「馬鹿ね」

「ほしいんだ」

「お茶の間に行きましょう」

「夕美さんにはわからないだろう。俺はそれがほしいんだ。しかし、それだけなんだ。こんな気持は、乾しつつあるズロースに触れるまでなんだ。触れるとかえって、戸惑っちゃうんだ。どうしていいかわからなくなるんだ。コレクションしたってしょうがないものな。それがどうだっていうんだ。結局、触れないほうがいいんだ」

それからまた坐り続けた。

「あきれた子」

夕美夫人が待ちくたびれて唐紙を開けた。

「仰向けになりなさい」

そう云うと、そこに乾いてあったズロースをとり、ふわっとぼくの顔の上に落した。

「台所のみだれ籠の汚れものをひっくりかえした犯人がわかったわ」

夜に忘れられた洗濯物の下穿きに、気が散るけれど、コレクションするほどのことはない。理由は持主の顔を知らないし、それが清潔なものだからだ。やはりぼくは汚れていないと困る。といって、現在穿いている人から奪うなどということは精神錯乱の起らない限り保証する。あくまでプレイにとどめたい。

デパートの、花やかな婦人下着売場に行く。と、それだけでぼくは女に生まれればよかったと思う。豪華な悩殺下着を見ているのは楽しいが、紳士肌着には行ったことがない。女の連れがあるとき、好んで観賞するようにしているのだが、男と行くことは御婦人のほうが恥しがって困る。夕美夫人も入口でストップさせた。

KKの読者通信などで、若柳キミコさんや富永洋子さんたちのグループが、下着の種々と面白い破究発表をしている。通信にとどまらず、巻頭口絵に写真を発表して、改良した

り発明したりした作品を説明していただきたいものだ。男が女の下着を、特にパンティを着けていけないと理由は無い。鴨居羊子ではないけれど、「女は下着で作られる」男はそれを追っかける。

デパートの婦人下着売場で、ゲイボーイらしい美少年に挨拶されて戸惑ったことがあった。ゲイボーイと思ったのは背広なのだが、セシルカットで赤く染めていたからだ。化粧はしていなかった。変っているのは髪だけなのだ。

「羊子です」

「ああ」

ゲイバー「羊子の店」のママなのだ。

「わからなかった」

羊二は微笑した。店で化粧した羊子は見慣れていても、外の背広の羊子を見たのは始めてなのだ。わからないのは当然であった。

「ブラザーガールだな」

「いやだわ」

と声はそれでもなまめいた。

「お買物ですか」

「そう」

二人で、パンティ売場の女店員の前に立った。この売場に男、といっても羊子は女のつ

もりだが、とにかく背広の男は二人だけであった。ナイロントリコットパンティを指して

「白、三枚」

「プレゼントですか」

「俺のだ」

「いやだわ」

と羊子が赤くなった。妙にてれた。女店員がふっと笑った。

「おかしいか」

「いやだわ」

と羊子がまた云った。小柄で愛くるしい女店員が奥へ逃げこんだ。品を包もうともしないで笑っている。

「羊子は何を買いに来たのだ」

「プラスチックケース入りのパンティセットです」

「羊子もパンティか」

「プレゼントですわ」

「なんの」

「お店の一周年記念です」

「お客にくばるのか」

「うちのお客様中年の方が多いでしょう。だから」

「羊子が綺麗だからな」

「いやだわ」

「中年紺士にパンティセットをくばるのか」

「しゃれたプレゼントでしょう」

「そう思うか」

とぼくは女店員に聞いた。羊子がうつむいて、女店員がうつむいた。

「俺にもくれよ」

「七色パンティセットにしようかと思うのです」

「綺麗でいいじゃないか」

「レースがついていますよ」

「男が穿いていけないということは無いだろう」

女店員に、

「そうだろう」

と云おうとしたら、先にまた逃げてしまった。あまりからかったので、羊子からウィクリイパンティはもらいそこねた。

高校時代バスケットで、いつもきちんとサポーターをしショートパンティ、それもお尻が半分出る短いやつを穿いていた癖で、男用のブリーフやパンツは氣にくわないのだ。ナイロントリコットの薄いのができてから、安くなったところで愛用している。夏でも冬でも半袖主義で、ワイシャツの下は一年中変らず薄着なのだが、パンティだけは、これから

もあらためることは出来そうにない。女ものの下穿きを買うことは別に恥しくない。ビキニパンティみたいな短いきっちりしたのが好きだから、これからが楽しみだ。いろいろとデザインしてくれるのを観賞しよう。メンスパンドを買おうと思うのだが、どんなものだろうか。

アパートの朝は、いつでも午後一時か二時頃なのだが、窓を開ける楽しみは階下の隣の庭の洗濯物だった。週に一、二度程度で、まとめてやるから、その時はショーウィンドウよろしく花やかだ。三人の女はアルバイトロンの女だが、何がアルバイトだかわかったものじゃない。

赤いナイロンショーツが乾されたとき、

「お？ イカス」

とか窓ら声を出して、尻をまくられた。

「そんなに見たいんなら、見せてやろうか」

黒いショーツで、眼の錯覚でなければ、彼女の宝物はおがめた。乾しつつあるのは、色ものがなくズロースは見たことがなかった。すべてがナイロンのショーツで、バタフライみたいに小型のやつであった。

ある朝、起きぬけ、

「お早う」

と女に挨拶すると、

「下穿きどろぼう」

と毒づかれた。

「乾しておいた私のピンクのショーツをとられたんだよ」

「俺は知らない」

「ママからもらったばかりなのに」

「俺じゃないよ」

「小さくて、本当にかくれるかか出来ないかママが可愛いって、云ってくれたのに」

三人のうちで、その女だけは若かった。前は踊子でステージの写真を持っている。酔ってくる、男の顔先にハイヒールを投げ出すのが癖で、サロンが終ってお客を連れてうちのバーに寄ると、よくこんな光景にぶつかった。カウンターのの上にハイヒールをのせる。スカートをまくって平気で、

「可愛いでしょう」

とショーツを見せる。

一度だけ、肩車をさせられてバーからラーメン屋まで歩かされたことがあった。ハイヒールを舐めさせられた客は居なかったが、ハイヒールのすっぽけた足を、持たされて困っていた客はいた。足の曲線を自慢に酔うとこの癖がでるものらしい。(終)

足 あし

環 かん

火

宮

透

1

向うに見える教会のドームへまで、冬の陽が傾いて行くと、司の家の地つづきの裏山の榆の林には、もう蒼い夕闇が漂いはじめるようだ。日中でも薄暗い群生した榆林だ。暮色を迎えるのははやかった。迎えるというより暮色を、蜘蛛の糸のように吐き出す感じだった。林には、夕闇の袋があるようだった。

玲子の部屋は、二階の北向きの洋室で、広い窓はその群生した榆林に面している。赤い斜陽と、林の蒼い暮色とが、窓の前で織りなされている。蒼と赤との夢想的な美しい交錯

だった。日暮れには、こういう美しい色の交錯が、司邸の庭ばかりではなく、たとえば裏街の路地裏辺りでも見かけられる。

三面鏡にむかって化粧する司玲子の、色の白い、細づくりの美しい顔を、窓に面した横顔の部分だけ、日暮れの光線が仄赤く染めていた。紅棒が、小さな唇に紅を点した。それで化粧は仕上った。アイ・シャウドは描かない。白粉もはたかない。上質なクリームと口紅だけの、至極あっさりした化粧だった。それだけで充分な、素肌の白い、持前の美貌なのだった。

玲子が、鏡の前から腰を浮かしかけると、

鏡の奥の方に女中の姿が映って来た。すると玲子は急に怯えたように、また、天驚絨張りの椅子にお尻を落してしまった。

「玲子」

女中は、そう呼捨てに呼んだ。女中が、主人の愛嬢を呼捨てに言うのだ。

「はい……」

可笑しなことに、玲子もまた、呼捨てにされて神妙に答えるのだ。顔は鏡を向いたまま身を固くして、美しい娘はじっとして椅子に坐りつづけていた。

女中が、背ろからその白いほっそりとした玲子の頸へ、片腕を巻きつけた。「ううう……」

……玲子は呻く。息がとまるほど強く、女中の腕が咽を締めてくる。女中は、そうしながら鏡の中の苦痛に歪む美しい顔を見つめた。その自分の顔も、鏡に写っている。はたち前後の若い玲子の顔にくらべ、この顔は、もう四十過ぎの、男のように眉毛の太い顴骨の出ばった醜い顔だった。「うううう」玲子は窒息しそうな苦しさで、女中の腕を白い華奢な指でつかんだ。「は、離……」女中の醜い顔が嗤った。

「さからうのかい、玲子」
「うううう」

玲子は見栄もなく八の字に足を乱した。私たちのいい長い脚だった。スカートの下から白いスリッパがのぞいた。羽根のように透けたレースの裾飾りのある、高価なスリッパだった。スリッパ一枚の、文字通りパンティも脱がしてしまったスリッパ一枚の、その姿にさせて白く透ける背中を鞭で責めてやろうかと女中は考えたが、それは思い直して、そのかわり玲子の躰を、力まかせに、椅子から緑色の絨氈の床へうしろざまに引き倒した。

あられもない姿勢で倒れた玲子の、スカートの裾をスリッパ毎めくり上げて、女中は、そのふくよかな白い太股を検べた。白い太股

を検べた、というのは正確でない。玲子の白い太股に、あの銀のリングが嵌っているか否かを、女中は検査した。

「ほほほほ」

女中は、満足そうに笑声を立てた。

2

細い、だが針金よりも強靱な銀の輪を、玲子がちゃんと右の太股に嵌ていたことで、女中の杉ともえは満足した。「いい子だよ」と笑った声で言い、もう玲子の細い頸を締め、虐めることはなく、外出を許した。のみならず杉ともえは、玲子を玄関まで見送って出ていた。「お嬢さま、お氣をつけて行ってらっしゃいませ」

玲子は、その慇懃な調子の底に、ぶきみな冷たさがあった。玲子の背中が、その冷たさだけを強く感じて、玄関を出た。

豪壮な石柱門を出て、なだら坂を下って行っている、坂下からパパの車が白く土埃を巻き上げながら上って来た。お抱えの運転手は、坂を下って来る人物を「お嬢さま」だと知ると、速度をゆるめ、玲子の美しい顔に土埃をかけないように気づかった。

車を停めて、玲子のパパは窓から笑った。

「今からデートだね」

「ええ……」

少し頬を染めて、玲子は笑った。

「車は？」

「ブルーバードはママが使ってるの」

「なんだそうか。じゃ僕は此処から歩いて帰るから、この車を使いなさい」

「いいのよ、パパ。バスで行きますから」

そう言う玲子は、パパの白髪の顔にちょっと手を振って見せて、もう足早になだら坂を下りだした。黒いハイヒールの細い脚が、美しい歩き方をした。

坂下の教会の高い巨きなドームは、すっかり陽を翳らして、ステンド・グラスの窓には灯がともっていた。その教会の鉄の門の前で、玲子がしばらく待っていると、銀杏の樹の向うから現われて来た市営バスは、氣早にヘッド・ライトを放っていた。

玲子が、バスの後部のシートに形のいいお尻を落すと、右足の太股のリングが、その部分の柔らかな肉を圧して痛かった。揺られて行くにつれ、その車輪の弾動で、リングが締めつけて来るようで、腿の痛みは増した。玲子は前の握り棒を両手で握り、シートからお尻を浮かしきみにした。ずいぶん見っともな

い恰好だったが、そうしていると、リングの痛みは遠のいた。

「今日も遅刻だよ」

司玲子が、テーブルへ近づいて来るなり、高島波夫はのっけにそう言った。笑ってはいが、無理に笑っている感じだった。彼が不機嫌になるのも無理はない。テーブルの灰皿は、煙草の吸殻の山だった。一時間余りも彼は待っていたのだ。

「ごめんなさい。車が空いてなくてバスで来たものですから。折悪くタクシーも通じかからないで……」

なるほど、それもそうだったが、女中の杉ともえに頸を締められて、虐められていた時間もある。だが、それは玲子は言えないことだ。この前のデートの時には、折角支度をした玲子を、殆ど全裸に近い恰好にさせて、その美しい胸やふくらはぎを虐めていた。今日も遅刻だよ、と高島が言うのは、そのためだった。

高島波夫と玲子がお見合をし、そして婚約したのは、つい先頃の秋の名残りのある季だったが、それからの彼とのデートのたび、玲子はいつも約束の時間に遅れがちだった。遅れが幾らかでも縮まったのは、ママ付きのお

抱え運転手がフル・スピードで車を飛ばしてくれたからだった。運転手は、玲子を、時間にルーズなんだと思ったにちがいない。まさか、お嬢さま付きの杉ともえが、玲子の室で玲子を虐めていたからだとは知りはないだろう。想像もできないことだ。

さて、玲子が、遅れたことを詫びて、しずかに皮張りの椅子にお尻を落すと、ハンサムな婚約者は、もう不機嫌な色はなく、むしろ玲子をいたわるような口調になった。会話の内容は他愛のないものだが、その口調に、なんとなくいたわる響がある。それほど、婚約者と差しむかいになりながら玲子の様子は、もの憂げであった。何か心は想いごとに沈んで、上の空で返事をしているようだった。注文したコーヒーにも、わずかに口をつけただけである。(この人は……)と高島波夫は胸の中で呟いた。(どうして、こういうも淋しそうなのだろう)そう思うと、彼の心も、自信のない、淋しい翳が拡がって来るようだった。見合をし、どちらも異存なく婚約を交したが、それだけで、愛の確証を得たわけではない。今夜こそは、この愁いを含んだ美しい顔の薄紅の口を吸ってやろう、玲子の唇を見つめながら高島は思った。唇を吸うことが、

それだけ愛が深まることに、彼もまた世の一般の男並に考えた。

喫茶店を出て、近くの静かな公園へ誘って行き、もうすっかり夜の闇に支配された、木の下芝生で、高島がほっそりした肩を抱くと、ほっそりした肩は自然に彼の胸の辺りへずれ落ちて来て、彼の唇を迎えるような顔の位置になった。その仰向いたほの白い顔へ高島の顔が重なった。

初めての接吻に、司玲子は感動するふうだった。彼の唇が離れると、玲子は、ふかい息を吐いた。暗い中で、耳飾りが光り、白金の腕時計が光っていた。その光は二つながら小刻みに揺れるようだった。司玲子のからだは細かく顫えているからだろうか。高島はふと掌に熱いしずくを覚えた。玲子の閉じた目尻から溢れ出る、それはなみだだった。

「なぜ……」

意外な思いで、高島は訊いた。

「なぜ……なぜ泣くんです……」

「波夫さん……」

玲子は、言った。

「今夜は、悪いけどこれで別れさせて……あたし、これから行かねばならないところがあ

3

司玲子の、細身のスタイルのいい姿が、タクシーから降りて来た。街灯の照光が、彼女の美貌を浮び上らせた。その顔をよく近づいて見たら、さっきのなみだの痕が残っているかも知れない。

路地の中へ、玲子は這入った。裏街の裏通りに、小さな入口を構えている、暗い細長い路地の石畳に、ハイヒールの音が響いた。路地の両側はずっと石塀がつづく。工場の石塀だった。何の工場か、玲子は知らない。路地を通り抜けたら一体何処へ出るのかも知らない。途中に、石造りの家がある。そこが「木曜館」だった。週一回木曜日の夜に、サディストたちが集って、女を、虐げる妖しい快楽の館だった。その石造りの館へ、玲子のハイヒールの脚は近づいた。

何の変哲もないドアの前で、ベルを押す。ドアは変哲もなかったが、ベルの押し方には特別な規則があった。短く、四度に区切って鳴らすのだ。四度に分けた暗号は、月、火、水、木に因んでいるのである。規則通りにベルを押し終って、玲子が待ったと、殆ど待つ間を与えず、ドアが内開きに開いた。同時に、

懐中電灯が真正面から眩しく玲子の顔へ光を浴びせた。「番号」と光を浴びせて言う。

玲子が黙っていると、

「番号」

女の声は、叱るようにきびしく変った。

「——C一一〇三です……」

「C一一〇三、待っていなさい」

ドアが閉じられ、玲子の黒い瞳孔は眩しい光線から救われた。いつも今のうちに懐中電灯で顔を照らしつけて、番号を訊ねるのだった。だから、この用心深い仕組みには、玲子は馴れている。だが、すでに何度となくこの石造りの館を訪れていても、玲子の心はなじめなかった。それは、その白い柔肌が、被虐の感覚になじめないのと同然だった。

今の女が、ふたたびドアを開いた。三十四五と映る体格のいい女である。杉ともえと、どこか似通った感じを玲子にもたらししていたが、しかしこの女は、言わば受付係で、玲子のからだを責めることはしない。「C一一〇三、おはいり」と、女が言った。

這入ると、薄暗く冷たい石の廊下だ。石の室が、およそ二十室余り、それぞれ個室になって廊下の両側に並んでいる。低い天井は普通の板張りで、角灯が一つ吊されて、淡い灯

影を投じている。廊下の横手の狭い石の階段を登って行くと、手狭な一室があり、そこが木曜館の言わば事務所だった。螢光灯がともっていてここはずいぶん明るい。

見馴れた、黒いマスクを顔に掛けた背広の中年紳士が、マスクの中から双の眼をじっと玲子の姿へそそいで、「きみ」と大柄な女に命じた。そのひと言で、女は恐縮したような身ぶりで急いで玲子のそばへ寄ると、玲子のスカートを腰までまくりあげ、右の太股のリングをたしかめた。細い銀の足環に小さく数字が刻みつけられてある。C・1103

「相違ないか？」

黒い仮面がしずかな声で問うた。いかにも館長らしい、一種氷のようにひややかな威厳がある。玲子の白い太股から顔を離し、女は丁寧に館長に答えた。

「はい、まちがいありません」

司玲子は黙って涙を頬に伝わせていた。

「一一〇三、さ、支度を！」

女は、玲子の肩口を突いて、壁ぎわの衣裳棚の前に押しやった。和服、洋服、そして下着類の、色とりどりの目も綾な美しい女の衣裳が、棚にいっぱい脱ぎ置かれている。ざっと見たところ、十七、八人分ぐらいの衣裳の

数である。すると、もうすでにそれだけの数の女がここに集い、石の室でそれぞれ被虐の苦痛に泣き、悶え、喘いでいるわけなのだ。

玲子は裸形を曝すと、顔をおおってむせびあげだした。太股の銀のリングもふるえるように光った。



「ああ——」

その白い細い腕を後手に館長はねじりあげて、玲子を階段口へ引き立て行き、彼女を先に立てて狭い石段を下らせた。

玲子はまず、石の一室で施術される。

冷たい白磁の大理石の上に裸の膝をつきそれから両手をひらいて前について、ふかくしゃがまねばならない。因みに、この室のドアに掲示されている標札は、TOILET ではない。シクラメンに似た香りが漂っているが、シクラメンの花が咲き匂っているわけではない。香水の匂いなのだった。舟形の大きな皿の中に、なみなみ香水が満たされていて強い芳香がたち昇る。

玲子はしゃがんだままじっとして、施術を待ったが、館長がそばへ来ると突然「かんにんして！」

その叫びが、たちまちのうちに、

「うううう……」

うめき声に変わった。

館長は白い腰を抑えつけていた。

「まだだ。辛抱してお腹の中をすっかり空にするんだ」

「うううう……ああ——」

「仕様ないお嬢さんだな、C一一〇三は」

ひくく、仮面の館長は笑った。舟形の香水皿へ這い寄って行く玲子の姿は、白い美しい芋虫のようだった。

施術が済んで、いよいよC一一〇三は他の女と同様、被虐の石部屋へ入れた。入口に近い四号室だった。このドアは鉄で作られていて、金属的な厭な軋みを立てた。背中をい

やというほど突き押されて、その鉄扉の間から、前のめりに玲子が這入って行くと、館長はドアを閉じて外から錠を施した。廊下を立去って行く彼の靴音も聴えない、完璧に防音された厚い石壁の長方形の室である。火の気のない、氷室のような冷たさ、寒さは、ますます酷く白い裸形を虐めて来た。石の床に蹲まって、乳房を腕でかこい、齒の音を立てて玲子は酷烈な寒さに顫えた。気の遠くなるような絶望感と、氷るような辛い寒さの中で、司玲子はファインセの面影を胸に浮べ、その彼の顔に、祈りと、懺悔とを捧げた。

高島波夫が、何も知らずに、二人の幸福な明日の設計を胸に樹てていることを思えば、たとえ杉ともえによって強制されていることとは言え、木曜日ごとにこうして見知らぬ紳士たちの嗜虐の生贄になるわが身を、玲子は

心の底で強く詫びずにはおれないのだった。

マイクが、館長の声をつたえた。

「立て、C一一〇三。お客さまがお見えになった。立って、ドアの前でお迎えするんだ」

その客はもう、室の前に来てドアの錠前を外ずしにかかっていた。

4

客は、館長と同じように黒い仮装用のマスクをつけているから、人相は分らない。ぐつと一文字に引締った意志的な唇が印象的だった。背が高く、背広姿がひきたって映った。

髪の毛は艶々しく黒いから、館長よりも若い紳士だ。黒いマスクの中の双つの眼が、貪婪な光を湛え、ドア口に突立って出迎えた玲子の白い肌を、丹念に眺めまわした。玲子はただうなだれて、彼の貪婪な視線が眺めるに任せていた。彼女が一瞬見たのは、意志的な唇と濃い頭髮だけだった。しかしその刹那の印象は、高島波夫を連想させていた。もとより高島ではない。けれどもなぜか、高島のような感じが玲子はしたのだ。この束の間の錯覚めく思ひは、いっそう哀れだった。

「顔を起して、眼をあけなさい」

客の最初の言葉であり、同時に最初の命令

だった。玲子は、顔を起した。美しい眸をみ

ひらいてじっと前面の石壁をみつめた。黒いお面の双眼が、鼻先で燃えるように光った。

「眼をあけていと言った筈だぞ！」

言う紳士は、壁の鞭入れ棚の中から野球バットを取りだして、玲子のうしろへ回り、その白い柔らかな肉盛りへ、一撃を加えた。

「あううう……」

衝撃で倒れそうになりながら、辛うじてハイヒールの爪先で踏んばり、

「うううう……」

バットで打たれたのは玲子は初めてだったから、ひどく痛く感じた。

「もう一つ」

と、紳士はまたバットを構えた。

「おお……」

玲子は恐怖する。それでも、しっかり足を踏ん張って衝撃に備えた。その脚に、もの悲しく銀のリングが光るのだ。

バットが、烈しく肉の音を立てた。

「ああ……うううう！」

姿勢を支え切れず、前のめりにたたらを踏んで、二、三步、泳いだ。

室の隅にローラーの台がある。恰度製麺工場の、うどん粉やそば粉を平たくならす製麺

機のようなものだ。岩乗な角机の上にそれが据えられてある。

紳士は、バットの代りに今度はなめし皮の鞭の一本を手にとって、それで、壁際で苦痛に呻吟している美しい奴隷の細腰をびし／と打ちすえ、ローラー台へ追い立てた。

ローラー台の前で、玲子は自ら髪をほどいた。ローラーでどう責められるかを、すでに彼女は心得ているからだ。泣く泣く、文字通り泣く泣く玲子は長い黒髪を自らほどいた。その間にもびしびしと、皮鞭が、肩、背中、ヒップへ当てつづけられていた。白い統のような肌は無数に赤い縞を描いていっていた。

ローラーが黒髪を巻き込んだ。

「手を二つとも燭台の上に上げろ」

ローラーのハンドルを握って、彼は言う。

「はい……」

ローラーの上の燭台に白い手が差し伸べられると、彼は、その手首に手枷を嵌めた。左右の燭台には百目ろうそくが立っている。火をつければ、熱い蠟涙が雨のように玲子の手にかかる仕組みなのだ。これも、髪責め同様玲子が何度となく経験していることだ。しかし、何度経歴しても、その苦痛に免疫的に馴れてしまうことは不可能なのだ。

恰度、司玲子は、双手を高くしておじぎをしているようなポーズで、髪の毛の一端をローラーに巻き込まれている。まだ浅く巻き込まれている。彼が、さらにハンドルを回していけば、それにつれて髪はふかく巻き込まれて行って、根ごと抜けるような甚しい苦痛を生むのだった。加えて、手の甲には焼けるような熱い蠟涙がしたたり落ちる。さらにまた身動きのできない背後から、背、腰、ヒップへ襲いかかる痛烈な皮鞭の洗礼！

生地獄にも等しい凄まじい苦痛の坩堝へ、司玲子は落されるのだった。

ギリギリとハンドルがめぐりだした。蠟燭につけられた火は勢いを増して炎え上る。ギリギリとハンドルはめぐっていく。

「いたいっ——もうとめてえっ——あっあ——ああッ、うううう……」

黒髪は全髪逆立ち、ローラーの中へぐいぐい引き込まれて行くのだ。項の辺りの毛は、じっさい根ごとひきぬけそうだった。

「もう、もう、とめてえっ——うううう」

両手へ、同時に初の蠟涙がしたたった。

「あ、熱いっ——か、か、髪がぬけるうっ」
叫んでも、頼んでも所詮救われない、絶望的な苦痛に全身で呻吟する哀れな生贄の姿を

黒マスクの眼は、夢見るようなうっとりした酔いの色で、暫く見守りつづけた。

熱い蠟涙がまたひと雫、手の甲へ落ちる。ローラーはとめられているが、極限まで逆立って曳っ張られた髪の痛みは、とまることがない。

「ああっ……く、くるしいっ——」

紳士は鞭を小脇に挟み、依然夢見るような陶酔の瞳で、両手で、今から鞭打つべき玲子の柔らかなからだの部分、さも愉しげに揉みほぐしだした。

5

司邸の朝。

パパとママが、それぞれ専用の車で出かけて行ったあとは、広い豪荘な邸には、二匹のシェパードと、人間が二人残った。

女中は、杉ともえの他にいま一人、ママ付きの若い子が居るが、今朝はママにお供して一緒に出て行っている。だから、玲子と杉ともえだけが邸に居る。

玲子は今日はピアノのレッスンへ行くのを休んだ。ベッドから起き上がることも出来ないのだった。食欲もなかった。牀中の無惨な鞭傷が火のように疼き、悪熱で異様に臉の辺りが

火照った。臉にも、きみわるく火が燃えている感じだった。

「お願いよ……今日は虐めないで……」

ともえが室にやって来ると、玲子は、ベッドの上で祈るように手を合わせた。その手には繃帯が巻かれている。言うまでもなく、蠟涙で火傷したのだ。白い手頸には、手枷の痕が赤く爛れたように残っていた。

その昨夜の木曜館での被虐の一部始終は、すでに玲子は昨夜のうちにともえに語っている。即ち、玲子は、細密な報告を杉ともえにせねばならないのだった。しかも、裸になつて如実に鞭傷を示しながら詳述しなければならなかった。それは心理的な仕置であった。だから木曜館からやっと解放されて我家に戻つても、その「如実な報告」という心理的な責めが、いつも玲子を待受けているわけなのだった。

虐めないで虐めないで、と玲子は必死な面持で手を合わせて頼んだが、

「ふふふ……」

醜い面相に薄い笑いを浮べて、杉ともえは羽根布団を徐ろに剥がし、

「お脱ぎ」

「ゆるしてえ……」

「お脱ぎ！」

すすり泣きながら玲子が鴉色のピジャマを脱ぐと、窓から射し込む朝の陽に、その白い肌一面に蛇のようにつちくねっている青黒い皮鞭の条跡は、まさに見るも無惨！

疼きと悲しさで、堪えかねたようにわつと、玲子が羽根枕へ顔を落して泣き伏した。

壁に懸っている人物画が、その玲子の姿を無情に見下ろしている。誰か高貴な外国婦人の肖像画で、その大きな明眸が無感動に冷たく見下すのだ。

ともえの手が横ざまに玲子の肌を張った。

びしっ。

「うう……」

びしっ。

「うう……」

明るい陽差しが鞭傷の肌を染め、手のひらの形に、薄赤く炎症を浮彫させた。

鞭痕の消えた、まっ白い処女雪のような肌に赤く掌型を印してこそ、加虐感はあるのだろう。夥しい青黒い条跡にはいままに蹂躪されている今朝の司玲子の肌は、だからともえにさして魅力がなかったと言える。

「今朝はもうかんべんしてあげる」

「………ほんとう？」

羽根枕の中で、玲子は言った。なみだ声だったが、解放の歓びが全身に出ていた。

うとうとした寝苦しいまどろみのうちに玲子は、自分の顔の上に、かぶさるような近々ともえの顔が迫っているのを覚えた。一匹の怖しい悪魔が、寝ている時でも自分を責めているような厭な、重苦しい息がつまりそうな感じだった。だが、夢であるのか、現実なのか、その辺のところはほんやりかすんでいた。何処かの淋しい野原で、鬼の姿の杉ともえから追いかけられている夢が、そのあとに、玲子をうなさせだしていった。

「………さん」

名前を呼ばれたようでハツとして、玲子は眼をひらいた。顔の上に、高島波夫の顔が笑っていた。玲子の頭の中から、怖ろしい鬼の姿の杉ともえの幻影が消え、現実が彼女にもどった。

窓の陽差しは、もう幾らか黄ばんだ午後之光線の色だった。

高島は床に膝まづいて、ベッドの上の美しいフィアンセの顔へ、ためらいがちに唇をつけた。頬に触れ、次に花の唇へ触れた。眼をとじたまま玲子は言った。

「いついらしたの……？」

「少し前に」

「起きてくださればいいのに……」

「起しましたよ、玲子さん」と呼んで

「すぐ起きないで、ひどいわ——」

「はは。可愛い寝顔でしたよ」

ろっておくより仕方がない。

「かるい風邪ですわ」

「かるい風邪ぐらいで一日ベッドについているんですか、さすがに大家の令嬢は」

ちがったものだ、高島は、皮肉とも冗談

「——なんと？」

「……」

「なんと云ったのですか？」

不安が募って、玲子は高い声で言った。すると、高島は「いや、僕のききちが良かった

かも知れない。——よしよしう」と笑って言った。

6

木曜館のサディスト・メンバーは、かならずしも男性のみとは限っていない。サディスティンもまじっていた。ただし、ひとりだけだった。その一人の女性性が誰であるかは、いま、石畳の細長い路地を歩いて来る二人づれの女の姿を見れば分る。

「杉さん、寒いわ……」

豪華な白い毛皮の外套を着て

いるが、その下はきつと裸なのだろう。司玲子は寒さにかじかんだ声で杉ともえに言う。

だが、ともえが慰めてくれるわけがない。

「だまって早くお歩き！」と、かえって玲子は背中を小突かれて、ハイヒールの脚がよろ

けた。そうして石造りの館の前に来た。

「ひどいわ」

「悪くて休んでいると聴いてびっくりしまし

たよ。電話で女中から聴いたのです。風邪を

引いたのですって？」

ともえは、どんなふうにも電話で応待したの

「玲子さん、きみのあの女中は変なことを言

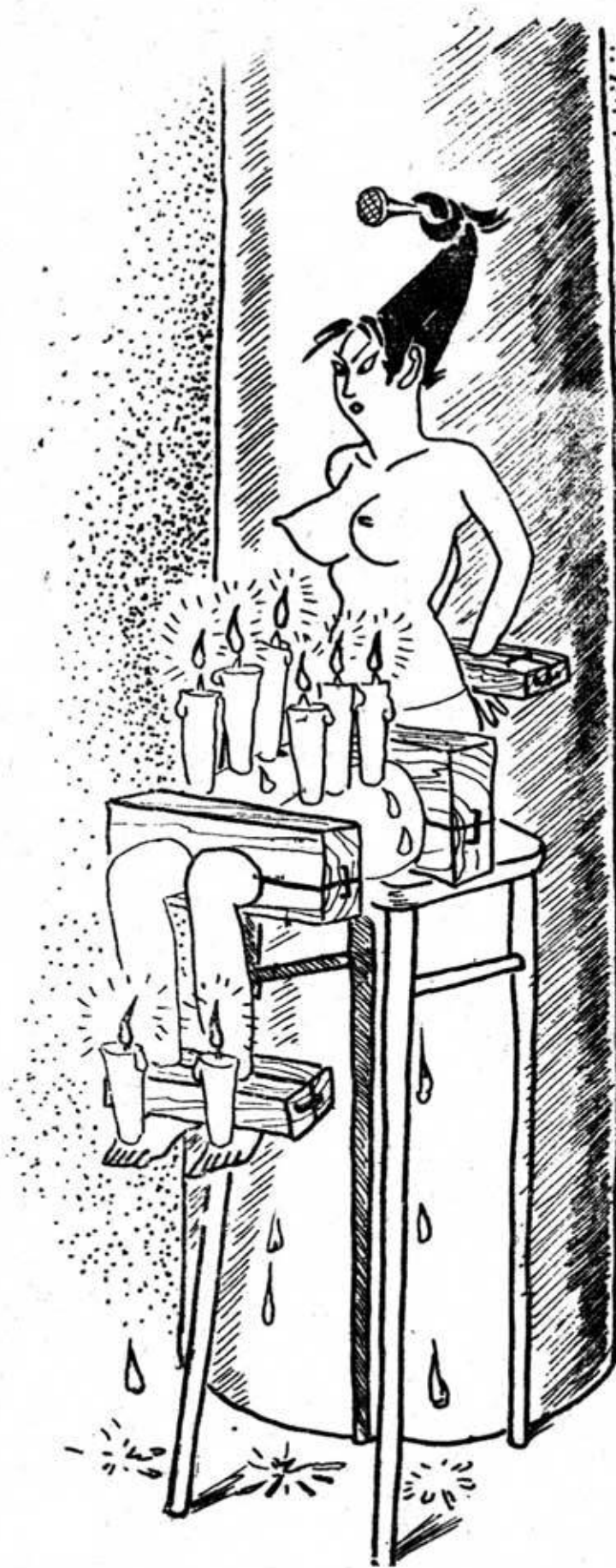
いましたよ」

「——ええ、うっかりして……」

「手を薬罐のお湯で火傷したのですって？」

った。

ともつかない言い方をした。ついで、彼は言



四度に区切って、ともえがドアのベルを押
し鳴らした。ドアが内開きにひらく。懐中電
灯の光が眩しく顔へふりかかる。

「杉です」

と、ともえは言い、玲子を指して、

「これはC一一〇三です」

受付係の女は恐縮した態で低頭して、「ど
うぞ」と即座に中へ招じ入れた。彼女の貫禄
に圧倒されたふうであった。メンバーの中で
杉ともえの存在は大きいだろう。それをさ
らに裏づけるように、女の報せをきいて、館
長自身が急いで階段を降りて来て、

「これは、久しぶりのおいでで——」

と、めずらしく凡人臭い愛想を示した。マ
スクの中で絶えず冷たい眼が光る冷酷な中年
紳士が、にわかに示した凡人臭だった。反対
に、杉ともえは、ひどく無感動な様子で、
「だいぶごぶさたしましたね。このC一一〇
三が気に入りましたね、ずっとこの娘のそば
にくっついていいますよ」

「それはお察し申上げていました」

「ほほほ」

別に照れるでもなくともえは笑い、

「あなた」

受付係に命じた。

「C一一〇三を施術室へ連れて行きなさい」

「杉先生、まず」

館長は腰を低くして、

「事務所のストープで、おあたまりになっ
てください」

「そのつもりなのです」

あかあかと炎える石炭ストープの前で、と
もえが大柄な躰を椅子に据えて、館長と談笑
しだしていると、三十女が玲子の真っ白な毛
皮の外套を抱えて戻って来た。

「杉先生の訓練はさすがでございますわ」

受付女は、おせじめく響で言った。

「C一一〇三は自分ですすんでタイル台にし
ゃがんで、先生のおいでを待って——」

杉ともえは、酔うような瞳の色になって、
しばらくあらぬ一点をみつめていた。女は玲
子の外套を衣裳棚にしまった。衣裳棚は、今
夜も色とりどりの美しい女の服でいっぱい
ある。

司玲子は、骨ごと氷るような酷烈な寒さに
はげしく顫えながら、白磁の大理石の床に両
膝をつき、ふかく身をしゃがめて、施術を受
ける姿勢を保っていた。しんしんと氷室のよ
うに冷たい石部屋は、シクラメンの花の匂い
に似た香気が、大きな舟形の皿から立ち昇っ

て漂っているが、被虐者にとっては、その甘
やかな芳香もまた、非情なムードであった。

ともえが、這入って来た。

「顔を床につけなさい」

「——こうですか……?」

「そう」

施術が行われる。

「ううううああ……むううう」

「まだまだ、しんぼうするの!」

「く、く、くるしい……ああッ——」

びしっ! びしっ! と玲子はスパンクを
された。「だらしないっ!」びしっ! と
もう一度烈しいともえのスパンク!

「ごめんなさい」

玲子は泣声をあげた。

「ごめんなさい……」

泣きながら香水皿へ這い寄って行った。

「十二号室なのね……」

と、そのドアの前で玲子は言った。木曜館
で玲子が初めてともえから責められたのがこ
の十二号室なのだった。あの日からもう幾月
経っただろう……玲子は、胸の中でなんと
く指折りして見た。ともえが錠を外ずしてド
アを開けた。玲子が美しい顔をまっすぐあげ
て、これから受けるさまざまな責めの苦しみ

を、その細身の全身に覚悟して先に立って室の中へ這入った。

ひとしきり皮鞭による猛烈な尻打ちのひびきが、冷たい灰色の石部屋の空気を領した。咽の裂けるような悲鳴が、その尻をたたく鞭のひびきの裏を縫って壁にこだました。石の円柱の真鍮製の首枷に玲子は首を嵌込まれ、その上の大釘で髪を逆吊りにされ、両手は柱を抱いて手錠をかけられていた。鞭のひびきと咽の破れるような悲鳴とが、そうしてひとしきりこだまし合った。

「あ……………」

鞭がとまると、火のような激痛の中で、やはり氣持がほーっとして、司玲子はふかくお腹から息を吐く。目尻からにじみ出る涙は、これは火で焼かれるような痛みのためだ。悲しくはなかった。なぜか、悲しみの底におちいることはなかった。

がらがらという音響が立った。

ひと隅から、ともえが頑丈な鉄の車椅子を押して来たのだ。

鉄板のシートは、ペダルを踏むとせり上って来て、高さが自在に調節に出来る。ともえは、玲子の腰の高さまでシートを持上げた。「まだスパンクをするの——？」

玲子は首枷に扼されてまったくうしろを見ることができない。電気仕掛のスパンク器が運ばれて来たように思ったらしい。がらがらという鉄の車輪の音が、そうとればなるほどそっくりだった。

「お坐り！」

ともえがシートを当てがうと、玲子は椅子と分って、お尻を落した。鉄椅子には六つの足枷がある。太股、膝頭、足くび、をそれがかたく締めつけて、からだを椅子に固定さすのだ。髪の毛、くび、両手をすでに円柱に固定されているから、玲子は両下肢に六つのその足枷を嵌められると、完全に身動きできない状態になる。黒髪を吊され、高椅子に鎮座した美しい白裸の観音像だった。

——やがて、見よ！

この幾本とない百目蠟燭の盛大な炎を。

「うううう熱、熱、熱、うむむむ」

肩に二本、腕に二本、乳房に二本、太股に六本、足の甲に二本——つごう十四本の蠟燭が玲子の肌にとって一斉に炎えるのだ。

「ああ熱いっ、熱いっ、ああッ……ゆるしてえっ、他の責めをしてえっ、スパンクを！スパンクを！ああッ、熱いっ、熱いっ」肌を爛らす熱い蠟涙が時雨のようにそそぐ

のである。炎々と揺らめき炎えるほのおの、しかし聖火のような美しさ！豪華さ、玲子の姿の神女のような神々しさ！
愴美の感に、心ゆくまで杉ともえは陶醉していた。

7

わずかながら玲子の胸底に、マゾの心が芽ぐんだのを、木曜館での責めに於て杉ともえは知った。

司玲子もまた、マゾごろの芽ばえを自ら意識した。それを、しかし彼女は羞かしく思うふうで、邸の自分の居間で、進んでともえに責めを乞うことはしなかった。けれど、日常の態度に微妙な変化が生じたのは、微妙であつても、杉ともえには精緻なアンテナのよう感じられるのだった。

玲子をここまで一応変化させたことを、彼女は、自分の勝利として飲こんだ。

高島波夫はしばしば司邸へ訪れて来たし、外で、玲子とデートすることも多かった。デートのときには、約束の時間にやはりいつも玲子は遅れるのだった。高島はいらいさせられた。時間を守らないことで、美貌のフィアンセが自分への愛も守っていないような不

安な思いがして、心を苦しめた。

だが、心が苦しいのは、玲子の方が彼よりもまだずっとふかった。高島へ対する懺悔が常に彼女の胸の内に充ちていたから。

「きみの心がよく分らない」

と、高島は言いだすようになった。そして「君付きの杉さんが、いつか電話でこんなことを言ったつけ。お嬢さんはノーマルな人とは絶対結婚できませんのよ、って。——玲子さん、この意味はなんでしょう？」

「——そんなことを申したのですか？」

「意味を、説明してください」

「波夫さんのききまちがいですわ……」

「あのとき、ききまちがいかもしれないと言ったけど、ほんとうはそうじゃない。はっきりにきいたのです」

「………そんなことおっしゃっても、あたくしにも、何のことか分かりません」

必死に玲子は逃言葉を張った。納得したのか、あきらめたものか、高島はしつこく追及しては来なかった。玲子は、からだ中に冷汗を覚えていた。

この日には、帰って玲子はともえに恨み言を言った。すると、

「さからうの？玲子」

ともえは、薄笑いして言った。

「さからうのでは……」

「さからうのと一緒です」

「……」

「さ。さからった罰にスパイクだ」

お仕置が済むと、ぐったりとうつ伏せて苦痛に呻吟する玲子を仄かに酔うた眼でながめながら

「わたしは彼に予言したのだよ」

ともえは言った。まじめな口調だった。

「あんたと玲子は決して結婚できない、と予言したのです。——予言通りになる」

と、言った。

かすかに、玲子がうなずいた気配だった。

「れいこ……」

酔いの色が、蕩けるように眼にひろがり、

「はっきりうなずいてお見せ」

「杉さん、あすは木曜、一緒に——」

「いいともさ」

男のように、ともえは答えて言った。

「おまえはもう、純金のリングをその太股に嵌める資格があるわ。A——〇三とナンバーを変えてあげるよ」

木曜館に登録されている女たちは、マゾヒズムの度合に依って、A、B、C、の三クラ

スに分けられている。最初はどんな女でもCクラスなのだ。それがしだいに馴致されてやがてBクラスに昇り、BクラスからさらにAクラスに昇華して行く。司玲子に純金の足環が与えられたら、それは一階級飛びの破格の昇格である。

「明日の晩を愉しみにして、今夜はもうおやすみ」

そう言って、ともえが室から立ち去ると、ひとりになって玲子は、裸の太股の銀リングを、あらためて眺め、白い細長い指でそっと撫でさすって見た。このリングには実にちっほけな錠が付いていて、その鍵は、玲子が自ら持っている。だから取り外ずしは自分で自由に出来るのだ。木曜日、石の館へ赴くときだけ嵌めて行ったらいいのである。だのに、最近では四、六時中玲子は嵌めている。その愛着感はとりも直さずマゾの深まりにちがいない。玲子は、羽根布団を頭までかぶってうつ伏せに寝て、撲たれたまゝい双丘を撫ぜさすっているうちに、眠りへはいった。

翌夜。

司玲子は、部屋の中でまっ白い毛皮の外套を着た。それを着ると、玲子の知的な美貌は妖美な色を添え、同時にまた高貴な色をも添

えた。

ともえが、玲子の頬にキスした。

「今日は、夜になるのが待遠しくって……」

玲子はともえの胸にしなだれた。

「早く連れて行ってあの石のお室へ……」

二人は暗く寒い夜の坂道をくだった。巨きなドームの教会のステンド・グラスの灯が今夜も美しい。その内部では高く、讃美歌がこだましていた。

玲子が、そもそも杉ともえと知り合ったのは、この教会なのだった。日曜日のミサのときによく顔が合って、いつからとなく言葉を交すようになっていた。ともえは、フランス帰りの画家、と自己紹介していた。

フランス帰りの女流画家が、或る木曜日に玲子を観劇に誘った。その大きな劇場は、その日から四日前に玲子が高島工業の跡取りである高島波夫とお見合をした場所だった。

だから伴れをちがえて、玲子は同じ芝居を二度見たことになる。高価な切符を、杉ともえが買っていたので断わるのが気の毒だったのだ。劇の幕間に、化粧室へ這入ったとき、玲子は突然ともえから抱きすくめられて、ハンカチで鼻孔をふさがれた。ハンカチの麻醉薬は十分な効果をあらわした。

寒さが、玲子の意識を呼び戻した。

見知らぬ異様な石の室で、彼女は石の円柱に括られていた。その羞ずかしい姿を、ともえが思うさまカメラに収めた。誰かが鞭を加えはじめ、狂ったように泣き叫ぶ玲子の姿にも、フラッシュが焚かれた。

写真が、司玲子を束縛した。写真を世間に出さないためには、玲子はともえに服従するより他なかった。

自称フランス帰りの画家は、玲子の御膳立によって、そうして司邸に女中に化けてはいり込んだのである。画家、というのはおそらく嘘であろう。

では、館長から先生と呼ばれ、礼を篤くされる杉ともえの実体は何だろうか——？

玲子は知らない。

玲子が完璧なマゾヒスティンになった時、ともえは正体を明かすだろうか。——それも分らない。

8

讃美歌のこだまする教会の前から、二人はスマートな大型のタクシーに乗った。

電車と、幾つかの車をみるみる追抜いた。「悲しい顔をしているよ、おもえ」

街路樹が次々にうしろへ退って行く。

「急に悲しくなったようだね、玲子」

ほほほ……ともえは笑った。

「金のリングはまだ早いようだね」

「いいえ……」

玲子はともえの肩に顔を押しつけた。

「金のリングを嵌めたい……」

「なぜ悲しい顔をしてたんだい」

「——考えてましたの」

「高島のことだね」

「——はい」

彼のことは、どうしたらいいのでしょうか、

玲子は鼻と顔を押しつけて懇えた。

「どうしたらいいの……」

車が、裏街へ這入った頃、司玲子は運転子の前も憚らず泣きじゃくっていた。

路地の入口に車がとまった。ともえが、玲子のハンドバッグから金を出して、払った。

「見っともない！ 車の中で泣いたりなんかして！」

路地を辿って行きながら、ともえはハンドバッグで玲子の腰を二度撲った。そうして二人は木曜館の中へ這入った。

仮装面の館長が、恐懼してともえを出迎えたのはこの前の通りだった。——杉ともえの

大名刺判(9×6.5) 印画紙焼付

Y 60	Y 59	Y 58	Y 57	Y 56	Y 55	Y 54	Y 53	Y 52	Y 51	Y 50	Y 49	Y 48	Y 47	Y 46	Y 45	Y 44	Y 43	Y 42
エビ賣めの表情	聖壇のさらし者	股間縛開股の絵	前手錠全裸像	膨隆突出した臀部	緊縛女体の開陳	カメラに晒す全裸	不行儀姿態の美	柱縛り観念の図	手吊り裸身の乱舞	ワンピース縛り	長襦袢後手しほり	振袖令嬢後手賣め	全裸寝台羞恥賣め	全裸後手壁ハリツケ	後手立木縛り	全裸変形時間正面	あられもなき開股	濃艶ハダカ縛り
(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(大塚啓子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(大塚啓子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(花坂道子)	(花坂道子)	(花坂道子)	(花坂道子)	(愛川悦子)	(村井知可子)	(大塚啓子)	(絹川文代)	

むかっ
て行っ
た。

そう司玲子は考えていた。

△体 験▽

女力士会見記

岡 平 吉 雄

昭和十七年八月、夏休暇の折とて帰郷。友人とお茶でも飲もうと町に出た。

いずこからともなく櫓太鼓の音が流れ、私はハッとした。

友人を誘うようにして櫓太鼓の方向へ足を進めると、私の予想は適中した。女相撲小屋が近くに見えたのである。四股名を染めぬいた幟が五、六本、風になびいているではないか。

私は中学時代、二、三度女相撲を見てからは異常な関心を抱きはじめていたのであるが、この念願がかなって、まのあたりに女相撲興行

団を発見したのであるから、一瞬、身体の血が逆流しはじめたことを自覚した。

御案内の通り、小屋の前側には客寄せの顔見世台に印半纏をはおった女力士が、相撲をとり終えたのか、櫓落しの相撲髪をみだして立っている。肉色のシャシとパンツの上に稽古まわしが餅肌にくっきり、しめられ、土俵上に倒されたのか、右半身に砂をかぶり、これをはらっている一人の女力士を見た時、平静を装いながらも胸の高鳴るのを止めることができなかった。私は息を止めながら、「おい。面白そうじゃないか、入ろうか」

と、友人を誘った。友人は小屋に一瞥をくると、

「ちえっ、化物みたいじゃないか」

と、そのまま足を止めようとしないう。私は黙って、その後に続いた。女相撲のファンであることを、この親友に見抜かれはしまいかと、努めてこれを無視した態度をとったのである。

しかし、一刻も早くこの友人をまいて小屋を覗きたいという願望は、益々強くなるばかりで、それから、どう友人をまいたか記憶がない。

とにか、その足で小屋に入った。が、やはり土俵近くに割り込むだけの勇氣もなく、遠くから観戦する羽目となった。

奇ク誌上で女相撲の白熱戦の様子は、たくさん筆致によってすでにたびたび描写されているが私の見る限りにおいて、興行的な女相撲は一応、肉弾相搏つすさまじいものではあった。が、やはり八百長くさい気持が相当強かったのはいぬめない。それを裏書きするような事態が、この女相撲で展開されたのである。

数番の取組後、桂川という二十四、五の女力士と二十一、二の若椿といふ女力士との取組が行なわれた。両力士とも男好きのする五尺二寸、十四貫位の比較的美貌の持主であったが、私はこの勝負は桂川の勝ちであることを予想した。というのは、この桂川は前の受組みでは負けており、若椿は勝っていたからである。

暫く観戦していれば、誰にでも気付くような公平な配分がなされており、それだけに取組み自体の興味は半減していた。この勝負は両者が二、三発はってから四つとなり、互いに投げの打ち合いとなりながら、桂川が土俵際に寄られ、弓なりになってこらえている。

この重なり合った肢体の光景は、二十年後の今でも記憶に残っている。桂川はたくみに土俵を回って上手投げを打ったが、両力士は同時に土俵から転倒した。さっと、行司は桂川に軍配をあげた。

ところが土俵際の見物人の二、三が、その前に桂川が土俵を割ったことを見抜いて、

「東が勝ったんだ」

「東だ、東だ」とさわぎたてた。この弥次が案外に強く、そのため行司も困ったらしく、呼び出の老人と何が相談していたが、直ぐ土俵中央に立ち、

「ただ今の勝負、取直し」と発表した。

私はこの時、あるいは女相撲も多少真剣味があるのかも知れないと期待を持ち、次の取直しを楽しみに見守ったのである。しかし、この取り直しで、全くの八百長であることを、はっきり見せつけられたのである。

両力士とも立ち合いから全く同じ取り口であり、桂川の上手投げで勝負は決った。ただ前の取組中、不用意に足を出したが、それが見られなかっただけである。

観客の大部分は八百長であることを、十分承知していたであろうと思うが、僅かにその眼をそらすだけの芸があつてほしいものと思

った。この勝負によって、女相撲がすべて準備された演出によるものであることを知らされ、多少の不満と不信を抱くようになったのである。

扱て、それから、土俵入り、腹上の飴つきなどの芸を見て小屋を出た。が、あの肉付きのよい若椿、桂川、梅の里という四人の女力士の相撲髪のみだれ、まわしをした太股あたりの女体が、たまらなく頭に焼きついて難れない。興奮は容易にさめない。

出来ることなら、この連中と個人的に近づくことが出来ないものかと空想に耽った。

あるいは、それ以上の期待を、求めたかも知れない。その時、ふと私の頭にEのことが思い出された。Eは中学校の同窓で四年生の秋、遊廓に登楼し、退校になったしたたか者である。

困ったときには、当時の不良らしく、よく話にのってくれたものである。このEに相談を持ちかけようと考えた。しかし、やはり私が女力士に興味のあることを見抜かれることは、とても堪えられないような気もした。でも、いつの間にか、私の足はEの家に向っていた。

当時のEはO組というテキ屋に入り、賭博

などをやって小使錢を稼いでいたようだ。久方ぶりに訪問するとEは大変喜んでくれた。私はその後の消息などを話し、ためらいながらも本意を打ちあけた。

Eは微笑をうかべながら、

「そんなことはわけはねエ、あんなものは、女郎と変りねえんだから、少し金をつかませば抱かせてくれるよ」という。

「いや、誤解しないでくれ、僕は、ただ話し合ってみたいんだ、それだけの理由だよ」

「ハハハハ、抱けりやなおいいじゃないか、だが、お前も物好きな奴だなあ」と笑って、

「それで目当ての女は何んて奴だ」

「いや、特定の女ではないんだ。誰でもいいんだよ」

「馬鹿なこというな、誰だって好みというものがあろう。こうなった以上、はっきりいってみろよ」

「うん、まあ、桂川、若椿、梅の里というのなら、どれでもいいんだ」

「お前も大した奴だ。三人も目当てがあったのか、まあ、いいだろう」という、

私は絶対に口外しないよう念を押したが、扱て、金の持ち合せがない。Eは、
「十円もあればよかろう」といって、その立

替を引受けてくれ、早速小屋へ交渉に出向った。Eの母親は芸者上りとかで家族はEと二人暮らしであったが、お茶の入れかえに微笑を浮かべながら入ってきた。

「あなた、随分面白いことをするんですね、お父さんやお母さんが心配しますよ」と広くもない家なので、うすうす私達の話の内容を感知したらしい、いい方であった。が、別にこれを止めようという様子もなかった。私はこの母親の気性を前々からよく知っていたから

「どうか、内分にお願ひします」と真赤になりながらも頭を下げた。

約一時間もしたのであろうか、Eはにこにこしながら戻ってきた。

「松屋という木賃宿があるだろう、あすここに泊っている。今夜九時頃、帰るからそこへ行きねえ、梅の里というのが相手になるそうだし」という。

「君も一緒に頼む、僕一人では無理だ」

「何んだ、だらしがねえ、俺がいたんじや、邪魔になろう」

「いや、別に僕はそんな意味で逢うわけではない、ぜひ一緒に来てくれ」

「ハハハ、仕方のねえ奴だ、まあ、お前が頼

むのなら行ってやる。だがなあ、俺はちっとも興味がねえなあ」と笑った。

九時までには、三時間位、間があったと思う。その間、時間の長いと思ったことはなかった、とにかく、私達はお互いの近況など語り合いながら、努めて平静を装って時間のくるのを待ったのである。

「じゃあ、出かけるとするか」

Eにうながされて外へ出た。が、内心は一刻も早く出たかった。その反面、何かそら恐ろしい犯罪でも犯すような気持で足がふるえた。暗い夜道を歩いて、松屋という木賃宿の一室に入ることになった。三疊の部屋は陰気で薄暗かった。

隣室から男とも女とも付かないような言葉使いをした女力士がギヤァギヤァさわいである声が耳に入ってくる。

「あら、きよ子の最負のお客が来たんだってさ」「うまくやんなよ」「あたしも相手をしてようか、二人がかりじや無理か、ハハハハ」「馬鹿野郎、なにいつてんだ」

そんな話がつつぬけに聞えてきたが、やがて梅の里が顔を出した。

「兄さん、すまなかったわねえ」とEに向って笑いかけた。この梅の里は三十は過ぎてい

たであろう。私の求めていた女力士の中では一番年輩であり、土俵態度も演技がかったと思う

「じゃあ、帰るぜ」とEは腰をあげかけたが「待ってくれ、君も一緒におる約束じゃないか」私はあわてた。

「ハハハ、若いねえ、兄さん、二人いたじゃあ、いくら私でも困るよ」と梅の里が下卑た笑声を出した。

「違う、僕はあんたから話を聞こうと思うだけなんだ」

「話を聞く？　どんな」

「相撲の——」

「そんな話、きいてどうすのさ」

そんな会話がいったように思う。すると再び戸が開いて、二、三の女力士が

「どう、あたし達も一緒に入ろうか」

「あたし達にも祝儀を出してくれよ」

「馬鹿野郎、手前達に用はねえ、そんな話は一人でたくさんだ」

ふざけかかった女力士にEは一喝した。

とにかく、私はそこで小一時間位、Eを交えて、とりとめのないことを話したが、その内容は、

「どうして角力になったの？」

「別にとりたててどういふこともないさ、喰うためにだよ」

「でも他に仕事はあるでしょう」

「角力が好きでなったわけじゃない、父ちゃんがここへ連れて来たから、この商売をしているわけさ」

「というと、この中の人は皆んな、角力が好きでなった人はいないの」

「さあね、最初から好きでなったのは居ないと思うよ。ただ身体が大きくて他に使い道のないものもいるからね」

「相撲は面白い？」

「商売さ」

直ぐ会話は閉ざされてしまう。梅の里は私の月並みな質問に少しの反応も示さない。

私はあの八百長相撲のことを切り出そうと思いつつも、梅の里の顔を見ると、なぜか口に出すことは出来なかった。Eも私達の会話にあきあきしたか、

「どうでえ、女同志で毎日、相撲をとっても面白くねえだろう」というと、梅の里も急に元気付いて、「兄さん、私の相手になりたいかい」「冗談じゃあねえ、女は抱くより興味はねえよ」「あたしを抱きたいのかい」「馬鹿野郎、俺はお前みたいなグロ婆さんは用はね

え、まともな相手でなくちゃ駄目でえ」「チエッ、何にさ、そんなら、お前さん、来なけりゃいいじゃあないか」

「好きで来たんじゃない、こいつのためさ」

「ふん、当の本人がこれじゃあねえ、何んだか真面目くさくてさ、馬鹿馬鹿しいよ」

と、私を見くだしたように一睨した。

この会見で予想したような胸をときめかす場面にはぶつからなかったむしろ一刻も早くこの場から抜け出たいという気持が強く動きはじめた。

まのあたりにみた梅の里は、当時の私としては余りにも年老いた小母さんという感じであり、その上あらうざらしの浴衣が妙に不潔くさくみえた。時間が経つに従って木賃宿の臭気で嫉妬感を懐きはじめ、どうしようもなかった。二階の階段をおりる時、梅の里がそと、「明日、おいでよ、五円持ってくれば遊んでやるよ」と耳打ちした。まるで子供をあしらうような感じであった。

外に出て、ホッとした私は後悔の念で一杯になった。

不純、辱しめ、変質、全くやりきれない空虚感におそわれ、堪えがたい苦痛がひしひしと迫ってくる。もちろん、二度と梅の里と逢

おういう気持はない。出来ることなら、このいまわしい印象を一日も早く脳裏から打ち消したいと願ったのである。女が相撲をとるということはノーマルな神経ではない。それに異常な関心を抱いた自分自身の心の動きが余りにも情けなかった。

しかし、それから月日が経って従って、益

々女相撲ファンとなつていったのは、どういふことなのであろう。あの強烈な印象が嫌悪と執着におりなされて、次第に抜け切れない絆となつて以後の生活に影響を与えたのである。

なぜあの時、私は梅の里を抱かなかつたのであろうか残念に思う。いや、むしろあの一

番若かつた若椿と一緒に浮き草の旅を続けたら、面白い一生ではなかつたらうか。あれから二十年、私は一流会社の課長の椅子で誰にも予期しない瞑想にふけていた。

「課長さん、お茶が入りました。」

部下の女事務員からふと声をかけられた。

(了)

「通信」

妊婦の写真を入手して

瀬 沼 四 郎

小生は気が弱く、これまで分譲写真などあまり注文する勇氣などありませんでしたが、三月号の『妊婦秘蔵写真特集』の広告を見ては、どうしても欲しいと思ひ、思い切つて注文しました。送られて来たものを見ると、提供者の方には申しわけありませんが、アマチ

ユアの方なのでしょう、辻村氏や塚本氏のよくなベテランの撮影されたものに比べて、写真の出来ばえとしては、正直に言つてかなり遜色があります。これは当然のことでしょうが――。

しかし、それにもかかわらず、ぶっくりと

ふくらんだ妊婦の腹の大きさは、さすがに立派なものです。かねての念願であつた、実際に妊娠した女性の裸出した腹部を目のあたり見ることが出来たのですから、こんな喜びはありません。欲を言えば、小生にとって、妊婦の腹は大きければ大きいほど魅力があるので、さらに九カ月、十カ月(臨月)の妊婦のヌードを見たいのですが、あえて妊娠中の大きなお腹を鑑賞する機会を与えて下さった、モデルの児玉昌子さんと、そのネガを提供された某氏とに感謝しなければなりません。お世辞ではありませんが、こういう読者の協力を得た分譲写真が売り出されるところに奇クのよさがあるよらな気がします。編集方針として、いたずらにどぎつさで売ろうとはせず、読者の多種多様な嗜好を公平に反映さ

せながら、常に読者と共にあることで良識を保って行こうとする態度、ここに他誌には見られない奇クの魅力があるのではないでしようか。

もちろん、社会一般の標準から見れば、ずい分変わった趣向が、大胆にとり上げられます。そして、節度を守りながら出来るだけ幅ひろく読者の要求にこたえることが、いっしか奇クの特長となったようです。これはいわば特殊誌としての要件ではないでしようか。一般の卑俗な興味に媚態を示さないで、あくまで雑誌の特殊性を生かそうとする方針がそれです。

たとえば、奇クは、普通のサド・マゾだけでなく、浣腸、切腹（以上は他誌にも見られます）はもとより、禪、女斗美、ゴムフェチお臍、鼻いじめ、お灸その他、あらゆる、傾向の読み物や写真を出していますが、このような雑誌が他にあるでしようか。蛙腹、そして妊娠についても、他の雑誌では殆んど扱ってはいませ。

しかし、浣腸にしても切腹にしても半年や一年で開拓されたものではありませんでした。何年にもわたる蓄積によって、今日奇ク誌上

に占めている地位を獲得したのです。他誌のように、借りものの趣向おかしくでっち上げて、読者におしつけるのとはちがいます。はじめは、何んておかしな……と思われようとも、だんだんと同志がふえ、山の雪がとけるように、読者の心の底に眠っている形のなかつたものが、徐々に流れ出して来て河をつくるのです。形のなかつたものが、形をとって来るのです。時をかけ、待つことによって、美酒が醸酵して来るのと似てはいないでしようか。だからこそ、いつもアイディアが新鮮で、魅力があり、たえず発展することが可能であるのだと思います。読者の中には、奇クのマンネリ化を心配しておられる方もありますが、小生は、右のように考え、大局においては心配ないものと思います。

小生は、妊婦マニアとして、今度のように月の進んだ妊婦の裸出した腹部の写真が、読者の提供によるとはいえ、分譲されるようになったことを、画期的なことだと考えます。そして、浣腸でも切腹でもそうであったように、妊婦マニアの読者諸兄姉が読み物に、通信に、写真に、絵に、どしどし進んで投稿されるよう願うものです。浣腸でも切腹でも、

読者の記事がどんどんのるようになって、次第にグラビアや、口絵や、分譲写真に進出するようになったのですから。

妊婦マニアの場合には、特別の制約があります。それは、妊婦のモデルが簡単には得られないということです。梨花さんとか大塚さんとかいう、普通のモデルを使えないことです。関谷さんが妊娠なさったら……と思いますが、これも勝手に要望できないことです。だから、この点でも、読者の特別の協力が必要なわけです。

妊婦マニアは、奇クの上で、もう十分に市民権を得ていると思います。奇クの発展を心から切望し、奇ク誌上での妊婦マニアの発展を心から切望するものとして、この稿をおわりたいと思います。

最後に、お臍とか切腹に興味をおもちの方で妊婦にも関心をおもちの方が、案外多いように見受けられますので、一度、何んとかして、妊婦の切腹の擬態写真のようなものも、グラビアを飾ることになれば面白いと、常々考えています。

どうか、私達マニアのために御協力下さるようお願い致します。

「今月の新版分讓品」

○女体争斗場面十二態

大手札印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円

略号「おん」

モデル 春日ルミ、愛川悦子
代表的なサジスチン春日ルミ女史がバーの
マダムという忙しい仕事の寸暇をさいてモデ
ルとして登場。野性的な肢体の持主、愛川悦
子嬢を相手に、組んずほぐれつの激しい争斗
場面。互いに相手の急所を攻めて完全に屈伏
させた上、尻の下に敷いてしまおうと全力を
つくして争うシーンの数々。

○オムツの股間しぼり

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号「むく」 モデル 東浦ひかる

口には頬もくびれよと厳しい猿ぐつわ、ゴ
ムのオシメカバーの半ばはずれかけたボタン
の間から浴衣地のオシメがむざんにものぞい
ている。胸から腹、そしてカバーの上からの
股間縛り。荒々しい男の足で踏みつけられて
喘ぐひかるの豊かな裸身。

○強烈責め、被虐の果て

大手札印画紙 五枚一組 五〇〇円

略号「りお」 モデル 梨花悠紀子

完全に飼育し終えた梨花嬢が吊責めやエビ
責め、逆エビ責めなどにも満足せず、被虐の

終局点として誠に強烈きわまりない縄目を、
全身くびれきつてしまいう程施され、男の手で
さいなまれ足で踏みつけられ、感極まって嗚
咽の叫びを挙げた数コマを生来の天性による
被虐モデル梨花悠紀子の代表的ポーズとして
紹介します。

○乳房いじめ

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号「とお」 モデル 大塚 啓子

乳房の上下に紐をかけて、ねじり上げ締め
つけ、豊満な乳房をむっくりと盛りあがらせ
て可愛い啓子の苦痛にもだえる顔を見る。

○強制浣腸三態

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号「きか」 モデル 絹川 文代

臀部を高々ともち上げて髪ふり乱して浣腸
のポーズを無理矢理にとらされた後手しぼり
の文代嬢に対して、もろもろの浣腸器具が男
の手によって悪魔のように襲ってくる。

○激痛！逆エビ責め

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号「きえ」 モデル 大塚 啓子

後手縛りの縄と両足首の縄とが若々しい女
体がしなう程締めつけられて、その連結した
縄をぐいぐいと持ち上げられる。全身は背中
で二つ折りとなり、さすがの啓子嬢もその激
痛に、うううと呻めきながら目に涙をためて

許しを乞う全くトリックのない迫真的な強烈
な逆エビ責めのシーン四態。

○美貌の裸身に縄目

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号「きん」 モデル 絹川 文代

絹川文代の美貌にきっちりかまされた豆絞
りの猿ぐつわ、一糸まとわぬ麗身に黒ずんで
手垢に汚れた縄が厳しくまといつき、しなを
つくって悶える表情と全身のうねりとを刻明
に描写して絹川文代ファンに捧げる。

○腰元吊り責め

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号「こり」 モデル 村井知可子

高島田に矢張り、白足袋姿の腰元が、一人
の武士のために庭の木に、後手縛りのまま高
々と宙に吊り上げられ、刀の鞘を縄目にこじ
入れられて折檻される時代劇映画の一場面の
如き華麗にしてロマンな被虐シーン。

○腰元間諜の拷問

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号「こく」 モデル 村井知可子

昨日までは腰元として御殿に仕えた身も、
今は敵方の間諜として、庭の樹に縛りつけら
れ、情容赦なく白状を強いられる哀れな一人
の乙女に過ぎなかった。刀を手にした侍は、
庭に晒された可憐ないけにえに対して、嗜虐
的な興味をもって拷問の手を下すのだった。

新版代理部分讓品案内

関谷富佐子夫人緊縛特集

一、強烈、エビ縛り

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(もい) モデル 関谷富佐子

肥り肉(じし)の白い女体をくの字に二つ折りにして、着用のバタフライもかなぐりすててエビ縛りのまま受ける強烈なムチ打ちに真白の臀部は忽ち紅に染まり、頸にかかった縄をピンと張りきらして悶える美体。

二、乳房責の苦悶

大手札印画紙 二枚一組 二〇〇円

略号(もろ) モデル 関谷富佐子

脂ののりきったコリコリとした固い乳房に加えられる手と足の暴虐の嵐。猿ぐつわに息もできぬくらいの口から洩れる苦悶の悲鳴。

三、全裸ムチ打ち

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(もた) モデル 関谷富佐子

豊麗な臀部に、太股に脛に、情容赦なく炸烈する革製のムチ。白い肌にはミミズばれが赤黒く走り、後手に縛られて身動きの出来ぬ彼女は、只ヒューヒューといて転げまわるばかり。ムチ打ちに命を捧げる彼女に対して行っ

た手加減のない本格的なムチ打ちの成果。

四、六尺褌の女性像

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(くる) モデル 関谷富佐子

恥しさに顔を赤らめた関谷夫人が、そのボリウムのある堂々たる体格の裸身に、白晒の六尺褌をきりと締めて、前後左右から、その見事な姿態を十二分に見て頂くため、皎々たる電光下に立つ。(縛りなし)

五、強打に泣く裸身

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(むち) モデル 関谷富佐子

裸身に六尺褌一丁の彼女が前手しぱりにあって、その可憐な身をかばうことができない哀れな膝立のポーズで、むきだしになった臀部に、背中に乱れとぶ皮ムチの強打。彼女の全身はエビのように曲り、或は倒れんばかりに逆に反り、ぐねぐねと曲り屈み、ムチの痛さに悶えぬく悦虐の極の姿態。ムチ打ちつつシャッターを切った二十数枚のネガの中から選びだした絶妙の表情のものばかり。

フェチッシュ緊縛の部

一、レインコート拘束

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(いろ) モデル 大塚 啓子

裸の肌に直接ネチネチとしたレインコートをまとい、フツドをまぶたにかかった大塚啓子の柔肌をぐるぐると荒縄で厳しく縛り上げれば、ゴムの裏布がジカに肌を圧迫して、その感触に、てんてん反側するさまを彼女の足の先から頭のとっぺんまで刻明に捉らえた。

二、ゴム布に包まれて

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(こま) モデル 梨花悠紀子

後手に縛られた梨花悠紀子が頭にはゴム帽子、首にはゴムの前掛け、ゴムのズロースをはき、手にはゴムの手袋、足にはゴムの靴下と、全身これすべてゴムづくめ、縛られて次第に時間が経つてくると、ゴムのあのヌメヌメとしたタッチが直接肌を刺戟し、特有の臭気が鼻をついてくると、彼は、そのままじっとしていることができなかった。

三、狙われた和装の娘

大手札印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円

略号(ねい) モデル 愛川 悦子

珍しく和服に身をかためた娘、愛川悦子に襲いかかった縄の暴虐。忽ち羽織は剥がれ着物の前は押しはだけられて、赤い長襦袢があらわに乱れ、縛しめられた愛川嬢の周囲は帯や腰紐、羽織などが百花繚乱と咲きはこり時ならぬ目の正月が現出した。

妊婦秘蔵写真特集

ここに分譲いたします妊婦写真、読者有志の提供になるもので、モデルは二十二才になる美貌の若妻です。本誌上にて関谷夫人が登場したことに対して感激された某氏が特に自ら撮影の秘蔵のネガを提供されたのであります。提供者の希望により誌上での公開が許されませんでした。分譲品としてのみ発表いたします。

○妊娠八カ月の股間縛

大手札印画紙鮮明焼付

三枚一組 四〇〇円

モデル 児玉 昌子

略号(には)

妊娠八カ月の二十二才の若妻がペンベンたるはちきれそうな大きな腹をつき出して立った全身裸像、しかも可憐な美貌でチャーミングに微笑んでいるというマニヤ垂涎のアイデアに加うるに妊婦の股間縛りという最高のアイデアによる秘蔵品。

○妊娠八カ月のヌード縛

大手札印画紙鮮明焼付

三枚一組 四〇〇円

モデル 児玉 昌子

略号(にあ)

後手に縛られ猿ぐつわをされた八カ月の妊婦が大きなお腹をつき出してすくくと裸で立った正面像。見事にふくらんだお腹が妊娠線もあざやかに、目の前に見ることが出来る妊婦写真の決定版！

○妊娠五カ月の緊縛

大手札印画紙鮮明焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 児玉 昌子

略号(にこ)

同じモデルの妊娠五カ月のときの緊縛フォト。八カ月のときのお腹の大きさと比較すると如何に差があるか一目で見分けることが出来て面白いです。

○妊娠前のヌード緊縛

大手札印画紙鮮明焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 児玉 昌子

略号(まさ)

妊娠中の写真と比較するため同じモデルの妊娠前の常態の写真を増やしました。如何に妊娠中のお腹が大きいかということがよくわかりますから一緒にお求め下さい。

大好評 妊婦緊縛写真分譲追加発表

先月号にて児玉昌子さんの妊娠中のヌード並に緊縛写真の分譲を開始しましたところ、妊婦マニアの方から非常な喜びを以って迎えられ、その膨満した腹部は、まさにマニヤ垂涎の逸品として絶賛を博しました。ここに更に変わった姿態の臨月近き妊婦写真を御覧にいたします。何卒はちきれんばかりの巨大な腹部に御期待下さい。

○妊婦、股間縛 (九カ月)

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

児玉昌子 略号(にふ)

妊娠線もあざやかに、ふっくらと膨隆した腹部は、妊婦ならではの美しさをぞくぞくとする魅力をもつてあらわしている。黒ずんだ乳量を中心に、大きくふくらんだ巨大な乳房は、紐に締めつけられて、なお一層素晴らしい盛り上りを見せている。あのほっそりとスタイルのよい昌子さんが妊娠したら、このようなポリウムのある腹部、腰部になるのである。芳紀二十二才の美しい若妻のはちきれそうな妊娠時の健康体をごらんに入れます。更に近々、同じモデルの分娩後の緊縛フォトも分譲できる予定です。

○妊婦、股間縛 (六カ月)

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号(にと)

提供された同じモデルの中、比較的便をはかるため、更に六カ月の股間縛りを分譲いたします。御参考にごらん頂くと面白と思います。

○妊娠初期の緊縛とヌード

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

児玉昌子 略号(ぬろ)

膨らみかけた腹部を露出して恥かしげに顔を掩ったヌードの妊婦と洋装の高手小手縛り。なお、妊婦フォトについては、今後出来るだけ発表したいと考えておりますので、モデルについて御心当りおありの方は御連絡下さるようお願いいたします。

佐保 忍案・四馬孝画

B6版8枚1組 500円

時代風俗責場面八景

略号(さほ8)

< 時代風凌辱場面ばかりの被虐絵巻 >

第四景
親分の折檻

コウモリの辰が狙った小股の切れ上った小間物屋の娘には、生憎くと言いかわした男があった。乾分に欺まされて連れて来られた娘は、腰巻もはがされたあらわな姿に縄を掛けられて、部屋の中に押しこめられた。キセルの雁首を娘の真ッちらい肌にしめて、自分の意に従わせようと、いろいろ手を変えて責め折檻するのだった。

第三景
腰元の逆吊

「拙者の意に従うと言わぬから、このような哀れな姿を晒すのじゃ」素裸に剥かれた美しい腰元は納屋の梁から逆さ吊りに釣り上げられて、観念の眼を閉じている。可愛さ余って憎さ百倍の直参は、弓の折れを手にして、この美麗な生人形を叩きのめそうというのである。汚れを知らぬ真ッ白い肌は、やがて紅に染まることだろう。

第二景
目明裸吟味

番小屋の裏の柱に真ッ裸のまま縛りつけられた娘、身に覚えのないことと拒みつづけるのを、役得とばかり十手を口の中へ捻じ込んで、口を割らせようと目明し。真白い太股にむしろのケバが喰いこんで痛々しそう。娘は乳房も押し潰されそうに厳しい縄目にもだえ、柱のうしろで頑丈に縛られた後手がびくびくと哀れにふるえる。

第一景
乞食と美女

荒むしろを張った乞食小屋へ掠られてきた町一番の小町娘と評判の美女。雪をあざむくばかり真白な肌をむき出しに、一糸まとわぬ裸身に太い麻縄がぐるぐる縛りつけられ、口には、むさくるしい汚れ褌できっちり縛りつけられて乞食の一人に抱かれて無慚な光景を、庭のすき間から覗き見している仲間の乞食の眼。

第八景
井戸責の姫

「姫、かくなる上は不憫ながら、その真ッ白い肌に、この弓のムチをお見舞いさせて貰いますぞ」全裸の恥しい姿にむかれ、冷たい井戸端の栗石の上に座らせられた姫は、後手をもうこれ以上は上らないという程、高々と背に縛り上げられ、苦痛の悲鳴を洩らすのであった。これから行われる苛酷な責を暗示する釣籠がころがっている。

第七景
杉葉いぶし

深夜の森の中にばかりと焚火の火。夜目にも白く浮かぶ裸身の若い女が、松の木から太い縄で吊るされている。下には奇怪な老女が白髪をふり乱して、この哀れなイケニエを山の神の人身御供に捧げるべく祈りつづけている。焚火にのせられた生の杉葉は、くすぶり続けて蒙々と白い煙を女の裸身にそそがけていた。

第六景
駕籠昇人足

悪人足の駕籠にのったのが運の尽きであった。人影のない森の中へかつぎ込まれた末、着物という着物をむしり取られ、後手のまま樹に縛られてしまった。口には汗くさい豆しぼりの手拭できっちり縛りつけられ、いやらしい醜男の人足が、美しい若奥様に対して舌なめずりしながら近づいてくる。まさに危ふし、美女の運命。

第五景
戦陣の血祭

生捕りにされた敵方の娘は、裸にむかれて楯にぎりぎり縛りつけられて、土塁の上に立てられた。裸の首に、胸に、腹に、胴に荒々しい太縄が喰い込んで息もつけぬ娘は、苦痛と羞恥に真赤になりながら、味方に救いを求めて泣き叫ぶが、飛び来たった一筋の矢が激しく楯に突き刺って、彼女の恐怖心を一層あふりたてるのだった。

今月の新版案内

六尺 褌

略号

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 東浦ひかる

セイカンな若々しい姿態にきりりと締めた白い晒の六尺褌一本の裸体(褌をしめさせると殆どの娘は大変恥かしがる)にて四股を踏む蹲踞の構えで正面。立って正面背面、側面、といろいろのポーズをござらんにいれます。

蒲団に悶ゆ

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

裸身に喰い込む麻縄、激しいムチ打ちに追い立てられて蒲団の上で転げまわって悶える若き夫人。足の爪先立ててムチを防ぐ太股に痛烈なる革ムチ。顔は悲痛に泣きむせぶ感きわまった悦虐の表情。

悦虐の果て

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

この全身の表情をちよっとごらん下さい。殴って殴って殴りつけた末に、今まさに倒れんとした刹那、やっとキャッチした貴重なポーズばかりです。この写真から従前にはない強烈なすさまじい責めのムードを擲んで下されば幸甚。

椅子エビ責

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

このポーズの撮影で半日を費した強烈きわまりないエビ責めマゾヒスト東浦嬢の熱意と若さを以てしなければ出来ないポーズ。椅子の上に縛りつけられ、両足を頭の上まで高々と折り曲げ、ぎゅうぎゅう締めつけ、一時間ばかり放置した上でシャッターを切ったフォト。勿論これはひかる嬢の注文で忍耐の限界を試したものの。

六尺 褌縛

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

六尺褌を前の垂れもなくしてきゅっと締めつけ、恥しきにもすれば両手を前にやろうとす

るのを制して、両手首を背後で括りつけて、殊更大きなお腹をつき出させるようにしたフンドシのしぼりフォト。

東浦の切腹

略号

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 東浦ひかる

東浦ひかるの腹部は最近皮下脂肪が増したか大変膨隆してきた。一日、彼女に切腹のことを話すと自分の下腹に刃を立てるということには興味を持っていた。というので、彼女の思いのままに短刀を渡してポーズをとらしてみた。これはその時のフォトである。端座して刃を下腹にかまえ、したたかに突き刺したところ。扶ぐって痛さに倒れ伏したところ等、好ポーズばかり五点を選び出した。

浣腸シリーズ

略号

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 梨花悠紀子

梨花悠紀子が、いちじく、ガラス製三〇〇CC浣腸器、イルリガートル、オシメ、オシメカパー、差込便器、等を用いて連続に浣腸と排便を模様を近い距

離から手にとるように仔細に描き出した浣腸関連シリーズ、愛川悦子、大塚啓子の(ちよ)(ちし)(ちふ)に続く浣腸マニヤに捧ぐ第四作。

弓吊り責め

略号

大手札 二枚一組 二五〇円

モデル 梨花悠紀子

両手首と両足首とを反対側にして別々に吊り上げ背を上にして高々と宙に浮いた梨花嬢。吊りを第一に好む悠紀子にして始めて出来た本格的な吊りポーズ。さすがの彼女も顔を垂れて苦痛に耐え、頭を上げて悶えるさまは、素晴らしい。

手足宙吊り

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 梨花悠紀子

両手を手摺に水平に括られ、両足を八の字に開いてその両首を各々左右に釣り上げて縛られた強烈な宙吊りのポーズ。辛抱づよい悠紀子嬢も美しい眉をひそめて苦痛に耐える懸命の責められぶり。ハすべて略号にてお申込み願いますV

新版特殊フェチ・フォト

△バンド・マニヤ向作品の部▽

一、パリスバンド前開き

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おい) モデル 東浦ひかる

黒メリヤス製の前開きのオーソドックスな月経帯を着用し、前開きを当てゴムをとり出して両手でひろげて見せている縛りなしのパリスバンド着用フォト。うつぶせに蒲団の上に腹這いになってバンドの替ゴムの着用部分をあらわに見せ、自らの手で黄色いゴムにふれていく諸々のポーズを開陳します。

二、パリスバンドの縛り

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おは) モデル 東浦ひかる

両手首を背中に回して厳しく胸に二巻き三巻き黒縄で縛られた東浦ひかるが、替ゴムもすっかり露出した開股のポーズでパリスバンドを着用させられ、両手の自由のきかない身をくねらし、両足をばたつかせる表情。

三、パリス携帯用白バンド

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おか) モデル 東浦ひかる

越中褌型の白い布製のバンドに替ゴムが直接ついたままの解放型の白月経帯を着用し、全身の正面のポーズに、大きく両足を八の字

に開いて替ゴムの部分をはっきりと表した大胆な月経帯着用フォト(縛りなし)

四、サカエ軽便型バンド

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おた) モデル 東浦ひかる

黒フンドシ型の解放的なメンスバンドで、二本の紐で固定されています。黒木綿に直接アテゴムがついて、着用したままですっきりゴムの有様がわかります。豊満な女体に着用した縛りなしの軽便型バンド。両股を大きく開いてバンドの有様を鮮明に表す。

五、パリスSSバンド

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おこ) モデル 東浦ひかる

ズロース型の黒メリヤス製の月経帯で、着用したそのまま替ゴムが見えるという準解放型のバンドです。ぴったりと腰部にはりついた月経帯が恥かしげに皆様の目の前に展開しています。縛りなしのフォトです。

六、パピアバンド(大型替ゴム)

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おし) モデル 東浦ひかる

黒メリヤス製の前開きで、大型替ゴムのついたパピアバンドです。ひだの多いどっしりとした替ゴムを裏返して、着用したままに殊更に自らの手でお見せしようという縛りなしの、いかにもメンスバンドの特徴をもったフォトです。

七、サカエバンド(百合)

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おえ) モデル 東浦ひかる

黒木綿のフンドシの股部にボタンで替ゴムをとりつけた解放型のバンド。白のゴム紐で両脇をとめたフンドシ型の標準品。豊満な臀部を白々と裸出した中に、替ゴムが可愛いと輝いている。大きく開いた股の間にちんまりと鎮座しているヌメヌメした替ゴム。

◎以上七点の月経帯着用フォトは、現在市販中のズロース型、解放型、フンドシ型のメンスバンドを裸身にまとわしめて、殊に替ゴムの部分にヒントを合せて、ポーズをとり極めて鮮明に作成したものです。マニアのために各種それぞれ型の変ったものを取り揃え、お求めの便宜をはかりました。

△ゴムマニヤ向作品の部▽

一、ゴムぐるみ人形

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(こみ) モデル 東浦ひかる

二、ゴム包みの束縛

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(こは) モデル 東浦ひかる

三、ゴムと女体のアップ

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(こあ) モデル 東浦ひかる

女体切腹 (現代篇) 絵巻

略号 (えま1)

四馬孝画 B 6判感光紙焼付 六枚一組 五〇〇円

将校と女学生の情死切腹

煉瓦のくずれた廃家の一室にて軍服姿の将校が軍刀にて双手突き立腹を切り、その前に可憐な制服姿の女学生、スカートを脱ぎすて、白いズロースを托し上げて九寸五分の短刀をぐさりと臍下に突き立てる。

女間諜、夕に切腹す

敵国潜入のうら若き女将校、スパイの露見を知った彼女は軍服姿に身を固め、前をくつろげて軍刀でしたたかに下腹を切れば、青黒き腸が傷口からのぞき血は床にしたり落ちる。乱入した数人の兵士の驚く表情。

大和撫子、乙女の自刃

敗戦で凌辱の手の迫ってきた女学校の寄宿舎。操を守るため次々と自刃する乙女たち。未婚の女教師、暴徒を前にして下腹を切りさばき、最後に咽喉元に短刀を突き立て飛び散る血汐の中に大和撫子の見事な自決を遂げる悲壮な女体切腹シーン。

雨中、美女の立腹プレイ

横なぐりの雨が降りつける深夜の林の中。レインコート一枚を素肌にとった麗人が、夜目にも白く浮ぶ下腹を洋式ナイフで深々と切り、創口からはむくむくと腸が溢れ出て、血汐は下半身を紅に染める凄絶さ。

夜会服貴婦人の切腹

黒皮手套に黒皮長靴の外は裸という大胆な服装の貴婦人が夜会服を肩にかけたまま、大の字に突っ立っての壮絶な覚悟の切腹。海軍将校用の短刀の切味は思うさまに素肌を裂き太い腸管がうねうねと這い出てくる。

女子大生の切腹自殺

美しい女子大生が失恋の結果旅館の一室を選んで思うさまに自らの下腹を掻き切って死のうと、パステイ一枚の裸身に、腸ののぞくまで深々と刃を突き立て壁に身を寄せて自分の死を待つ哀婉きわまりないシーン。

女体切腹 (時代篇) 絵巻

略号 (えま2)

四馬孝画 B 6判感光紙焼付 六枚一組 五〇〇円

落城の姫君、火中の自刃

火焰に包まれた天主閣の一室、城主の姫君は迫りくる火焰と敵兵に囲まれながら、十八の花の命を自らの手で絶とうと双肌ぬぎとなつて下腹を家宝の脇差でしたたかに切りまくり、血汐に塗れて自刃を遂げる。

武家の娘、覚悟の切腹

女ながらも死を賜った武家の娘は介錯のために派遣された藩中の青年武士に対して介錯を断り、白布の上に正坐して古式にかなった覚悟の切腹。柄も通れと突き立てきりりと引き回せば血汐と共に腸が溢れ出る。

恋人に抱かれての切腹

白装束に身を固めて覚悟の腹切りを行う娘と抱き起して顔をのぞき込む恋人の青年武士。娘の下腹は一面血の海で腸さえ溢れ、蒼白な顔を挙げて両の乳房を恋人の掌の中に委ねながら、満足そうに絶

命してゆく。

介錯に落ちる女の首

カガリ火の燃える御殿の庭。双肌ぬぎとなった若い女が殿の御前で悲壮な切腹。前かがみになった下腹のふくらみに短刀を突き立てた途端、白刃一閃して娘の白い首すじにさつと飛び散る血汐。首は哀れにも落ちる。

死を賜った腰元の切腹

局のザン訴によって死を賜った腰元は、その憎い局の見ている前で無念の切腹を遂げる。えいッとはかり激しく下腹に突き立てる刃飛び散る血汐と共に思わず口をついて出る絶叫、臍の上を切り裂く十字字腹。

操を守る若妻の切腹

夫の出府中、かねて横恋慕していた上役が無理無体に迫ろうとするのを、かくし持った懐刀で下腹をしたたかに切る。二寸ばかり、ぐいと切りさばけば血汐は白い内肌に飛び散る。操を守る若妻の悲壮な切腹場面。

最新代理部分讓品案内

女体緊縛フオトの部

一、//大の字//逆さ吊り

大判印画紙 三枚一組 四〇〇円
略号(つり) モデル 梨花悠紀子

二、立木//宙縛り//

大判印画紙 三枚一組 四〇〇円
略号(くた) モデル 梨花悠紀子

三、凄惨//乳房責//

大判印画紙 三枚一組 二五〇円
略号(とい) モデル 梨花悠紀子

四、//妊婦の緊縛//

大判印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(にむ) モデル 某女

五、//全裸の仕置//

大判印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(すお) モデル 東浦ひかる

女体切腹フオトの部

一、血紅女体自害

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(ひち) モデル 大塚啓子

二、女体切腹マンダラ

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(あま) モデル 甘木春子外

三、悲愴女体自決

四、哀艶女体割腹

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(ひい) モデル 大塚啓子

五、凄惨血紅女体立腹

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(かつ) モデル 梨花悠紀子

六、苦悶切腹表情

大判印画紙 五枚一組 五〇〇円
略号(ひさ) モデル 大塚啓子

フェチ・フオトの部

一、バンド着用フオト

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(めい) モデル 梨花悠紀子

二、バンド着用の縛り(後手)

大判印画紙 四枚一組 三〇〇円
略号(めろ) モデル 梨花悠紀子

三、バンド着用の縛り(前手)

大判印画紙 四枚一組 三〇〇円
略号(めは) モデル 梨花悠紀子

四、女性の六尺褌

大判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(ろく) モデル 大塚啓子

五、ゴム・マニヤ

大判印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(こむ) モデル 梨花悠紀子

六、メンス・バンド

大判印画紙 四枚一組 四〇〇円
略号(めす) モデル 梨花悠紀子

七、ゴムカバー着縛り

大判印画紙 三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(かは)

八、脱がされたバンド

大判印画紙 二枚一組 二五〇円
梨花悠紀子 略号(めに)

九、アテゴムの猿ぐつわ

大判印画紙 二枚一組 二五〇円
梨花悠紀子 略号(めほ)

特殊趣向フオトの部

一、絞首処刑

大判印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(こう) モデル 絹川文代

二、変態強盗侵入

大判印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円
略号(こと) モデル 絹川文代

三、和洋争闘場面

大判印画紙 六枚一組 五〇〇円
略号(らり) モデル 田中芳代 外

四、裸女争闘場面

大判印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円
略号(らし) モデル 田中芳代 外



小生はある機会に、奇クを知り以後愛読しています。貴誌を知る以前は自分の持っている興味を異常なものではないかと思っておりましたが「奇ク」を知り大勢の同好者がいる事を知り嬉しく思っております。まだ「奇ク」を愛読し始めて日が浅いんですが、今後も「奇ク」は私の側に何時もある事でしょう。小生はSM両方ですので自縛しついでに逆つり等もして

みましたが上手いかず同好の方の御協力をお願い投稿した次第です。又小生は特に女性の縛りに大変興味を持っております。街を若い人が大変派手な格好で歩いていますが若いピチピチした女学生やセーターでスラックス姿等の女性を見てみると一度見動きも出来ない位に縛り上げたいと思います。が同好の方になど全然めぐり逢えず、今日に至ってしまいました。その様な時は頭の中で女性の縛られた姿を想像したり奇クを見てなぐさめていました。小生に云わせてもらえらるならば、女性のあらゆる縛りと思っております。特に豊かに発達した乳房等に太い縄、細い縄がしっかりと入り込み、そのくい込みから乳房にかけ、この自然の曲線は最高の美しさがあります。又縛られている時のあのしびれてくる様な感覚も最高のものです。しかし、その縛りにおける美しさも、まだ写真か、想像するだけでしか判りません。「奇ク」愛読者の中でも小生のように一度責めてみたい方、又責められてみたいと思っている女性の方も居ると思います。小生はまだ若輩ですので、いろいろ研究して満足のいく様な縛りをしたかと思っております。

同好の女性の方で小生の夢を満たしてやろうと思われる方が必ず居ると確信しています。是非御連絡下さる様お願い致します。(千葉
△H・K生▽)

奇クファンの皆様、お元気ですか。僕は二十一歳のマゾ青年ですがサド女性の方々、浣腸責、ムチ責足責、馬責、ローソク責など体に傷がつかない程度なら、どんな責めでも、喜んでお受けいたします。僕が毎夜描いている夢をお知らせしましょう。右手にムチを持ちパンティ一枚の美しい女王様の足もとに、全裸でひざまづいている僕に、女王様はピシリとムチでひと打ちして命令する。「サアこのドレイめ、馬におなり。」四つんばいの馬になった僕の背に女王様はドッカとまたがり、まるでカモシカの様に柔かくひきしまった美しいお足でシッカリとしめつけて又命令される。「このドレイ馬……歩け歩け……ハイハイドードー進め進めハイドーハイビ……ピシリピシリ……。」ハアハアと息をはずませながら進む僕にムチが情け容赦なく飛んでくる。倒れてしまった僕に女王様の足とムチが振りおろされる。「サア……このいくじ

なしめ……サア……ドレイ馬……私の足にキッスすればもう許して上げるは……。」「いかがですか、この様なドレイ責めは。あるいは女王様の下着を僕の顔にかぶせて、美しいお足で思いきりふんづけたり、体をしばっておいでからローソク責めなど、どんな責めでも結構です。僕はまだ一度もプレーの経験は有りませんし、ましてドレイです。女王様のお好きな責めに絶体不服はありません。又女王様お二人のペアで責められても結構です。僕はマゾ九八%、サド二%位で三六五日に二、三日位マゾ女性を優しく責めてみたいと思う時があります、普段はマゾです。どうか横浜、東京など関東一円のサドの女王様方、ぜひお手紙下さい。僕は土、月曜それから平日でも午後はなんとか出きます。プレーだけの交際で満足ですし、なんとか一度女王様の思いきり責めて欲しいと思います。ただ僕はどちらかといえば裕福でないのです、余りデラックスな交際は出きないかも知れません。(横浜へ山本明)

読者のみなさん、私は二十才になる電話交換手の職にある者です。そして私は熱烈な浣腸マニヤ

です。毎日の単調な生活を浣腸によつて、まぎらわせている次第です。私の浣腸のやり方を少々お話し致します。私の住んでいるアパートは各部屋毎にトイレがついておりますのでプレイには大変好都合です。会社がひけますと、夕食後の暇なひとときを待って、よいよ実施するのです。この時間こそ私にとっては待ちに待ったひとときなのです。大抵は食塩水を用いますが、ときには石鹼液のときもあります。量は一リットル位までなら大丈夫で、排泄する時がガラス製五十CC浣腸器の外味を用います。すぐ勢よく流れ出てきます。我慢のあとだけに普通でさえ勢がよいのに、先のとがったところで一層速度が早められ、その速さはすごいものです。それを洗面器のような音のたし易いものに受けます。音が大きければ大きいだけ私の感激は素晴らしいのです。でも、こんなこと、自分だけだった一人のアパートの個室だからこそ出来るものですね。でも、そんな私なのに、時々それだけでは満足出来ない時があるのです。そこで読者の皆さんにお呼びかけ致したいのです。どなたか、私を縛って浣腸して下さい方、ございませ

んでしょうか。私一人でプレイするだけでしたら、どうしても手ぬるくて、最後まで我慢できなくて、途中で、妥協してしまうのです。又、一度オムツをあててみたいとも思っております。男性の方出来たら、若い方がよろしいですが。私は身長一七〇で体重も普通ぐらいで体力には十分自信がありますから、少々きつくしても私はかえって幸福に感ずる位です。どうかこの誌上でお返事下さい。お返事あり次第、こちらの詳しい地図をお知らせします。又、御都合でそちらへお伺いしてもよろしいと思っております。では、よろしくね。(名古屋市中種区八寺島美千代)

川田幸子様、突然この様な失礼な手紙を差し上げますことをお許し下さい。去年の暮近く読者通信のページで貴女の投書を拝見し貴女こそ私が長年待ち望んでいた理想の女王様であると思ひ、直ぐにでもペンを取ろうと思ひましたがその勇氣もなく徒らに貴重な日を過してしまいました。それ以来、毎夜の如く見も知らぬ貴女のことを想像し、貴女に奉仕している自分を描き、どうしたものかと悩み結局ペンをとってしまいました。

全裸後手縛

略号

(みに)

大名刺

三枚一組 二〇〇円
モデル 平野 笑子

OSミュージックのヌードダンスーとして活躍する平野笑子嬢が一条まとわぬすべとした姿態にロープをかけられて後手高手小手の緊縛ポーズをとらされた嗜虐的な三葉のフォト。

寝台の全裸

略号

(みほ)

大名刺

三枚一組 二〇〇円
モデル 平野 笑子

ぐっと凹んだお臍、伸びやかな下股、痛さにもだえる太股、投げだされた足の指。厳しい縄目にベッド上で転々ところがりまわる平野笑子嬢の緊縛裸身をとらえた三ポーズ。前作(みに)と共に彼女の全身の美しさを余すところなく露呈した垂涎万丈のフォト。

全裸の羞恥

略号

(みる)

大名刺

五枚一組 三〇〇円
モデル 田原美佐子

モデルずれのしていない可憐な

BGのアルバイト作品。本人の希望によつて特に口絵には大々的に掲載しなかったのでお馴染みも薄いと思いますが、清純なフェイスと姿態の田原美佐子嬢が恥しさに耐えて衣服をすっかり脱ぎ去り、縄のいましめに哭くポーズ。

股間しばり

略号

(みと)

大名刺

五枚一組 三〇〇円
モデル 絹川 文代

顔といい姿態といい、モデルとして一級品に属するベテラン絹川文代嬢が股間しばり、首縄高手小手に施されて、開股、仰向、足の指をくの字に曲げてのもだえ、等々、度胸をきめて縄ととり組んだ五つの変化のあるポーズ。

全裸股間縛

略号

(みへ)

大名刺

五枚一組 三〇〇円
モデル 絹川 文代

全裸になった文代嬢の真白い肌に喰い込む茶とグレイのまんだらんのロープが美しい姿態と相まって夢幻的な股間しばりのムードを全面にはのほのかにもし出して、見る者をして恍惚境へさそい込む。

今となつては、もう日本中のMの男性が貴女に女王様になつて下さいと申し込んでしまつた後かもしれません、どうかこの可哀想な私にお手紙を下さい。貴女はあの投書で「Mの男性に体験を話し次第によつてはプレイもしたい」と書いてありました、私に是非それをして下さいませんか。私にはその様な経験は一度もありません。ですから貴女様の様な方に先生になつて頂いてMというものが、どんなものであるかを十分にわかるまで教えて頂きたいのです。毎日往き帰りに通る女子寮の前に干してある色とりどりの若い女性のパンティやそれを干している女性を見たりすると、そのパンティの中に埋もれ、その中の一番汚れているのを、顔にあてがい唇に押しつけてみたいと思ひます。その女性の見てゐる前で全裸にされ縛られ、もて遊ばれ恥かしめを受けたり大勢の女性の前で責められたりされたくてたまりません。全裸にされ床の上にころがされ、その顔の上に女王様の大きなお尻をデンと乗せられたり、股の間に首をはさまれ、ギューギューしめつけ、苦しまぎれにパグパグする口の中にパンティを押し込ま

れたり、そんなことを空想して今までは過してきましたが、貴女様の様な、女王様を見出した今では、一日も早く貴女の足下にひれ伏し御奉公いたしたく思ひます。どうか私の女王様に、先生になつて下さい。そしてMの悦びをお教え下さい。(東京八佐藤光彦)

○ 奇ク編集の皆様、始めてお便りします。奇クを読み出して丸二年になります。特に女斗美マニヤとして楽しい思い出を毎月待ちわびております。ファンが一杯いる事は心強くなりました。私子供の頃に居たお手伝さんが始めてフンドシを私にしろと言つた思い出がのこつております。今その人は不明です。奇クにお願いは私は現在「雲斎木綿相撲廻し二本」と「洋服地陣一本」と「サラシ三本」を持つております。毎夜一人楽しく奇クを読み乍ら締めて床に入ります。朝の気持ちの良い事は実際に持ちいた方ではないとわかりません。そこで東京の方で、おたがい締めて合つてプレイ(SM)を楽しむ友をもとめております(男女共)秘密は絶対にお守りします。(プライドの問題ですから)二人が全身の力の有るかぎり攻め合い満足

の行く迄もとめましょう。特に東京の村田さん通信拝見して私も同じ区の居住者なのでもし御使用下されば、お相撲さんの締めて居る輝二本を、おかししても良いと思つております。又、相撲のシコの踏み方、仕切の仕方、廻しの締め方相撲に関する事の出で居る本を持つておりますからおかし致します。御希望の節は本誌を通じて連絡して下さいませ。又、輝会の集いを作つてゐるそうですが、此の際ぜひ私も会員として入会させて戴きたく思ひます。作家土俵四股平氏、雪崎京人氏、岡本吉雄氏、円山景三氏の方々にどしどし書きつづつて下さる事をおたのみします。美女斗ファンの方にも心から御健闘をお祈りして楽しい奇クにして戴きペンを置きます。(東京都豊島区八間和志男)

○ 三月号、久し振りに女学生の縛りがあり大変嬉しく思つています近頃、どうも女学生の姿が見られないので淋しく思つていた所でした。女学生の姿というものは、成熟した女性とはいつてまだ固い清纯な感じのするものです。肢体もコリコリした感じで、未完成の美しさがあります。こんな女学生を

縄目も厳しく縛り上げた姿をもつと見たいものです。それもセーラー服の似合う可愛い感じのモデルで。そのセーラー服も、半袖の夏服を着せて欲しいものです。女学生の縛りと云えば大半が長袖の冬服ですが、豊かな二の腕をあらわにして、縄を喰ひ込ませた姿は美しいものです。又、スカートを乱して、白い太ももをむき出しにしたり、パンティだけにしたりした姿も可憐です。それ以外にも半袖にショーツの姿も好みます。女学生の場合、裸の縛りには必ず腋毛をはぶかないで下さい。若々しい肌に見る腋毛は可愛いものです。貴誌は最近、余りにも腋毛や、全裸に、氣を使い過ぎてゐるようです。他誌の例を見てももっと大胆に扱つてゐます。一度本当の女学生を相手にプレイしてみたいものです。(大阪市北区八喜多忠)

○ 初めてお便り致します。私は本年二十五才のS傾向のやや強い女性です。私は肉体的な責めよりも精神的に苦しめる事に興味をもつております。特にアヌス責めや浣腸責めは私の行つてみたい念願です。今は相手がおられませんので自分が行つて楽しんでおります。どな

今月の新版案内

相撲 禪

略号

(そい)

大手札 五枚一組 五〇〇円

モデル 東浦ひかる

雲斎の相撲禪をはちきれそうな若々しい裸身に締め込んで正面、背面、側面、或は両股を開いた蹲踞の姿勢など、相撲禪を締めた娘の裸姿をあますところなく皆さまの眼前に晒した女体禪フォト。従来の六尺禪から一歩前進した狙いの趣向。

吊り打ち

略号

(やり)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

両手を鴨居に吊られた全裸の関谷富佐子夫人。これこそ夫人の待ち望んでいたムチ打ちのポーズである。眼前に無防備でさらされた豊満な臀部に激しく炸裂する革ムチ。吊り縄をねじるようにして悶え、泣き、哀願する夫人の被虐の表情。全くこれこそサドフォトの圧巻である。

禪裸女血闘場面写真

大手札 五枚一組 五〇〇円

略号(らは)

モデル 絹川文代、大塚啓子

黒フンドシをきりりと締めた二人の裸女が、必死になって渡り合い、遂に倒れた一人に対して脇差でもって咽喉元に止めをさす凛々しい姿を血紅を使用して写真化した夢幻的な美しさと惨酷美溢れるフォト。勝誇った美女と血を流して倒れる可憐な乙女との血斗交響楽。

介添切腹

略号

(あか)

大手札 四枚一組 四〇〇円

モデル 甘木春子 外

切腹マニアの読者の提供による野外切腹フォトの第二弾、柔肌を切る方も切られる方も痺れるような恍惚境の中でプリプリと切りさばかれてゆく切腹プレイの一シーン四カット。

股間縛法悦境裸身

略号

(めこ)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 絹川 文代

素晴らしい美しさと均整のとれた股間に厳しく黒縄が喰い込む全裸の股間縛。足の指先に至るまで溢れる色気を漂わせたとおきの秘藏品。入手して絶対悔いのない完全無比な緊縛フォトをどうぞ。

たかMの女性で特に浣腸責めなどに興味を持っておられる方、責められてみたい方、一しょにプレイをしませんか。東京に住んでおられる方、毎月奇クの発売日の次の日から一週間、午後六時から六時半まで、千駄ヶ谷駅(中央線)の改札口で待っております。貴女は左手に見えるようにハンカチを持っていて下さい。私は何げない顔で時間をお尋ねしますわ。最後に奇クの御発展を心からお祈りいたします。(東京都八木青木洋子)

三月号の女斗彦様の通信大変楽しいものでした。東西の美女がふんどし一つの裸での血斗図絵は全く素晴らしいアイデアと思います。ふんどし一つのクレオパトラも美事なる千姫のふんどし一本の姿もマニアにとってはこの上ない贈り物です。輝くばかりの肉体を惜しげもなく白日の下に晒して相打つ東西の美女。血みどろな中にも凄艶な裸女血斗図絵が出来ることでしょう。分譲品の中にも吾々マニアに對するものが増えて来るのも嬉しいことです。今後共、此の種ものを続々発表していただきたいものです。何といっても吾々裸女血斗マニア、生首マニア、女斗

美マニアは少数派ではありませんがこの少数派の声も編集部にて無視されることのないように望みます。さし当って実現して欲しいものは、「大奥裸女血斗」中の「和風サロメ」の図でしょう。それから一枚の図に血斗を演ずるふんどし一つの奥女中達の群像をまとめたいのです。斬り倒されてのけぞる裸の娘。くみしかれて止めを刺されている若い女中。山を築き血の池をつくるふんどし一つの裸女達の屍の数々。その屍体をふみつけて更に斬り合う奥女中の返り血を浴びた凄艶なふんどし一本の立姿等々、是非一枚の絵にまとめていただきたいと思います。和洋美女の血斗も組合せて考えてみれば面白いと思います。例えば古代エジプトの女とギリシャの女というようなものは、どうでしょう。同好諸氏諸姉の通信をお待ちしております。女斗彦様の次のアイデアを楽しみにしております。(大阪市八木英山)

初めてお便りします。私もエネマファンです。又エイネスファンでもあります。大阪市と和歌山市に住んでいる若い女性で浣腸の好きな方お手紙下さい。医学科の勉

強をしていますので浣腸方法も導
入法の尿排泄肛門拡張などいろ
ろ出来ます。普通の人々が相手に浣
腸する場合相手が痛がるのはゴム
管の入れ方が悪いからです。私は
このように浣腸方法など又検査な
どいろいろ勉強して来ていますの
で安心して相手になって下さい。
現在出来る方法は次の四つです。
若い女性の方、私でよかったです。
腸して差し上げましょう。お返事
は編集部まで。先程の四つとい
うのはこれです。

1、イルリガートルによる高圧浣
腸、仕方が今までとは少し違いま
す。でも普通の人々にやられると腸
に傷が付きまゝ。傷といつても腸
壁のことです。私の方法は新しい
方法で大量に浣腸する方法です。
2、直腸指診と肛門拡張法、これ
も柔いゴムによって行います。
3、少し苦しいかも知れませんが
バリウム高圧浣腸といつて直腸の
中を洗滌します。
4、女性の方でしたら浣腸だけに
しましょう。勿論貴女も良ければ
私の方もいじめて下さい。
若い女性の方お相手下さい。お礼
になんでもあげます。住所は編集
部でどうぞ。女性の方であつて美
しい人、背の高い低いは問いませ

ん。良ければ上六、ナンバ、布施、
梅田で会える人。和歌山では市駅、
本町二、三、四、京橋、高松、小
松原で会える人。大阪では先程申
し上げた他に阿倍野、東住吉区田
辺東ノ町などで会える人。お手紙
下さい。(和歌山人得野三生)

法谷四郎様の御便り嬉しく読ま
せていただきました。いま私はキ
ュロットクラブに夢中で限られた
メンバーですけれど充実したプレ
イの日々を送っております。昨年誌
上で御約束した「殉国の妖花」も
キュロットクラブで巡覧し補筆を
加えて、文字通り身も凍るばかり
の凄惨な図絵となりましたが私に
はすでに送稿した「死に挑む愛」
という作品があり、これを使つて
いただけないようでは、「妖花」
の掲載は無理だと思ひ、送稿を見
送っているところです。このよう
な残酷な自決が女の身で実行不可
能であらうことは、私、よくわか
っております。でも、すべては情
痴の世界の夢物語です。このよう
な激しい肉体と精神力との戦いが
現実に行われたとしたら、すばら
しいことでしょうけれど、せめて
ものそれは、此のような特殊な方
法で表現して空想するはか無さそ

うです。灼熱の焔を包んで燃えつ
くす乗馬ズボン姿の女の執念。そ
うしたもの、もし少数の方々に
ても感銘を与えることが出来れば
秀緒は死んでも本望です。法谷様
をはじめファンの皆様の中に、此
のシリーズのために挿絵をプレ
ゼントして下さいの方があればと、そ
れが私のお願いなのです。(藤山
秀緒)

K誌を書店で見えて愛読するよう
になりました。僕は二十九才、僕
と同じ傾向の人がいることに意を
強くした次第です。これから諸兄
のお仲間に入れて頂き、いろいろ
と御指導願えたらと厚かましいお
願いを致します。尚、僕は同性愛
責め、浣腸、文身に興味を持って
おります。それらの写真、資料を
集めたいと思ひますし、又文通も
して交際できたらとひそかなる願
いをもっております。K誌も白表
紙のときのを人からゆづつてもら
ったのがありますので、御入用の
方には実費でゆづつてもよいと思
つていますので御希望の方は御連
絡下さい。全国の諸兄と心からな
る文通と交際を御願ひして編集部
の諸先生の御活躍をお祈り申し上
げます。(宝塚市八水本隆司)

毎日寒い日が続いております。
貴誌ますます御発展の御様子で読
者一同非常に心強く思っております。
先々月号に貴誌に発表されま
した煙草責め、よく御検討して下
さったと感謝しております。活字
の美しさ、絵のデフォルメも大
変満足いたしました。それよりも
うれしいのは、その後の責め絵に
口の責めが多くなり呼子笛とか、
人参とかヤカンとか、若い女性が
サルグツワとして口にくわえさせ
られている責め絵は縛り上げるだ
けのマンネリズムを打開するもの
として大歓迎いたします。この他
口にタワシを押し込んだり靴ブラ
シをかましたりすれば、なお面白
いと思ひます。責め絵について四
馬孝先生にタバコ責めの素晴らしい
のをお願いいたします。一、三月
号の鼻いじりの代りにマドロスパ
イプをくわえさせ鼻よりもくもく
白煙を吐いている娘を描いて下さ
い。二、鉄柱にがんじがらめに後
手に縛られハマキを吸っている妙
令の美人。三、お座敷机に大の字
に縛りつけられ細いロープでサル
グツワをはめられ、開いた口を灰
皿代りにさせられている娘(タバ
コの吸いガラ、キセルを立てマド

浣腸マニア東浦ひかる特集

一、只今浣腸実施中

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(かみ) モデル 東浦ひかる
責めの中でも浣腸が一番好きだ
という東浦ひかるに対して、実際
に彼女のためのプレイとして実施
した浣腸の場面を特にマニアに分
譲するために撮影したもののワン
カット。

二、強制空気浣腸

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(かく) モデル 東浦ひかる
彼女の好む空想のアイデア。お
腹の中にドンドン空気を入れて蛙
腹したらという要求でエネマシリ
ンジを用いて、最大限に空気を注
入したときの、腹部膨満の状態を
ごらんになれる珍しい浣腸作品。

三、百CCの硝子浣腸

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(かな) モデル 東浦ひかる
浣腸が好きだというモデルでな
いと、中々出来ない芸当。彼女な
ればこそこういった、強烈な浣腸
も容易に、しかも何の抵抗もなし
に実施できるのである。

四、浣腸責のムード

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(かむ) モデル 東浦ひかる
浣腸されることが至って好きで

あるという彼女にしても、やはり
マゾ女性に通有として無理矢理に
浣腸されるというムードには弱い
従って、両手を拘束されて、もう
どうにもならないという絶対絶命
のピンチに対して大きな関心を持
っている。クリスター・マゾのひ
かるを最大限に満足させるポー
ズ

水本茂美緊縛特集

一、強烈エビ責め

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(えひ) モデル 水本茂美
野性美を帯びた水本茂美を全裸
にひきまわした上で、足首と背中
に吊り上った後手首とを連結さし
て、グイグイ足で踏みつけて締め
上げたエビ縛り、一分、五分、十
分と経つうちに、流石の水本札も
全身から脂汗をふきだして、う
うと苦悶のうめきを洩らす。

二、ゴム衣緊縛

大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(みす) モデル 水本茂美
アメゴムのヌメヌメしたゴムズ
ロースが、汗ばんだ肌にネチャネ
チャとねばりつく。容赦のない繩
さばきは彼女の弾力性のある肌を
腰のあたりから二つ折りにして力
いっぱい締めつける。むき出しの
はりきった尻には、びっちりとゴ
ムズロースが貼りついていて

ロス置きにされている。四、後手
に縛り上げられ、首根っこを柱に
縛りつけられ、ビニールテープで
鼻の穴をふさがれて男にキセルを
無理に口に押し込まれて、もだえ
ている美女。梨花女史のタバコ責
めのフोट、ぜひお願いいたしま
す。一、海老責めに縛り上げて横
にころがし、キセル、マドロス、
ハマキを男に無理にかまされ白煙
を吐いている場面。二、後手に縛
り上げられうつぶせにし、背にま
たがり髪の毛をぐいと持ち上げマ
ドロスを口にくわえさせて鼻から
白煙を吐いている場面。三、前手
縛りに乳の上で両手を縛り両足は
一つにして柱に結び長キセルを手
ににぎらせてタバコを吸っている
場面(上にはムチが飛んでいる)
四、縛り上げられてハマキを横ぐ
わえにゆうぜんと煙を吐くえんぜ
んたる彼女のアップ。この他にも
木馬責め、椅子責め、タタミ責め
(タタミの上に大の字に縛りつけ
る)鉄棒グツワ(一メートル、二
キログラム位の鉄棒を口にかませ
バランスを取りながら後手でよち
よち歩く)等もぜひ御願いたし
ます。最後に編集者各位様の御多
幸をお祈り申し上げます。(京都
八煙草責ファンV)

随分永い間御無沙汰しました。
貴誌を求める術もない辺境の地で
燃えさかる情熱をひたすらに押え
この道に於いて孤独のわびしさを
かこちつつもう幾年かにもなりま
した。併し心境は貴誌に拙文を再
三のせて貰った頃と何も変わって
りません。私特有の奇妙な好みと
はいえ奇クが懐しく発展を祈りな
がらも生来の筆不精と環境と、そ
して訴えも満たされぬ空転する欲
望がかえっていとおしく、つい永
い間の失礼となりました。今日、
はるばる出掛けていったW市の古
本屋、奇クの十月号と十二月号を
買いました。相変わらず、一貫した
我々のグループの中心としての編
集。嵐の中で耐え抜けて続いてい
るその努力の並々ならぬものに敬
意を表します。W市へ出掛けるの
も三月に一度位。その都度本屋へ
よって奇クの存在を確認するのだが
店頭に出ていない時が多く、あっ
たときの喜ばしさ。奇クはまだ健
在なんだと嬉しくなる。昔の夢
がよみ返る。ペラペラとめくる中
に目にやきついたのが十月号の河
場象之助氏の一文とそのさしえ。
勿論文句なしに買い求める。他の
客があっても、ちうちよしなくな

ったのは年のせい。一気に読み続けてその読後感をかくと共に河場氏に『貴兄の告白と全くどこからどこまで同じ気持の男がいる』ということを知って、はしくって筆をとったのです。生のままの告白とお互いの読者通信が矢張り心につまされる。河場氏の一文は何もいうことがない。かくもよく私と同じ好みの人がいるものかと不思議な位。その他には花巻京太郎氏の『花と蛇』が素晴らしい十一月号の2を見ていないのではがゆいが私にはそのヒロイン静子主人公がこの上なく美しい豊満な肉体の持主であつてしかも中年の豪華な富豪の令夫人であることが私の理想に描く中年の美しい夫人に通じて素晴らしく又その凌辱の過程も元の召使いである男に全裸の肉体を凌辱され捕えられ暴力団の親分に売られる。私を宇頂天にさせたのは娘の前ではづかしめられるという絶対的な精神的な凌辱、プレイじみた妥協でなく、地獄の絵巻の様な陰惨でもない輝くばかりに美しい宝物の様な肉体への残虐美と精神的なはづかしめに徹しきった傑作ではないか。私はその1と2を読みたいし又この読きが欲しい。花巻氏の御健筆を祈ること

大です。佐治麻造氏の『宇宙のどこかで』が又私にとって好きな世界。私の描くSとMのまざったこの道の追求に考え抜いた幻想の国の光景と、何とよく似ていることか。私が考案したと自惚れている錠のかかった革又は鎖の輝が出てくるのに驚いた。ショーとして好事家に見せ又家畜として飼主の意のままに扱われるとき以外ははづすことの出来ないふんどしは人間として最も屈辱的な拘束具であると思う。私の世界の家畜に対するいろいろな拘束については又後日くわしく述べたいが、佐治氏の作品の中でそのふんどしや鼻環、肉体に印する番号等々あまりにもよく似たアイデアが出てくるのに驚き且つ大いに興味をそそられた。もっとも番号は顔に印するのは私には一寸頂けないのだが……、私の世界の家畜同様の奴隷には番号と名前（家畜としての……例えばシロとかブーとか）は臍の下にきれいに刺青でほりこむ鎖のふんどしはその下へギュッと締めさせて臍や下腹を露出させる。輝は陰ペいを主目的とせず細かい網の目状の前袋で覆うだけであくまでも自由にさせないことを主目的とするのです。他に尾てい骨に短いしつ

代理部分譲品御注文の栞

○代理部分譲品はすべて前金にて御注文願います。直接の御訪問並に代金引換はお取扱い致しておりません。

○御送金は現金書留、小為替、定額小為替、振替等にてお願い致します。切手の代用は当分の間お断り申し上げます。

○御注文品名は雑誌にては何年何月号或は略号、フォトはすべて略号にてお願い致します。送料は日本国内に限り当方にてすべて負担させて頂きます。

○局留にてお受取り御希望の方はお受取りになられる郵便局名（特定局でも可）と御名前とを御連絡いただければ、御指定の局宛お送りいたしますから、その局にてお名前お申出の上お受取り下さい。お名前は仮名にててもよろしいです。局に於ける留置期間は十日間です。

○御注文の宛先は阿倍野局私書函第十四号天星社です。

○フォト類は原則として密封の第一種便にてお送りいたしますが破損の虞のあるものは、アテ紙を貼した上で第五種にてお送りいたします。雑誌はすべて第三種便にて

お送りいたします。

○尚、御注文の際、第二希望品がございましたら添記下さいますと分譲中止又は品切れ等の場合、迅速に処理が出来ますので大変助かります。

○分譲品の新しいものは毎号新案内として掲載しておりますが、御希望の趣向がありましたらお申出次第、出来る範囲のものは作成に努力いたします。

○分譲中止になったものは、漸次誌上にてその旨広告いたしますから御留意願います。

○お送り先は必ず楷書ではっきりとお書き願います。

○未着品につきましては、御送金の月日、金額、品名等をお書きの上御照会下さい。調査の上お返事或は再送いたします。

○御注文品の返却交換等は原則としてお断りいたします。但し郵送中の破損等の場合は、この限りではございません。

○金額にして五千円以上まとめてお申込の際には一点、八千円以上の際には二点、一万円以上には三点の優秀フォトサービス品を贈呈いたします。

ばを肉体にぬいこみ羞恥にもだえる美しい奴隷を様々なポーズをとらせ又罰を与える時の緊縛に利用するのです。ともあれ、まだまだ書きたいことがあるのですが、今日は久し振りに奇クに接して妖しい夢をかきたてられた私の思いついたままのことを書きました。今後共何卒よろしく（和歌山県八咫尻満六▽）

二月号には愚作「誕生す女相撲会」及びよびかけを掲載していただき有難とうございました。扱て女相撲友の会的文通も出来まして見聞を広めました。比較的人数です。此の際、同好者の方々から是非ともお便りをいただきたいと存じます。また、この道の先輩である雪崎京人氏からは直接歴史的事実や、会見談などをおきかせ願いたいと二、三の方々からお便りもありました。住所等につきさしつかえがございましたら指定の日時、場所に連絡に参りますから、私あて御一報下されば大変嬉しく存じます。その外、円山、殿田、雄松の各氏からもお便りをいただければこれに過ぎる喜びはありません。住所は二月号読書通信欄の通りでございます。では女相

撲ファンの皆様からのお便りをお待ち致します。（東京八岡平吉夫▽）

始めて、お便り申します。読者通信の皆様お元気ですか。白表紙以前からの読者です。以前から、一度仲間に入れて欲しいと思っていました。仲々思い切りが悪くおくれました。本誌が益々発展の一路をたどり同慶に耐えません。川端嬢の頃より新鮮な編集とユニークなグラビア、それに益々充実のモデル諸嬢と大変結構ですね。小生の希望としてですが、浣腸の写真はグラビアにはなりにくいのでしょうか、出して欲しいと思います。又浜嬢のような可れんな感じの方のグラフを望みます。小生MS両方かも知れませんが、Sの方ですか。しかし残念乍らプレイの経験はありません。ちょっと普段には、そんな機会はないのではないのでしょうか。実際には見も知らぬ人に、そんな事を望むより文通をして、お互いに意見を交換する程度を僕は理想ではないかと思ひます。小生も秘密を守りますから、三十才前後の女性の方で文通希望の方がありませんか、そちらでも、秘密を守って下さる方

ならば、お互に色々文通してみたいと思ひますが、如何ですか。住所は編集部にて、お調べ下さると幸いです。必らず、お返事をお出しします。では本誌と皆様に、お元気です。（大阪府八三津木生▽）

三月号をみてびっくり、まさかと思ひましたのに私の投書がのっているんですもの。A子にも早速見せましたの、「あらいやだ、貴女、本当に出したのね」と驚いておりましたわ。でも大好きな豊山が大関になりましたので、もう一度何となく投書し度くなりました。の。A子も私も本当にお相撲が好きなのね、六尺禪をつけてお相撲のまねをする様になってから四月、それでも何となく感じが出ないというので、運動具屋さんから一寸いやがって居ましたが、二本求めました。時折二人でたのしんで居りました。でもきつくしめると、両股がすれて痛さをかんじます。でもそれがまた何となくエキサイトするの。本当の土俵があれば、是非共やって見たいと思ひました。でもこんな気持の女の子は世間では、一般に変態と云われるでしょうね。それから編集の方々

に御願ひ。KK誌を求める事は女の子にとつて、とても恥しい事です。でも直接送って頂ければ家の者に見られて危険です。何とか方法はないものでしょうか、是非よい方法を考えて下さい。それから大勢の方々の御希望も有る事です。是非女相撲特集号を頂き度いものです。モデル難でしたらA子と私が出ます。但し顔が出ない様に撮って下さい。採用して頂けるのなら、自動シャッターで撮りましょう。誌上にて御見合下さいませ。私、だんだん大たんになりますわね。でも読者の関谷富佐子様のマゾ、児玉昌子様の妊娠写真も有る事ですもの。わたくし達の相撲があっても構いませんわね。（東京都豊島区八村田武子▽）

初めてお便りさして頂きます。小生もぜひ皆様の仲間に入れていただきたいとおもひお便りしたいです。小生は今年三十一才の男ですが、小生もここ二年前からMSプレイに興味をもち、自分でも色々と研究もいたして居ります。小生は以前A子という女性の奴隷となり（小生の恋する人でした）その人にたのみ月に三回……後は読者のお考えにおまかせ

いたします。小生はそれ以来排泄物狂崇になり下りました。特に尿狂崇です。A子が結婚してからは小生は毎日を淋しく暮して居ります。全国の女性で小生を奴隷として使つて下さる方ぜひお便り下さい。美しい女王様のためなら馬にも又、人間便器として顔乗や足舐等もいたします。このような哀れな男の願をかなえてやって下さい。全国の女王様のお呼を一日千秋の思いでお待ちして居ります。(神戸市真合区八北川勇)

○ 関谷さん、貴女はなんと素晴らしい方でしょう。私はもう十年以上も奇クを愛読していましたが貴女ほど美しいモデルの方を見たことはありません。いな、モデルというように職業的な呼び方をするのが失礼に当るほど、貴女には神聖な冒し難い美しさがあります。貴女の旦那さまには申し分けありませんが、貴女こそ、私達ファンの共同の女神といつても過言ではないでしょう。貴女の縛られたときの美しさこそ、私達の心のふるさです。このような素晴らしい女性を妻としていられる男性は本当に幸福だと思ひます。羨ましいくらいです。しかし、なんだか、貴女は

未婚の方ではないかという気がします。グラビヤは勿論のこと分譲品を全部買い求めて、私が判断したところによりますと、そういう気持が強いのです。仮に貴女が人妻だとしても、いささかも、その美しさにマイナスがあることはありません。いな、現在の貴女の人氣は、人妻であるというところから、今までモデルの方にはない魅力を発揮しているのでしょう。先月号では、妊娠中の人妻として児玉昌子さんも名乗りを挙げました。関谷さんを皮切りとして、私達はこのような方々の出現を心から待ち望んでいます。美しい妻を持たれるマニアの方々、自分一人だけの花とはしないで、どうか、せめて分譲品の中なりとも、美しい花を飾つて下さい。私はまだ独身なので、その資格はゼロなのですが今後結婚したときは、自分の妻の美しい姿を全国のファンの方々に披露したい覚悟です。関谷さん、どうぞ、これから頑張つて下さい。私は貴女のフォトに限りない魅力を感じています。理想の女性です。貴女の御健康と御幸福を祈ります。出来たら、体談とか旦那様とのプレイなんかについても御知らせ願えれば幸甚です。(東

四馬孝画(女斗ファンと裸女争斗マニアのために)

大奥裸女決闘場面

略号

(おく5)

B6判 感光紙焼付 四枚一組 五〇〇円

○禪裸女の争い

○首級を挙げる

○大奥の裸女格闘

○庭での果し合い

京八森一直

○ 私は小さい頃より赤い腰巻が大好きです。少年の頃家の押入に赤い腰巻が入れてあるのを知り、留守の時、押入れの中に入り込み腰巻に巻き、それ以来、あの赤い色と心ちよい感触をおぼえてしまいました。そうして腰巻の感触と赤い色を忘れる事が出来なくなってしまう使用せす物置き同用にして「間」に赤い本ネルとネズミ色の毛糸の腰巻がありました。私はネズミ色はあまり好きではありませんので赤い本ネルの腰巻をよく巻きました。本ネルのは一枚だけでした。色はさめずに真赤でしたが「虫」がつき大分破れておりまし

たので、母が使用しなかったのと思います。それから一人で留守番をしている時には昼夜の別なく腰巻を巻きたくてしかたがないのです。母は真赤な毛糸の腰巻が一枚と、ウス赤(ピンク)ではありません)の毛糸の腰巻が一枚ネズミ色の毛糸の腰巻が一枚、他に赤いネルが数枚、上物の柄模様の一枚ありましたが、私は真赤の毛糸の腰巻が一番好きでした。母が成可く私の好きな真赤な毛糸の腰巻を着用せず、他の腰巻を着用して呉れます様心の中で願つておりました。私が一番好きな真赤な毛糸の腰巻を母が着用している時は、どうか一日も早く他の腰巻と着換ええてくれます様心の中で願つておりました。母が他の腰巻と着換え

て私の好きな真赤な毛糸の腰巻を洗濯する為に置いてあるのを見た。洗濯中に見ました時には、此の腰巻が乾けば母が留守の時に又私の腰に巻く中が出来ると思ひ、嬉しさで心がわくわくしましたのをよくおぼえております。母が腰巻を洗濯中、急に用が出来てちょっと留守の間に濡れた腰巻をさわた事もありました。又真赤な毛糸の腰巻を裏庭の水溜の中へそつとつけてみた事もあります。後で濡れた部分が、乾かずに困りました。ネルの腰巻の上に真赤な毛糸の腰巻を重ねて巻き自分の腰巻姿を鏡に写し楽しみました。少年時代、私一人だけで一日中留守番をする事が一度だけありました。此の時ばかりは私の好きな真赤な毛糸の腰巻を母がどうか着用せず家に置いてくれます様心の中で祈りました。今迄着用していません。たウス赤い腰巻を脱ぎ、私の好きな真赤な毛糸の腰巻を巻き外出してしまいました。此の時程残念に思つた事はございません。其の後家が戦災に合いウス赤い毛糸の腰巻を一枚残し他の腰巻は全部焼失してしまいました。成人してから七年以上の腰巻を巻くのをあきらめておりましたが戦後ぼつぼつ

他家の物干に赤やピンク色のネルの腰巻や真赤な毛糸の腰巻が干してあるのを見ますと（成人してから毛糸の腰巻の事を都腰巻とおぼえました）少年の頃を思い出しあゝ私も又あんな赤い都腰巻を巻いてみたくなるとか入手したい念願しておりました。それからとうとう恥かしさを我慢し赤い都腰巻を一枚づつ数年かかって五枚買いました。只買う度に自分の体に腰巻の寸法を合やす事が出来ませんでした。現在、四季を問わずで困ります。現在、四季を問わず夜寝る時は（夏は都腰巻一枚だけ巻きますが）冬は、五枚の都腰巻と赤ネル二枚を重ねて巻いて寝ます。腰巻を一日中巻いたまま暮らす。腰巻が出来ますれば、どんなにか楽しいだろうに何時も思っております。一番困りますのは、汚れた腰巻の洗濯です。堂々と洗濯出来ず、又屋外で干す事が出来ないからです。洗濯した腰巻は七輪の火で乾燥します。奇クの女装特に和装、お腰に関する告白等書かれてある「号」はいつも買い求め楽しく読ませて頂いております。和装の女性の裾から赤い腰巻が「のぞいて」いますと、じつと見ていたくなるのはお腰マニアの方と同じです。奇ク愛読者の方で女装又は

お腰フェチストの方女性読者の方で、私の様な性格の者を理解して下さる方はございませんでしょうか、若しおられましたら、どうかお呼び掛け下さいます様お願い致します。御交際して頂きたいのです。誰方か私の希望を叶えて下さいます様お願い致します。以上同好の方々に読んで頂けますれば幸いです。ごさいます。（腰巻愛好生）

編集部の皆様、読者の皆様御元気で。私は白表紙の時には一時途切れましたが随分前からKKを愛読させて頂いて居る男性Mであります。二月号には、東京の川田幸子様、神奈川の中川フミ子様と云う二人の女主人様の御文を見付けましたので嬉しくなり拙い

ペンをとりました。川田幸子様は過去に二人の男性を御奉仕させた経験がありがたの由、御差支え無ければKK誌上に発表して戴けませんか、必ずや世のM男性共は随喜の涙を流す事であろうと思ひます。之までKK誌上に載ったM読物でも、男性側の立場から書いたものよりも責めるサチスチンの方から書いた読物の方が遙かに深い感銘を覚えますから、この事は編集部の方にもお願い申し上げます。緊縛された上、顔の上へびったりとおヒップを据えられたり（下着を着けて居られても結構です）ネクターでもコットでも其の他、馬、犬、椅子、何でも貴女の思いのままです。私は現在三十八才、

四馬孝画（若き女性の美しくもいたましい変死体）

変死女体惨酷場面

略号

（へし4）

B6判 感光紙焼付 四枚一組 五〇〇円

- 一、首吊り屍体発見
- 二、溺死体の検屍
- 三、縊死体の検屍
- 四、溺死体の解剖

次号（五月号）は三月二十五日に発売いたします

五尺四寸、十八貫、極めて健康です。女性の方なら二人乗られてもつぶれない自信があります。年に三、四回出張で上京する機会があります。川田幸子様、中川フミ子様を始め、東京方面及び近県のサチスチンの方、私をいじめて戴けません。又、中川フミ子様には親しく御使用せられたショーツを男性M共にあたえても良いとの由、私にも是非一枚戴かせて頂きたいものです。之までお捨てになつた分はまことに惜しいものと思ひます。私なら中央部の一番汚れた部分を切りとって、マスクの内側に縫い付けて肌身はなさず使用し他の部分も決して捨てたり等致しません。昼は帽子の中、夜は顔の上に載せて寝ます。又、マスクの分が摺り切れた時の補充用として大切に致します。送って戴けますならば、新しいのを一〇枚でも二〇枚でもプレゼントさせて戴きたいと思ひます。私はサチスチンの方のこそ珍重するのでありまして、ノーマルな方のは欲しいとも思ひませんし、又時々新聞種になる下着泥の様な勇氣を持合せて

居ませんし、又自制心も充分あるつもりです。心あるM男性ならばお互に世間に迷惑はかけたくないものです。下着泥の横行する事が我々アブの仲間が世間から誤解される一つの原因では無いかと考えます。求めて得られる物で無い丈に其の気持は良く判るのですが、誰にも迷惑をかけず女性に対して御奉仕する事に対して唯一の生き甲斐を感じて、ひっそりと我が道を行く我々が下着泥の記事を読む度に、ノーマルな方以上に憂慮している事も考えて貰いたいものです。この意味に於きまして、進んで下着を提供して下さる中川様に対してM族一同深く感謝しなければならぬと思ひます。又貴女様が考へて居られます男性を馬にする事も、おヒップの下敷にする事も、決して夢物語ではありません。実行しようと思ひになれば飛んで行って御奉仕申上げ様と云うM共が幾らでも居る筈です。斯う云う私も其の一人ですが、御奉仕申上げる事以外には、何んの邪心も持ちませんが、若し信用出来無ければ予め自由を奪って置いて

も良く、又、二三人お友達を連れて来られても結構です。只プライベートルな事には一切ふれず、お互に御迷惑をおかけしない事が肝要と思ひます。又其の事は固く御誓い申上げます。奉仕させたい女性と御奉仕申上げたい男性と会った時、ああそれは何と云う素晴らしい事ではありませんか。私が十幾年来ずっと見続けて来た夢なのです。では編集部の諸先生方、広く世の女王様方今後ともよろしく御願ひ申し上げます。（富山県高岡市八西村六夫）

山辺まゆみ様、貴女の呼びかけ三月号にて知りました。告白もすてきでしたわ、私一度でいいから同性の人虐めてみたかったの。普段はおとなしい女性になるのですが、本心はそれとはまったく逆なんですのよ。貴女の希望通りに乳房責めにしたいわ、恥かしくしたら私も半裸体になってもよくてよ。二人だけのひそかなプレイを楽しみにしていますわ。きつとよ、お返事下さいね。私は当年二十五才のBG、身長一六五、体重は四五kg、追いまわすオオカミも二三人はおりますの。その位のフェイスですわ。お便りきつと

よ。（東京都杉並区八清水和子）

私は一年程前から奇クを愛読しているMの大学生です。毎日空想の世界に夢を追っています。女の方にムチ打たれ、縛られ、責められることのみ夢見ている男です。私の念願はSの女性の方と心よくまプレイすることです。女の方の足をなめさせられたり、緊縛の不自由な身体をムチ打たれたり、ネクター責め、顔乗りなどされたいと思ひます。どなたか私を責めて下さらないでしょうか。あなたが好むことなら、私はどんな責めでも受けるつもりです。あなたは私を馬になさるでしょう。馬になつたあとのほつた私の体をあなたは水責めになさるでしょう。冬の寒い日だったら、全裸の私を雪の庭に投げ出すでしょう。あなたが望みならば浣腸も喜んでお受けします。どなたか私を責めて下さい。私の住所は、北海道帯広市です。私は道産子ですが東京へも度々出ますので、東京又は帯広市近郊の方のお便りをお待ちします。当方身長一七〇センチ、体重六五キロ、顔も悪い方ではありません。秘密は必ず守ります。八水谷正一

○ 小生はどうしたわけか女の角力が大好きだ。大好きと言っても実際に見たことはない。KK誌の小説などで空想しているだけだ。

また、さし絵があるので、実際にはこんなであろうと想像するだけだ。編集部にお願ひしたいことは実際の写真を是非のせてほしいということだ。大塚嬢、関谷夫人など一番適役だと思うが、是非実現してほしい。それからよく素人の女の角力大会が農村や漁村であるときいているが、月日、場所、様子などを通信してのせてくれれば大変便利だと思うが、読者諸兄姉も是非我々ファンに協力下さい。お願ひします。(岡山市八女の角力ファンV)

○ 奇クの編集の皆様お元気ですか二、三年前から奇クを知り購読を続けてその奇想天外なアイデアには心から感動を得て人知れず喜び且ついろいろと妄想に楽しんでいました。特にグラビア写真の斬新さには、みるものをたのしくさせて何かをひきつけられる様な心ちです。あらゆる女性写真もそうですが私は特に女性の切腹とか、妊婦ものにみりよく感じます。切

腹は壮絶な構想ですが、男体はがいてゴツゴツした感じでそれ程まではありませんが女体は丸みのある強力性の腹部に刀が突き刺さることは、写真としても絵としても非常に快感的に目に受入れてくれます。特に私は最近望みたいのは妊婦の切腹又、十二、三才の少女の切腹の写真又は絵画が望ましいと思います。私自身この種のマニアでカメラで撮影もします。七八才の少女をモデルにして切腹のまねを写真撮影しています。私は腹にしわができるのは女性の腹の美しさを半減するものとして私は前かがみをさせません。むしろいくらか反身かげんにしてぱんと張り切った腹部に刀をあて、その所だけくぼんだ写真が最も美しい切腹ではないかと思ひます。しかし実際の場合にはとてもこの様なポーズはむづかしいものだと思います。奇クグラビアの女性切腹のモデルさんに御意見でも頂きますれば幸かと存じます。この点妊婦になつたら巨大な腹部ですからいやが応でも張り切っており迫力のあつた切腹美の作品ができるのではな

○ 奇ク愛読者の皆様、今日は。私は梨花嬢の大ファンです。読者通信で皆様方の声を楽しみに拝見させていただいています。又私も近ごろはプレイを行つてみたくなりまして。都内又は横浜あたりに御住居で二十才くらいの女性、M的な方、私こそ梨花だ絹川だ東浦だと言ふ様な方が御座居ましたらノ緊縛、尻打ち、吊り、乳房責め、浣腸責めなんでもOKです。とは云うものの、初めてなのでうまく出来るかどうかわかりませんが、奇クのグラビアなどで研究をしましょう。プレイする場合も旅館だホテルだなどではとうてい出来る勇気がないので自宅で行えたらと思ひついています。当方は二十一才の真面目な会社員です。あなたからのお手紙をお待ちしています。手紙は奇ク編集部あてに御出し下されば転送して下さると思ひます、どうか編集部の方よろしくお願ひいたします、なお御手紙に御住所、氏名を御書き下されば直接返事いたします、又こちらにも住所をお知らせいたします。なるべく編集部

○ の方に御手数をかけたくないのでノ奇ク愛読者の皆様、私も読者通信のなかにに入れて下さい。(東京八勝V)

○ 奇クへ初めて仲間入りさせていただきます。私は工科系大学へ通う二十二才の学生です。私は鼻責め乳房責めに特に興味があります。マゾ女性の方で鼻や乳房に自信のある方とプレイをしてみたいと思ひついています。可愛らしい鼻を、つまんだり押したりして責めたらきつと楽しいでしょう。私の好きなモデルさんは絹川文代さんです。とても素晴らしい人だと思ひついています。学生ですので経済的側面では役立ちませんが、誠意は本心に人一倍持つているつもりです。信頼を裏切る様な事は決してしませんから御互いに約束を守り正しいプレイを楽しみたいと思ひついています。都内でしたら場所さえ知らせていただければ行きます。会つていただけたら私を理解出来ると思ひます。真面目な交際を希望します。最後に三月号で山辺まゆみさんの「風の町から」の告白に出てきた山田という人とは決して違いますから念の為に。(東京都世田谷区八山田正孝V)

読者原稿募集

△体験、告白、手記▽

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるものたえ、どうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語▽

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下

さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポート・マニヤ通信▽

新聞記事、週刊誌記事等に関心をお持ちの事項、或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

△読者通信▽

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思文、出話、或いは読者相互間の交歓、通信、応答などをお寄せ下さい。誌面の許す限り、つとめて掲載いたします。

書下し原稿募集

新しい風俗雑誌として新発足する本誌のために、新鮮にして読者の大歓迎するよう、新鋭にして原稿をどしどしとお寄せ下さるよう、左記の要項にて募集いたします。どうか奮って御応募下さい。

募集要項

一、原稿の内容は風俗雑誌の尖端をゆく本誌にふさわしいもの。例えは、小説、創作、研究、資料、連した告白、紹介、論説といった体験、告白、紹介、論説といったものを始めとして、流暢、女装、切腹、フェチ、女相撲、女闘美、美、身体各部に対する狂崇等に関するもの等を含めます。

一、表紙、口絵、挿絵、或は写真なども努めて掲載したいと考えます。原稿の枚数は別に定めません。から長短は御自由です。尚、御都合によつては、便箋や鉛筆がき等にて未発表のものに限りません。掲載可能の作品は最近号から漸次発表いたします。優秀作品の投稿者には、採集部から題材を提供して寄稿を御依頼することがあります。一、採集部にお支払い致します。又、採集部で匿名は御自由です。対に他へ洩すようなことは致しません。故御安心下さい。

奇譚クラブ編集部

☆本誌御愛読の榮

予約料

一月分	(1冊)	二百円	△送共
三月分	(3冊)	六百円	△送共
半年分	(6冊)	千二百円	△送共

本誌は各地書店にて毎月二十五日一斉に発売致しますが、若し入手困難でしたら、直接発行所へ代金御送りの上お申込み下さい。予約お申込みの場合は発行と同時に、厳重包装の上、急送申し上げます。尚既刊号の内、在庫分は別項に一覧表を掲げてあります故、御注文頂き次第に急送いたします。

☆代理部分譲品についての案内

○本誌代理部分の譲品は、最近分譲品案内並に読者通信欄の記事中に広告してあります。他に「代理部分譲品録」を準備しております。録は十円切手同封にてお申込下さい。急送申し上げます。○雑誌は厳重包装の上三種便にて、写真類は密封の第一種便にて、その他は第五種便にてお送りいたします。○代理部に対する御送金は、なるべく現金書留、振替、定額小為替、小為替、等にてお願いいたします。切手代用は当分の間、都合によりお断りいたします。○本誌に発表した口絵、写真の複写或は無断転載等は固くお断りいたします。

奇譚クラブ 定価二百円

四月号

(第十七卷第四号)
(通刊第七十五号)

昭和三十八年三月二十日印刷

昭和三十八年四月一日発行

編集印刷兼発行人 箕田 京二

大阪阿倍野郵便局私書函第十四号

発行所 天 星 社

(振替口座大阪五〇〇四二番)

(昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認雑誌 第一二二二号)